
決闘者の道

あちゃべ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

決闘者の道

【Nコード】

N0485W

【作者名】

あちゃべ

【あらすじ】

西条亨はある日、一人の少女に出会う。

その日から西条の日常は、非なる日常として歩む事となる。

これは、西条やその仲間達が人として、決闘者として成長していく物語である。

序章

※

精霊界。

そう呼ばれる世界の中心に、神々が封印されている神聖な塔がある。

しかし、その地は暗雲が立ち込める荒れ果てた荒野の大地と化し、その塔も神聖さからかけ離れたような…。

辺りの風景も相俟って、不気味な存在となっていた。

重鈍な空気を漂わせるその塔は非常に高く、地上から見上げれば空を覆う雲を貫き、見上げれば見上げるほど一体どれほどの高さなのか想像がつかない位のものだ。

その塔から遠く離れたとある里で、自室の部屋の窓からも見えるその塔を眺める一人の魔術師がいた。

紺色の魔導着を身に纏う魔術師は椅子に座り、近くの机に置いてあった一冊の魔導書を手にとる。

「…やはり…残された手段はこれしかないのか…」

魔導書に記された情報を読み取ると、魔術師は意を決した様に一人の少女の名を呼んだ。

「…ブラック・マジシャン・ガールよ」

魔術師が名を呼ぶと、部屋の扉がガチャリ…と開き、一人の少女が部屋の中に入ってきた。

ブラック・マジシャン・ガールと呼ばれた少女は部屋に入ると、真剣な面持ちの魔術師とは対照的な、どこか垢抜けた雰囲気話しかけてきた。

「お呼びですか、お師匠さま？」

「ああ…実はお前に頼みたい事がある」

魔術師の言葉を聞くとマジシャン・ガールは

「またお使いとかですかお師匠さま？食材とかはまだ沢山残ってますよ？それとも何ですか、あ…分かった！あれですね、被災地のモンスター達に支援をしに行くんですね！？」

「違う、話は最後までちゃんと聞きなさい」

勝手に話すマジシャン・ガールを一括する魔術師は、壁に立てかけてあった自分の杖を取り、マジシャン・ガールに説明を始めた。

「今の我々の世界は、復活した古の悪しき神々いにしえによって破滅の道を

辿っている」

「悪しき神々：つまりは【三邪神】：ですよね」

「そう：邪神達は勢力を伸ばし、今やこの世界のほとんどの国々が邪神の手に堕ちてしまっている：」

二人は窓から見える外を眺めた。

空にはどす黒い雲が覆い尽くし、所々眩しい光を放っては青白い閃光と轟音が鳴り響いている。

「その邪神と対を成す【幻神獣】は、邪神が復活した際に奴らの手によって、その力を封印されてしまっている：つまりは奴らに対抗できる唯一とも言える手段を、我々は封じられている状態だ。：ここまではお前も知っているな？」

魔術師が確認をとるかの様に尋ねると、マジシャン・ガールも真剣な表情になってコクリと頷く。

「奴ら邪神達の力は強大だ：このままではこの【精霊界】は、奴らが支配する暗黒の世界となってしまう：！！　それだけは何としても避けなければならない：！！」

魔術師の言葉、一つ一つに重苦しい感情がのし掛かる。

その意を汲み取ったマジシャン・ガールは、自分を呼んだ魔術師

に尋ねた。

「…お師匠さま。私に頼みたい事というのは一体…？」

弟子のマジシャン・ガールに尋ねられた魔術師は、先程まで読んでいた一冊の魔導書を広げて、それをマジシャン・ガールに見せる。

「この魔導書には、ある世界の事が記されている」

「…ある世界？」

マジシャン・ガールはその魔導書を受け取り、内容を読んでいく。魔術師は魔導書を読むマジシャン・ガールに構わずに話を続けていった。

「その世界というのは…【人間界】…！」

「人間…界…？」

「その書物に記された内容によると、人間界にも我々デュエルモンスターズが、カードとして存在している」

「…別の世界にも、私達と同じ…デュエルモンスターズが…！？」

「元より我々デュエルモンスターは、人の思想が詰まった夢の存在。」

そんな我々を作り出した人間界には当然、私達と同じデュエルモン
スターズが存在するという事になる……！！ 人間界にデュエルモン
スターズが在るならば、則ちそれは……幻神獣もカードとして存在す
るという事になる……！！」

「っ！？」

魔術師の話を聞き、大きく目を開くマジシャン・ガール。

その様子を見た魔術師は、マジシャン・ガールが自分の話を理解
していると判断し、更に話を進めていく。

「今お前が手にしている魔導書にも、その事が書き記されている。
その魔導書は、魔法都市の図書館の奥深くに封印されていた物だ……
その魔導書に記された内容は、我らが王も既に知っておられる……そ
して王より、一つの命がくだされた！」

「王サマからの命令……っ！？ まさか……っ！？」

「……そう、その魔導書に記されている世界【人間界】に向かい、そ
の世界に存在する幻神獣を我らの世界に降臨させる……！！」

魔術師はそう言うのと、手にしていた杖を鮮やかに回し、杖に込め
た魔法を床へと叩きつけた。

「ハッ！」

ドシューッ!!

放たれた魔法は床にぶつかると、そこには円形の魔法陣が展開され、淡いピンク色の輝きを放ちはじめた。

「この魔法陣はあちらの世界、つまりは人間界へと繋がる門^{ゲート}。この王より仰せつかった大命を…マジシャン・ガールよ、お前に頼みたい…!!」

「…お師匠さま」

正直、マジシャン・ガールは師匠である魔術師からの言葉が信じられなかった。

何をやるにしても「駄目だ。まだだ。修行が足りない」と言われ続けて、自分の力不足を痛感していたマジシャン・ガールは、いきなり王よりの大命を任されるなんて思ってもみなかった。

はたして自分に、その様な重大な任を全うする事ができるのだろうか？

マジシャン・ガールは思わず師匠である魔術師に聞き返した。

「お師匠さま…そんな重大な任務を…何で私なんですか？」

「……」

「私…今までお師匠さまからの修行は頑張ってきたつもりです。…でも、今の私は…まだまだ力不足だと分かっています!…そんな重大な任務、私なんかよりもお師匠さまの方が適任だと思います…!」

「！」

王からの勅命、その重圧がマジシャン・ガールを気持ち萎縮させる。
プレッシャー

今の自分の言葉がどれだけ情けない事だろう、とマジシャン・ガールは思った。自分はまだまだ力不足だと思うのは本当だ。何度修行をしても満足のいく結果が残せず、いつも師匠である魔術師に怒られてばかりだった。任務として師匠と一緒にモンスターの討伐に向かっても、足を引っ張るばかりでちっとも役にたてなかった。

それらの積み重ねが、マジシャン・ガールの自信というものをロボロに崩していた。

「…マジシャン・ガール」

師匠である魔術師は、震える弟子を真っ直ぐに見つめて話し掛けた。

「弟子を信用しない師匠が…どこにいる」

「…え？」

「私はお前を信用しているから、この任務を任せようという気になったのだ。確かにお前自信の力はまだまだ未熟だ、だがお前の力というのは…ただ力だけではない！」

「お師匠サマ…」

「自分に自信を持て、マジシャン・ガール…!! お前はこの『ブラック・マジシャン』が認めた、唯一の弟子なのだぞ?」

ブラック・マジシャンはマジシャン・ガールの肩に手を置き、

「生憎と私は別の任務があり、暫くは動けないのだ…だから私の代わりに、この任務をお前に任せたい」

「…お師匠サマ」

マジシャン・ガールは頷いた。

師匠であるブラック・マジシャンからの一言…

『弟子を信用しない師匠がどこにいる』

今の彼女には、この一言がとても嬉しく思えた。

「お師匠サマ、私やります…やらせて下さい!」

マジシャン・ガールの言葉に力が籠もる。

それを聞いたブラック・マジシャンは、弟子に優しく微笑みかけた。

「頼んだぞ、マジシャン・ガール！」

「はい、行ってきます!!」

力の籠もった返事で返し、マジシャン・ガールは魔法陣の上に乗った。

パアアアア…!!

すると、魔法陣の輝きに強みが増してきた。

その輝きは次第にマジシャン・ガールを包み込んでいく。

そして遂に、眩い光に包まれたマジシャン・ガールは、やる気に満ちた瞳と共にその姿を消した。

そして彼女は出会う。

運命の相手と…

後に自分たちの世界で『英雄』と呼ばれる事になる一人の決闘者^{デュエリスト}と…。

※

空は夕暮れの色に染まりつつも、未だ暑い日差しが降り注ぐ。

七月の中旬。

夏真っ盛りの中、三上市の街中で少年の声が響き渡った。

「ヤバイ！！ 間に合わねーッ！！」

そう声をあげ、三上市の広場を全力で走り抜けていくツンツンウニ頭の一人の学生。

彼の名は西条亨。

ここ三上市に在る第七デュエル高等学校に通う生徒である。
本日の授業も終わり、放課後を友人等と遊びに行っていた西条であつたが、その途中でふと友人が告げた一言がキツカケだった。

『そおいや西条ちゃん。もう6時半を過ぎてるぜい…行き着けのスーパーのタイムバーゲン、下手すりゃもう完売しちまうんじゃないの？』

「畜生ッ！！ 帰り際になって結締に誘われた時にはまだ覚えてたのに…！！」

そう。

放課後になって友人から遊びに誘われた時には、まだバーゲンの事は覚えていたのだ。

しかし、友人とカードゲームをやっていたらつい熱くなってしま

い、いつの間にか結構な時間が過ぎていた。

「くっ！？ スーパーはもう目と鼻の先なのに、信号が赤から全然変わらねー！！」

地団太を踏み、信号を今か今かと待ちわびる西条。

なぜ、彼のような高校生がスーパーのタイムバーゲンに？と思うかもしれない。

ここ三上市は、遊戯王オフィシャルカードゲーム発祥の街として知られている。

街の中心にシンボルとして建設された大きなビル 회사가、その遊戯王カードを創設した大企業【トリティニーグループ】である。

西条が中学三年の高校受験シーズンの頃、このトリティニーグループはある一大発表をした。

その内容は、三上市に在る高校の授業に、遊戯王カードを取り入れるという前代未聞のプランだったのだ。

その狙いとしては、若者に遊戯王カードを知ってもらう事で、トリティニーグループへの関心を高めさせ、高校卒業後の就職を希望する若者を引き抜く為の企画であったが、当時まだ中学生である西条やその友人等は…

『おお、すげえ…！！ 高校の授業でデュエル出来るんだってよ！！』

『なにっ！？ デュエルが授業というのであれば、俺のブルーアイ

ズがクラスの成績でダントツで一位になってしまっているのではないか……！」

『っし……！ 俺の進学先は決まったぜい……！ デュエルで授業なんざ、人生で滅多に出来る事じゃねえからな……！』

当時【デュエルⅡ遊び】だった西条達は即座に三上市の高校を受験し、足りない学力は気合いと根性とカンニングで補い、無事に合格した。

だが三上市は、西条達にとって実家から遠く離れた位置にあった為、学校の寮に入らざるを得なかった。

その寮生活も楽なものではない。
寮にも食堂があるにはあるのだが、そのご飯がまた絶妙に不味いのだ。

入学当初、初めて利用した時に頼んだ親子丼は【親1…子9】と割合が凄まじい位に極端であった。

最初から素直に卵丼と書けよ……と思ったのは、今では良い思い出である。

そんな理由から西条は、両親からの仕送りの中から食費を分け、自炊生活を始めたのである。

今では苦労の甲斐あってか、ある程度の料理は作れるようになっていた。

「……っ……！ 青だ……！」

何時もより長く感じる信号が青に変わり、一目散に走り抜ける西

条。

そして、いざスーパーの店内に入ろうとした瞬間：

「間に合えいグギッ！！　　って、によあああ：！！！」

床の微妙なコンクリートの段差に躓き、見事に転んだ西条。

道を行き交う人達は、そんな急に転んだ西条を見ながら、ポカーンと口を開けて啞然としていた。

「痛っってええ…。でも、こんな事でメゲる西条さんではないんですよ…！！　　タイムバーゲンが：俺を待ってるんだああ！！！」

ガバツと立ち上がる西条は、人目など気にしていられなかった。転んだ拍子に顔や腕、膝が擦りむけてしまっが、そんな傷も気にしていられなかった。

部屋の冷蔵庫はスツカラカン。愛用の冷蔵庫ちゃんの空腹を満たしてあげる為にも、今回のタイムバーゲンには何としても参戦せねばならないのだ。

（今いくからな…待ってるよ…！！！）

意気込んだ西条が足を引きずりながら店内に足を踏み入れたその時、店員の高らかな声が店内に響き渡った。

『ハイ!! 本日のタイムバーゲン、全て完売の為に終了とさせて頂きます!! 本日はご来店、誠にありがとうございましたー!!』

「…な…っ、なにいいいい!?!」

まるで図ったかのようなタイミングでバーゲンが終わってしまった西条は、へなへなとその場に崩れ落ちてしまった。

そんな西条を見ていたどこぞの幼稚園くらいの女の子は、指を加えて西条を指差しながら

「ママ、ママ! 見て! あれが俗に言う“負け犬”って人なんでしょ?」

「こら、あんなの見ちゃいけません!」

それを聞いた西条は重なる惨事に思わずホロリと泣きそうだった。

※

空の色も暗くなり、夜の冷たい風を浴びながら、西条は何とか寮へと帰ってきた。

「痛ツツ…」

吹き抜ける風が擦りむいた傷口に染みる。

結局、今日のタイムバーゲンに間に合わなかった西条は、安く済む焼きそばと具材だけを購入した。買ひ物は安く済めばそれで良いのである、と自分に言い聞かせる。

「バーゲン価格で卵や牛乳が買えなかったのは残念だったけど…まあ仕方ないか」

いつまでも凹んでたつてしょうがない。

気を取り直した西条はポケットから部屋の鍵を取り出し、軽い溜め息を吐きながら自室へと入っていく。

「ただいま」

ワンルームの部屋に響く自分の声。

しかし、彼の言葉への返事はない。

寮で一人暮らしをしてからは、初めこそ寂しさを感じはしたが、今ではこの環境に慣れてしまった。

テキパキと冷蔵庫に食材を仕舞い込み、ベッドの上にゴロンと寝転ぶ西条。

「ふう…今日は派手に転んじまったな…まあこの擦り傷もほっとけ

ば治るだろ」

自分の傷を見て呟く西条は、ふとある事を想像してみた。

（しかし…あの転んだ場面を白石や結締に見られなくて良かった。
見られてたら今度の学校で、絶対に笑いのネタにされちゃうからな
…）

「ん…そう言えば…？」

何かを思い出した西条は、鞆の中からデッキケースを取り出した。
このデッキケースの中には、彼が昔から使い続けてきた、大切な
仲間達が修まっているのだ。

「そう言えば…明日もまた結締や白石とデュエルする約束をしてた
っけ…」

今日の放課後、学校近くの行き着けのカードショップで、西条は
友人等とデュエルをしていた。

西条のデュエルの腕は弱くはないし、強いとも言えない。
勝ったりもすれば、負ける事もしばしばあるが、西条はデュエル
が大好きだった。

机の上にカードを広げ、一枚一枚それぞれに眺めていく。

その中から、西条は一枚のモンスターカードを掴む。
そんな彼の表情は、どこか懐かしむような目をしていた。

「『ブラック・マジシャン』：明日のデュエルは、絶対に勝とうな！」

当然、カードから返事がある訳ではないのだが、西条はついカード達に声をかけてしまう癖があった。

端から見ればイタい子に見えるが、それだけ彼が自分のカード達に愛情を注いでいる証でもあるのだ。

しかし、愛情だけ大きくても、デュエルの実力がついて来なければ意味がない。結論から言えば、西条は今日の友人等とのデュエルで負け越していた。

先日思い付いた戦術を試そうと思ってデュエルをしたは良いが、なかなか上手くデッキが回らなかったのだ。

「さてさて…どうデッキを組み直すかな…」

カッ…!!

そう言い、西条は部屋のカードを片付けてある棚に手を伸ばした時、ふと異変が起こった。

「…っ!？」

一瞬。

カードを取り出す為に身体を棚の方に捻った時、自分の背後から何か光ったような気がしたのだ。

思わず振り返ってみるものの、特に光るような物はこの部屋には置いていない。

テレビも電源は切つてあるし、携帯電話だって鳴っていない為、気のせいだろう…。そう思って再びカードを取り出そうとしたその時。

…カッ…カッ…!!

机の上に広げたカードに背を向けた瞬間、再びピンク色の光が背後から発せられたのだ。

「…っ!？」

気のせいでは無かった。

条件反射で振り返った西条の目に最初に映ったのは、いつの間に出来ていたのであろう、直径1・5メートル位のピンク色をした円形の魔法陣。

机の上に突如展開されるピンク色の魔法陣に驚いた西条は、思わず言葉を無くして後ずさった。

「な…っ!？ なん…だよ…っっ」

後ずさるうにも背中が壁にぶつかり、これ以上後退する事が出来

なくなった西条は、吸い込まれるように宙に浮かぶ魔法陣を見つめる。

一段と、また一段と魔法陣から発せられるピンク色の光が強くなっていく。

突然の怪奇現象を前にし、西条はこれ以上動く事も出来ず、声を発する事も出来なかった。

カッ…カッ…カッ…！！！！

何度か光を発していた魔法陣は、遂には部屋を覆い尽くす勢いで強い光を解き放つ。

「っっ！！？」

思わず目を瞑り、身構える西条。

一体どれくらいの時間が経過したのだろうか。

部屋を覆い尽くす光は徐々に収まり、目を瞑る西条は恐る恐る、ゆっくりと前方の魔法陣があった場所に視線を向ける。

いったい何が起こったのか。

そう思い、確認しようとした西条は、更なる衝撃を受けた。

「…な…っ！？」

目を見開き、唾然とする西条。

恐らく、西条でなくとも全員が唾然とするだろう。先ほど、突如

として現れた謎の魔法陣。

しかし、気付けば魔法陣はいつの間にか消失しており、消失した魔法陣の代わりに一人の女性が立っていたのだ。

西条は混乱しながらも、いつの間にか現れたその女性に対し、視線を上下させた。

特徴的な水色とピンクのラインが入った尖り帽子。背中まで届く金色の艶やかな髪。くりっとした目元。少し幼さが残っているような、端正な顔立ち。肩を大きく露出させた可愛い衣装。手にしているのは先端の丸い杖。ピンクのスカート部分から伸びる長い足爪先が丸みを帯びた、特徴的なブーツ。

突如として現れたその女性に見とれながらも、同時に西条はこう思った。

（だ…誰だコイツ…！？）

いきなり現れたその女性は辺りをぐるりと見渡した後、自分の目の前で座り込む西条に視線を合わせ、なんともあどけない表情で、こう尋ねた。

「あのお…」

「……」

「ここは…いったいどこなのかな？ 人間界で合ってる？」

「……………は？」

意味不明な女性の意味不明な質問に対し、西条は何とも答える事ができなかった。

そしてこの瞬間から、西条は日常から非日常の世界へと足を踏み入れる事となる。

この時の西条は、そんな事を知る由もなかった。

※

西条亨は生まれて初めて言葉を失った。生まれて初めて、夢なら覚めてくれと心から願った。

転んで擦りむいた傷痕を抓ってみてもただ痛いだけ。

(いたい…やっぱ…夢じゃねえ…)

いきなり彼の部屋に現れた謎の女性は、自虐プレイをする西条を見て「？」と首を傾げる。

何から話せば良いのか分からない。

まずこの状況が全く分からない西条を見て、謎の女性は何かを思い付いたかのように、手で相槌を打って

「あ、いきなりだったからビックリしているんだね。それに自己紹介がまだだったし…」

呆然とする西条は完全に置いてけぼりをくらい、その女性は一人でペラペラと話し始めた。

「私はね…精霊界から来た『ブラック・マジシャン・ガール』って言うんだ。貴方に聞きたいんだけど、ここは人間界で合ってるかな？お師匠サマの転移魔法がちゃんと成功したのか確かめたいんだけど…？」

「…ブラック…マジシャン・ガール…？」

「うん！そうだよ！」

名乗られてから西条は、ブラック・マジシャン・ガールと自称する目の前の不審者を一瞥する。

言われてみれば、確かにカードの『ブラック・マジシャン・ガール』に似ている…というよりは明らかにその姿は『ブラック・マジシャン・ガール』である。

だが何故、カードである『ブラック・マジシャン・ガール』が目の前に現れたのだろうか？

これまでの状況を頭の中で整理した西条は、ある考えにたどり着いた。

（待てよ…少し落ち着け、俺！！　ここは三上市…別名、決闘者の

街だ。こういったソリットヴィジョンを使つての悪戯なのかもしれない……！）

このような悪戯をする人物は知人の中に……

（もしかして……結締や白石の仕業か？ いや、でもアイツ等がここまで手の込んだ悪戯をするとは……！？）

自分の友人等の仕業かと考えたが、友人等の性格上、このような悪戯をするヤツらではない。

もしかしてドッキリなのか！？ と部屋中をぐるりと見渡してみるも、それらしき仕掛けはない。

「あのー、さっきから聞いてるんだけど？」

「あ、ああ……悪い……」

つい条件反射で謝ってしまった西条だったが、ここまで来て遂に西条の中で何かがキレた。

「……って、ちょっと待て！？ お前いったいどこからこの部屋に入ってきたんだよ！？」

「え？」

「だいたい何だよブラック・マジシャン・ガールって!？ それはカードの名前だろ!？ それにコスプレするのは勝手だけだな、ドツキりにしちゃあハイレベルすぎるぞコラァ!!」

「なっ!？ 質問の答えになってないんだよ!! コスプレってのが何かは知らないケド、言いぐさで偽物扱いされてるのくらい分かるし!! もっかい言っとくケド、私は正真正銘、本ツ物のブラック・マジシャン・ガールなんだよ!!」

「コスプレじゃないとしたら何だお前!？ いったいどこから入って来たってんだよ!! 窓もドアも全部閉まってたんだぞ!？」

「ドコからって、そんなの：私は転移魔法でこの世界に來たんだから、コッチにも門ゲートとなる魔法陣が展開されたハズだけど?」

「魔法陣…っ!？」

その言葉を聞いて、西条はふと先程の光景を思い出す。

自称ブラック・マジシャン・ガールが言うように、確かに魔法陣らしき物が宙に浮かび上がっていた。

そしてその魔法陣が激しい光を放ち、気が付くとそこにはこの自称ブラック・マジシャン・ガールが立っていたのだ。

これまで起きた現象に変に辻褄が合う事で、西条はまさか…と思い始める。

しかし、やはりまだ彼女の言うことが信用ならない西条は、試しにこう言ってみた。

「じゃあ：証拠を見せろよ？」

「証拠？」

「ああ：お前が“本当にブラック・マジシャン・ガールだ”っていう証拠だよ。正直に話すと、まだこの状況に混乱しているんだ。俺からすれば余りに不可解な事ばかり起きてるからな…」

「証拠：って言われても：何をすれば良いのか、いきなり言われてもサッパリなんだよ」

焦るとはまた違う反応を見せる自称ブラック・マジシャン・ガール。

もし彼女が偽物ならば：

普通の人ならば、嘘を吐いている場合、思わず顔に出るか、言葉に違和感のある詰まり方をするか、堂々と清々しい位にまで演技するか、どちらかである。

しかし、彼女の反応はそのいずれかにも当てはまらない。

彼女の表情からは、どうしたら自分の事を信じてくれるのか？という真剣に悩む雰囲気漂っている。

その事からか、何となくこの自称ブラック・マジシャン・ガールが、まさか本物では：とさえ思えてきてしまう。

「…なあ」

真剣に悩む彼女を見て、西条は一つの提案を試してみる事にした。
その案とは

「『ブラック・マジシャン・ガール』は、カードの種族じゃあ魔法使い族モンスターだ。お前が本当に真正銘本物のブラック・マジシャン・ガールだって言うんなら、何か魔法の一つでも使ってみるよ」

「え、魔法…？」

自称ブラック・マジシャン・ガールは、西条からの案にキョトンとした表情を見せる。

そして何かを思い付いたかのように、一瞬だけ悪戯な表情を浮かべた彼女は、ニコツと西条に笑みを浮かべた。

「ホントに魔法…使っちゃっても良いんだね？」

「ああ。お前が魔法を使う所を俺に見せれば、俺はお前の事を信じてやる…って、なんで杖を俺に向ける？」

「なんでって、だから魔法を使うんだよ。正確には、これは私の魔法攻撃かな☆」

キャハ☆つと無邪気な笑みを浮かべた彼女とは対照的に、西条の表情は徐々に青ざめていく。

その理由としては、彼女が自分に向ける杖の先端に、何やら不穏なエネルギーが凝縮していくのが見えているからである。

「お、おい…ちょっと待て…!!」

一步、二歩と玄関に向かって後ずさる西条に歩調を合わせるように、自称ブラック・マジシャン・ガールも一步、二歩と西条に詰め寄る。

「流石に攻撃ってのはナー」

「駄目だよ。コレはちゃんとした証拠なんだから☆黒・魔・導・爆・裂・破!!」

「ま、待てまちよっ!?　ぎゃあああああ!!!!」

カアツツ…!!

ボバアンツツ!!!!

瞬間、彼女の魔法攻撃が西条に炸裂した。

彼女の放った魔法の余りの衝撃に、玄関のドアは勢い良く開いては閉まり。西条愛用の冷蔵庫はガタガタッ!!と有り得ない揺れ方をしながら横転し。

そして、西条自身は黒こげになり、体中の至る所から煙をプスプスと上げながら、バタンと倒れ込んだ。

「…あ、やりすぎちゃった…」

どうやら加減を間違えたらしい自称ブラック・マジシャン・ガールは、今も体中から煙をプスプスとあげる西条に慌てて駆け寄った。

「ご、ごめんね！！　まだ上手く調整できてなくて！？　だ、大丈夫！？　生きてる！？」

ガクガクと肩を揺らされながら、超至近距離で自称ブラック・マジシャン・ガールの揺れる胸をうつすらと見つめる西条。

（信じよ…コイツは本物だって…でないと…）

でなければ、命が幾つ在っても足りない。

たゆんたゆんに揺れる胸を前に西条は、薄れゆく意識の中でそう思う事にした。

※

爆風によって倒れた冷蔵庫やら散らばったゴミ箱やらを整理し終えた西条は、溜め息混じりに自室の広間へと足を踏み入れる。

そこには、ちょこんと女の子座りをしながら落ち込む魔法少女（？）の姿があった。

彼が部屋に入って来た事に気付いた魔法少女（？）は一瞬だけ顔を挙げると、直ぐに落ち込んだ表情で顔を下げる。

「…ごめん…なさい…」

ポツリと呟くように謝る彼女に、西条の口から再び小さな溜め息が零れる。

先程までの強気で無邪気だった彼女の姿勢は見る影もなく、落ち込んだその姿からは本当に反省しているのだろうかという姿勢が見られた。

そんな彼女の姿を見て、西条は先程の展開を思い返していた。

何もない所から魔法陣と共に現れ、更には魔法によって爆発を起こした。

あれから彼女が手にしていた杖を見せてもらったが、自分からすれば何の変哲もない普通の杖だった。

どこかにスイッチがあって、押せば爆発するとかいった装置なんてなかった。

何の素材で出来ているかは分からなかったが、本当に只の杖。

今でも頭はパニックを起こしているが、彼女の話しを本当に信じてみても良いのではないだろうか。

西条は床に座ると、今も頭を垂れる魔法少女に向かって、こう告げた。

「…信じるよ」

「…え？」

「なにキョトンとした顔してるんだよ？お前が魔法を使ったら、お前の事を本物だと信じるって言ってただろ？」

未だに西条が言った事が信じられないのか、魔法少女のブラック・マジシャン・ガールは、ポカンとした表情をしていた。

「なんだよ…今度はお前が俺の事を信じれないって顔してるな？」

「ううん…違うの。ビックリしてただけ…」

徐々に表情に明るさを取り戻していくマジシャン・ガールは、自分の事を信じると言ってくれた彼に、恐る恐る聞いてみる。

「でもその…怒って…ないの？わたし、酷いことしちゃったし…」

「そりゃ…さっきまでは怒ってたさ。でも、元を辿れば俺がそうさせた様なものだし…それにさっきの爆発だって、本当にお前の魔法なんだろう？」

「うん…」

「だったら、俺はやっぱりお前の事を信じるよ。最初からそういう約束だったからな…」

西条の話しを聞いて、マジシャン・ガールは思った。自分もそうだったように、彼も突然の状況に混乱していただけないだ。

師匠であるブラック・マジシャンの転移魔法によってこの世界に來たは良いが、自分は彼に信じてもらう為に必死だった。しかし、どう話せば良いのか。どう上手く説明すれば良いのかが分からなかった。

既にここまで色々なやらかしてしまったが、彼は自分の事を信じてくれると言ってくれた。

見知らぬ土地で、見知らぬ世界で、マジシャン・ガールは初めて頼れる人を見つけた気がした。

「そう言えば…俺の自己紹介がまだだったな」

そんなマジシャン・ガールに、西条は

「俺は、西条亨。最初…お前の事を邪険にして悪かった。だからさ、お前の事を話してくれないか？」

※

「なる程な…精霊世界って所は、そんな風になってんのか…」

西条は腕を組みながら、うーんと声を唸らせた。

マジシャン・ガールが何故、自分たちの住む人間界にやって来たのか？

そして、彼女から聞かされた精霊界の紛争。

邪神による制圧によって、精霊界は暗黒の世界と化してしまっている事。

それを阻止する為に、自分が人間界に派遣された事。

「んで、お前の使命ってのは…俺達の世界の【幻神獣】を持ち帰って、精霊世界に降臨させる事…って訳か」

「うん。だから私は、まずこの世界で幻神獣を探さなくちゃならないんだ…」

マジシャン・ガールの真剣な表情から、西条は再び小さく唸った。彼女からどんな話しが聞かされるかと期待していたら、結構重苦しい内容で、西条からすれば予想外だった。

抽選が当たりました的な感覚で話を聞き始めたばかりに、最初の淡い期待とは裏腹に、今ではかなり重苦しい雰囲気部屋中に漂っているように感じる。

唸る西条に、マジシャン・ガールは幻神獣の情報を聞き出そうとし

「さいじょおは幻神獣の事で何か知らない？居場所さえ分かれば、後は直接向かうだけなんだよ」

「幻神獣…って、俺の住む世界からして【神のカード】の事だろ？
だったら、在処は知ってるけど…」

「ホントに!？」

願ってもない返事に、マジシャン・ガールは即座に立ち上がり、
座り込む西条の腕をグイッと引っ張り上げる。

「それなら話しは早いんだよ!!　さいじょお、わたしを幻神獣の
所へ案内して!!」

「あだだ!？　ちょ、落ち着けて!!　まだ話しの途中だったの
!!」

マジシャン・ガールを再び座らせると、西条は神のカードに関する
事情を説明する事にした。

「良いか？俺達の世界…つまり人間界では、お前たち精霊世界のヤ
ツらは、カードとして存在しているんだ」

「うん。その事はこの世界に来る前に、お師匠サマから見せてもら
った本に書いてあった」

知っているなら話しは早いと思った西条は、窓から見える三上市の中心地を見ながら言葉を続ける。

「あそこに大きなビルが見えるだろ？あれは【トリティニーグループ】って言う大企業で…俺達の世界じゃ、あの会社が遊戯王カードの製造や販売を取り仕切っている」

「……！！」

西条に言われてマジシャン・ガールは、窓から見える天に向かって聳え立つ巨大なビルを眺める。

トリティニーグループと呼ばれたそのビルは、マジシャン・ガールからすれば、自分の世界の神々が封印された塔と重なって見えた。

「何でも昔、あの会社は遺跡発掘の会社だったらしいんだけど…どこかの遺跡で三枚のカードが発見されてから、カード関係の会社に変わっていったって、学校の授業で教えられた」

「三枚のカード…っ！？　さいじょお、そのカードって…まさか！？」

「…ああ。そのカードが、お前が探し求めている…幻神獣と呼ばれるカードたちだ」

「…っ！！」

幻神獣。

その言葉を聞いて、マジシャン・ガールの表情がキリッと引き締められる。

「けど…幻神獣と呼ばれるカードは、俺達の世界じゃ一枚づつしか存在しないし、何よりもカードテキストが読めないんだ」

昔、トリティニーグループの社長が遺跡発掘の際に偶然に発見した神のカード。

そのカードに記された言語は自分たちの世界には歴史上、存在しない文字で記されており、その時点では解読ができなかった。

三枚の神のカードを遺跡から持ち帰ったトリティニーグループは、このカードを研究し、そこからイマジネーションを膨らませ、遊戯王オフィシャルカードゲームを作り上げた。

しかし、やはり神のカードに記された文字は未だ解読できず。今もトリティニーグループ内にて、解読作業が行われている。

「人間界に存在しない文字…もしかしたらそれは、精霊界の文字なのかも…」

不意に呟くマジシャン・ガールのその言葉に、西条は思わず目を見開いた。

それと同時に思う。

マジシャン・ガールの言うように、本当にあちらの世界の文字なのではないだろうか？と…。

「さいじょお。わたしを…あの建物に連れて行って！もし幻神獣のカードに記された文字が、精霊界の文字だとしたらー」

「ああ。お前の言いたい事は分かるよ…けど、時間がな」

徐に携帯電話を開き、時間を確認すると、何時の間にか大分時間が過ぎていたようだ。

「20時17分…流石にもう会社は閉まってる時間だろ。だから日を改めようぜ？明日は俺も、学校は休みだし」

人間界の事情を把握している訳でないマジシャン・ガールは、彼の言葉から何となくの事情を理解した。

どうやら今すぐにといいのは無理らしい。

「明日、一緒にトリティニグループに向かおう。お前の世界が大変だったのは聞いてるけど、焦らずに…な？」

マジシャン・ガールの緊張した面持ちを見て、西条は安心するよう話しかける。

この世界に来て間もなく、右も左も分からないマジシャン・ガールは、とりあえず彼の言葉に頷くしかなかった。

「さて、そうと決まれば…飯にしようぜ」

気持ちを切り替えた西条はそう言うと、冷蔵庫から夕方に買った食材を次々と取り出していく。

直ぐに目的が達成できなかった事で、今も神妙な表情のマジシャン・ガールは、台所に立つ西条に尋ねてみた。

「ねえ、さいじょお。今から何をするの？」

「なに…って…料理だよ？お前の世界じゃ、食事をするって習慣が無いのか？」

「あるには…あるけど…ギュルルルル…！！」

「へ…っ!？」

マジシャン・ガールが呟くと、途端に彼女のお腹から大きな音が鳴った。

自分でも予想外だったのであろう。とっさにお腹を押さえたマジシャン・ガールは、恥ずかしさで顔を赤面させながら

「なんだ…お前も腹が減ってたのか？」

「ち、違うもん！コレはわたしの新陳代謝が良いだけの話しであって……！別にわたしもご飯が食べたいなあとか！もしかしたら、わたしの分のご飯も用意してくれるかなあとか！淡い期待を抱いている訳じゃないんだからね……！」

「……………」

マジシャン・ガールさん、口から涎を垂らしながら話しても説得力は皆無なのでござえますよ？

「ハイハイ……分かった分かった」

「なっ！？　さいじょお！？　さいじょおだって、人の話しはちゃんと聞くべきなんだよ……！」

「ちゃんとお前の分も作ってやるよ。だから隣の部屋で待ってろよ？……味は期待してて良いからな」

「……ちゃんと大盛にしないと駄目だからね……！」

「……………」

先程までの発言は何だったのかと思わせる台詞を吐いて、マジシャン・ガールは浮き足立つように台所を後にした。

そんな仕草に思わず笑みがこぼれそうになる西条だったが、この後彼は知ることになる。

彼女の胃袋は、バケツという位に収まらない程の大食らいであるという事を…。

その日の夕食時、西条の部屋から彼の悲鳴が三上市の夜空に響き渡った。

「さいじょお、おかわり☆」

「もうやめてえ！！ 西条さんの冷蔵庫のライフはとくに0な
よ！！」

※

食事を終え、放心状態の西条は台所で皿洗いをしていた。

「…三日分の食料が一食でパァ…三日分の食料が…たった一食でパ
ァ…」

ブツブツと呟く西条の言葉を聞き流すマジシャン・ガールは、やる事がない為に彼の部屋を物色し始める。

精霊界にはない品物の数々に心を奪われるマジシャン・ガールは、部屋の隅に置かれた棚から一つの箱を取り出してみる。

「なにコレ…本？人間界にも魔導書とかつてあるのかな？」

他に何か無いかと、至る所から次々と物を取り出していくマジシヤン・ガール。

あらかた部屋を物色し終えたマジシヤン・ガールは、ふと机の横に置かれた小さなケースに手を伸ばす。

開けてみると、中には彼のデッキが入っていた。

「コレ…！？ もしかしてコレが、私たちデュエルモンスターズ…！？」

人間界での自分たち、デュエルモンスターズに出会えたマジシヤン・ガールは、胸が熱くなるのを感じた。

（こうやってデッキがあるって事は…さいじょお達も、デュエルをするんだね…！！）

自分たちも精霊界で敵と戦う時は、デュエルによって勝敗を決める。

世界と世界の繋がりを感じ、一人感傷に浸りながら次々とカードを広げていく。

すると、彼のデッキの中に、自分にとって馴染みのあるカードが入っている事に気付き、マジシヤン・ガールは思わずその手を止めた。

「あ…お師匠サマのカードだ…!!」

ブラック・マジシャンのカードを取り、マジシャン・ガールは此処に来るまでに師匠に言われた事を思い出す。

（待っていて下さい、お師匠サマ…!!　わたしは必ず、幻神獣を精霊界に持ち帰ってみせます…!!）

まるでブラック・マジシャンのカードに祈るように、再び決意を固めるマジシャン・ガールは、ふとある事に気付いた。

「…あれ？」

よく見ると、他の彼のカードに比べ、ブラック・マジシャンのカードだけ至る所に擦り傷が目立っている様に感じる。

いや、明らかに傷物であった。

なぜ、自分のお師匠サマのカードだけ、こんなにも扱いが悪いのか!?

その事に激昂したマジシャン・ガールは

「ちょっと、さいじょお!!　コレは一体どういう事なのか、説明して欲しいんだよ!!」

「ん…なにが…って、うワイイツ!? 気のせいかな!? いや、絶対に気のせいじゃないですよね!? 何時の間にか部屋の中が、足を踏み入れる場所が無え位に散らかってるじゃねえか!?」

洗い物をする西条の時点に映るは、自分に詰め寄るマジシャン・ガールの背後に見えるゴツチャゴチャに散らかった部屋の惨劇。自分が食器を洗っているものの数分の間に、一体なにが起きたというのだろうか?

「さてはお前、また魔法か何かで部屋をこんな状況にしやがったのか!?」

「そんな事よりさいじょお!! 何でお師匠サマのカードだけこんな傷物になってるワケ!? 納得のいく説明が欲しいんだよ!!」

「その前に掃除に決まってるだろうがああ!!」

「掃除の前に、せえ、つう、めえ、いいいい!!」

「ちよっ!? 分かった!! 分かったから杖をコッチに向けるな!? 頼むから、頼むから魔法は止めてくれええ!!」

いきり立ち、自分に杖を構えるマジシャン・ガールに、西条はもう従うしかなかった。

でなければ…また自分が黒こげになり、部屋の中は阿鼻叫喚な地獄絵図と化してしまう。

本日、西条の三度目の悲鳴が学生寮に響き渡った。

※

徐々に徐々に、少しずつ少しずつ。

西条は半分涙目になりながら、マジシャン・ガールが散らかした部屋の中を整頓していく。

何だか今日はこの魔法少女ならぬ迷惑少女に振り回されてばかりな気がする。

（あ、考えれば考える程：西条さん、何だか切なくなってきちゃいました：グスン）

そんな西条の心境を知らず、彼を半泣きにさせた元凶の迷惑少女マジシャン・ガールは、彼の前に仁王立ち

「さいじょお！！ お師匠サマを侮辱した罪は、死んでも償いきれないんだよ！！」

「：俺だって、好きでそのカードをすり減らした訳じゃねえよ」

お部屋のお片付けを一時中断し、西条は部屋の中央に置かれた机

の前に座った。

机の上には、自分のカードが沢山広げられている。

「俺がデュエルモンスターズを始めたのは、中学に入って直ぐだった。」

その当時、自分が通う学校では遊戯王カードが大流行していた。そんな流行に触発され、自分もカードを始めた事を今でも覚えている。

始めたばかりの頃は、デュエルをする度に負けていた。

初期の遊戯王カードというのは、単純な攻撃力での殴り合いが主な戦術であった。

遊戯王カードを始めた当初、レアカードを一枚も持っていなかった西条は、友人等が持つ強力なカード達に散々にやられていた。

その当時の友人である白石直也は、主力の『青眼の白龍』でクラスで敵なし。

自分を遊戯王カードに誘ってくれた結締智恭は、様々な効果モンスターを取り入れてのテクニカルな戦いを駆使し、かなりの強敵だった。

何とかして彼らに勝ちたい。

そう願う西条は、なけなしのお小遣いを使って、店に売れ残っていた最後の一パックを購入した。

そのパックで、西条は生まれて初めてのレアカードと遭遇した。

そう。

そのカードこそ、『ブラック・マジシャン』なのである。

「初めて当たったのが、その『ブラック・マジシャン』のカードなんだ。俺…もの凄く嬉しくてさ…！！ それ以来ずっと、そのカードをデッキに入れてデュエルをしてきたんだ…！！」

西条にとって、初めてのウルトラレアカード。

余りの嬉しさから、西条は『ブラック・マジシャン』のカードをずっと使い続けてきた。それ故に、カードは使えば使った分だけ傷んでいく。

当時まだカードスリーブを付けていなかった西条は、その傷みがより顕著に現れてしまったのだ。

流石に傷みが酷くなってから西条はカードスリーブを取り付けたが、それでもこの『ブラック・マジシャン』のカードを使い続けた。

それだけ、このカードには西条自身の思い入れが詰まっているのだ。

「だから…好きで傷つけた訳じゃないんだ。むしろ今では、俺のデッキに欠かせない…大切なパートナーだな」

「そう…だったんだ…」

彼のカード、もとい自分たちデュエルモンスターズに対する気持

ちを聞けて、マジシャン・ガールは素直に自分の早とちりを反省した。

そういえば精霊界でも、自分の早とちりで師匠を色々と困らせた事もあったな、と思い出す始末だ。

「ごめんね…わたしの…早とちりで」

「良しさ。それだけお前が、お師匠さんを好きだって証なんだろう？」

「…うん」

彼の優しい言葉に、マジシャン・ガールはどこか照れながら、自然と笑顔で頷く事ができた。

そして、そんなマジシャン・ガールと気持ちを同じとする様に、西条も照れくさそうに

「へへ…俺もだ」

互いに微笑みあい、少しだが気持ちを通じ合わせた二人。

しかし、二人は気付かなかった。その姿を、カーテンの開いた部屋の窓から見つめる、ある一つの存在を。

彼等の知らない場所で、闇の胎動は静かに脈打つ。

序章（後書き）

おはようございます。こんにちは。そして、こんばんは。

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

ここまで読んで、もう既にお気づきの方もいらっしゃるかと思います。すが：この小説は以前に僕の書いた小説『頂を目指す者』の過去の内容となっております。

西条亨、マナ、白石直也、結締智恭が東区に来る前：三上市での活躍を描いた作品です。

以前に投稿していた同じタイトルの『決闘者の道』ですが、自分で内容が余りにも酷いと感じられ、そのデータを全て消去しました。こちらの勝手な都合、言い分での行為に、もしかしたら不快に感じた方もいらっしゃるかと思います。

前回の続きを待っていた方もいらっしゃるかと思います。

それらにしましては、この場を借りて謝罪の意をお伝えしたいと思う次第です。

今回の内容は、以前の投稿に比べ如何でしたでしょうか？

各状況のキャラクターの心理描写。その状況を伝えるための表現方法。

考えに考えたつもりですが、以前よりも楽しく読めた、と思って下されば幸いです。

この小説は、僕にとって創作活動始まりの作品です。

なんとしてもこの作品は完成させたい。

この作品で皆様に有意義な時間を過ごして欲しい。

そんな想いで、今回の序章を書かせてもらいました。

さて、9月より遊戯王カードの制限改定が更新されました。
その中でも多くの方が、このカードに注目したと思います。そのカードは…

《カオス・ソルジャー ―開闢の使者―》

かつて遊戯王カードの一時代を形成したカオスモンスターの一体でそのステータス、効果が非常に有用なモンスターの一体。

その効果は非常に優秀で、現環境でも1ターンキルをするに十分な力を秘めています。

このカードの復帰に思わず目を疑った方も多いのではないのでしょうか？

しかし、今は様々なデッキが生まれ、様々なカードが生まれています。

今回禁止となったカードや、制限・準制限となったカードをどう上手く使いこなしていくか？

代行天使やら暗黒界が登りつめそうな環境ですが、これからのカードに期待したい所です。

モンスターエクシーズ？

はいはいローチローチ…

ローチ買占められているのか、近くの書店では1冊も本が売ってない（涙）

さて、愚痴はここまでにして…

ちなみに今回の作品から、作中に使用する禁止・制限は2011年9月1日のを適用させてもらいます。

それにしても『頂を目指す者』の時系列で言えば、過去の作品を書く訳ですので：気分はちょっとしたイリアステルです。

ZONE「過去の歴史を変えねば、未来は救われない！」

ちなみに第2話は、9月5日に掲載予定です。

それでは、今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。
次の話でまた皆様と合える事を願いつつ。新しい方に出会える事を祈りつつ。

長文、失礼しました。

追跡者

※

精霊界。

八畳程の石垣で詰まれた部屋に、重鈍な空気が辺りを包み込む。その部屋の照明は壁に設置された松明のみで、所々薄暗く感じられた。

小さな窓、もとい通気口から入る突き刺すような風が松明の炎を揺らし、部屋を覆う影は幻想的に揺らめく。

すると、その空間に似つかわしいくぐもった声が響いた。

「ふむ…。やはり次に動いたのは魔法都市であるか…」

その声の主は、異形な姿をしていた。

松明の明かりに照らされた獅子の顔、上半身は屈強な身体、そして下半身には四つの獣の形をした剛脚。

誰が見てもその姿は人の形をしていないと言うだろう。

「で…その詳細は？…ふん。かの最上級魔術師の弟子が人間界に向かった…？」

そう言葉を発する獅子顔の口元は愉快そうに笑みを浮かべる。

しかし、その姿はなにか異常だった。

部屋の中には獅子顔の獣一人だけで、他に話せるような存在は誰も居ないのである。

携帯電話や無線機なども見当たらない。

それはまるで、ここには居ない誰かと“魔法を使って交信しているかのような…”。

「ふん。異世界への転移など、かの最上級魔術師ならば容易であろう…だが我々として、転移に長けた者もおる」

獅子顔の獣は思慮を巡らせる。

「ヤツらが向こうの世界の何を狙っているかは知らん。だが…もし我等が神“邪神様”の障害になるのであれば…見過ごす訳にはいかぬ…!!」

獅子顔の獣はその表情をぐしゃり、と歪ませる。

歪ませたその笑みは、獅子の獣顔と不気味なくらいに釣り合っていた。

「…：ほう、もう既に手を打ってあったか。成程…貴公が向かうとするならば、私はここで静観しているでしょう…」

獅子顔の獣が誰と話しているかは分からない。
しかし、彼の発した言葉からは、それなりの余裕が伺える。

薄気味悪い部屋からは暫くの間、異形の主の笑い声が響いていた。

※

三上市と呼ばれるこの場所は、決闘者の聖地と呼ばれる所である。
比較的大きな街で、近代科学が発展した場所であり、深夜近くになると街のイルミネーションが至る所で光っている。

そんな夜の街を、二人の若き男女が出歩いていた。
男女の内、誰もが魅入るであろう少女は、どこか挙動不審気味に
辺りをキョロキョロとしている。

「こっちの世界は何だか凄いね！あちこちピカピカ光ってて、夜なのに全然明るいんだよ！」

トタトタ、と小走りし、まるで今の状況を楽しんでいると全身で表現する少女。

その少女が言った“こっちの世界”、という言葉に違和感を感じるかもしれないが、これにはちゃんとした理由がある。

彼女の名はブラック・マジシャン・ガール。

自分たちの暮らす世界を救う為に、精霊界から遙々と人間界にやって来たデュエルモンスターなのだ。

そんな彼女は現在、カードイラストで着ている様な衣装ではなく、どこか男物の衣服を身に着けてはしゃぎ回っている。

これには理由があり、彼女のそのままの格好だと不自然に目立つ為、間に合わせの服を着たからである。

(ネオンが珍しいなんて：コイツが居た世界にはこういった技術が無いのかな…?)

マジシャン・ガールのはしゃぎ様から察するに、精霊界ではネオンという物は存在しないのかもしれない。

彼女の話しによると、今の精霊界は邪神によって暗黒の世界となりつつあるらしい。分かり易く言えば、戦争状態という事だ。

闇夜の中で光など発したら、自分から敵に居場所を知らせる様なものだ。

恐らくそういった事情から、精霊界では現実的に光を失っていたのだろう。

しかし、そんな彼女の言葉をそこまで理解していない相方の少年、西条亨は、浮き足立つマジシャン・ガールに。

「あゝ勝手に先に行くなよ、はぐれたりしたら面倒だからな」

「うん！大丈夫、分かってるよ！」

大丈夫、とは言うが、その発言に些か不安に感じてしまうのは気のせいでしょうか？

西条は軽く溜め息混じりになりながら、自分の前で子供のようにハシヤぐマジシャン・ガールを見た。

（こうし見ていると：俺たちと何ら変わらないんだけどな…）

西条の脳裏に浮かぶのは、つい数時間前の出来事。

突如、部屋の中に魔法陣が出現し、その中から遊戯王カードのイラストそのままの格好で彼女：ブラック・マジシャン・ガールが現れたのだ。

彼女が本物かどうか確かめさせたら、自分だけでなく、部屋ごと爆破されてしまった。

まさか命懸けになるとは思っていなかった。

「さいじょお、さいじょお。まだスーパ―って所には着かないの？わたしは今お腹が減っていて、もう倒れ死にそうなんだよ！」

彼の部屋で冷蔵庫の中身を全て喰らい尽くした元凶である少女は、ぷくつと頬を膨らませながら西条に詰め寄る。

「スーパーじゃなきゃ、食べ物は置いてないの？」

「いや…すぐ隣にあるコンビニなら食べる物なんて幾らでもあるけどだな…ってフィッ!?」

コンビニの方が値段が高くなってしまうのですよ。と説明する間もなく、空腹少女マジシャン・ガールは「たべものおお…!!」と、単身で食料庫^{コンビニ}へ突撃していった。

「コラアア!! 人の話しは最後まで聞きなさいってえの!! っ
て、なんつう馬鹿力だ…コイツ…ッ!?」

「放して、さいじょお!! 食べ物がわたしを呼んでいるんだよ!
! 幻神獣を解き放つには、満腹状態じゃなきゃ出来ないんだって、
さいじょお知らないでしょ!? 精霊界じゃ常識なんだよ!?」

「嘘だ!! お前の世界の事情だか常識だか知らねえが、それが嘘
だって事ぐらい誰にでも分かるぞ!!」

店の前でドタバタギャーギャー騒ぐ西条とマジシャン・ガールの
二人は、行き交う人達の注目の的になっていた。

「いい まあ 食あ べえ たあ いいい!!」

「我慢しろ おお!!」

余りの空腹に駄々をこねるマジシャン・ガール。
財政的に少しでも安く買いたい西条亨。

いがみ合う二人のその姿は、周りの目からはどこか微笑ましく映っているらしく、誰も仲裁に入る者は居なかった。

すると、コンビニのドアが開き、中から一人の大きなアフロが特徴的なオバサン店員が出て来た。

オバサンはスウウ…と大きく息を吸い込む。

どうやら店の前で騒ぎ立てる迷惑な二人は、まだ自分の気付いていないらしい。

「それに、このコンビニは品揃えが悪い事で定評があるって有名なんだぞ！！それに店員のおばちゃんは態度や口が悪いゴリラ以外の何者でもねえし！！」

ブッチィイイ…！！

次の瞬間…。

三上市の一角にて、西条とマジシャン・ガールの二人に、ゴリラお婆ちゃんの鉄拳が振り降ろされた。

※

「…ふう」

厄日というのは正しく今日みたいな日の事を言うのではないだろうか。

部屋の隅に腰を降ろした西条は、溜め息を吐くしか無かった。

夕方はタイムバーゲンに間に合わずに滑って転ぶわ。

家に帰ったら精霊界からやって来たという魔法少女からの爆撃をくらうわ。

成り行きで魔法少女に料理を振る舞えば、三日分の食料全てを食い尽くされるわ。

外に出てみればコンビニのゴリラおばちゃんから鉄拳制裁されるわ。

マジシャン・ガールが盾にするものだから、コンビニのゴリラおばちゃんの鉄拳制裁が二発に増えるわ。

たった一日の半分で、既に西条は身も心も疲れ果てていた。

ここまで内容の濃い一日は、生まれてから一回でもあっただろうか？とさえ思えてくる。

それもこれも全て…。

「うわぁ…！！　さいじょおって、いっぱいカードを持っているんだね…！！」

西条を振り回した元凶である少女、マジシャン・ガールはそんな彼の氣を知らずか、彼の所有するカードを床一面に広げてはしゃい

でいた。

(…さっき一緒に出掛ける前に掃除したばかりだったのに…っ!)

無自覚なのが余計に質が悪い…と、西条は込み上げるストレスをグツと堪える。

しかし、いつまでもイライラしては駄目だ。これからの事を考えよう。

そう思った西条は、カードを触って楽しんでるマジシャン・ガールに話し掛けた。

「なあ、明日になったら一緒に神のカードの所に行こうって行ってたじゃん？」

「うん」

何の気なしに返事をするマジシャン・ガール。

しかし、次の西条の言葉に、マジシャン・ガールは衝撃を受けた。

「それまでの寝床って…お前どうするの？」

「…え？」

寝床：つまりは宿。

そこまで深く考えていなかったマジシャン・ガールは、何を今更
…とても言いたげな表情で

「さいじょおが泊めてくれるんじゃないの?」

まだ自分は泊めるとも何も言ってないのですが…と、西条の口か
ら軽い溜め息が洩れた。

西条が今暮らしている場所は、三上市にある第七デュエル高等学
校の学生寮だ。

やはり寮というだけあって、それなりの規則がある。
当然、西条が住んでいるここにも規則はある。

「一応言っておくが…この建物は原則として契約者以外の住み
込み、若しくは泊まり込みは禁じられているんだよ」

「…え?」

どうやらマジシャン・ガールにも、西条の言った言葉が理解でき
たようだ。

その表情からは「…ウソ…」と、焦りからくる冷や汗が流れ落ち
ている。

「でもでも、言わなきゃバレないでしょ!?」

「まあ大抵は大丈夫だと思うが…」

仮にマジシャン・ガールも一緒に暮らしたとしよう。

しかし、その事が周囲にバレるのは時間の問題である。

そう思うと西条の口からは、「絶対に大丈夫だ」とは言えなかった。

「…じゃあ…わたし…ドコに行けば良いの？」

不安げな瞳を向けるマジシャン・ガールに、西条は少なからず胸が痛んだ。

お金も持たず、身分という証明もなく、ましてや見知らぬ土地で。

このままでは間違いなく、マジシャン・ガールは一人で野宿をする事になるだろう。

よくよく考えれば、女の子が一人で野宿をするというのは、余りに危険で余りに過酷だった。

彼女が泣き顔で「どうしよう…」と尋ねるのも無理はない。

思案を巡らせる西条。

そんな彼が考え抜いた答えは…。

「…どこに行かなくても良い」

「…え？」

「お前が寝る時は、この部屋を使えば良いさ。俺はその間、友達の一部屋にでも泊めてもらうから…」

「そんな…さいじょお、出てっちゃうの…!？」

「ただし、静かにしてないと駄目だぞ？五月蠅くしたら、隣の部屋のヤツとかにバレるからな…!」

西条はそう言いながら、鞆の中に適当な荷物を放り込んでいく。その様子をマジシャン・ガールは、ただ狼狽えながら見ている事しか出来なかった。

「明日の朝7時には帰るようにするから…それまでここで、静かに待ってろよ？」

「あ…さいじょお…っ!！」

言うだけ言うと、この部屋の主である西条は出て行ってしまった。静まり返った部屋からは孤独感しなく…。

マジシャン・ガールは、彼が出て行った玄関のドアの前から動けなかった。

二人は気付いていなかった。

今の自分たちの様子を伺う、ある者の存在に…。
二人がそれぞれに離れた事を確認すると、その者は行動に移す為に、ゆっくりと足を踏み出した。

※

一人になった部屋の中は静寂に包まれていた。
ベッドの上で体育座りしながら俯くマジシャン・ガールを、窓から入り込む月明かりが照らす。

うつすらと見える彼女の表情はどこか儂く、不安や孤独感が垣間見えた。

彼女からすれば正直な話し、西条には出て行って欲しくなかった。
見知らぬ土地、見知らぬ世界で、マジシャン・ガールが初めて出逢った相手。

今更にしてマジシャン・ガールは気付く。

彼は何だかんだ言いながら、自分の為に非常に協力してくれているという事を…。

しかし、それでも。

マジシャン・ガールは一人になるという状況が嫌だった。

（明日は…遂に幻神獣と対面するんだ…！！ わたしが仰せつかったこの任務の成果が…精霊界の命運を分ける…！！）

マジシャン・ガールは、この世界から神のカードと呼ばれる幻神獣を、自分の世界に持ち帰る任務を受けている。

自分がこうしている間にも、精霊界では今も邪神たちが世界を制圧しようと動いているに違いない。

あちらの世界の現状が理解出来ない今、マジシャン・ガールに焦りや不安がのし掛かる。

それと同時に、ふと思う。

(…でも…もしわたしが、幻神獣を持ち帰る事が出来なかったら…！？)

それはそれで、自分たちの世界はいつたいていどうなってしまうのだろうか…。

言いような不安が更に増幅し、「ヒ…ッ!？」と嗚咽がこみ上げてくる。

マジシャン・ガールはとっさに頭を振り

「だ…大丈夫! アッチにはお師匠サマだって居るんだもん! 絶対、絶対に…!!」

口に出す事で、込み上げる不安を払拭しようとする。

一人ぼっちという状況が自暴自棄にさせる。

こうなるのが嫌で、マジシャン・ガールは西条には出て行って欲しくなかった。

話していれば、多少の気は紛れるからである。

部屋にある時計の針を確認すると、まだ夜中の十一時を過ぎたばかりであった。

確か彼が帰ってくるのは、明日の朝七時だった筈だ。

（寂しいよお…）

ベッドの上でうずくまる彼女は祈るではなく、懇願するようにポツリと呟く。
すると…。

「さいじょお…早く…帰って来てよ…」

『ピンポーン…!!』

「ッ!？」

それは突然だった。

マジシャン・ガールが呟いたと同時に、備え付けのインターホンが鳴り響いたのだ。

『ピンポーン…ピンポーン…!!』

一瞬、何が起きたのか分からなかった。
マジシャン・ガールは反射的に後ずさり、その華奢な身体はギュ

ツと縮こまる。

『ピンポーン…ピンポーン…ドンドン!!』

暫くして…インターホンの音から無造作にドアを叩く音に変貌し、マジシャン・ガールは恐怖心から涙目になり、齒をガチガチと鳴らせた。

人間界の常識で言えば、インターホンが鳴るという事が来客者を意味しているのだが、マジシャン・ガールからすればそんな常識は知らない。

しかし、これだけは分かる。

あの玄関の向こうには、自分にとって得体の知れない何かが居る。という事を…。

(なに…なんなの一体…っ!? 分からない…どうしたら良いのか…分からないよ…さいじょお!!!)

今にも泣き出しそうなマジシャン・ガール。

すると、玄関の向こうからこんな言葉が彼女の耳に入ってきた。

『ドンドン…開けてくれ。俺だ…!!!』

「え…さい…じょお…?」

初めは自分の耳を疑った。

しかし、今のマジシャン・ガールには深く考えるような余裕は無かった。

さいじょおが来た。理由はどうあれ、帰って来てくれた!

「さいじょお…。さいじょおなの…!?!」

『ああ、俺だ。だから開けてくれ』

「ま、待ってて…!!」

今、鍵を開けるから!と、マジシャン・ガールは声の主へと急ぎ足で向かう。

今の彼女には、彼の声が希望に見えた。
今の彼女には、彼の存在が必要だった。

ガチャリ…ツ!!

彼が帰ってきたという思い込みの安心感で、マジシャン・ガールは盲点だった。

期待に胸を膨らませるマジシャン・ガールは、玄関のドアを勢い良く開けた。

「さいじょお!! 帰ってく……………え？」

しかし、期待に満ちたそれまでの彼女の精神は、次の瞬間、粉々に砕け散った。

結論から言えば、そこに立っていたのは彼ではなかった。

月明かりを背にしたその姿からは、その者から放たれる異形の存在感が浮き出ている。

「全く…手間を掛けてくれる」

やや重みがあった、まるで変声機を使ったかのような声を発するその者は、啞然とするマジシャン・ガールの眼前に腰に下げてあった剣を突き出す。

「お前がこの世界に来て何を成そうとしているのか…全て吐かせてやる」

「そんな…何で…っ!？」

その者の姿は、こちらの世界に住む人の格好をしていなかった。

頭部にはねじ曲がった二本の角。顔や腕や身体や脚の皮膚の色は、月明かりで紫に彩どり。肩から背中にかけて、モスグリーンのマントが風に靡く。

マジシャン・ガールは、突き付けられた剣の切っ先を見つめながら

「デーモン・ソルジャー…精霊界の者が、どうして人間界に来ているの…!?!」

精霊界にて悪魔族の戦士達の中でも、精鋭部隊と名高いデーモン・ソルジャーと呼ばれたその者は、無機質な表情のまま、マジシャン・ガールに向けて切っ先を押し込んでいく。

喉元に軽く突き刺さる一部分からは、うっすらと赤い滴が床に零れ落ちた。

「貴様の話しに付き合うつもりはない。黙って我々に付き従え…」

「我…々…っ!?!」

その言葉に言われて、マジシャン・ガールは初めて気が付いた。いつの間にか自分の両側にも、それぞれに二人のデーモン・ソルジャーが立っていた。

目の前から突き付けられた剣にばかり注意してしまい、周囲の警戒を疎かにしていたのだ。

完全に包囲されたマジシャン・ガールに、打っ手は無かった。

このままコイツ等に連行されれば、情報だけを抜き取られ、自分は間違いなく死を迎えるだろう。

それだけは、それだけは何としても避けたかった。

「……ーッ!？」

ジャラジャラ…ッ!！
ガシィッ!！

マジシャン・ガールが行動に移そうとした瞬間だった。

両側に立っていた二人のデーモン・ソルジャーが、闇の力を凝縮させた鎖でマジシャン・ガールの身体を縛りあげてしまった。

「んあっ…!？　なに、コレ…っ力が…!？」

上手く足に力が入らず、その場にガクリと膝をついてしまうマジシャン・ガール。

これでは身動き一つとれず、ヤツらの好きなようになってしまう。

「…場所を変える。連れていけ」

正面に立っていたデーモン・ソルジャーがそう言うと、マジシャン・ガールの眼前に二人のデーモン・ソルジャーが立ち並んだ。

（そんな…わたし…っ…イヤだよ…っ、助けて…っ!！）

自分に向け迫り来る悪魔の手に、マジシャン・ガールの悲鳴が響

き渡った。

※

西条亨は、三上市の夜の街を渡り歩いていた。

マジシャン・ガールを部屋に泊め、自分はこれから友人の部屋へと乗り込むのである。

最初は、マジシャン・ガールが言うように一緒に過ごそうかと考えた。

しかしよく考えてみれば、マジシャン・ガールのような美少女と呼ぶに相応しい相手と一緒に、同じ部屋で一夜を共にする…という言葉には、なにやら厭らしい意味を期待しそうではないか。

それが健全な男子高校生なのだが、西条はウブなのだ。照れ屋さんなのだ。

寮の規則もあるが、実を言うと彼は、ただ単に気恥ずかしくなつて飛び出したただけだった。

そんな純情少年である西条は、繁華街の路地裏にある木箱に腰を降ろした。

耳に当てた携帯電話からは、彼の友人の声が聞こえてくる。

『ふうん…で、俺の部屋に泊まりに来たいと言う訳か』

「そうなんだよ。最初、結締のヤツに電話してみたら…何か今日は合コンで朝まで帰って来ないみたいだし。それで、白石ならどうか

「思ってたさ…」

『合コンだと…！？ 羨ましい限りだ…。あ、ちなみに西条よ、最初に言っておくが…泊まりは無理だ』

「え？」

『俺は今、エロゲーで忙しいのだ！！ 今ちょうど三人目のヒロインを堕とせるかどうかの瀬戸際なのだ…！！ たとえ誰であれ、この俺の有意義で貴重な時間を潰すのは、西条よ！！ 貴様とて許さんぞ…！！』

ブツツ…ツーツ、ツーツ、ツーツ…

一方的に電話を切られた西条はガックリと頭を垂れた。

結締みたく、朝まで帰って来ないのなら話しは分かるが、エロゲーしてるから駄目という断られ方は、生まれて初めてだった。

西条は溜め息混じりに携帯電話を開き、次々と電話帳を検索していく。

誰かわたくしめを泊めてくれる心優しい方はいらっしやらないだろうか？

「はあ…誰も居なかったら、ファミレスか漫喫で時間を潰すしか無いかなあ？」

そうボヤいていると、ピピピピピ…ッ！！と西条の携帯電話に

着信が入った。

液晶画面に映るその名前に、西条は「イゝ!？」と驚きの表情になる。

「寮監から…ッ!？」

西条はガバツと立ち上がり、まさか…!？と声をあげる。

もしかしたら、マジシャン・ガールの事がバレて、連絡が来たのではないかと。

そうであるなら、一体どんな処罰が下されるか……想像しただけで、西条は思わず身震いしていた。

「…はい、もしもー」

『夜分遅くに悪いわね、西条くん…楠くすのきです。私が何を言いたいのかわかるわよね?』

バレた。

確実に寮監にバレている。

西条はそう、とっさに判断した。

「あの…先生、スイマセン…直ぐに帰ります」

受話器の向こうから、寮監の「今すぐ」という言葉が聞こえてきた。

どうやらマジシャン・ガールは大人しく待つ事ができないようだ。まさかこんなに早くバレるとは思ってなかった。

電話を終えた西条は深い溜め息と共に、来た道を引き返していた。

※

どうやら最近では、デュエルモンスターズのコスプレでも流行っているらしい。

寮に帰る途中すれ違った人達が、よく出来たデュエルモンスターズのコスプレだと言っていた。

最初はマジシャン・ガールの事かと思い、詳しく訊こうと聞き耳を立てたのだが、どうやらコスプレはマジシャン・ガールではなく、デーモン・ソルジャーとの事。

マジシャン・ガールがまた何かやらかしたのかと一瞬危惧したが、どうやら違ったらしい。

それはそれで、心配事の種が一つ解消された。

しかし、今の西条には問題の種が山のように積もっている。

今現在、寮の入り口の前で仁王立ちする寮監兼、クラスの担任である楠ミナは、自分の前で青ざめた表情を浮かべる西条亨を、視線だけで黙殺していた。

端正な顔立ちからなるスリムな体型。

ピンクのジャージ姿からでも分かる控えめな胸。

夜風に靡く艶やかな茶髪のポニーテールが特徴的な楠ミナ先生は、小刻みに震える西条に、顎で促した。

「…コツチ、来なさい」

「…は、はい……」

促されるままに足を動かす西条の頭は、必死になって弁明を考えていた。

マジシャン・ガールの事をどう説明しよう？ 精霊界云々とか言っても信じてもらえるだろうか？

マジシャン・ガール

そして何より、今回あの馬鹿は一体何をやらかしたのか？

大人しくしていなさいと、あれだけ言ったのに…！！

うーん…と西条が思考を張り巡らせていると、先導する楠ミナ先生の足が止まった。

止まった場所とは、自分の…西条が使っている部屋の前だ。

そして楠ミナは言う。

「コレ…どういう事か、説明してもらえるかしら？」

「ッ!？」

余りの光景に、西条は目の前の現実が一瞬、理解できなかった。

開けっ放しの玄関の扉。

まるで硬い金属か何かで打ち付けたであろう壁や扉の凹み。

そして何より、中から玄関を開けた者であろう、床に広がった赤黒いシミ。

彼にとって日常離れしたその光景。

これには理由を求められても、直ぐに説明できるような状況ではなかった。

「…な…っ…だよ…っ!？」

開けっ放しの玄関から、部屋の中を窺う西条は、更に衝撃を受ける。

いない。

部屋の中に居る筈のマジシャン・ガールがいない。

（アイツ…どこに行ったっていうんだよ…!？）

「夜中なのに変な物音はするわ、仕舞には女の子が大声で君の名前を叫ぶわで…西条くん。誰か連れてきてたの？」

「っ!？
（大声で…アイツが…!？）」

西条の中で言いようのない不安が渦巻いていく。
床に流れた血の痕。

そして、彼女の助けを求めたであろう叫び。

西条は奥歯を一瞬だけ噛み締め

「…先生…っ！！ 声がしたのって…いつ頃なんですか…！？」

「君が戻ってくる10分位前よ…あの声で、私も気付いたんだし」

楠ミナ先生が話したと同時に、西条は一気に駆け出した。

「っ！？ 待ちなさい西条くん！！ アナタ、どこへ行くつもりなの…！！」

「スイマセン、先生！！ ちゃんと戻りますから！！」

制止の声を振り切り、西条は学生寮から飛び出した。

迂闊だった。

認識が甘かったとしか言いようが無かった。

（そうだよっ…何でもっと早くに気付かなかったんだ…！！ アイ

ツが俺達の世界に転移して来れたなら、他のヤツも転移出来るかもしれないって……！！！！）

マジシャン・ガールは精霊界で、邪神を崇める連中と戦っていたと話していた。

現場に残された痕跡から察するに、マジシャン・ガールは敵に襲われた。

あの時、なぜ一緒に居てやらなかったのだろう……と、西条は悔やみきれない気持ちでいっぱいだった。

がむしやらの街に走ってきたは良いが、肝心のマジシャン・ガールが何処に向かったのかは分からない。

しかし、西条には思い当たる節があった。

それは学生寮に戻る途中に、よく出来たコスプレの話聞いていた事だ。

（確か……話によると……っコスプレ集団は、三上川に向かった筈だ……！！）

一か八かの大勝負。

もしかしたら、既にヤツ等はマジシャン・ガールを連れて、精霊界に帰ってしまったかもしれない。

しかし、だからといって諦める西条ではなかった。

（こんな半端に消えられちゃ、後味が悪いんだよ!!）

自分が向かった所で、何が出来るか分からない。

しかし、放っておける程、人としての心は腐ったつもりはない。

目的地（三上川）へと向けて、西条亨は一心不乱になって駆けていった。

※

三上市の西側に、南北に伸びる大きな川が流れている。

通称、三上川と呼ばれるその河川は、対岸を繋ぐ為の巨大な鉄橋が建設されている。

その鉄橋の下に広がる区間にて、一人の少女の苦悶な声が響いていた。

「ハア…ハア…ツああっ!？」

ガスッ!…と、少女の横顔が地面に押し込められる。

這い蹲り、殴られたように顔を腫らすその少女マジシャン・ガールの周りには、異形の悪魔戦士デーモン・ソルジャー三人が取り囲んでいた。

端から見れば、一人の少女に対する集団暴行。

しかし、周りには人の気配はなく、誰もその事に気付かない。

「いい加減に吐いてもらおうか。これ以上は貴様にとって、苦痛が長引くだけだ」

朦朧とする意識のマジシャン・ガールに、デーモン・ソルジャーの一人が問い掛ける。

「ハアっ…ハアっ…ハアっ…!!」

しかし、マジシャン・ガールは口を開かない。

仮に自分が消滅しようとも、次なる者が自分の代わりに人間界に赴き、幻神獣を持ち帰ってくれるだろう。

しかし、今ここでその事を敵に知られる訳にはいかない。

マジシャン・ガールは決死の覚悟で、今という状況を乗り切ろうと必死だったのだ。

「貴様はデュエルで我々に敗北したというのに、まだ吐かぬか…往生際が悪い女だ…!!」 フンっ!!」

「んあっ!? ケホッ、ケホッ…ッ!!」

マジシャン・ガールの腹部に重い一撃が響く。
噎せ返り、うずくまる少女相手にも、悪魔は容赦しなかった。

すると、一人のデーモン・ソルジャーがマジシャン・ガールに背を向け、跪くような姿勢をとった。

うつすらと視線を向けると、マジシャン・ガールはハツとなり、息を詰まらせた。

そこには何時の間に居たのであろう、もう一人の異形の主が君臨していたのである。

その異形の主に対してデーモン・ソルジャーは頭を下げたまま

「邪帝様、申し訳ございません。手間取ってしまって…」

(邪帝…っ、そんな…まさか…っ!？ 邪帝ガイウス…っ!？ 【王】
クラス…デュエルモンスターまで…っ!！)

邪帝と呼ばれた異形の主は、黒ずくめの甲冑から覗く赤い眼光をマジシャン・ガールに向ける。

マジシャン・ガールは邪帝の放つ邪気に当てられ、青ざめた表情から唇が青紫へと変色していった。

「続ける。何故この異世界に来たのか…何が目的なのか…何としてもその小娘から吐かせろ」

邪帝の言葉に、再びマジシャン・ガールを三人の悪魔が取り囲む。無機質な表情からなる残虐な視線が、マジシャン・ガールに向けられる。

マジシャン・ガールは悟る：もう自分は、此処までなのだ。

思い返せば、自分はちっとも成果を上げられなかった。

まだ精霊界に居た頃は、師匠であるブラック・マジシャンに付き従い行動してきたが、大した活躍はできず…。

何をするにも、失敗続きだった。

周りからはブラック・マジシャンが有用すぎて、なぜ弟子であるマジシャン・ガールはこうも落ちこぼれなのだ？と、陰で非難されていたのを覚えている。

初めて聞いた時はショックだった。

しかし、マジシャン・ガールは明るく振る舞う事にした。

失敗がなんだ。だったら次は成功させてやる！と、前向きに考える事で、モチベーションを高くしていった。

しかし、失敗は続いた。

もしかしたら、自分はブラック・マジシャンの弟子である事は、間違っているのではないかと、自らの存在を否定しそうになった。

そんな時だった。

師匠であるブラック・マジシャンから、今回の任務の話をされたのは…。

『弟子を信用しない師匠など、どこにいる？』

人間界に向かおうと決意させられたその言葉が、マジシャン・ガールにとって唯一の救いだった。

人間界に来てからも、何だかんだありながら、西条亨という優しい協力者を得られた。

自分の為に料理をしてくれた事だって、部屋を貸してくれた事だって、幻神獣の事だって…。

人間界の右も左も分からない自分に、西条は本当に資力してくれていた。

（今頃…さいじょおは何してるかな？きっと、わたしの事なんか…知らないよね？…お友達のとこに居るんだもん…でも、今は…来て欲しくないな…）

あの時、思わず助けを求める意味で彼の名を叫んでしまったが、今の気持ちは逆であった。

彼にこんなボロボロになった自分を見て欲しくない。

彼にはこれ以上、自分のせいで傷ついて欲しくない。

マジシャン・ガールの瞳から、涙がポツリ、ポツリと零れ落ちる。

（ごめんね、さいじょお…明日一緒に…幻神獣のトコへ行こうって約束…守れそうにないや…色々迷惑かけちゃって…ホントに…ごめんね…）

彼に対する懺悔の気持ちの中、隣に立つ悪魔の手が自分に向かって伸ばされる。

迫り来る悪魔の手を見て、マジシャン・ガールは一瞬。

向こうからやって来る一人の少年の姿に、ほんの一瞬、自分の目を疑った。

「…!？」

どうやらデーモン・ソルジャー達も彼の存在に気付いたらしく、伸ばす手を退げて少年の方に振り返る。

(…なん…で…っ!?)

マジシャン・ガールは目の前の光景が信じられなかった。

来てくれる筈がないと思っていた。

来てほしくなかった。

この戦いに、彼を巻き込みたくなかった。

こんな姿の自分を見られたくなかった。

それでも、彼はやって来た。

ツンツン頭の黒髪に、白いカッターシャツと黒の学生ズボン。

マジシャン・ガールにとって、それは見間違える事のない、西条亨だった。

マジシャン・ガールの気持ちは複雑だった。

来てほしくないと願ながらも、それでも来てくれた彼に、マジシャン・ガールは嬉しさを感じていた。

初めは驚いた顔をした西条だが、地面に横たわるマジシャン・ガールや、彼女を取り巻く異形の連中を見て、その表情を徐々に険しくする。

「貴様は…あの部屋の住人か。何の用だ」

デーモン・ソルジャーの一人が、西条に対して問い掛ける。
西条は、身体を微かに震わせながら

「…っお前等こそ…ソイツに何してやがる…!?!」

その声は震えていた。

それは脅えからくるものでは無い事は明らかだった。

「見ての通りだ。この小娘が吐かねば、次は貴様に訊こうと思って
いた所だ」

あまりに淡白に答える異形の者、デーモン・ソルジャー。
その返事が、西条の神経をより逆撫でた。

「…………い…お…………!?!」

「!？」

そこで、西条は見た。

地面に横たわる少女が、ボロボロになりながらも自分に向けて手を伸ばす姿を。

その手は所々皮膚が剥けていた。

その身体は至る所に血が滲んでいた。

彼女が身に纏う服は、それぞれに破られ、斬られた部分が見えた。

そんな彼女の顔からは、大粒の涙が流れ落ちていた。

「……さい…じょ…お………」

「……!?!?!」

その瞬間、西条はキレた。

「…れろよ」

「……?」

「ーッ!! マジシャン・ガールから離れろって言ってんだろッ
!! 聞こえねえのか、三下アア!!!!!!」

追跡者（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の内容は如何でしたでしょうか？

精霊界からの追っ手に捕まったマジシャン・ガールを助けに現れた西条。

次回からいよいよデュエルが開始されます。

今回の小説を執筆するに当たって僕が心がけているのが、その時の描写を具体的に書いていこう、という事です。

例えば：文庫本なんかを読んでいると分かるのですが、作品の流れというのは大きく分けて2種類あると思います。

一つは、今回僕が心掛けているような【その時々 of 描写を書き表し、具体的内容を読み手に伝える】方法。

そしてもう一つは、【キャラクターの会話を重点に置き、会話の流れで内容を進めていく】方法です。

これにはどちらにも一長一短があります。

一つ目の【その時々 of 描写を書き表し、具体的内容を読み手に伝える】方法ですが、これは読み手にその場その場での描写が伝わり、感情移入しやすい表現方法かと思います。

反面、文章量が多くなり、途中で読み手が疲れやすくなってしまふというデメリットがあります。

一言で言い表すなら「もっさり感」。

そして二つ目の【キャラクターの会話を重点に置き、会話の流れ

で内容を進めていく」方法。

これには各キャラクターの会話によって物語が進む為、テンポ良くストーリーの流れを感じる事が出来ます。

しかし途中で、この台詞はどっちのキャラクターが話しているんだ？となる場合があり、それが二人だけでなく三人四人にまでキャラクターの数が増えると、読み手が混乱する場合が顕著に顕れます。一言で言い表すなら「スパスパ感」。

まあどっちも書き手の技量次第なんですがね？

いずれにせよ、実際に出版されている作家の方々はその辺りを弁えており、作品ごとの世界観がしっかりと表現できた内容となっております。

やはりプロの方々は凄いなあと毎度思います。

反面、そう思うと僕の作品はまだまだ甘いな…と自分で思わざるを得ないです。

文章表現でこうした方が良い、とかアドバイスがありましたら、感想でも良いのでは非ともご教授願いたいです。

さて、前の回にちょこっと書きましたインヴェルズ・ローチ…ある店でようやく発見しました。

「見つけたああ!!」と思った矢先、そのカードの値札に記された金額を見て僕は言葉を無くしました。

僕「…さ…三枚セットで…五千円…だと…っ!?!?」

アポリア「少年よ、これが絶望だ…」

もちろん買いませんでした。

買えなかったんじゃない。買わなかったんです！

ちなみに次話の掲載予定は9月10日を予定しております。

さて、そろそろ：

次回の話しで、また皆様に出会える事を祈りつつ。次回の話しで、新しい出会いを期待しつつ。

今回はここで筆を置かせてもらいます。

ありがとうございました。

決闘

※

三上市の西を流れる三上川。
大きな河川だ。

昼間は河川敷にある公園や広場に、小さな子供たちが遊び回ったり、犬の散歩道になったり、運動に勤しむ者がジョギングのコースにしたりと、何かと賑わう場所でもある。

しかし、今その三上川の河川敷に人の気配は、ある一人の人物と、異形の集団しか存在しなかった。

その唯一の人間である西条亨は叫んだ。

「マジシャン・ガールから離れろって言ってんだろッ!! 聞こえねえのか、三下アア!!」

「…三下…だと…?」

三下呼ばわりされた異形の集団は、彼から発せられた怒号に怯み、思わず一步後退する。

その様子を、異形の集団に囲まれていたマジシャン・ガールは、信じられないものを見る様な目で、声をあげる彼を見つめた。

自分を取り囲む異形の集団は、マジシャン・ガール等デュエルモ

ンスターズが暮らす世界、精霊界の住人。

その中でも悪魔族の中で、精鋭部隊と称されるデーモン・ソルジャーである。

更にもう一人。

精霊界を脅かす邪なる神を崇拝する帝王、邪帝ガイウスまでもが居合わせているのだ。

彼の切った啖呵が、如何に命知らずな発言であったか…。

精霊界でなく、人間界で暮らす西条は、そんな事情など知ったことではなかった。

「よく邪帝様の前で、その様な口がきけたものだ。身の程を弁えろ、人間」

「テメエ等の事なんか、知った事じゃねえよ…!! それよりも、ゴチャゴチャ言ってねえで、さっさとソイツから離れろッ!!」

全身から怒りという感情を剥き出しにする西条に、無機質な表情のデーモン・ソルジャーからは、首筋から冷や汗にも似た何かが流れ落ちる。

「…貴様…!!」

「もう良い…」

その言葉に、マジシャン・ガールを取り囲む三人のデーモン・ソルジャーの血の気が、一気に引いた。

三人の内一人が、恐る恐る振り返ると、彼らの上司である邪帝がイウスが遂に動き出した。

「邪…邪帝様…!?!」

「何を狼狽えている…貴様等は悪魔族の精鋭部隊では無いのか? あんな小僧一人に、何を臆する?」

つまならそうに息を吐く邪帝。

その動作一つ一つに、彼の部下であるデーモン・ソルジャー達は慌てた…いや怯えた様子で

「邪帝様…?!?! お、お待ち下さい!!! 我々は決して…!!!」

「もう良いと言ったのだ。貴様等は私の力の礎となれば良いのだ…!!!」

その瞬間、西条の目に信じられない光景が映った。

「…?!?! お、お前…!!!」

響き渡る異形の悪魔の雄叫び。

それは雄叫びというよりも悲鳴と呼んだ方が正しいだろう。

邪帝と呼ばれる悪魔が片手を翳した瞬間、三人のデーモン・ソルジャーはそれぞれにもがき、苦しみだしたのだ。

地に膝をつき、大きく肩で息をする三人のデーモン・ソルジャーの身体から、黒い煙のようなものが一気に放出されると同時、彼ら三人の身体に、ある変化が訪れた。

みるみる内に彼らの身体は凝縮し、四角い一枚のカードへと姿を変えたのである。

西条やマジシャン・ガールの前で、三人のデーモン・ソルジャーは、最後まで「邪帝…様…」と声をあげ、その意識を消失させた。

「…なに…してんだよ…お前…っ!!」

「なにをしているか…だと？ 愚問だな…」

西条の言葉に、邪帝は嘲笑うように

「臆した兵など、私の部下には不要だ。それに…」

それに…。

そう述べた邪帝の赤い眼光が、西条の怒りに満ちた視線と衝突する。

「なかなか良い目をしているな…小僧」

「…お前に言われても嬉しくねえよ…!! それよりも、さっきから言ってるだろッ!! マジシャン・ガールを解放しろ!!」

西条の言葉に、地に這い蹲るマジシャン・ガールを一瞬だけ見や
った邪帝は、その目元を卑しい形へと変貌させる。

「…そんなにこの小娘が大事かね？」

邪帝がそう言うと、三枚のカードとなったデーモン・ソルジャー
が、邪帝の手の中へと集結していく。

「お前にとって、この小娘は何なのだ？ 私とこの小娘は、精霊界で
の敵同士。言わば今回の件も、その延長線上に起きた事に過ぎない。
そこに何故、人間であるお前が出て来る？」

「…い…じよお…」

マジシャン・ガールは、邪帝の言葉の意味が少なからず理解した
つもりでいた。

確かに自分と邪帝は、精霊界での敵同士。
今回はたまたま、その戦いの舞台が人間界で起きてしまっただけ
である。

「部下からの報告によれば、貴様等はたった数時間前に会ったばかり…情でも移ったか？それとも、この小娘に誑かされたか？」

「あぁっ…！！！」

「ッ！？ テメエ…ッ、その足をマジシャン・ガール退けろッ！！！」

邪帝に向かい迫る西条に、マジシャン・ガールは声に出せずとも制止の声をあげる。

そんな彼女の予測は正しかった。

邪帝に殴りかかろうとする西条だったが、彼の拳が邪帝に届く事はなかった。

軽く腕を薙ぎ払われただけ。

たったそれだけの動作で、西条の身体は二メートル近く吹き飛ばされてしまったのだ。

（っ！？ さいじょおっ…！！！）

ズザザザ…ッ！！と砂利の上を転げ回る西条。

これは別に、西条の喧嘩の腕っ節が極端に弱い訳ではない。

相手が悪いのだ。

精霊界のデュエルモンスターズは、人間に比べ様々な力に秀いた存在である。

人間とモンスター、その元となるスペックが違いすぎているのだ。

それでも、西条はすぐさま立ち上がった。

身体中は砂利を転げ回ったせいで、所々悲鳴をあげている。

だが、それがどうした？

(アイツが受けた痛みは…こんなもんじゃねえんだ!!　こんな所で…俺が先にくたばったんじゃない、話しになんねえよ!!)

(…この人間…)

ぶっ飛ばされても尚、鋭い敵意をぶつけてくる西条に、邪帝はもう一度尋ねた。

「人間、もう一度だけ聞くんが…貴様がこの小娘を助ける理由は何だ？」

(……………)

マジシャン・ガールはゴクリと息を飲み込んだ。

自分は彼に迷惑ばかり掛けていた。

出会ってまだ、半日しか経っていない。

自分の代わりに戦ってくれとも頼んでいない。

それでも、彼はやって来た。

吹き飛ばされても尚、彼は立ち上がってくれた。

これでは嫌でも、彼の言葉に期待してしまうではないか。

「…初めは…迷惑に感じてたさ…!!」

西条の出だしの言葉…。

「突然現れて、自分は精霊界から来たブラック・マジシャン・ガールだって訳分からねえ事言うし、部屋は爆破するわ、冷蔵庫の中を全部食っちゃうわ、掃除した部屋を散らかすわ、俺を盾にするわで散々だったさ…!!」

(うう…)

マジシャン・ガールにとって、彼の話の下りは苦痛以外の何物でもなかった。

「ケドな…!! アイツは…一生懸命だったんだよ!! 右も左も分からないトコ来て、自分なりに必死に信じて貰おうって、アイツの行動は全部、一生懸命だったんだ!! そんなアイツの姿は…俺には孤独に見えた…!!」

(っ!?)

「何も知らねえ所にいきなり一人で来たら、誰だって寂しいに決まってる!! 俺がアイツの立場だったら、絶対にそう思う!!」

だ

から…俺は決めたんだ!!」

西条は大きく息を吸い込み、ハッキリ、堂々と宣言する。

「どんな事があっても、誰が何と言おうと、俺はマジシャン・ガールの支えになってやろうってな!! お前がマジシャン・ガールの使命を邪魔するってんなら、容赦しねえ!! 俺が相手になる!!」

「…ほう」

ポツリと、マジシャン・ガールの瞳から再び涙が零れ落ちた。
やはり迷惑に思われていたが、彼は自分の事を理解してくれていた。

この世界に来てからの自分が感じていた孤独を、彼は分かってくれていた。

それと同時に感じる。

自分には、こんな身近に頼れる仲間が居たんだという事を。

「なる程…それが貴様が戦う理由か。面白い、ならば私は貴様の言葉に敬意を払い…貴様に決闘^{デュエル}を申し込む!!」

「決闘^{デュエル}…ッ!!」

邪帝はそう言うと、どこからか板状の腕輪を取り出し、それ自分の腕に装着させた。

マジシャン・ガールを踏みつける足を進ませ、西条の前へと進み出る邪帝は

「決闘^{デュエル}とは、精霊界では古来より伝わりし、戦いの儀式。互いの合意を得た決闘は、何人たりとも邪魔をする事ができない……!!」

「……ッ」

西条は自分の鞆の中に入れてあったデッキと、決闘盤を取り出した。

元は友人の部屋に泊まりに行く際に鞆に放り込んだ物。その当時は、まさか今みたいな状況になるとは思わなかった。

西条は決闘盤を腕に装着する。

デッキをシャッフルし、それを決闘盤のデッキホルダーにセットし終え、西条は正面に対峙する邪帝ガイウスを見据える。

邪帝はそれを、決闘^{デュエル}の承諾とみなした。

「貴様が勝てば、私はこの世界から退こう……しかし、私が勝った場合……」

「その時は、お前の好きにしろよ……俺は負けるつもりは毛頭ないがなッ……!!」

「…それで良い」

その言葉に不穏な空気を漂わせる邪帝。

真っ直ぐに見据え、闘志を剥き出しにする西条。

(…さいじょお…!!)

そして、今も横たわりながら、自分の為に駆けつけてくれた彼の為に、必死になって立ち上がろうとするマジシャン・ガール。

西条 対 邪帝。

二人の決闘^{デュエル}が今、幕を開けた。

「行くぞ…!!」

「…来い、人間…!!」

『決闘^{デュエル}ッ!!』

※

遂に西条と邪帝のデュエルが始まった。

深夜の三上川、その河川敷に重苦しい空気が漂っていく。

そんな中、先攻プレイを奪取した西条が、デッキトップに指を添えた。

「行くぞ…!! 俺の先攻、ドロツ!!…っ!？」

デッキからカードをドロした西条は、対峙する邪帝の様子に付き、そのプレイに一瞬の硬直が入る。

邪帝は「ククク…」と不気味な笑い声と共に、空いた掌に膨大な力を凝縮させていく。

「お前…っ、一体何を…!？」

西条の問い掛けに、邪帝は凝縮させた力の塊を西条に見せ付けながら

「その目にしかと焼き付けるが良い。コレが我々…精霊界のデュエルだ!! フンツ!!」

カツッ!!

キイイイイイイ…!!

邪帝は凝縮させた力の塊を地面へと叩き付けた。

衝撃を受けた力の塊は拡散し、その形を濃い紫色の円形状の魔法陣に変え、展開していく。

地を這う円形状の魔法陣は大きく広がり、瞬く間に西条と邪帝の二人を囲うようにして停止した。

「っ！？ 何だ…コレ…っ！？」

「言った筈だ。精霊界のデュエルでは、何人たりとも干渉を加える事は出来ない…！！ この円の外より、何人たりとも入る事叶わず。この円の内より逃げる事許さず。この円が解かれる瞬間こそ、^{デュエル}決闘の決着也…！！」

「…なる程」

分かり易くて良い…と西条は思った。

「要はあれだ…“俺がお前に勝てば良い”って事だろ？」

「…フン、減らず口を…」

西条の言葉に不気味な笑みを浮かべる邪帝。

そして、遂に西条の先攻プレイが再開された。

【先攻】西条亨

LP／8000

【後攻】邪帝ガイウス

LP／8000

「行くぜ……！！ 俺は『魔導騎士ディフェンダー』を召喚ッ……！」

【魔導騎士ディフェンダー】

星4／光属性／魔法使い族

ATK／1600 DEF／2000

「効果」

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大1つまで）。フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスターが破壊される場合、代わりに自分フィールド上に存在する魔力カウンターを、破壊される魔法使い族モンスター1体につき1つ取り除く事ができる。この効果は1ターンに1度しか使えない。

西条のフィールドに、巨大な盾を構えた魔導騎士が出現した。

「魔導騎士ディフェンダーの効果発動……！ コイツが召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを1つ置く……！！」

【魔導騎士ディフェンダー】

ATK／1600 DEF／2000

(魔力カウンター ×1)

西条の召喚した魔導騎士ディフェンダーの持つ巨大な盾が魔力を帯び、淡く虹色に輝いた。

彼は更に手札を掴み取り…。

「先攻は最初のターン、攻撃する事は出来ない…。俺はリバーサイド1枚をセットして、ターンエンド!!!」

西条のターンが終了し、邪帝のターンへと移行する。

自分のターンが訪れた邪帝だが、相変わらず不気味な笑い声を漏らしていた。

「私のターン、ドロー!!! フフフ…私は手札の『ジェスター・コンフィ』を、攻撃表示で特殊召喚…ッ!!!」

【ジェスター・コンフィ】

星1／闇属性／魔法使い族

ATK／ 0 DEF／ 0

【効果】

このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚した場合、次の相手ターンのエンドフェイズ時にこのカードと相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を手札に戻す。「ジェスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

邪帝のフィールドに、小さな玉に乗った道化師、ジェスター・コンフィが特殊召喚された。

西条はそのモンスターのステータスを見て、鼻を鳴らした。

「攻撃力、守備力が0のモンスター…？ハッ、そんなモンスターじゃ俺のモンスターを倒す事は出来ないぜ！！」

「…目先の事しか見えておらぬ様だな。この帝王たる私が、このまままで終わると思っているのか？」

邪帝の言葉に、二人のデュエルを観戦する形となったマジシャン・ガールは、這いずりながらも必死になって西条に訴えかける。

相手は精霊界の王の一人。

その実力は、並大抵のものではないという事を…！！

「私は特殊召喚をただけであって、まだこのターン。通常の召喚権を残しているのだぞ？」

邪帝のフィールドには特殊召喚されたモンスターが一体。

そして、残された召喚権。

それらの言葉に、西条は「まさか…っ！！」と声を漏らす。

「フフフ…！！　そう。私はジェスター・コンフィをリリースし…

「!!」

邪帝のモンスター、ジェスター・コンフィが激しい渦に包まれる。
そして、その渦の中から姿を現したのは…!!

「現れよ…天を切り裂く雷ッ!! 『雷帝ザボルグ』を、アドバンス召喚ッ!!」

【雷帝ザボルグ】

星5／光属性／雷族

ATK／2400 DEF／1000

〔効果〕

このカードのアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体を破壊する。

ズゴゴゴゴ…ッ!!

邪帝のフィールドに、雷の力を宿した帝王が一、雷帝がアドバンス召喚された。

「アドバンス召喚…ッ!! 場のモンスターをリリースする事で、5つ、若しくは6つ星の上級モンスターを召喚する方法…!! まさか1ターンでやってのけるなんて…ッ!？」

いきなりのアドバンス召喚に気を引き締める西条。
そんな彼に、雷帝の特殊能力が襲い掛かる。

「この瞬間：同胞、雷帝ザボルグの効果発動！！ このカードが召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体を破壊する！！
破壊するのはもちろん：『魔導騎士ディフェンダー』！！」

ビシッと指をさす邪帝。

そして、雷帝の掌から無数の雷の矢が、西条の魔導騎士ディフェンダーに向けて放たれた。

バリバリバリバリッ！！！！

「ッ！！ だがこの瞬間、俺は魔導騎士ディフェンダーのモンスター効果を発動する！！」

【魔導騎士ディフェンダー】

ATK／1600 DEF／2000

(魔力カウンター 1↓0)

「俺の場の魔力カウンターを1つ取り除く事で、魔法使い族モンスターの破壊を無効にする！！ うぐっ！？」

バリバリッ…ドシュウ…!!

魔導騎士ディフェンダーは、雷帝の雷を巨大な盾で防ぎ、事なきを得た。

「ほう…雷帝の力を凌いだか。だが…まだ私はこのターン、バトルフェイズを行っていない…!!」

「…っ!!」

邪帝の紅き眼光が鋭さを増す。

メインフェイズ1を終了させた邪帝は、バトルフェイズへと突入した。

「ゆくぞ…!! 我が同胞、雷帝ザボルグよ。ヤツのモンスター、魔導騎士ディフェンダーに攻撃ッ!!」

ズドンッ!!

バリバリバリバリッ!!!!

「ぐあっ!？」

雷帝ザボルグの攻撃が炸裂し、西条のモンスターが破壊された。

「戦闘で自分のモンスターが、相手の攻撃力を上回っていた場合：その数値の差だけ、相手に戦闘ダメージを与える。人間、貴様には800ポイントのダメージを受けて貰うぞ：！！」

【西条亨】

LP／8000 ↓ 7200

【邪帝ガイウス】

LP／8000

「…さい…じょお…！！」

西条がダメージを受けた事で、マジシャン・ガールは思わず声をあげる。

そして、ライフポイントにダメージを受けた西条は、ある異変に気付いた。

それは…。

（何だ…っ！？ 今の衝撃は…！！）

自分のモンスターが破壊された事で。自分のライフが微弱ながらも削られた事で、自分の身体中を得体の知れない衝撃が駆け巡った。それはまるで、見えない空気の壁がぶつかったような感触。

「気付いた様だな、人間…この円の中で決闘をする者がダメージを受けた時、そのダメージは本物のダメージとなってプレイヤーを襲う…!!」

「なにっ!？」

西条は「まさか…!？」と、地面に横たわるマジシャン・ガールを見つめる。

彼女の全身にできた無数の傷跡は、もしや…。

「フッフ…。貴様も直ぐにあの小娘と同じようにしてやろう…!!」
私はこれで、ターンを終了する」

邪帝の言葉に、西条はギリツと歯を食いしばった。

やはりマジシャン・ガールの身体にできた傷は、邪帝たちの仕業だった。

その事実が西条の怒りの炎を、より燃え上がらせる。

しかし、それと同時に考えてしまう。

このデュエルでもし、自分が負けてしまったら…と。

そうなれば恐らく、自分もマジシャン・ガールと同じように、無事ではいられないだろう。

西条は、自分の怒りの感情の中に、少しずつ恐怖という闇が広がっていくのを感じた。

（俺だって…あなるのは嫌だ。怖いさ…!!　けどそれ以上に…許せねえ!!　一人の女の子を相手に、平気でこんな危険なデュエルを仕掛けるコイツ等には…何があっても、絶対に負けられねえ…ッ!!）

西条は頬を伝う汗の感触を感じながら、自分のプレイを開始する。

「…っ俺のターン、ドロップ!!」

【西条亨】

LP／7200

「手札」

5枚

「モンスター」

なし

「魔法・罠」

リバースカード　1枚

【邪帝ガイウス】

LP／8000

「手札」

4枚

「モンスター」

雷帝ザボルグ

「魔法・罠」

なし

デッキからカードをドロートした西条は、引き当てたカードを確認し、「よし……!!」と笑みを浮かべる。

西条が引き当てたカードは、効果モンスター『執念深き老魔術師』だった。

（コイツは、裏側から表側にリバースした時、フィールド上の相手モンスターを破壊する強力なカード！この効果で、ヤツの上級モンスターを破壊する……!!）

【執念深き老魔術師】

星2／闇属性／魔法使い族

ATK／ 450 DEF／ 600

〔効果〕

リバース…フィールド上の相手モンスター1体を破壊する。

西条は老魔術師のカードを掴み…。

「俺は、モンスターを裏側守備表示でセット!! ターンエンドだ!!」

自信あり気にターンを終えた西条の様子を見て、対峙する邪帝は紅き眼光を細くする。

「ヤケに気合いが入っているな。恐らくその守備モンスターの効果がそうさせるのか？」

「遠慮はいらねえ…。さあ、掛かって来い！！」

挑発じみた言葉を吹きかける西条に対し、邪帝は冷静だった。そして考える。

彼の場合に現れた、守備モンスターの正体を。

（恐らくあの人間は、私の攻撃を誘っている…ならば攻撃ではなく、効果で破壊すれば良いだけの事…！！）

「フッフ：私のターン、ドロー！！」

邪帝のターンが始まった。

今まで精霊界で、数多くの決闘をくぐり抜けてきた邪帝は、冷静に彼の策を打開していく。

「人間よ。幾ら貴様が策を練ろうとも、帝王の前では無力也ッ！！私はフィールドの『雷帝ザボルグ』を手札に戻し、『A・ジェネクス・バードマン』を特殊召喚ッ！！」

【A・ジェネクス・バードマン】

星3／闇属性／機械族

ATK／1400 DEF／400

「効果・チューナー」

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を手札に戻して発動する。このカードを手札から特殊召喚する。この効果を発動するために手札に戻したモンスターが風属性モンスターだった場合、このカードの攻撃力は500ポイントアップする。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

邪帝のフィールドに、鳥の姿を模した機械人形、A・ジェネクス・バードマンが特殊召喚された。

「このモンスターは、私のフィールドのモンスター1体を手札に戻す事で、手札から“特殊召喚”できる。人間よ、この意味が分かるか？」

ニタァ…つとした目つきに変える邪帝に、西条は目を見開く。

邪帝は【帝モンスター】を手札に戻して、新たにモンスターを特殊召喚した。

つまり邪帝は、まだこのターン、通常召喚を行っていない。

「ま…っ、まさか…っ!？」

「そう。私は特殊召喚に成功したバードマンをリリースし、再び現れよッ!! 【雷帝ザボルグ】ッ!!!」

ピシャッ!!

カッッ！！バリバリ…ッ！！

邪帝のフィールドに再び、雷帝ザボルグがアドバンス召喚された。
雷帝ザボルグがアドバンス召喚に成功した事で、その効果が発動される。

「雷帝ザボルグの効果、発動！！ このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体を破壊する！！ 対象は勿論…貴様の守備モンスターだ！！」

バリバリバリバリ…ッッ！！！！
ズドゴウッ！！

「ぐあっ！？ ろ、老魔術師が…っ！？」

西条の守備モンスターである執念深き老魔術師は、裏側守備表示のままカード効果によって破壊された。

裏側のまま破壊された為、老魔術師のリバース効果は発動する事はない。

邪帝は見事に、西条の目論見を突破してきたのだ。

これにより、西条のフィールドには壁となるモンスターは全て消え、残されたのは一枚のリバースカードのみとなった。

「執念深き老魔術師のカードだったか。フッフ…どうやら貴様は、老魔術師のリバース効果を狙っていた様だが…この私に、そんな手は通用しない…！！」

「…くっ!!」

その場しのぎとはいえ、自分の用意した迎撃策をいとも簡単に突破する邪帝に、西条は思わず舌打ちした。

そして、メインフェイズ1を終えた邪帝は、バトルフェイズへと突入する。

「これで貴様の場には、壁となるモンスターは消えた。バトル!!
! 雷帝ザボルグで、プレイヤーにダイレクトアタック!!」

バリバリバリ…ッッ!!!!

邪帝の攻撃宣言と共に、雷帝ザボルグは雷の力を宿した拳を大きく振り上げる。

そして西条の腹に、ザボルグの攻撃が直撃した。

ズドンッ!!

「グハッっ!!!? が…っ、あ…!!」

【西条亨】

LP / 7200 ↓ 4800

【邪帝ガイウス】

ダイレクトアタックを受けた事で、西条のライフが一気に減少していく。

それと同時に彼を襲う、精霊界の力。

まるで痛みが現実のものであるかのように、西条の身体は大きく吹き飛ばされた。

「ぐああああっ!!」

「さい…っ、じょお…!!」

目の前で彼が苦しんでいる。自分の代わりに、彼が決闘で苦しんでいる。

なのに自分はこうして、彼が苦しむ姿しか見れない。

彼の力になれない事に、マジシャン・ガールは辛い気持ちでいっぱいだった。

「どうした人間。威勢が良い割には、大した事もないではないか？
貴様の気持ちは所詮、口先だけの代物だったという事か？」

「…ッ!？」

吹き飛ばされ、それでも立ち上がろうとする西条に対し、邪帝は呆れたように言葉を放つ。

「まあ良い。貴様の実力がその程度であるならば…貴様の末路は、あの小娘と同じようになるだけだ!!」

「…ん…だと…っ!!」

邪帝の言葉に、西条の身体がわなわなと震える。

怖い。確かに怖い。

今まで自分が知る決闘^{デュエル}というのは、ただのカードゲームに過ぎない。

こんな実際にダメージが入るカードゲームなんて、見たことも聞いたこともない。

これが自分一人なら、今にも逃げ出したいくらいだ。

しかし、それは出来ない。

何故なら自分は、知ってしまったから。

精霊界の事を。マジシャン・ガールの事を。精霊界の決闘の事を。

そして自分は決めてしまったから。

マジシャン・ガールの力になると。

今この状況から、彼女を救ってみせると。

「フフフ…この決闘^{デュエル}、余裕だな。私はこれで、ターンエンド」

「まだ…終わりじゃねえッ!!」

「っ!?!」

「…さいじょ…!?!」

邪帝のエンドフェイズ、西条は傷付きながらも声を大にして張り上げる。

「俺はまだ諦めない!! まだ俺には、このカードが残されているんだッ!!」

西条は自分の場に唯一残されていた、一枚のリバースカードを指した。

「リバースカード、オープンッ!! 速攻魔法『終焉の焰』を発動!!」

【終焉の焰】

「速攻魔法」

このカードを発動する場合、自分は発動ターン内に召喚・反転召喚・特殊召喚できない。自分のフィールド上に「黒焰トークン」（悪魔族・闇・星1攻／守0）を2体守備表示で特殊召喚する。（このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためのリリースはできない）

「このカードは、俺のフィールドに『黒焰トークン』2体を、守備表示で特殊召喚する……!!」

ボワ……ッ!! ボワ……ッ!!

【黒焰トークン】

星1／闇属性／悪魔族

ATK／ 0 DEF／ 0

このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためのリリースはできない。

西条のフィールドに黒焰トークン二体が守備表示で特殊召喚された。

このカードの発動に対し、邪帝は怪訝な表情をつくる。

（速攻魔法だど？ フィールドに伏せる事で、相手ターンでも発動を可能とする魔法カード……だが……）

だが、なぜ今になって発動したのか？

「分からんな……私の雷帝ザボルグの攻撃の時、なぜそのカードを発動しなかったのだ？ そうなれば貴様はダメージを受けずに済んだものを……」

所詮は雑魚か、と吐き捨てる邪帝。

しかし、決闘^{デュエル}を観戦するマジシャン・ガールは違った。

（違う…さいじょおは…意味のない事なんて、しない…!!）

出会ってまだ半日しか経っていないが、マジシャン・ガールは考
える。

彼がそうしてくれた様に、今度は自分が、彼を理解しようと必死
に考える。

彼は何か行動する時、必ずその裏を考えて行動していた。
買い物をする時でも、同じ食べ物でも安い方を買おうと、必ず考
えて行動していた。

だからこの決闘^{デュエル}でも、西条は必ず何かの策があつてのプレイをし
てきた。

魔導騎士ディフェンダーの効果に然り、執念深き老魔術師のリバ
ース効果に然り。

デッキとは、その持ち主の人格が写し出された存在だ。
だからこそと、マジシャン・ガールは信じる。

彼の行動^{デュエル}を。
西条の決闘^{デュエル}を。

「今は分からなくても良いさ。行くぜ…邪帝、ここからが俺の反撃
だ!! 俺のターン、ドロート!!」

【西条亨】

LP／4800

「手札」

5枚

「モンスター」

黒焰トークン 2体

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP／8000

「手札」

3枚

「モンスター」

雷帝ザボルグ

「魔法・罨」

なし

西条のターンが始まった。

邪帝のターンの最後に黒焰トークンを残した西条の真意。

それは…。

「邪帝：確かにお前の言うように、雷帝ザボルグの攻撃の瞬間、終焉の焰を発動していれば：俺が受けるダメージは0で済んだ」

西条はそう語ると、手札の中から一枚のカードを掴み取る。

「だが：手札の7つ星モンスターを召喚する為には、フィールドのモンスター2体をリリースしなければならない！！」

「2体の：ッ、アドバンス召喚だとッ！？」

「：！！」

邪帝の紅き眼が大きく見開かれる。

「俺はフィールドの、黒焰トークン2体をリリースし：！！」

マジシャン・ガールの不安げだった表情が綻ぶ。

そして、西条のフィールドに姿を現したモンスターとは：！！

「このカードが、俺の信じる最強モンスターだッ！！ 現れよ！！」

『ブラック・マジシャン』！！」

【ブラック・マジシャン】

星7／闇属性／魔法使い族

ATK／2500 DEF／2100

魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

西条のフィールドに現れしモンスター。

それは、彼が昔から愛用し続けてきたカード、ブラック・マジシヤンだった。

「ブラック・マジシヤンのカードだとオ…ッ!?!」

「お…お師匠サマ…!!」

それぞれに驚きの表情をつくる邪帝とマジシヤン・ガール。
そんなマジシヤン・ガールに、西条は

「しっかり見てろよマジシヤン・ガール。俺と、お前のお師匠さん
とで…お前を助けてやる…!!」

「…さいじょお…!!」

マジシヤン・ガールの目に、再び熱い感情が込み上げる。
そして西条はこの決闘^{デュエル}で、初めて攻撃の姿勢に入った。

「さあ行くぜ…!! ブラック・マジシヤンで、雷帝ザボルグに攻
撃ッ!! 黒・魔・導ッ!!」

バリバリバリバリ…ッッ!!!!!!!!!!
ズドゴオオ…ッ!!

「ぬおお…っ!?!」

【西条亨】

LP／4800

【邪帝ガイウス】

LP／8000 ↓ 7900

ブラック・マジシャンの攻撃が炸裂し、雷帝ザボルグが消し飛んだ。

微弱ながらも西条は、この決闘で初めて、邪帝のライフに傷を負わせたのだ。

（ブラック・マジシャン……！！ まさか人間界にて、貴様と対峙する事になるうとはな……！！）

「俺は、リバースカードを1枚セット……！！ 邪帝、お前に魅せてやるよ……俺の、本気の決闘をな……！！」

自身のエースカードを召喚した事で、心理的にアドバンテージを得た西条。

西条 VS 邪帝。

二人の決闘は、更なる熾烈を極めていく。

決闘（後書き）

おはようございます。こんにちは。こんばんは。
あちゃべです。

いよいよこの小説初のデュエルが始まりました。

相手のデッキはそのまま【帝デッキ】となっております。

帝には様々な種類がありますが、どれも共通しているのが攻撃力2400、守備力1000というステータス。

「帝ライン」という呼ばれ方が普及したように、このシリーズは遊戯王カードの歴史に名を残したカード達とも言えます。

召喚しただけでボードアドバンテージを取れるこの帝モンスターの効果は総じて高く、シンクロやエクシーズが普及した今でも十分な活躍が見込めるカードです。

実際にデュエルで、相手に帝モンスターを召喚されたら「厄介だ…!？」と思う方は多いのではないのでしょうか？

しかし、そんな帝モンスターにも弱点はあります。そこはやはりカードゲーム。

まず効果が無効化されては意味がない事。

スキルドレインやエフェクト・ヴェーラー、禁じられた聖杯…と様々にあります。

次に、守備力がたったの1000である事。

表示形式変更の効果に弱く、今は禁止カードの月読命で一方的に殴り倒せる事や、エネミーコントローラー。月の書等、やはり様々です。

そして最後に、リリースを封じられたら出せないという事。

良い例としては永続罫の生け贅封じの仮面や、フィールド魔法ア
ンデット・ワールド。

まあ前者はデッキに入る事はまずありませんが、後者は対戦する
相手によっては十分に有り得ます。

最も、リリース確保の為の下級モンスターの特殊召喚を封じられ
たら致命傷なので、大天使クリスティアが出されているとキツイ。

また、下級モンスターの低ステータスを利用し、悉く破壊してく
る王虎ワンフーも苦手とする相手です。

と、色々と説明させてもらいましたが、現在の環境でも単体でデ
ッキもしくはサイドに入っても十分に活躍できるかと思います。
邪帝ガイウスや風帝ライザーの効果は除外にバウンスな為、スタ
ーダスト・ドラゴンでも対処できない所が評価できます。

え？炎帝で暗黒界が落ちてアド取られた？

知らんがな。

さて、話しは変わりますが、今回のデュエルを読んでお気づきに
なられた方も多いとは思いますが、この場を借りてお話しします。

今回のデュエルは、内容を原点回帰させてみました。

初心に戻り、様々なカードの種類や効果を作中で説明し、デュエ
ル初心者にも幾分か分かりやすい内容になったのではないか？と思
います。

ただその分、あまりデュエルは進んではおりませんが…申し訳な
く思います。

ちなみに次話は9月15日に掲載予定です。

それでは、今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。

ありがとうございました。

帝王の降臨 (前書き)

※

夜。

三上市のネオンという夜景が息づくこの街のほとりでは、ネオンの光とはまた違った光が発生していた。

それは、三上川の河川敷。

普段ならこの時間のこの場所は、あまり人通りがない所なのだが、今日は違った。

そこに立っている三人の人影。しかし、その内の一人は【人】というには、余りに不釣り合いな姿をしていた。

まるで西洋の鎧のような黒き甲冑。兜からは二本の捻れた角を生やし、人というには余りに大きな体軀をしたその人物。

名を、邪帝ガイウス。

ここ人間界とは違う、精霊界という異世界からやってきたデュエルモンスターは、自分の目の前に立つ人物に対し、不気味な笑みをみせつける。

「フフフ…人間。まさか貴様ごときが、帝王たるこの私にダメージを負わすとはな…!!」

自らを帝王と称するガイウスに対し、対峙する少年はキツい視線を向ける。

少年の名は西条亨。

ここ三上市の高校に通う、ごく普通の少年“だった”。

だった…というのは、今の彼を取り巻く環境からくる表し方だ。

突如、自分の目の前に現れた精霊界からの使者、ブラック・マジシャン・ガール。

なんでも、彼女達の暮らす精霊界が邪神という悪しき神に乗っ取られようとされているらしい。

それを阻止する為には、この世界にある神のカード【三元神】を、精霊界に持ち帰らなければならないとの事だった。

事情を知った西条は半信半疑でありながらも、ブラック・マジシャン・ガールに協力する事にした。

しかし、彼女を一人にしたその時、事件は起きた。

精霊界の邪神の勢力が、人間界に來たマジシャン・ガールを襲ってきたのだ。

デュエルによって傷つく彼女を助けるべく、西条は邪帝ガイウスにデュエルを挑んだ。

帝王の降臨

※

【西条亨】

LP／4800

「手札」

3枚

「モンスター」

ブラック・マジシャン

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

【邪帝ガイウス】

LP／7900

「手札」

3枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

ブラック・マジシャンの攻撃が決まり、邪帝のモンスターを破壊した事でターンを終えた西条。

彼のフィールドに召喚されしモンスター、ブラック・マジシャンの存在に、魔術師の少女ブラック・マジシャン・ガールは立ち上が

る。

身体は傷だらけだ。

だが、それがなんだ！と言わんばかりに、マジシャン・ガールは声をあげる。

「さいじょお、…頑張って！！」

「フフ…たった100ポイントのダメージを与えたからと言って、いい気になるなよ？」

自分のターンが訪れた事で、邪帝はデッキトップに指を添える。初めはブラック・マジシャンの登場に驚きはしたが、思考を冷静に切り替えた今となっては、大した脅威ではない。

「私のターン、ドロート！！ 私はモンスターを1体セット…！！ 私のターンはこれで終了だ。さあ人間よ、掛かって来い…！！」

モンスターをセットしてターンを終えた邪帝は、不気味な雰囲気漂わせていた。

「…なんだよ邪帝。お前だって、守備に徹するしかねえじゃんか。このまま一気に攻める…俺のターンッ！！」

自分のターンに移り、デッキからカードをドロートした西条は、今

が攻め時とばかりに…。

「俺は『魔導戦士 ブレイカー』を、召喚ッ！！」

【魔導戦士 ブレイカー】

星4／闇属性／魔法使い族

ATK／1600 DEF／1000

「効果」

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1個乗せる（最大1個まで）。このカードに乗っている魔力カウンター1個につき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。また、その魔力カウンターを1個取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する。

西条のフィールドに魔導を極めし戦士、ブレイカーが召喚された。ブレイカーが召喚に成功した事で早速、そのモンスター効果が発動する。

「ブレイカーの効果だ！このカードが召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを1つ乗せる。そして、ブレイカーに乗っている魔力カウンター1つにつき、攻撃力を300ポイントアップする…！！」

【魔導戦士 ブレイカー】

ATK／1600 ↓ 1900

（魔力カウンター×1）

西条のフィールドにモンスターが二体出揃った。
そして、西条のバトルフェイズが始まる。

「バトルッ！！　まずはブレイカーで、ヤツの裏守備モンスターに
攻撃！！」

「フッフ…！！」

西条の攻撃に対し、余裕の笑みを浮かべる邪帝。
ダメージステップに入り、邪帝の守備モンスターが姿を現した。

「残念だったな。そのモンスターの攻撃力では役不足だ！私のモン
スターは『墓守の偵察者』！！　そのリバー스効果を発動する！！」

【墓守の偵察者】

星4／闇属性／魔法使い族

ATK／1200　DEF／2000

「効果」

リバーズ…自分のデッキから攻撃力1500以下の「墓守の」と名
のついたモンスター1体を特殊召喚する。

「このカードが裏側から表側表示になった時、デッキから攻撃力1
500以下の【墓守】モンスターを特殊召喚する。私は2体目とな

る、墓守の偵察者を守備表示で特殊召喚ッ!!」

【西条亨】

LP／4800 ↓ 4700

【邪帝ガイウス】

LP／7900

邪帝の守備モンスターは、守備力2000の墓守の偵察者だった。攻撃を仕掛けた西条の魔導戦士 ブレイカーの攻撃力は1900。攻撃力が守備力に及ばず、西条は相手モンスターを破壊する事ができなかった。

「くっ…!! まさか守備力2000だなんて…!!」

「札を言わせてもらおうか。おかげで私のフィールドにも、モンスターが並んだ…フッフ」

数を減らす所か、逆に数を増やす羽目になってしまった西条。しかし、彼にはまだ攻撃が残されている。

「まだだ!! まだ俺には、ブラック・マジシャンの攻撃が残っている!! 行けッ、ブラック・マジシャン!! 墓守の偵察者に攻撃ッ!!」

ズバッ！！
バリバリ…ッ！！

ブラック・マジシャンの攻撃で墓守の偵察者を破壊は出来たが、結果として邪帝のフィールドにモンスターが一体残されてしまった。

このターン、西条は邪帝にダメージを与える事が出来なかった。

「いくら貴様ごときが最上級魔術師を従えようと…貴様の實力ではブラック・マジシャンを使いこなす事は出来ないみたいだな？」

「…なんだと…ッ！！」

「ブラック・マジシャンだけではない。現に他のモンスター達は、無残にも反撃すら出来ずに散っていくだけではないか？貴様は所詮、その程度の雑魚でしかないのだ」

豪語する邪帝は、言葉の一言一言に重みを増していく。
それはこのデュエルでの、邪帝の絶対的な自信の現れであった。

「さあ、他にやる事が無いなら、ターン終了を宣言しろ。人間！！」

「く…っ、俺は…ターンエンド」

悔しいが、今の西条の手札では、これ以上のプレイは出来なかつ

た。

そんな西条を見下し、徐々に高圧的な態度になっていく邪帝。

【西条亨】

LP／4800

「手札」

3枚

「モンスター」

ブラック・マジシャン

魔導戦士 ブレイカー

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

【邪帝ガイウス】

LP／7900

「手札」

3枚

「モンスター」

墓守の偵察者

「リバースカード」

なし

西条のターンが終了し、遂に始まる邪帝のターン。

「私のターンッ、ドロートッ!! 私、墓守の偵察者をリリースし
...!!」

ターン開始早々にモンスターをリリースする邪帝。
彼がアドバンス召喚するモンスター、それは…。

「いでよッ【風帝ライザー】！！」

【風帝ライザー】

星6／風属性／鳥獣族

ATK／2400 DEF／1000

〔効果〕

このカードのアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード1枚を持ち主のデッキの一番上に戻す。

「雷帝の次は…風帝のお出ましか…ッ！！」

邪帝がアドバンス召喚したのは、攻撃力2400の風帝ライザーだ。

西条のフィールドには、ライザーの攻撃力を上回るブラック・マジシャンが居る。

しかし、西条の表情は険しかった。

「…雷帝ザボルグは、アドバンス召喚する事で効果を発動するモンスターだった…恐らく、あの風帝ってヤツも…」

「フフフ…少しは学習しているみたいだな。貴様の読み通り、この

風帝ライザーにも当然、特殊能力がある!!」

邪帝は早速、風帝ライザーの効果を高々と宣言した。

「風帝ライザーのモンスター効果、発動ッ!! このカードがアドバンス召喚に成功した時、モンスター1体をデッキトップに戻す! 対象は…ブラック・マジシャン!!」

「っ!？」

ニヤリ…と、邪帝の目が歪んだ。

西条にとって、ここでブラック・マジシャンがデッキトップに戻されては、確実に勝機を失う。

それは、何としてでも避けなければならない。

「フッフ…これで苦勞して召喚した貴様のモンスターは、ただの足手まといとなった。消え去れ、ブラック・マジシャン!!」

風帝ライザーの両手に、荒れ狂う暴風が集う。

そして、荒れ狂う力が西条のブラック・マジシャンに向けて解き放たれた。

ゴバオウツ!!

「お師匠サマ…ッ!？」

思わず西条の下へ駆け寄ろうとするマジシャン・ガールだが、それは出来なかった。

西条と邪帝、二人を囲うように展開された魔法陣が空間を遮断し、外部からの干渉を妨げているのだ。

ハラハラしながら、マジシャン・ガールは二人のデュエルを、西条を見つめる。

この風帝ライザーの効果が決まれば、西条の召喚したブラック・マジシャンは、デッキの一番上に置かれる。

つまり、次の西条のドローカードはブラック・マジシャンという事になる。

次のドローを操作されるというのは、その数だけ自分の行動を抑制されてしまうという事なのだ。

「消え去れ、ブラック・マジシャンッ!!」

「…フッ、それはどうかな？」

西条の不敵な笑み。

彼のその一言で、邪帝やマジシャン・ガールの瞳が大きく開く。

「お前がブラック・マジシャンを狙う事は、最初から読めていた…なら当然、それに対抗する為の手段を警戒すべきだったな!!」

そう言い放つ西条のフィールドには、一枚のリバースカードがあった。

彼が前のターンから伏せてあった、一枚の切り札が…。

「まさか…ッ、罠カード…ッ!？」

「そう。リバースカード、オープンッ!! カウンター罠『闇の幻影』を発動ッ!!」

【闇の幻影】

「カウンター罠」

フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターを対象にする効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

ブラック・マジシャンに向かい来る風帝ライザーの力が、ブラック・マジシャンの前に展開された闇の奔流に阻まれる。

「このカードは、闇属性モンスターに対するカード効果の発動を無効にし、破壊する!! 消え去るのは、お前のモンスターだ!!」

「なにッ!？」

ゴバオウッ!!

跳ね返された力は風帝ライザーを襲い、邪帝のモンスターは粉々

に碎け散った。

これにより、邪帝は自分のフィールドに、壁となるモンスターが全て消えた事になる。

「ば…馬鹿な…ッ!？」

「どうしたよ邪帝さん。言葉が震えてるぜ？」

一気に形勢逆転され、邪帝の口からは声に出さずとも焦りが感じられた。

バトルフェイズを終了し、メインフェイズ2へ移行した邪帝は、残った手札の中から一枚のカードを掴み取り…。

「ぐうう…ッ、ならば手札より、魔法カード『おろかな埋葬』を発動ッ!!！」

【おろかな埋葬】

「魔法カード」

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

「この効果により、私はデッキからモンスターカード1枚を墓地へと置かせてもらう…!!」 私を選ぶのは『黄泉ガエル』!!！」

黄泉ガエルのカードを墓地へ送った邪帝は、忌々しげに視線を西条へと向けた。

「私のターンは…終了だ…!!」

※

白石直也という男がいる。

西条亨と同じく、彼の同級生でありクラスメートでもある。

高校生にして、身長180センチを超える大きな体格をし、オールバックに決めた髪型。

三人に二人は、彼を高校生とは思わないだろう。

そんな彼は現在、自分が暮らすアパートの部屋で、一人でエロゲーをしていた。

天井の照明は点いておらず、部屋を照らすのはパソコンのデスクトップから灯る薄暗い光だけであった。

「ふうん…。この俺に掛ければ、このゲームの全ヒロインを手中に収めるなど、容易い事だ…!!」

画面には可愛い女の子が映っており、どこか憂いを帯びた瞳でこちらを見つめている。

『でも私、一度アナタを振ったのよ？ あんなに酷い事まで言ったのに…。なのはどうして、アナタは私に構うのッ!？』

「ふうん…決まっている。それはお前がッ!! 美少女だからだッ!!」

現実ではなく、二次元に熱く応える白石は、血走った目を剥き出しにした。

相当このゲームに熱が入っているらしく、机に置いてある携帯電話が鳴っている事に気付かない白石。

そんな熱血ドリーマー白石は、鼻息を荒くしながらマウスやキーボードを馴れた手つきで、巧みに操作していく。

その姿は、三人が三人とも気色悪いと答える位に変態染みていた。

「ハアハア、マコちゃんかわいいよマコちゃん。チュツチュ…ム？」

果てしなく危ない人物の白石は、ここにきてようやく携帯電話が鳴っている事に気付いた。

チツと舌打ちする彼は、ぶっきらぼうに机に置いてあった携帯電話を掴み取る。

「どうせ西条のヤツだろう…アイツめ…ッ!! あれほど俺の有意義な時間を潰す事は許さんと言っておいたものを…ッ!!」

何時間か前に、西条から今晚だけ泊めてくれないかと電話が掛かってきたのだが、彼はそれを断った。

一人で楽しくエロゲーがしたいから断った。

まだ高校生がその様なゲームをしてはイケないのだが、白石にとってそんな常識は無いも同然だった。

この年頃の若者は、多少の悪さをしたいものなのだ。

「ええい、なんだっ!? 俺は今、忙しいと言っただろう!!」

着信相手を確認する事なく、開口一番に怒鳴りつける白石。
すると、受話器から淡白な…。

“男ではなく、女の声”が、白石の耳に入ってきた。

『…白石くん。誰に向かってそんな口を訊いてるのかしら?』

「ムッ!? (なにッ!? 西条じゃない、だと…ッ!?)」

受話器から聞こえてきた声で、途端に青ざめた表情と化す白石。

「この声の主はッ…楠先生…っ!? れ…れれれ冷静になれ…!!
もう時刻は日付が変わり、午前一時になる所なのだ。こんな非常識な時間に、常識ある先生がこの俺に電話を掛けてくる筈がないっ

！！ 貴様…いったい何者だ!？」

誰に説明する訳でもないのに豪語する白石。

それでも受話器越しに聞こえてくる声は、間違いなく自分のクラスの担任だ。

『あんまりグダグダ言っていると、今日の補習…もう1教科増やすわよ?』

「っ!？ この俺のスケジュールをそこまで把握しているとは…まさかッ!？ 本当に楠先生…ッ!？」

『…やっぱ2教科に…』

「ま、ままま待って…ださい!! す、スイマセンでしたア!!」

よほど補習が嫌なのか、白石はまるで手のひらを返したかのように、態度が一気に豹変した。

白石は担任の楠ミナ先生には訳あって、頭が上がらなかった。

受話器越しに聞こえてくる先生からの溜め息に、白石はビクウツ

!! っと肩を跳ね上げる。

『アナタなら知ってるかと思って電話してるんだけど…西条くん、知らない?』

「ム、西条…だと?」

彼にとって意外な質問だったようで、まるで拳を突かれたように言葉が詰まる。

確か数時間前に、西条から泊めて欲しいと電話はあった。しかしそれを断った今となっては、その後の彼を知る由もなかった。

「いや、知らんな。23時頃に電話はしていたが…それだけだ。今はヤツが何をしているかは知らん」

『…そう』

まるで何かを考えているかのように、会話に空白ができる。

白石が、西条がいったいどうしたというのだ…と思っていると

『…白石くん。今から街に出て、西条くんを捕まえてきなさい』

「…は？」

※

三上市の河川敷にて鋭い視線を交差させる二人の人物。

西条亨、そして邪帝ガイウス。

二人のデュエルの流れは、大きく傾いていた。

アドバンス召喚を主軸とし、その効果と攻撃力で西条を追いつめる邪帝であったが、西条も反撃に出た。

自分が信ずるエースモンスターと共に……！！

【西条亨】

LP／4800

「手札」

3枚

「モンスター」

ブラック・マジシャン

魔導戦士 ブレイカー

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP／7900

「手札」

2枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

フィールドが空きの邪帝に対し、迎えるは西条のターン。

このデュエルで初めて、西条が一気に攻め入るチャンスが訪れたターンでもある。

叩ける時に、着実に叩く。

そう意気込む西条は早速、自分のターンを開始する。

「俺のターン、ドロートッ！！ このまま一気に攻めるぜ！！ バトル…ッ！！」

バトルフェイズに突入した西条。

その第一陣を務めるのは…。

「魔導戦士 ブレイカーで、プレイヤーにダイレクトアタック！ 行ッけエエ！！」

「…っ！！」

ズバッ！！ と邪帝の身体に鋭い一閃が刻まれる。

このデュエルで初めて、西条が相手にマトモなダメージを与えた瞬間であった。

【西条亨】

LP／4800

【邪帝ガイウス】

LP／7900 ↓ 6000

「ぐうゝ…ッ、貴様…ッ!!」

「まだだ! まだ俺には、ブラック・マジシャンの攻撃が残っている!!
行けッ、ブラック・マジシャン!!」

バリバリバリバリッ!!!!

「グオオオアアッ!!!!」

【西条亨】

LP／4800

【邪帝ガイウス】

LP／6000 ↓ 3500

一気に邪帝のライフを半分近くにまで減らした西条は、「どうだ!!?」と言わんばかりにガッツポーズを作る。

それとは対照的にダイレクトアタックを受けた邪帝は、迫り来るダメージ衝撃に肩で大きく息をしていた。

ライフポイントが逆転し、ライフアドバンテージやボードアドバンテージで優位に立った西条に、デュエルを観戦していたマジシャン・ガールは、まるで信じられないものを見る様な目で、西条を見つめていた。

(…ウソ…っ!?)

今のマジシャン・ガールの気持ちには、様々な感情が入り混じっていた。

精霊界でも王クラスの者というのは、相当なデュエルの実力者なのだ。

それを、彼はダメージを負いながらではあるが、王クラスの実力者を追い詰めた。

その現実が彼女の中に、希望という光が差し込む。

もしかしたら勝てるかもしれない。

王クラスの相手に、デュエルで勝てるかもしれない。

(さいじょお…!!)

彼に淡い期待を抱くマジシャン・ガール。

しかし、そんな彼女の想いを踏みにじらんと、邪帝のターンが始まる。

「俺は、ターンエンド!!」

「…フフ…人間よ、今の攻撃は効いたぞ。だが、貴様は後悔する事になる…」

「…なに？」

邪帝は不気味な笑みをこぼしながら、自分のターンを開始する。
ライフを逆転されたとは言え、ボードアドバンテージが奪われた
とは言え、邪帝にはまだ余裕があった。

「今のターンで、この私を倒せなかった事を後悔させてやろう…！
！ 私のターン、ドロートッ！！」

デッキからカードをドロートした邪帝。
ドローフイズからスタンバイフェイズへと移行し、邪帝は自分
の墓地にあるカードに手を伸ばした。

「私のターンのスタンバイフェイズ…墓地に眠る『黄泉ガエル』の
モンスター効果ッ！！」

【黄泉ガエル】

星1／水属性／水族

ATK／ 100 DEF／ 100

【効果】

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フ
ィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、このカードを自分
フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果は自分フィール
ド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

「このカードは、私の場に魔法・罠が存在しない場合、墓地から特殊召喚する事ができる……！！　我が力の糧となれ、黄泉ガエルッ！！」

邪帝のフィールドに黄泉ガエルが守備表示で特殊召喚された事で、西条は思わず目を見開く。

そして同時にこう思う。

「ッ！？　これじゃ毎ターン、ヤツの場に……生贄^{リリース}確保のモンスターが……ッ！！」

「フフフ……そう。私が今まで魔法・罠の類を伏せなかったのも、この黄泉ガエルの効果を能動的に発動させやすくする為……！！　人間、覚悟するが良い……私の力を存分に見せ付けてやる……！！　黄泉ガエルをリリースッ……！！」

邪帝の身体から圧倒的な威圧感が、闇の霧となって辺りを覆う。
黄泉ガエルをリリースし、邪帝がアドバンス召喚するモンスター。
それは……。

「現れよ。我が分身にして、最強の帝王ッ……！！　『邪帝ガイウス』をアドバンス召喚ッ……！！」

【邪帝ガイウス】

星6／闇属性／悪魔族

ATK／2400 DEF／1000

「効果」

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を除外する。除外したカードが閥属性モンスターだった場合、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える。

ズドドドドド…ッ！！

遂に現れし、邪帝ガイウス。

端から見れば、邪帝ガイウスが自分自身のカードを召喚する光景に違和感を覚えるかもしれない。

しかし、対峙する西条には、そんな気持ちの余裕は無かった。

相手が召喚したのは【帝モンスター】だ。

アドバンス召喚時に、様々な効果を発揮する強力なカードたち。

その効果は雷帝の破壊に然り、風帝のバウンスに然りと…。

ならばこの邪帝の効果は…！？

西条がゴクリと息を吞むと同時、邪帝が動いた。

「我が分身、邪帝ガイウスのモンスター効果だ！このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード1枚を除外するッ！！」

「なにッ！？」

破壊、バウンズときて、今度は除外。

前のターン、西条は罠カードを使う事で、敵の効果を回避する事に成功した。

しかし、今の西条のフィールドには、魔法・罠カードは無い。

つまり、邪帝の効果を防ぐ手段が残されていない状況だったのだ。

「フッフ…今度こそ貴様のモンスターには消えて貰うぞ。この効果で除外するのは勿論…ブラック・マジシャン!!」

邪帝が指定した瞬間だった。

西条のエースカードであるブラック・マジシャンは、邪帝ガイウスの効果により、闇次元の彼方へと吸収されてしまったのだ。

「ブラック・マジシャンッ!?!」

「お師匠サマッ!?!」

エースカードを失った西条。

しかし、それだけでは無い。

次の瞬間、更なる衝撃が西条を襲った。

「ブラック・マジシャンは闇属性モンスター。我が分身…邪帝ガイウスは、自身の効果で除外したカードが闇属性モンスターだった時、相手に1000ポイントのダメージを与える…!!」

「なにッ!?　ぐああああッ!!」

【西条亨】

LP／4800 ↓ 3800

【邪帝ガイウス】

LP／3500

「さいじょお…っ!？」

思わず声をあげるマジシャン・ガール。

そんな彼女に心理的ダメージを追撃するかのように。

立ちほだかる西条に、肉体的にダメージを追撃するかのように。

邪帝のターンは、まだ終わらない。

「フッフ…私が受けた痛みを倍にして返してやるぞ…!!　手札より魔法発動『死者蘇生』!!」

【死者蘇生】

「魔法カード」

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。

「この効果により、私は墓地のモンスター1体を特殊召喚する。同

胞よ…今再び！！ 風帝ライザーを特殊召喚ッ！！」

「っ！？」

邪帝のフィールドに、二体目の【帝モンスター】風帝ライザーが特殊召喚された。

邪帝のフィールドに並ぶ、二体の帝モンスターたち。
それに比べ、西条のフィールドには魔導戦士 ブレイカーが存在するのみ。

一気にボードアドバンテージを取り返された事に、西条の頬から冷や汗が流れ落ちる。

「バトルフェイズに入らせてもらう。覚悟は良いか、人間？」

ギラッ…っと、邪帝の紅き眼光が西条を射抜く。
そして遂に、邪帝の攻撃が始まった。

「バトル…！！ 風帝ライザーで、魔導戦士 ブレイカーに攻撃ッ！！」

「うあっ！？」

【西条亨】

LP／3800 ↓ 3300

【邪帝ガイウス】

LP／3500

唯一のモンスターを破壊され、ダメージを受けた西条のフィールドはがら空きになってしまった。

超過したダメージが現実のものとなってプレイヤーを襲うこのデユエル。

ゾクリ…と。

西条の中で得体の知れない恐怖心が広がる。

「ハア…ッ、ハア…ッ…くっ!？」

「フフフ…もう息が上がったのか、人間？だが私には我が分身、邪帝ガイウスの攻撃が残っているのだぞ…?」

「っ!？」

その言葉に西条は一瞬、頭の中が真っ白になった。

今まで受けてきたダメージだけでも辛いのに、まだ追い討ちがあるというのだ。

(正直…キツ過ぎるぞ…コイツあ…ッ!!！)

「フフフ…その身に我が一撃を受けてみろ!! 邪帝ガイウスで、

ダイレクトアタック!!」

モンスターである邪帝の両手の間に、黒色に輝く闇のエネルギーが凝縮されていく。

そして、攻撃宣言と同時に。

闇のエネルギーは西条に向けて、大砲のように勢い良く放たれた。

ズドンッ!!!!

バリバリバリバリッ!!!!

「うゝあゝあゝあゝあゝ!!!!」

「っ!?! さいじょお!!」

【西条亨】

LP／3300 ↓ 900

【邪帝ガイウス】

LP／3500

今までにない衝撃が西条を襲う。

それと同時に、身体から力が抜けていくのが分かる。

思わず地に膝を着いてしまいそうな、激しい脱力感に、西条はギリッ…と歯を食いしばった。

「フッフ…満身創痍だな」

「ゼイ…ゼイ…ゼイ…」

西条の肩が大きく上下するのを見て、邪帝は細く笑みを浮かべた。
大きく開いたライフ差。

そして取り戻した、ボードアドバンテージ。

それらを見越し、邪帝は確信する。

このデュエルの結末を確信する。

「これで私のターンは終了だ。さあ人間、貴様のラストターンだ…
！！」

※

三上市の夜は長い。

しかし、長いと言っても限度はある。

例えばこの商店街の通りにある居酒屋では丁度閉店時間を迎えた
らしく、最後まで残っていた客が次々と外に出てくる。

ざっと六人位の大学生らしき集団だろうか。

その中にいた一人の男が、陽気な声で笑い声をあげていた。

「へへっ。さアて、二次会に向かうとすツか！」

その男の名は結締智恭。

西条亨や白石直也のクラスメートにして、彼らの友人の一人。

やや小柄な背丈で、やや細目な顔立ちをしたこの少年は、深夜の居酒屋から出て来た。

まだ高校生である彼が、なぜ深夜の居酒屋から出て来たのか？

それは彼が今、合コンの真っ只中だからである。

男三人、女三人で遅くまで飲み明かし、このまま朝までカラオケに向かうつもりで結締に、今日の合コンに参加していた一人の女性が声をかけてきた。

「カラオケは良いけど…結締くんは大丈夫なの？まだ高校生なんですよ？」

「大丈夫だぜい。明日は…あ、日付は変わってるから今日か。今日は学校は休みだし、それに舞ちゃんともっと話したいし…!!」

アルコールが入っているせいか、無駄にテンションが高い結締は、危機感というのが欠如していた。

それは舞ちゃんと呼ばれた女性も同じようで、彼がまだ未成年である事を知っていながら…。

「ふふ…。でも結締くんって、まだ高校生なのにお酒が飲めるのね。もし警察とかに職質されたらどうするの？」

「ンなもん、だんまりを決め込むに決まってるぜよ。コッチにゃあ黙秘権ってのがあるからにゃ。それに、偽造した身分証だってあ

るし」

「うわ…スゴ…」

そう言い結締は財布の中から偽造した身分証をごまんと取り出した。

「どうやってこんなに作るの？大学生である私たちでも、結締くんみたいな真似は出来ないわ」

「こればっかは舞ちゃんと言えど、教えられねエぜよ…さて、とりあえず場所を移そうぜい！」

大学生の集団に混じる一人の高校生、結締智恭。

今日の合コンを結締は全力で楽しむつもりでいた。

大学生の集団の中で、一人だけ子供というスキルを得た結締は、存分に巧みな話術を発揮して、遂に一人の女性と話し込む事に成功した。

それがこの黒髪の女性、舞ちゃんである。

浮かれ気分で舞ちゃんと足を進める結締。

しかし、幸せな時間はそう長く続かなかった。

それは不意な出来事だった。

舞ちゃんと二人っきりで一緒に歩いている最中、いきなり背後から肩をガシッと捕まれたのだ。

「いゝっ！？　だっ、誰だ！！　って、白石さん！？」

「ふうん…丁度良いところにお前が居たからな…！！」

振り返る結締の前に立っていたのは、彼の友人である白石直也だった。

なぜこんな時間にこの場所で、白石がここに居るのか不思議に思った結締は、とりあえず…。

「なんで白石さんがこんなトコに？」

「ふん、俺とてこの時間の外出は本意だ。だが楠先生からの頼みでな…というか結締よ。酒くさいぞ」

「えゝっ！？　せ、先生が…ッ！！」

いきなり自分の担任教師の名を出されて、焦りの色を出す結締。

もし、白石に自分が居酒屋で酒を飲んでいた事を先生に知らされたら…。

そうなれば偽造した身分証など、自分を知る連中相手には意味がない。

バレたら謹慎処分か？はたまた嚴重注意か？

いずれにせよ、親には確実に知らされてしまうだろう。

それらを防ぐ為にはどうするべきか？

簡単な事だ。

白石に黙ってもらえば良いだけの事である。
或いは白石もコチラに引きずり込むか。

「：なあ白石さん。俺アこれから先輩たちとカラオケに行かにやあならん。白石さんもうー…」

「ふうん…結締よ。貴様の事情など俺の知る所ではない。既に貴様は俺への拒否権は封じられていると思え」

「いゝだだだだだっ!？」

結締の肩を掴む力が徐々に強くなる。
白石はニヤリと不敵な笑みを浮かべると、苦悶な声をあげる結締に対して、こう述べた。

「結締よ。この事を楠先生に知らされたくなくば、今すぐッ!!
この俺にッ!! 協力してもらおうぞッ!!」

「ダアアア!! 痛いっ、痛いからっ!?! 分かったから白石さん、手を放してくれええ!!」

完全に白石にやられた結締。
ちなみに、いつの間にか舞ちゃんは二人のやり取りに呆れてしま
い、この場から消えていた。

結締のウハウハは、白石の登場と共に碎け散った。

※

【西条亨】

LP／ 900

「手札」

4枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP／ 3500

「手札」

1枚

「モンスター」

邪帝ガイウス

風帝ライザー

「魔法・罨」

なし

邪帝のターンが終了し、西条のターンが訪れる。

しかし、迎える西条のフィールドは芳しくない状況であった。
フィールドにモンスターは無く、魔法・罨もないこの状況。

頼みのエースモンスターであるブラック・マジシャンは、邪帝の効果によって除外されてしまっている。

更に邪帝のフィールドには、攻撃力2400の帝モンスターが二体も出揃っているのだ。

激しいダメージを受け、身体に上手く力が入らない西条は、霞む視界の中でも前を見続けていた。

「ゼイ…ッ、ゼイ…ッ、ゼイ…」

「フッフ…満身創痍だな、人間。最早このデュエル…貴様に勝つ術はない」

今にも崩れそうな姿勢を保つ西条に、邪帝は余裕な態度で語りかける。

「貴様のライフは残りたったの900…このままデュエルを続けた所で、その程度のライフなど、私の前では無いに等しい…!!」

「…ゼイ…ッ、…ゼイ…」

「そんな貴様に私からの最後の慈悲を与えてやろう。降参しろ、人間」

「…ッ!？」

邪帝からの突然の発言に、西条の耳がピクリと反応する。

「このままデュエルを続ければ、更なる激しい苦痛を伴う事になる。最早貴様は、私に勝つ事は不可能なのだ。同じ敗北ならば、痛みを感じない選択をしてはどうかね？」

「…降参…っ、だと…ッ!？」

降参。

確かに邪帝が言うように、そうする事も出来る。
自分のライフも残り少ない。
フィールドもがら空き。

四枚の手札の中にも、邪帝に対して何ら有効な手は残っていない。

「フッフ…どうだ。その小娘もそう思わんかね？」

「え…!？」

何も答えない西条に変わり、次に邪帝はマジシャン・ガールに狙いを定めた。

「先ほどから、その人間の背後でデュエルを観ていた貴様ならば分かるだろう。この人間では、私を倒せないと…!!！」

「…さいじょお…!!！」

マジシャン・ガールの前では、膝に手を着き、肩で大きく息をす
る西条の姿が。

確かに、これ以上のデュエルを続けるのは危険だと思う。

例えライフが残されていようが、彼の身体が保つかどうか分
からない。

手札だって、彼の背後から見えていたから分かる。

今のままでは、敵の二体の帝モンスターを倒す事はできない。

(…このままデュエルをしても…やっぱり、王クラスの相手は桁が
違うんだよ…)

仮に自分が西条と代わっても、邪帝を相手に戦えるかどうかも怪
しい。

万事休すとは正に、今のような状況を表す言葉として適切であっ
た。

「小娘、貴様からも人間に言ってやれ。この私に勝てないと」

「……………さいじょお」

手札・フィールド・ライフ。

それらの状況が、マジシャン・ガールの気持ちをぐらつかせる。

「もう…むー…」

「無理じゃねえ」

最初は彼が何を言っているのか分からなかった。
彼の言葉を理解するのに、マジシャン・ガールは一瞬の時間が必要だった。

「…え」

「無理じゃねえって！何だよさっきから。人が少し休んでる間に、勝手にベラベラと話しを進ませやがって…！！」

マジシャン・ガールの前で、ぎこちない動作でありながらも、西条は立ち上がる。

その瞳は、とても澄んだ色をしていた。

このデュエルに対する、絶対に諦めないという強い信念が、彼の瞳には宿っていた。

「でも、さいじょお…！！」

「何でお前に降参を進められなきゃならねえんだよ？良いか、よく聞けよマジシャン・ガール」

西条は向き直り、キョトンとした表情の彼女に言い放つ。

「俺は、お前を助ける為にデュエルをしてるんだ！俺はお前の、そんな言葉なんか望んじやいねえ！ただ一言：『頑張れ』、それだけで良いんだよ」

「…さいじょお」

「俺を信じろ。マジシャン・ガール！！」

俺を信じろ。

その言葉は、何故かマジシャン・ガールの胸に熱く染み込んだ。

彼は、この世界に来たばかりの自分を信じてくれた。

だから今、彼はここに立っている。

自分の代わりに立っている。

ならば、彼の言うとおりではないか？

彼が自分を信じてくれた様に、今度は自分が、彼を信じる番だ。

「…うん」

マジシャン・ガールは一呼吸おいて、自分の気持ちに言い聞かせる。

このデュエルに対する、彼の気持ちに応える為に、今できる精一杯の笑顔で、彼女は言う。

「頑張って、さいじょお!!」

「ああ。任せとけ!!」

デュエルを通じ、ようやく気持ちを通じ合わせた二人。
そしてここから、西条の反撃が始まる。

※

【西条亨】

LP／ 900

「手札」

4枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP／ 3500

「手札」

1枚

「モンスター」

邪帝ガイウス

風帝ライザー

「魔法・罨」

なし

遂に始まった西条のターン。

絶対に諦めない、という気持ちを確固たるものとし、西条はデツキトップに指を添える。

この手は降参の意味ではない。

可能性という未来を賭けた一枚。

「愚かな…」

西条やマジシャン・ガールが自分の意のままに動かなかった事に、邪帝は呆れたようにそう呟く。

「愚かでも何でも良いさ…」

そう。

何と罵られようが、西条は諦めない。

マジシャン・ガールを助けると決めたから。

それだけではない。

「俺は…決闘者だ。そこに1%でも可能性が残されてる限り…ッ、
デュエリスト

俺は諦めない!!」

決闘者として、自分自身にそう決意したから。

「行くぜ…!! 俺のターン、ドローツ!!」

シュバツ!!

キイイイイイ…!!

ラストターン宣言をされた西条が引き当てた可能性。
それは…。

「…フフフ。無駄な事をー…」

「…ッ!! それはどうかかな？」

（ッ!?!）

嘲笑う邪帝であったが、西条の言い放つ言葉に一瞬の戸惑いが生じる。

ふと見ると、西条の顔は真剣だった。

このデュエルに諦めた者の目をしていなかった。

（まさか…!?!）
引き当てたとしても言うのか!?!
この状況を打開

する為の…カードを…ッ!?)

「さいじょお…!?!」

周囲が戸惑う中、西条は反撃を開始する。

「邪帝。ここからが本当のデュエルだ!! 手札を1枚捨てる事で…手札より『THE トリッキー』を特殊召喚ッ!!」

【THE トリッキー】

星5／風属性／魔法使い族

ATK／2000 DEF／1200

〔効果〕

手札を1枚捨てる事で、このカードを手札から特殊召喚する。

手札の『見習い魔術師』を捨て、西条は上級モンスターを特殊召喚した。

しかし、THE トリッキーの攻撃力は2000。

邪帝の操る帝モンスターの攻撃力には届かない。

「攻撃力2000…!?! フッフ…その程度のモンスターでは、この私を…」

「更に俺は、チューナーモンスター『ターボ・シンクロン』を召喚ッ!!」

【ターボ・シンクロン】

星1／風属性／魔法使い族

ATK／ 100 DEF／ 500

「効果・チューナー」

このカードの攻撃宣言時、攻撃対象となるモンスターを守備表示にする事ができる。このカードの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた時、受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1体を手札から特殊召喚する事ができる。

西条はTHE トリツキーを特殊召喚はしたが、まだ通常召喚は行っていないかった。

そして、通常召喚権を使用して出したモンスターは、レベル1のチューナーモンスターであった。

「チューナーモンスターだと…貴様ッ、まさか…ッ!!」

チューナーモンスターの召喚に、それまで余裕な態度でいた邪帝も言葉に詰まる。

そうした中で西条は、邪帝の繰り出すモンスターに対抗すべく、力の限り声をあげた。

「行くぞ…!! レベル5のTHE トリツキーに、レベル1のターボ・シンクロンをチューニング!!」

ヒュンヒュン…ッ!!

西条の掛け声と同時に、彼のモンスター達は高く跳躍した。
互いの力を一つにし、ここに新たなモンスターが誕生する。

「集いし絆が更なる力を紡ぎだす。光さす道となれ!!」

カッツ!!

「シンクロ召喚!! 轟け『ターボ・ウォリアー』!!」

【ターボ・ウォリアー】

星6／風属性／戦士族

ATK／2500 DEF／1500

「シンクロ／効果」

「ターボ・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードがレベル6以上のシンクロモンスターに攻撃する場合、
攻撃対象モンスターの攻撃力を半分にする。このカードはレベル6
以下の効果モンスターの効果の対象にならない。

西条のフィールドに現れしモンスター、ターボ・ウォリアー。

彼の後ろで見つめていたマジシャン・ガールは、彼のシンクロ召喚に心を踊らせた。

「シンクロ召喚…ッ!? まさか貴様如きが、シンクロ召喚をする

とは…!!」

「どうやら俺のラストターンには、まだ早かったみたいだな。行くぞ、邪帝！バトルッ！！」

シンクロ召喚をし、勢いに乗る西条は、バトルフェイズへと突入する。

「ターボ・ウォリアーで、邪帝ガイウスに攻撃ッ！！ アクセル・スラッシュ！！」

「ぐおおお！？」

【西条亨】

LP／ 900

【邪帝ガイウス】

LP／ 3500 ↓ 3400

ターボ・ウォリアーの一撃が決まり、邪帝ガイウスを破壊した。邪帝にとってはこの展開が予想外だったのか、紅く光らせる瞳は大きく見開いていた。

「くう…ッ、人間めがア…ッ！！」

「邪帝……！ 今の内に宣言しておくぜ……！！」

勢いに乗った西条は、対峙する邪帝に向かい、ビシッと指をさした。

そして言い放つ。

決闘者としての、マジシャン・ガールを守ると決めた決意を込めて、こう言い放つ。

「次のターンが、お前のラストターンだ……！！」

帝王の降臨 (後書き)

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。
さて、今回の内容は如何でしたでしょうか？

【帝モンスター】の効果でフィールドを制圧していく邪帝でしたが、負けじと西条もシンクロ召喚という反撃に出ました。
次回でいよいよ決着です。

しかし書いてて思いましたが、デュエルの描写を表現するというのは本当に難しいなあという事です。

今回の内容で例えれば【ターボ・ウォリアー】というモンスター。皆様ならいったいどう表現します？

今まで遊戯王を観て来た、若しくは遊戯王カードをやっていたという方ならば、ターボ・ウォリアーと聞いただけでそのモンスターの絵、もといイメージが浮かぶと思います。
しかし、それらを知らない方が読んだら…？

「ターボ…？…は？」

で終わりです。うーうーん…あの赤いリゼントとしか言い様がない気がします…

やはりそういった表現も組み込んだ方が良いのかな？

凄く大変そうだけど…

さて、秋の色が徐々に現れてきました。

夏とは違い、早朝の冷えた空気で肌寒く感じる方もいらっしゃる

かと思っています。

季節の変わり目ですので、体調管理にはくれぐれもお気をつけ下さい。

それでは、今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。

また次回の話でも皆様と会える事を願っています。

ありがとうございました。

西条の決意

※

深夜：午前一時三十分。

商店街、住宅街、路地裏に、それぞれ二人の足音が響き渡る。

一人は髪をオールバックに纏めた大柄な体格の男。
名を白石直也。

そしてもう一人は、やや小柄な背丈で、青ざめた表情から細い目つきが特徴的な男。
名を結締智恭。

二人とも三上市にある第七デュエル高等学校に通う高校二年生である。

二人は辺りを見渡しながら、何かを探すように三上市の中を走り回っていた。

かれこれ二十分近く走り回り、白石の後ろについて回る結締は、ヨロヨロと足をもつれさせながら、近くに建っていた電柱にもたれ掛かる。

「し、白石さん…ちょ、ちょっと待ってくれい…うぷ」

「何だ、もうへばったのか結締？ だらしがないぞ…!!」

青ざめた表情の結締は、それはそれは息苦しそうな呼吸をしなが
ら、ゆっくりと白石に顔を向ける。

「そろそろ……ちゃんとした説明をして欲しいぜよ……つぷ、なんで俺が……西条ちゃんを探さなくちゃならねんだよ……!？」

そう。

結締は好きで走り回っている訳ではなかった。

元々結締は、今日は朝歸りのつもりで大学の先輩と合コンに参加していた。

居酒屋で酒を飲み、そこで知り合った舞ちゃんという女性と一緒に二次会のカラオケに参加する筈だった。

今日一日は、女の子と楽しく過ごせる筈だった。

しかし、そんな予定も白石の登場と共に粉々に砕け散った。

居酒屋から出て来た直後、彼に捕まり、西条亨の搜索に否応無しに協力しなければならなくなった。

「い、いきなり連れ回されたんじゃ…っ、状況がっ…っぷ、掴めねえじゃんよ…!!」

「ふうん：説明してやっても良いが：結締よ。お前大丈夫か？顔が真っ白だぞ？」

「酒飲んで…っぷ、走り回りやあ…気ぼちばるぐぼええええええ」

「ヌオオアアアッ!! コイツつ、ゲロしやがった!?! 寄るな、

結締!! コッチに来るなアアア!!」

深夜の三上市のとある一角で、白石の悲鳴が響き渡った。

※

【西条亨】

LP／ 900

「手札」

2枚

「モンスター」

ターボ・ウォリアー

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP／ 3400

「手札」

1枚

「モンスター」

風帝ライザー

「魔法・罨」

なし

「次が私の…ラストターン、だと…?」

ターボ・ウォリアーを召喚し、邪帝のモンスターを破壊した西条は、邪帝に対してそう宣言した。

しかし、それで黙っている邪帝ではない。

「シンクロ召喚して、随分と図に乗ってきたようだな、人間……！！貴様、自分のライフが後どれほど残っているのか、分かって言っているのか？」

西条の残りライフは僅か900。

下手をすれば、あと一撃で決着がついてしまう位まで減少していた。

対する邪帝の残りライフは3400。

決して多いと言える数値ではないが、それでも西条と比べれば、幾分か余裕がある。

しかし、それでも西条は諦めない。

このデュエルに勝ち、マジシャン・ガールを助けると決めた彼の想いは強固なものだった。

「分かってるさ。だからこそ、次のターンで決着をつける！！俺がお前に勝つっていう結末でな！！」

声を大にし、西条は手札のカードを掴み取る。

「リバーズカードを1枚セットして、ターンエンド!!」

念には念を…。

デュエルとは、たった一枚のカードから戦況をひっくり返される事がある。

自分から、次がラストターンだと宣言した為に、西条は打てる手は全て出す事にしたのだ。

「…フン、いい気になるなよ」

気持ちが高ぶる西条とは違い、邪帝は内心穏やかではなかった。序盤は確実に、自分のペースでデュエルが進んでいた。

しかし、西条がブラック・マジシャンを召喚してから、デュエルの流れが激しく揺らいでいた。

しかし、邪帝にも手はない訳ではなかった。

邪帝の手札は一枚。

その一枚のカードとは…？

（フッフ…私の手札は、魔法カード『死者転生』。いくら貴様が足掻こうが、私のターンが始まれば…!!）

脳内でこの後の展開をシュミレートする邪帝は、細く不気味な笑みを浮かべる。

「このデュエル、やはり私の勝利に終わると見た……！！ 私の手
ンッ……！！」

自分のターンを開始する邪帝は、カードをドロし、スタンバイ
フェイズへと移行し……。

「スタンバイフェイズ、私は墓地の『黄泉ガエル』の効果発動……！！
墓地よりこのカードを特殊召喚……！！」

【黄泉ガエル】

星1／水属性／水族

ATK／ 100 DEF／ 100

「効果」

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フ
ィールド上に魔法・罠カードが存在していない場合、このカードを
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果は自分フイ
ールドに「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

墓地に眠る黄泉ガエルが、邪帝のフィールドに守備表示で特殊召
喚された。

スタンバイフェイズを終え、メインフェイズへと移行した邪帝は、
二枚となった手札から一枚のカードを掴み取る。

「フッフ…人間、覚悟するが良い!! このカードで、貴様の滅ら
ず口を叩いてくれるわ…!!」

「っ!？」

「魔法カード『死者転生』を発動!!」

【死者転生】

「魔法カード」

手札を1枚捨てて発動する。自分の墓地に存在するモンスター1体
を手札に加える。

邪帝が魔法カードを発動した瞬間、辺りに不穏な空気が漂いだし
た。

それはまるで、今の邪帝の心理を具現しているような…。

「このカードは、手札を墓地に送る代償として…墓地のモンスター
を手札に加える。勿論…私が手札に戻すカードは…フッフ!!」

「ッ…『邪帝ガイウス』のカード…!？」

邪帝ガイウス、自らの分身を手札に戻した邪帝は、高らかに笑い
声をあげる。

「フハハハハ!! 私は黄泉ガエルをリリースし、アドバンス召

喚ッ！！ ヤツに引導を渡してやれ……！！ 我が分身、邪帝ガイウスッ！！」

【邪帝ガイウス】

星6／闇属性／悪魔族

ATK／2400 DEF／1000

「効果」

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を除外する。除外したカードが闇属性モンスターだった場合、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える。

グゴゴゴゴゴ…ッ！！

再び西条の前に現れし邪帝ガイウス。

アドバンス召喚に成功した事により、邪帝ガイウスは自身の効果の発動を、高らかに宣言した。

「我が分身の効果は貴様も知っていよう？アドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを除外する……！！」

現在、西条のフィールドにカードは二枚。

モンスターカードであるターボ・ウォリアーに、一枚のリバースカードだ。

更に言えば、西条の残りライフは僅か900。

少しのダメージもが、即敗北へと繋がりがねない程であった。

「我が分身の効果で、人間よ！！ 貴様のシンクロモンスター、ターボ・ウォリアーを除外すれば…貴様を守る術は無くなる訳だ…！！」

得意気に語る邪帝。

その様子からして、邪帝は本当にこのターンで勝負をつけるつもりなのだろう。

しかし、西条とて負けていけない。

残りライフが僅かだろうが何だろうが、彼とて負けられない理由があるのだ。

「残念だが邪帝、お前の効果は通用しないッ！！」

「っ！？」

「ターボ・ウォリアーは、“レベル6以下の効果モンスターの効果対象にならない”という永続効果を持っている！お前が繰り出す【帝モンスター】のレベルは6！よって、お前が召喚した邪帝ガイウスは、俺のモンスターを対象にする事は出来ない！！」

【帝モンスター】というのは、レベルが5～6の上級モンスター達だ。

そして共通している効果が、アドバンス召喚時にフィールド上の

カードを対象にとって発動する、という事。

西条の召喚したターボ・ウォリアーは攻撃力でもそれらを上回っている為、対帝モンスターというには打ってつけのモンスターである。

「ターボ・ウォリアーの効果によって、お前の召喚した邪帝ガイウスの効果は、俺のモンスターは受け付けない！！　消えるのはお前のモンスターだ！！」

「帝モンスター達は全て強制効果だから…凄い…さいじょお、凄いやー！！」

敵の能力を坂手にとってのシンクロ召喚。

そんな西条のプレイに、デュエルを観戦するマジシャン・ガールは心を踊らせる。

しかし…。

「フフフ…なる程。少しは考えてデュエルをしているみたいだな、人間…だが、まだ詰めが甘い…！！」

「…なに？」

「忘れてないか？我が分身、邪帝ガイウスには…もう一つの効果がある事を…！！」

「もう一つの…効果…ハッ!？」

邪帝に言われた事で、西条は数ターン前の事を思い出した。

その効果によって、自分のエースカードであるブラック・マジシヤンが除外された時…。

『ブラック・マジシヤンは闇属性モンスター。我が分身…邪帝ガイウスは、自身の効果で除外したカードが闇属性モンスターだった時、相手に1000ポイントのダメージを与える…!!』

「…まさか…ッ!？」

「そう。我が分身、邪帝ガイウスの効果は、何も貴様のフィールドだけが範囲ではない。全てのフィールド上に効果が及ぶのだよ?」

その意味が分かるか?と、邪帝は卑しい笑みを西条に向けた。

邪帝ガイウス自身は闇属性モンスターだ。

つまり、自分自身を効果の選択として除外すれば、問答無用で相手に1000ポイントのダメージを与える事が出来るのだ。

【西条亨】

LP / 900

【邪帝ガイウス】

「フハハハハ！！　そうだ。貴様の思った通りだ人間よ！！　邪帝ガイウスの効果発動！！　自身を除外し、ヤツに1000ポイントのダメージを与える！！」

「そんな…ッ！？」

一喜一憂、今度は驚愕の声をあげるマジシャン・ガール。

この効果が成立すれば、西条に1000ポイントのダメージが入り、負ける。

そうなれば、自分の使命が…そして何より、彼の命が…。

（このままじゃ…さいじょおのライフが0になっちゃう…！！　さいじょお…っ！？）

マジシャン・ガールが声をあげようとしたその時、西条は残った手札一枚を取り出した。

「くっ、そうはさせない！！　手札の『エフェクト・ヴェーラー』の効果発動！！」

【エフェクト・ヴェーラー】
星1／光属性／魔法使い族

ATK／ 0 DEF／ 0

「チューナー・効果」

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。この効果は相手ターンのメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

「このカードを手札から捨てる事で、効果モンスターの効果を、エンドフェイズまで無効にする！！」

「なにっ!？」

西条がエフェクト・ヴェーラーのカードを捨てると、邪帝のフィールドの邪帝ガイウスの効果が弾け飛んだ。

これにより邪帝ガイウスは除外されず、西条にダメージは入らなかった。

「おのれ…ッ…貴様ア…ッ!!」

訝しむ表情を作る邪帝はこのターン、打つ手が無かった。

モンスターを召喚し、手札も0。

肝心のモンスターでさえ、西条のモンスターの攻撃力には届かない。

「どうした邪帝…このターンで決着^{ケリ}を着けるんじゃないのか？」

「ぐうう…！？」

打つ手が無い邪帝は、ターンを終了するしかなかった。
そして始まる。

このデュエルのラストターン。
西条の攻撃^{ターン}が始まる。

※

「はあ？西条ちゃんが出て行ったア？」

真夜中の三上市内を搜索する白石に結締は、駅前商店街、その路地裏に居た。

先程まで真っ青な顔をしていた結締であつたが、吐くだけ吐いたらスッキリしたらしい。

ミネラルウォーターを一気に飲み干した結締は、隣で靴を一生懸命になって洗う白石に、事の経緯を尋ねていた。

「それにしても珍しいな…西条ちゃんが先生に反発してまで、夜中に飛び出して行くなんざ…」

「ふうん…。どうやら西条のヤツ、女の事で飛び出して行っただけだ」

「さッ：西条ちゃんに：お、女だと!？」

女と聞いて、結締は驚きを隠せなかった。

西条や白石とは、中学校時代からの付き合いだから分かる。

今まで自分たちには、女性関係の話題なんてなかった。

それが遂に、三人の中から女性関係の話しが持ち上がったのだ。

お年頃の結締からすれば、コレほどのネタはない。

「なる程：こりゃあ面白そうな話しになってきたぜい」

「だろう？それに西条のヤツを見つけないければ、俺の補習も無しにしてくれると先生は約束してくれた!! コレは俄然、やる気が出てくるわ!! ワハハハハ!!」

「白石さんの補習の話しは個人的に納得いかねえが：ま、西条ちゃんに関しちゃう同感だぜい」

結締は飲み干したミネラルウォーターのペットボトルを放り投げ、ゴミ箱にシュートを決める。

「ほら、何時までボサッとしてる白石さん! サッサと西条ちゃんを探しに行くぜよ!!」

「ま、まて結締っ！？　まだ反対の靴に貴様のゲロが付着したままなのだ！！　アルコール消毒させろ！！　って、俺を置いて行くな
アアー！！」

二人の西条探しは、まだまだ続く。

※

【西条亨】

LP／900

「手札」

なし

「モンスター」

ターボ・ウォリアー

「魔法・罨」

リバースカード　1枚

【邪帝ガイウス】

LP／3400

「手札」

なし

「モンスター」

風帝ライザー

邪帝ガイウス

「魔法・罨」

なし

「俺のターンッ!!」

邪帝のターンを凌ぎ切り、始まる西条のターン。

カードをドロ―した西条は、険しい表情で睨み付けてくる邪帝に
対し、こう言い放つ。

「さあ邪帝…覚悟は良いか？俺はこのターンで、お前を倒す…!!」

「ぬうう…出来るものなら、やってみせろ…!!」

現在、西条のフィールドには攻撃力2500のターボ・ウォリア
ーと、一枚のリバースカード。

そして手札はドロ―した一枚のみ。

対する邪帝のフィールドには、リバースカードは無いものの、攻
撃力2400の帝モンスターが二体並んでいるのだ。

（ヤツのモンスターが攻撃してきた所で、私が受ける戦闘ダメージ
はせいぜい100ポイント。それに私のライフは、まだ3400も
残っている…!!）

まだチャンスはある。

このターンで決着を着ける事など不可能だ！と、邪帝は誰でもない。自分自身にそう言い聞かせる。

そうした中、西条はこのデュエルに終止符を打つ為の最後のプレイを開始した。

「よく見てろよ、マジシャン・ガール。俺は勝つぞ…このデュエルに…！！」

「…さいじょお。うん！！」

西条はマジシャン・ガールの返事を聞くと、自分の墓地から二枚のカードを取り出す。

「墓地に眠る光属性モンスター『魔導騎士ディフェンダー』と、闇属性モンスター『魔導戦士 ブレイカー』を除外し、手札より特殊召喚ッ！！」

光と闇の力を解放し、西条が特殊召喚するモンスター。
それは…。

「現れよ、混沌の魔術師！『カオス・ソーサラー』！！」

【カオス・ソーサラー】

星6／闇属性／魔法使い族

ATK／2300 DEF／2000

「効果」

このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する光属性と闇属性のモンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する事ができる。この効果を発動するターン、このカードは攻撃する事ができない。

西条のフィールドに召喚されし、混沌の魔術師。

片方の手には光の力を、片方の手には闇の力を。

そのモンスターの登場に、邪帝は表情に影を作っていく。

「貴様ツ…そのカードは…!!」

「カオス・ソーサラーの効果発動!! このターン、自身の攻撃を封じる代わりに、フィールド上のモンスター1体を除外する!! 消えろ、風帝ライザー!!」

ゴバウツ!! と、凄まじい力が邪帝のモンスターを襲う。

カオス・ソーサラーの効果を受けた風帝ライザーは、その身体を亜空間へと消失させた。

これにより邪帝のフィールドには、邪帝ガイウス1体のみとなっていた。

「ッ！！ 風帝を除外したからと言って、いい気になるな！！ 見ろッ！！」

【西条亨】

LP／ 900

「手札」

なし

「モンスター」

ターボ・ウォリアー

カオス・ソーサラー

「魔法・罠」

リバースカード 1枚

【邪帝ガイウス】

LP／3400

「手札」

なし

「モンスター」

邪帝ガイウス

「魔法・罠」

なし

「貴様、言ったな？このターンで決着を着けると。貴様の場に攻撃できるモンスターは、ターボ・ウォリアーしか居ないではないか！？ カオス・ソーサラーは効果により攻撃は出来ず、貴様の手札は0ッ！！ このターンで貴様が私に与えられるダメージは、たったの100ポイントでしかない！！」

まくし立てるように豪語する邪帝。

言葉の端に焦りや不安が見え隠れする中、邪帝は言い放つ。

「やはり所詮、貴様はその程度……！！ 次のターンで、私がこのデュエルに終止符を打つ……！！ 私の手でな……！！」

「……………」

スウウ……と瞳を閉じる西条。

確かに邪帝の言うように、このままでは邪帝に1000ポイントのダメージしか与えられない。

そうなれば邪帝のターンに移り、下手をすれば自分はこのデュエルで負けてしまうだろう。

しかし、自分は宣言した。

このターンで、自分が勝つという事を宣言した。

その為の準備は既に完了している。

「……言いたい事はそれだけか？」

「……なにっ……？」

「言った筈だぜ？このターンでラストだと……！！ 確かに、俺の手札は0で、このターンでモンスターを召喚する事はできない。だが……ッ……！！」

西条はそう言いながら、自分の場に伏せてある一枚のカードを指した。

「俺にはまだ、このカードが残されている。そしてこのカードこそが、今回のデュエルのキーカードだ！！ リバースカード、オープンッ！！」

西条が言うキーカード。
それは…。

「罠カード『異次元からの帰還』を発動！！」

【異次元からの帰還】

「罠カード」

ライフポイントを半分払う。ゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。エンドフェイズ時、この効果によって特殊召喚されたモンスターを全てゲームから除外する。

【西条亨】

LP／ 900 ↓ 450

【邪帝ガイウス】

LP／3400

「このカードは俺のライフを半分払う事で、ゲームから除外されている自分のモンスターを、全て特殊召喚する！！」

「なにいいッ！！？」

このデュエルで西条の除外されているモンスターが全て復活する事に、邪帝は思わず後ずさる。

「現れよ…魔導戦士 ブレイカー！！ 魔導騎士ディフェンダー！！
そして…ブラック・マジシャン！！」

【西条のモンスター】

ターボ・ウォリアー

ATK／2500

カオス・ソーサラー

ATK／2300

魔導戦士 ブレイカー

ATK／1600

魔導騎士ディフェンダー

ATK／1600

ブラック・マジシャン

ATK／2500

(さいじょお…それに、お師匠さま…ッ!!)

モンスターカードゾーン全てを覆い尽くす展開力に、邪帝は言葉を無くした。

こうなれば嫌でも分かってしまう。

この先の展開を。

このデュエルの結末を。

「バトル!! ターボ・ウォリアーで、邪帝ガイウスに攻撃!!
アクセル・スラッシュ!!」

ズゴウッ!!

「グウウ…ッ!!」

【西条亨】

LP / 450

【邪帝ガイウス】

LP / 3400 ↓ 3300

ターボ・ウォリアーの攻撃が炸裂し、邪帝ガイウスは破壊された。
これで邪帝のフィールドにはモンスターが全て消え、邪帝を守る者は誰も居なくなってしまった…。

そして、西条の攻撃は続く。

「続けて魔導戦士 ブレイカー、魔導騎士ディフェンダーでダイレクトアタック!!」

ズバツズバツ!!

「ガアアアア!!」

【西条亨】

LP／ 450

【邪帝ガイウス】

LP／ 3300 ↓ 1700 ↓ 100

二体の魔導戦士たちの攻撃を受け、邪帝のライフは風前の灯火となる。

そして、遂に動き出す。

このデュエルを終わらせる為に。

マジシャン・ガールを守る為に、彼のエースが動き出す。

「この一撃で決める…!! 行けッ、ブラック・マジシャン!!」

黒・魔・導 ツ!!

辺りに凄まじい闇の閃光が迸る。

ブラック・マジシャンの攻撃を受けた邪帝は、弾け飛ぶ魔力の奔流に飲み込まれ、地に膝を着かせた。

[illegible]

⌋

【西条亨】

LP
450

【邪帝ガイウス】

$$\begin{array}{c} \text{LP} \\ \hline 1 \\ 0 \\ 0 \\ \downarrow \\ 0 \end{array}$$

この瞬間、西条 VS 邪帝のデュエルは、西条の勝利に終わった。

ビキツ、パキヤパキヤパキヤパキヤ…。
ビシシツツ…！！

デュエルの決着がつき、西条と邪帝の二人を囲っていた魔法陣の結果に、無数の亀裂が走る。

そして、結界の外にいたマジシャン・ガールの目の前で、まるで校舎の窓ガラスが一斉に割れたかのような衝撃音が鳴り響いた。

三上市の河川敷。

マジシャン・ガールの前で最後に立っていたのは、西条亨だった。

対する邪帝は地に膝を着き、全身をワナワナと震わせながら、唸るような声をあげる。

「ぐうう…ッ、油断…したか…ッ!!」

邪帝からすれば、今回の出来事は自分でも信じられないらしく、握った拳を力任せに地面に叩き付ける。

邪帝はデュエルで負けた。

精霊界でも【王】と呼ばれた自分が、人間界にてこの馬の骨とも知れない輩にデュエルで負けた。

「…邪帝、俺の勝ちだ…!!」

「…ッ!!」

地に膝を着く自分の前に立つ西条に告げられ、邪帝はようやく、現実を認識する。

認識する事で、邪帝はゆっくりと立ち上がり、自分を見つめる西条と同じ様に、自分も彼を真っ直ぐに見つめる。

「…デュエルによる約束は守ろう。今回は、これ以上その小娘には手出しはしない。私は精霊界に引き上げよう…」

邪帝がそう言うと、彼の身体に、ある変化が訪れた。

まるで闇夜に染まっていく様に、うっすらと邪帝の身体が透明化してきているのだ。

それは、邪帝が精霊界に帰っていく事だと、西条は認識する。

「今回のデュエルで力を消耗した私が、近い内にこの世界に来る事はないだろう。だが、今回の事は…始まりに過ぎない」

「…なに？」

消え行く中、邪帝は自分に聞き入る西条に告げていく。

「私が貴様に敗れた事で、他の勢力もその小娘を狙ってくるだろう。フフフ…どうだ、今の気分は？」

つまりはこういう事だ。

自分の他にも、マジシャン・ガールを襲おうとする連中は次々と攻めてくるだろう。

そうした中で、貴様はどこまでマジシャン・ガールを守りきれるか？

邪帝はそう、西条に尋ねた。

それに対する西条の言葉は…。

「…誰だって良い。何時だって良い…」

西条は消え行く邪帝を真っ直ぐに見据え、言葉を強く発した。

「アイツの使命を果たす為なら…俺がいくらでも相手になってやる…！！
そう伝えとけ」

「フ…良い返事だ」

邪帝はそう呟くと、消え行く最後に。
確認するかのように、西条を見据える。

「…そう言えば…貴様の名を聞いていなかったな。人間…貴様の名は…？」

西条。

彼は自身の名に決意を込めて述べた。

彼の名を聞いた邪帝は頷くでもなく、返事をするでもなく、訝しむでもなく。

小さな笑みを浮かべて、人間界から姿を消した。

※

邪帝が人間界から去り、三上市の河川敷には日常の静寂が戻ってくる。

涼しげな夜風、隣から聞こえる河のせせらぎ。

西条はそれらを見渡し、ひと息つく事で実感する。

マジシャン・ガールを守る事が出来たのだという事を…。

「っ!？ そうだ、マジシャン・ガール!」

実感する事で思い出したかのように、西条は振り返る。

そこには、ボロボロな姿になりながらも、綻んだ表情を見せるマジシャン・ガールが立っていた。

自分が駆けつける前、マジシャン・ガールは邪帝の部下達とのデュエルで敗北し、酷い仕打ちを受けていた。

つい先程、精霊界のデュエルを経験していたから分かる。

あのデュエルでは、ダメージが実際の衝撃となって自らに襲い掛かってくるのだ。

デュエルを終えた今でも、西条の身体は所々が痛みという悲鳴をあげている。

つまりは、彼女も同じなのだ。

今、自分が痛みを堪えている様に、必死になって応援してくれていた彼女も、痛くない筈がないのだ。

西条はマジシャン・ガールに駆け寄る。

そして、デュエル中では分からなかった彼女の容態が、近くで見ると明らかに、西条はショックを受けた。

破けた衣服から見える、擦りむいた肌。

腕や腹には殴打されたかのような、内出血が広がり。

小さな唇の周りには、血が拭われた痕が…。

「おい、大丈夫か？どこか痛む所ないか？立ってられるか？酷い怪我じゃねえか…！！ 何か冷やす物は…！？ ええつと…！！」

遠目では分からなかった。

まさか彼女がここまで酷い仕打ちをされているとは思ひもしなかった。

パニックになり、慌てふためく西条を見て、マジシャン・ガールは声を震わせながら…。

「…そんなにいっぺんに言われても…」

「…っ」

「…何から答えれば良いのか…さっぱりなんだよ」

その声は震えていた。

しかし、声を発する彼女の表情は笑顔だった。

邪帝を退けられた事への安堵から。

そして何より、二人とも無事であった事の喜びが、彼女の笑顔を作っていた。

「マジシャン・ガール…っ、お、おい!？」 大丈夫かよ!？」

張り詰めた緊張の糸が切れたのだろう。

マジシャン・ガールはガクツと膝を崩し、西条に倒れ込む様にその身を預けた。

「しっかりしろ…おい!!」

「はは…ごめんね、さいじょお…。こんな痛い思いさせちゃって…」

西条の腕の中で、彼を見つめるマジシャン・ガールは、ゆっくりと瞼を閉じていく。

「わたしがもつと…つよくななきゃ…ダメなんだね…そしたら、さいじょおが傷付くことなんて…なかった…」

「おい!？ なに言ってんだマジシャン・ガール!! おいッ!!」

マジシャン・ガールのかすれゆく声と共に、彼女の目尻からポツリと涙が零れ落ちる。

「…ごめんね…さいじょお…巻き込んだじゃって…ホントに…ホントに…ごめ……」

「オイッ!! マジシャン・ガール!? マジシャン・ガールッ!!」

そこから彼の耳に入ってきたのは、隣を流れる河のせせらぎだけだった。

腕の中の少女は、涙を流したまま。

それ以降、彼女の口から言葉という声が聞こえてくる事はなかった。

「…なんで、お前が謝るんだよ…っ…!!」

少年の声は震えていた。

「…謝らなきゃいけないのは…っ、俺の方じゃねえか…っ！！」

自分が彼女を一人にしなければ、彼女は敵に襲われる事はなかったかもしれない。

自分をもっと早く駆け付けていれば、彼女はこうも酷い仕打ちをされずに済んだかもしれない。

自分をもっとデュエルが強ければ、彼女にこんな負担を強いる必要はなかったかもしれない。

西条の中に、自責の念が激しく渦巻いていく。

彼女を抱える両の腕に、尋常じゃない位の想いを込めて、西条は呟く。

「…ごめんな。マジシャン・ガール…」

西条は、今の自分がどんな顔をしているか、分からなかった。

「俺、強くなるから。これ以上、お前が涙を流さなくても良い様に…俺、強くなるから…！！」

西条は泣かない。

何故かそれは、自分で許せないと思ったから。

その言葉が、彼女に聞こえているかは分からない。
その決意が、彼女の心に響いているかは分からない。

それでも、彼は自分自身に言い聞かせる。

彼女の為に。

彼女を守る為に、西条亨は決意する。

「だから…俺は………」

※

深夜になっても居る所に人は集まるものである。

白石と結締の二人がやって来たのは、辺り一面に裸の女性達のポスターやDVDが流出した、いわゆる卑猥なお店だった。

「感じる…俺にゃあ感じるぜよ!!　いきり立つ男の魂を!!」

「ふうん…熱くなるのは構わん。が、結締よ…とりあえず建て前として貴様に尋ねておくぞ。本当にこの店に、西条のヤツがいると思うか?」

「え…だって白石さん、女って言ったじゃん? 女って事ア…つまりはこうだったー」

「有り得ん。西条はこういった店に來ると、よく腹を壊していたからな…ヤツが自分からこの様な店に來るなど、俺には考えられん…!!」

「ちえっ…じゃ、次に行ってみますか？」

「どうせ貴様が來たかったただけだろう？あ、待て結締!!　せめてこのエロ本を買ってからにー!!」

・
・
・
・
・

「はい、到着!!　ここなら西条ちゃんを搜索するのにゃあ、持つてこいな場所だぜい!!」

続いて二人がやって來たのは、西条の住む学生寮の正門、その道沿いに植えられた茂みの中だった。

「結締よ…なぜこんな場所を…？」

茂みに隠れ、購入したエロ本を抱えて縮こまる白石は、這い蹲りながら双眼鏡を構える結締に、とりあえず尋ねてみた。

「考えてもみろ、白石さん。三上市は広いんだぜい？そんな中、たった一人を探せったって…。『ウォーリーを探せ』ならともかく、

人間の足で街一つ探し回るなんざ、土台無理な話しだぜよ。そうなりゃ、残された手は一つ…!!」

「なる程…ここで待ち伏せという訳か」

「その通りだぜい」

きっと西条は帰ってくる時、この正門から学生寮に入ってくるだろう。

そこを待ち伏せして、帰ってきた西条を捕まえ、楠先生に彼を差し出せば…!!

というのが、結締の導き出した案である。

しかし、世の中そう上手く事が運ばないものである。

盲点だったのだ。

「…なにやってんの、アンタたち…?」

「え?」

「ムッ!?」

それは、彼等のここに隠れるまでの一部始終の行動を、正門で待ち構える楠先生に、しっかりと目撃されていた事である。

「白石くん…それに、なぜ結締くんまで居るのか分からないけど…」

「せ、せんせい…」

「ま、待ってくー」

その瞬間、結締と白石の悲鳴が夜空を翔る。

結果、白石の補習は倍の数となり、結締も同じく補習を受けさせられる羽目になったのは言うまでもない。

日常

※

渦巻く炎の集落の中を、マジシャン・ガールは必死になって走っていた。

辺りに人は一人も居らず、感じるのは肌を焼くような熱気と、倒壊する家屋の焦げ腐ったような噎せ返る匂い。

自分の暮らすこの集落は、邪神の手の者によって、一度崩壊した。今、マジシャン・ガールは、誰か生き残りが居ないのか、懸命に搜索している最中なのである。

「みんな！だれか居ないの！？ 誰でも良いから、返事をして！」

声を大にして叫ぶマジシャン・ガールであったが、返ってくる言葉はない。

やはりもう…この集落の住人は、邪神の手の者によって既に…。

そう思うと、それまで走り回っていた足がピタリと止まる。

いや、そんな事はない！きっと誰かが残っている！

そうやって気を強く持つ事で、マジシャン・ガールは再び搜索活動を再開する。

すると、ある一カ所に視線が釘付けになった。

彼女の視線の先には、道に倒れている小さな女の子がいたのだ。

「あれは…!?!」

急ぎ、その子の所へと駆け寄るマジシャン・ガール。
抱えあげて、必死に声をかけるが、その子からの返事は微々たるものだった。

「酷く衰弱してる…!! 一刻も早く、手当て出来る場所に連れて行かないと…!!」

そう判断したマジシャン・ガールは、その子を抱えながらその場を離れようとした。

その時だ…。

いつからそこに立っていたのかは分からない。
マジシャン・ガールの前には、邪神の手先の中でも【王】と呼ばれるモンスター、邪帝ガイウスが立っていたのだ。

「邪帝っ…そんな!?!? なんでここに…!?!」

「フッフ…この集落から誰も逃がすなどの御命令だ。魔術師の小娘よ…デュエルだ…!!」

そう言い、マジシャン・ガールにデュエルを挑む邪帝。
王とのデュエル。

その重圧に、マジシャン・ガールは青ざめた表情で、歯をカチカチと鳴らしながら、一歩、二歩と後ずさる。

勝てる訳がない。

自分なんかが、王と呼ばれるモンスター相手に勝てる筈がない。
邪帝の部下にさえ、手も足も出なかったのだ。

どう足掻いても、このままデュエルをした所で、自分が勝てる可能性など皆無だった。

「…いや…っ、来ないで…!!」

ペタンと尻込みし、ガクリと頭を垂れるマジシャン・ガールは、
自己嫌悪や恐怖心から、その場を動く事ができなかった。

「助けて…お師匠さま…!!」 助けて…」

目に大粒の涙を溜め込みながら、マジシャン・ガールは懇願する。

「助けて…っ、助けて…!!」 助けて、さいじょおお!!」

※

「さいじょおお!!　っ!?!」

気がつくところでは、自分の世界の集落ではなかった。

見慣れない部屋の天井。

辺りを見渡す事で、マジシャン・ガールは自分が夢を見ていたんだと実感する。

部屋の中は、見慣れない物で満ち溢れていた。

机の上に置かれた四角い箱パソコンや、本とは違う紙を束ねた何か（ファイル）の数々。

更に言えば、自分が今まで体を預けていた、フカフカの長椅子ソファ。これらは彼の部屋に有っただろうか？

いや、ない。

（ここ、どこなの…?　さいじょおの…部屋じゃ…ないの?）

自分に掛けられていたタオルケットを引き寄せるマジシャン・ガールは、縮こまりながら挙動不審に辺りをキョロキョロと見渡す。

西条の部屋にはない重苦しさが漂うこの部屋に、マジシャン・ガールは息苦しさを感じていた。

すると…。

ドタドタドタドタッ！！

「ヒィっ！？」

マジシャン・ガールの耳に、けたたましい足音が響いてくる。

その足音は、どんどん自分が居る部屋に迫って来ているではないか。

恐怖心から気が動転しているマジシャン・ガールは、どこからか杖を取り出し、その先端を部屋のドアに向ける。

顔を背けながら杖を構えるマジシャン・ガールは、ドアが開いた瞬間。

部屋に飛び込んできた人影に向かって、黒魔導爆裂破をぶちこんだ。

「マジシャン・ガール！！ 目エ覚ま『ズドンッ！！』 ぶぎゃああああああ！！」

「ふえ…！？ その声…って、ああ！？ さいじょお！！」

不審者かと思ひ込み、攻撃した相手は、なんと西条亨だった。

吹き飛んだドアの下敷きになり、漫画チックに目をぐるぐると回しながら気絶する西条。

「えい、ごめん、さいじょお！ しっかりしてえ！」

慌てて彼をドアの下敷き状態から救出しようとするマジシャン・ガール。

すると、そんな彼女に、西条とは違う別の男性の声が聞こえてきた。

「ちょっと、西条ちゃん？今の音は何なのよ……って、あら？西条ちゃん……なんでドアの下敷きになっちゃってるの？」

マジシャン・ガールが声のした方を向くと、そこに現れた人物は、それはそれは巨大なオッサンだった。

自分の太もも位の太さはあるだろう筋肉質な腕。

ピチピチに張り裂けそうなシャツの上からでも明らかな程、ガツシリした胸板。

そして、野太い声色から成る、独特なオカマ口調。

極めつけにその人物は、プロレスの選手が付いているような顔面を覆うマスクを被って現れたのだ。

一言で言い表せば、正真正銘の不審者が現れたのだ。

「きゃあああああ！！ 化け物おお！？」

「誰が化け物よ！！ 全く、失礼しちゃうわね……ほら、西条ちゃん。何時までそうしてんのよ？」

怯えるマジシャン・ガールの前で、覆面オカマの人物は、今も気

絶している西条を軽々と引っ張り出す。

そして、ぐったりとしている彼を、まるで手軽な荷物を放り投げるかのような素振りで、ソファアの上にぼーんと投げ飛ばした。

「いい加減…っ、起きなさい！」

「ぐえっ!？」

「オトコでしょ!!！」

「いゝっつてええ…っ!？」

どうやら投げ飛ばされた衝撃で意識を取り戻したらしい西条は、目をシパシパさせながら、ぎこちない動作で起き上がる。

「…あれ? 何で俺…こんなトコで倒れてたんだ? あれれえ？」

覆面オカマと西条のやり取りに言葉が出て来ないマジシャン・ガールは、とりあえず西条の側に寄る事にした。

現状が全く掴めないマジシャン・ガールは、彼の近くに居ても、不安が拭いきれる事はなかった。

※

落ち着いた所で、三人は部屋に用意されていた椅子にそれぞれ腰掛けた。

正面には覆面オカマの巨漢。

そして、マジシャン・ガールが眠っていたソファーに、西条とマジシャン・ガールが並ぶように座る所で話しは始まる。

「あー…先ずはお前に、この人から紹介しなくちゃいけないな」

言葉を探しながら口を開いたのは西条。

「この人は…ここ、カードショップ『アリス』の店長を勤めている、中島さんだ」

「紹介に預かった、中島よ☆ヨロシク♪」

「は…はあ…」

紹介された覆面オカマの中島は、マジシャン・ガールに向けてバチコーン☆とウインクをするが、マジシャン・ガールは引きつった表情のままである。

彼女からすれば中島は、覆面を被った怪しい男でしかなかった。

「んもう！西条ちゃん、その子イケずウ！！」

「恐がってるんですって…店長がそのマスクを外せば…」

「ダメよ、絶対！絶対ダメ！！」

マスクを外せば、多少はマジシャン・ガールの反応も変わる筈なのだが、中島はそれを断固として拒否した。

「…えーっと、それでな、マジシャン・ガール。今、俺たちが居るこの場所だけど…分かんと思うが、俺の部屋じゃない」

「…みればわかるもん」

「ここは、この中島さんが経営しているカードショップの事務所なんだ。お前の事を匿ってくれるのに、中島さんは協力してくれたんだ」

「…え？」

匿う？それは一体どういう事なのか？

今の言葉だけでは、マジシャン・ガールは現状を理解できなかった。

「お前は覚えてないだろうけど、邪帝とのデュエルの後、お前は意識を失ってたんだ…」

「…え？」

西条の脳裏に蘇るあの時の出来事。

自分の腕の中で気を失ったマジシャン・ガールを休ませる為に、西条は三上市の街中を懸命に走り回った。

初めは、彼女を病院へと連れて行こうかと考えた。

しかし、彼女は精霊界から来たデュエル・モンスターなのだ。

人間界の医療が効果があるのか分からないし、何より病院側に彼女の事を、どう説明すれば良いのか分からなかった。

精霊界から来たマジシャン・ガールは、人間界での身分証を持っていないのだ。

どうすれば良いのか分からない。

どこに連れて行けば良いのか分からない。

自分の部屋に戻るか？

いや、寮には担任の楠先生が待ち構えている。

しかし、なりふり構ってられない。

西条がマジシャン・ガールを抱えて戻ろうとしたその時、彼に声をかけて来たのが中島だった。

「気を失ったお前を、店長は匿ってくれたんだ…」

「そう…なんだ…」

知らなかった。

自分が気を失っている間にも、彼が自分の為に必死になってくれていた事。

彼だけでなく、その周りの人達にも迷惑を掛けていた事。

それらを知る事で、マジシャン・ガールは素直な気持ちで中島を見る事ができた。

それまで中島の事を、覆面オカマの怪しい人物としか思えなかったが、今は違う。

この人は西条と同じく、自分の為に協力してくれた恩人なのだと、マジシャン・ガールは理解した。

「あの…てんちょーさん」

「？」

どこか気まずそうに口を開くマジシャン・ガールは、縮こまり、気恥ずかしながら中島に向き直る。

「さっきは…化け物なんて言って、ゴメンナサイ…。それから…ありがとうございました…」

自分の気持ちをしっかりと言えたマジシャン・ガールは、チラッと上目遣いで中島の反応を待つ。

その中島は、そんなマジシャン・ガールの仕草に、マスクから覗く目元をキラリ☆と光らせた。

「んー、良いのよ。アナタの事情は西条ちゃんから聞いたし、アナタの事はアタシなりに理解してるつもり。だから…」

中島はそう言うのと、マジシャン・ガールの前に自分の右手を差し出した。

一瞬、何のことだか理解できないマジシャン・ガールは、キョトンとしながら「コレはナニ？」と、西条に顔を向ける。

「コレは握手って言って…こうして互いに手を握りあう事で、ヨロシクって体現する挨拶だよ」

「へえ…そうなんだ」

まるで珍しいものを見るような表情に変わるマジシャン・ガールは、早速、自分に差し出された中島の手を握った。

「てんちよーさん、ヨロシク！」

「こちらこそ☆いつでも頼りにして良いわよ♪」

西条を通して、マジシャン・ガールは新たな仲間を作る事ができた。

その時の彼女の表情は、なによりも眩しい笑顔だった。

※

午前八時二十分。

カードショップ『アリス』を出た西条とマジシャン・ガールは、とりあえず彼の部屋もとい、学生寮に戻る事にした。

寮の前まで中島の車で送って貰った二人は、送迎してくれた中島に挨拶をする所だった。

「てんちよーさん、ありがとう！」

「スイマセン、車まで出して貰って…」

車から降りた二人に、中島は運転席の窓を開けて、覆面から覗く口元をニカッ☆つとさせる。

「良いのよう♪それよりも西条ちゃん、今日は“マナちゃん”をゆっくりと休ませてあげるのよ☆」

「はい。そのつもりです」

マナちゃん、というのは彼の隣に立つマジシャン・ガールの事だ。それは車の中の事…。

中島の「マジシャン・ガールって名前、少し長いわネ…何かニツクネームをつけたらどう♪」という発言から始まった。

確かに、いちいちマジシャン・ガールと呼ぶのは長い。

それに端から聞けば、なんでカードの名前で呼んでるのかと思われてしまう。

そんな理由から、西条は「大食い女」と名付けようとしたが、マジシャン・ガールに杖を突きつけられた事で断念した。

「うー…じゃあ…マナ。これで良いんじゃないか？呼びやすいし」

『マ』… マジシャン・ガールの

『ナ』… なまえ

西条は適当に考えてそう呼んでみたのだが、本人はマナという名前が気に入ったのか、それですんなりと了承した。

勿論、西条がそんな適当な理由で言ったという事を、本人は知らない。

「それじゃ、西条ちゃん、マナちゃん。また会いましょう☆」

ブロロロロ…

発進していく車を笑顔で見送る二人。
すると、そんな二人の背後に忍び寄る二つの影があった。

二つの影は二人に気付かれる事なく、西条の背後に迫って行く。

「さて…それじゃ、部屋に帰るとするか」

「さいじょお。帰ったら何か作って欲しいな！今のわたしは、お腹と背中がくつつきそうなくらいペコペコなんだよ！」

「はいはい。じゃあ…ーっ！！」

その時だった。

部屋に帰ろうと西条が振り返った瞬間、彼の目に飛び込んできた者。

それは…。

「サアアイジヨオウちゃああん…！！！」

「ふうん…美少女を連れて朝帰りとは…！！ 西条よ、詳しく聞かせてもらおうか…！！！」

「む、結締…！？ それに、白石まで…っ！？ なんでお前らがここに…！？」

両サイドに挟まれ、ガツシリと肩を組まれた西条は、結締と白石から逃げる事ができなかった。

「さいじょお…!？」

「ま、待て、マナ…!!」

彼が襲われた事で、杖を取り出そうとしたマジシャン・ガールだったが、それは彼の言葉によって制止される。

戸惑うマジシャン・ガールだったが、そんな彼女に結締が

「マナちゃんって言うのか…。心配しなくても大丈夫だぜい、マナちゃん。俺たちア、西条ちゃんのトモダチだ」

「トモ…ダチ…？」

「ああ、トモダチだとも。そうだろう、西条？」

「オマエ等…なんで…ッ!？」

白石直也、結締智恭。

この二人は、西条の中学時代からの付き合いだ。

これまでに何度も一緒に遊んだ事もある為、友達という呼称に偽りは無い。

偽りはないのだが、この時ばかりは友達という呼称は止めて欲しかった。

「俺たちや心配してたんだぜい…。夜中に西条ちゃんが寮から飛び出してたって聞いたモンだからにゃ」

「おかげで俺や結締は、楠先生から…あ、いや、自ら進んでお前を探しに回ったというのに…」

どこか遠い彼方を見つめ、虚偽を交えながら語りだす二人。
楠先生に言われ、西条を探しに出たは良いが、結局、彼を見つめる事は出来なかった。

それどころか、こうして彼を捕まえてみれば、どこの誰ともしれない美少女と一緒マジシャン・ガールに居るではないか。

自分たちは罰として、補習を追加されたのに、コレはあんまりだ…！！

この時の結締と白石は、恐ろしい位の連携がとれていた。

「西条ちゃん。ドコでナニしていたのか…（補習の）時間までたっぷり聞かせてもらうぜい」

「いや、ちょっと待てオマエ等…！！俺はー」

「ふうん…なに、遠慮する事はないぞ、西条よ。俺達はトモダチではないか…！！」

「そうだぜい。トモダチ、トモダチ」

「いや、なんか怖いぞオマエ等!? 放せ、放してくれええ!!」

二人にガツシリと拘束されながら、自室へと運ばれていく西条。そんな彼らの様子を、マジシャン・ガールからすれば、こんな風に写っていた。

西条が寮から飛び出して行ったというのは、恐らく自分が敵に捕まってしまったからだろう。敵に捕まってしまった自分を助ける為に、彼は精霊界の敵と戦ってくれたのだ。

しかし、彼の友人等はそんな事情など知る由もない。ドコに向かったのか分からないが、友人として、彼の事を放っておけなかったに違いない。

（なんて友達想いの人達なんだろう…さいじょおは幸せだよ。こんな良い人達が友達で居てくれて…!!）

すっかり何か勘違いしているマジシャン・ガールは、彼等の友情愛（?）に感激しながら、彼等の後を追い掛けて行った。

※

現在、西条の部屋には、テーブルを囲うようにして座る三人の姿がある。

白石直也、結締智恭、マナことマジシャン・ガールの三人である。

何故この三人なのか？

部屋の主である西条は、いったいどこに居るのかという…。

「さて、西条くん。昨夜…アナタは何処で何をしていたのかしら？」

「……………」

第七デュエル高等学校学生寮の管理人室である、楠ミナ先生の部屋であった。

白石と結締の二人に、先生の部屋に放り込まれた西条には、先生からの尋問が待ち受けていたのである。

昨夜、何処で何をしていたのか尋ねてくる先生に、西条はどうやって説明しようか悩んでいた。

正直にマジシャン・ガールの事をこの人に話しても、中島店長の様に直ぐに信じてくれるだろうか？

いや、無理だろう。

「スイマセン…街に出て…女の子を探しました」

彼の言葉は嘘ではない。

敵に連れ去られたマジシャン・ガールを探す為に、自分はあの時に飛び出して行ったのだから。

「探しに出て、それから？まさか、今まで探し回ってた訳じゃないでしょう？」

「う…」

椅子に座り、優雅に脚を組む先生は、鋭い視線を西条に向ける。

正直に話せ。

その内容によって、アナタの処罰が決定すると思いなさい。

先生の視線にはそんな言葉が記されていた。

さて、ここからどう答えれば良いのだろうか？

敵とデュエルしてました？

それとも女の子とのイザコザで朝まで掛時間かかりました？

（うおおおおお！！ 何ッて説明すりゃ良いんだよおおお！?）

汗という汗を滝の様に流しながら、西条の頭はショート寸前だった。

「と、とりあえず…朝まで知人の所とかに…」

「ふ…ん、知人…ね？」

じっくり、じっくりと誘導されるように尋問してくる楠先生に、西条はある事に気付いた。

それは、向かいに座る楠先生が、徐々に鼻息を荒げながら

「で、西条くん。その子と朝までナニしてた訳？」

「へ？」

「大丈夫よ。先生は口が堅いから…（ハアハア）。良いから、包み隠さず全部話しなさい（ハアハア）」

「いや、先生…何か誤解してませんか？つうか目つき怖っ！？目エ逝っちゃってますって、ちよつとオ…！」

「良いから（ハアハア）、良いから（ハアハア）」

「いや、良くない良くないって!？」

西条からすれば、楠先生は寡黙な印象が強かったのだが、まさかこんな一面を持っているとは知らなかった。

「どうしたってんですか、先生エ!？」

「いい西条くん。人の恋バナってのはね、聞いててとっても楽しいモノなのよ。だから…」

「ヒィっ!？」

ガシッと、その場から逃げようとする西条を光の速さで捕まえた楠先生。

その表情は、邪帝でも恐れおののくのではないかと思える位に、歪んだ笑みを浮かべていた。

「もっと詳しく話さない。減るものじゃないでしょう?大丈夫、先生は口は堅いから…ウフフフ」

「怖えええええ!! は、放してくれええ!!」

楠先生の知られざる一面に恐怖する西条。
彼の運命や如何に…!?

※

「ほおお、マナちゃんの世界ってのは、そんなに大変な事になってんのかあ…」

「うん。それでこないだ、さいじょおに助けて貰ったんだよ」

「……」

西条が楠先生から取り調べを受けている最中、彼の部屋で、結締と白石の二人はマジシャン・ガールから事の経緯を聞いていた。

精霊界、邪神、そして幻神獣。

普通ならば、夢物語みたいな話である。

マナことマジシャン・ガールの話を聞いていた白石は、なにを言っているんだコイツ？みたいな表情をしていたのだが、結締は違った。

彼女の話を真剣に受け止め、同情するかのような相槌を打つ。

マナも結締がしっかりと自分の話を聞いてくれる為、つい色々と話し込んでしまう。

その繰り返しで、白石は自分だけが置いてけぼりをくらっているような気がしていた。

「ほら、この怪我だってそうなんだよ！さいじょおが来てくれなきゃ、もっと大変な事になってたんだから！」

「マナちゃんみたいな可愛い子ちゃんに、そんな仕打ちをするんなら……許せねえぜよ……！！」

「……おい、結締」

コッチコッチ、と手招きする白石は、寄ってきた結締を捕まえて、マナに聞こえない位の小さな声で話します。

（貴様…まさか本当にこの女の言うことを信じるつもりか？）

（あつたりまえだぜい。白石さん、常に俺は…可愛い女の子の味方だぜよ！！）

（ヲイ…お前なあ…）

結締の軽さに若干呆れつつ、白石は軽く溜め息をつく。

そして思い出す。

結締は昔からこうなのだと。

「白石さんこそ、聞いてて何も思わなかったかにゃ？西条ちゃんが出てった事と、マナちゃんが昨日の夜に襲われた時間や経緯…自分が先生から、西条ちゃん搜索の連絡が来たタイミング…」

「むう…」

「それらのピースを当てはめてきや、辻褄はピタリと合うぜよ」

「確かに…そうだが…」

結締の言うことにも一理ある。

しかし、白石にはやはり信じられない内容だった。

精霊界、三邪神、ブラック・マジシャン・ガール。

いきなりの事に理解が追いつかない白石は、言葉に詰まり、難しい表情をつくる。

（ゴニョゴニョ…こういう事は、あまり難しく考えちゃ駄目だぜい）

（むう…しかしだな…）

（だって、マナちゃん超可愛いじゃん？だから俺、信じちゃう）

「……結局、お前はソコか」

結締の楽観的な意見を聞いて、白石はやはり、呆れたように溜め息をついた。

そんな二人の様子を見ていたマナは、思い出すように口を開く。

「アハハ…白石くんも、さいじょおと同じような顔するね」

するとマナは、彼の物まねをする様に、むむむう…と頬を膨らませ

「お前が本当にブラック・マジシャン・ガールなら、何か証拠を見せてみるよ！って」

「ぷっははは！！ 何だよマナちゃん、西条ちゃんに滅茶苦茶ソックリだぜい！！」

「：しかし、本当にお前はブラック・マジシャン・ガールなのか？すまないが：やはり信じられん。どう見ても、普通に美少女にしか見えん」

難しい表情のままの白石に、無邪気にこの状況を楽しんでいる結締は、ある事を思い付いた。

「お堅いねい、白石さんは…。なら、マナちゃんに一肌脱いでもらうしかないにゃ〜？」

「え、脱ぐ？それって、エッチな事？なら、絶対イヤ。死んでもイヤ」

「ああ脱ぐって言っても、そういう意味じゃなくってエ：」

勘違いから身構えるマナに、結締はニカッと笑い、白い歯をキラリと光らせながら。

「要は、マナちゃんに再現して欲しいだけだぜい。西条ちゃんが、マナちゃんを信じるキツカケになった事を。そうすりゃ白石さんだ

って、嫌でも納得せざるを得ないぜよ」

「わたしが…さいじょおに…やった事…」

言われてマナは考える。

あの時、自分は彼に向けて攻撃魔法を放った。

おかげで彼には自分の事を信じてもらえたが、その代償として彼の部屋は…。

（うーん…誰も立ってない場所に撃つ位なら、問題ないよね？）

決意したマナはスツと立ち上がり、どこからともなく愛用の杖を取り出した。

最早この段階でツツコミ所なのだが、白石達はあえてスルーした。

「じゃあ、やってみせるよ！よく見ててね！」

そう言い、マナが杖に向けた先は玄関。

今の玄関には、誰も立っていない。

これなら、誰かが自分の攻撃に巻き込まれる心配はない。

『…っ！！ 黒・魔・導…』

ズズズズ…ッ！！

マナの構えた杖の先端に、黒い球状のエネルギーが凝縮されている。

自分達にとって不可解な現象を目の当たりにした二人は、マナのその姿に魅入っていた。

「…マジか…!?!」

「マナちゃん…ッ!」

ズズズズ…ッ!!

攻撃魔法の準備が整った。

目の前に誰も居ない。

撃つなら、今だ!

『…爆・裂ー!…』

「ガチャッつと、ただいま。まったく先生のヤツ、最後の方は全く関係『破アア!』」ってによぎゃあああああ!?!?!」

あぼーん。

マナの放った黒魔導爆裂破は、奇跡的なタイミングで帰宅してきた西条に、見事に直撃した。

ボタンと倒れ込み、身体の至る所から煙をあげる西条を見て、マナ達は事態を認識するのに一瞬の時間が掛かった。

「あ…さ、さいじょお!?　しっかりしてよ!　だだだ大丈夫!」

「かぺ…かぺぺぺぺ…なんで…俺ばっか…」

「…むうう…これが魔法か…」

「流石に俺も驚いたぜよ…まあ白石さん。これで納得せざるを得ないにゃ〜?」

確かにマナは、自分たちに出来ない真似を試みせた。

西条自身が吹き飛んでしまった為に、あの魔法とやらは本物なのだろう。

ならば、やはりこの美少女は本当に…?

「…ふうん。面白い…!!」

白石は立ち上がり、虫の息な西条の所へと歩み寄る。

白目を向いている西条を、必死になって揺らしているマナ。

見かけは普通の女子。

しかし、その話しや力は、やはり本物だった。

信じてみよう。この存在を。

自分が彼みたく黒こげにならない為にも、白石は結締とは違う意味で、彼女を信じる事にした。

※

時刻は正午。

全身が焼けるように痛い。

しかし、それを我慢しなくてはならない。

西条は今、部屋の台所に立ちながら、ぎこちない動作で鍋を振っていた。

「さいじょお。ごはんはまだなの？」

「……」

なぜ、こんな身体の状態で料理をしなければならないのか？
それは彼の後ろで、今か今かと待ちわびる彼女の言葉から分かるだろう。

「帰ったら、ごはん作るって約束だったんだもん！ねえ、さいじょ

「おー、ごはんまだー？」

「…っ、だぁぁぁあ！！ 気が散るっっちゃうの！！ ちゃんとご飯は作るから、杖を構えながら待つのは辞めてくれませんか！？」

本当ならば寝ていたかった。

だって、身体中が痛いんだもん。

朝は中島店長の店で一発、そして部屋に帰ってからもう一発。

もう自分のライフは軽く0を切っていた。

「ちゃんと作ってるだろ？だから、隣の部屋で待ってろって」

「待ってるだけじゃ、つまないもん」

「…だったら、杖なんか構えてないで、何か手伝ってくれよ」

「やだ。わたし料理できないもん。えっへん☆」

「…何で自慢気なワケ？」

※

キーンコーンカーンコーン…。

第七デュエル高等学校のチャイムが鳴り響く。

まだ空の色は明るく、時刻も正午を過ぎた頃である。

日曜日のこの時間の学校は、生徒の数など数える程度しかない。部活動に参加する生徒か、その他の用がある生徒だけだ。

二階にあるとある教室では、その他の用がある生徒二名がいた。

その二名というのは、白石直也に結締智恭である。

部活動に所属しない二人は、部活をする為に学校に来ている訳ではない。

補習の為に来ていたのだ。

自分達の席で、青ざめた表情から息をつく二人を見て、教壇に立つ楠先生は静かにプリントの束を整えた。

「…今日の所は、ここまでね。それじゃ各自、帰って良いわよ」

端正な顔立ちからなるクールな雰囲気で楠先生が言うと、二人はやっと解放されたかのように、同時に息をついた。

「ぶはーっ。やっと終わったぜよ…とんだとばっちりだぜい」

「ふうん…そう言うな結締よ。お陰で、マナという美少女に出会えたではないか」

「ああ、それだきや白石さんに感謝」

それまでどんよりした表情だった結締は、パツと明るく照り輝いた。

なんと分かり易い性格なのだろう…と、白石は思ったが口にはしない。

結締は補習が終わるや否や、手荷物をササツと纏めて、一気に教室の出口へと掛けだしていく。

「ほら、白石さんも早くするぜよ。また一緒にマナちゃんトコ行こうぜい！」

よほどマナことブラック・マジシャン・ガールに惚れたのだろう。結締からは、異様な程にピンクのハートが浮かび上がっていた。

「ふん。悪いが結締よ…お前は先に行ってる。俺はまだ、楠先生に用があるのだな」

「へ？」

白石の視線の先には、教壇で「？」と首を傾げる楠先生が。

いったい白石は、先生に何の用事があるというのだろうか？

不思議に思った結締だったが、彼にとって今は白石の用事など、どうでも良かった。

「ふーん。じゃ、先に行ってるぜい☆」

「ああ。またな」

教室を沈黙という静寂が包む。

教室には、白石と楠先生の二人だけとなった。

「…で、白石くん。私に用って…何なの？」

手短に済ませなさい、と。

楠先生はプリントの束をトントンしながら、真剣な表情の白石を真っ直ぐに見つめる。

凜とした鋭い視線に射ぬかれながらも、白石も威圧的な姿勢を崩さない。

白石は鞆から、自分のデッキが収められた決闘盤を取り出し、ゆっくりと立ち上がる。

「…先生。俺とデュエルしろ」

「…デュエル？」

いきなりデュエルを申し込まれた楠先生は、ふう…と、軽い溜め息をついた。

「俺は今日こそ、先生に勝つ……!! 負けたままというのは、どうにも気分が晴れなくてな……!!」

「ふう……良いけど、アナタ……私に挑むのはこれで何回目かしら？」

「30回目だ!! 入学式以来……俺がここまで連敗を喫したのは、先生が初めてだ。それでこそ、倒し甲斐があるというものだ!!」

「……物好きね」

「それに付き合う先生もだろうか？」

楠先生はそう言うと、教壇の中から自分の決闘盤を取り出した。

「このあと職員会議があるから、一回だけよ」

「構わん。一瞬で決着^{ケリ}をつけてやる……!!」

互いに鋭い視線を交錯させる二人。

白石 VS 楠先生。

二人のデュエルが、今始まろうとしていた。

日常（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の話は如何でしたか？と言っても、今回の内容は次の展開へ繋ぐ為のパートです。

次回は白石と楠先生のデュエルです。

『頂を目指す者』では、最強の龍使いと称された白石は、いったいどのようなデュエルを魅せるのか？

そして、そんな彼の担任である楠先生の實力は？

頭の中ではある程度の物語の構成はできているんですが、最近仕事が多忙しくて、なかなか執筆が進んでいない状況です。

それでも、皆様が読んで面白いと思えるような作品を心掛けていきますので、応援よろしくお願いします。

楠ミナの願い

※

デュエルモンスターが暮らす世界、精霊界。

邪神によって支配された神聖なる塔に、一人の王と呼ばれるモンスターが帰還した。

それは、人間界にて西条とのデュエルで敗れた、邪帝ガイウスである。

彼にとって、今回の敗北は予想外だった。

人間界に向かったマジシャン・ガールの動向や目的を探る為に向かったは良いが、予期せぬ相手が現れた。

いや、邪魔が入る事は、ある程度は想定していた。

しかし、自分は負けた。

デュエルで負けた事により、身体が思うように動かない。

ぎこちない動作で塔に登る邪帝は、息を切らしながら、遂にある部屋の前へとたどり着いた。

その部屋の扉はとても豪華な、そして威厳のある造りをしており、この先に入る事を躊躇わせるような雰囲気醸し出していた。

その扉の前に立った邪帝は、改めて息を飲み込んだ。

それと同時に、自分自身に言い聞かせる。

(…くっ、落ち着け…気を強く持つのだ…!!)

それは恐怖心。

この扉の向こうにいる存在を恐れる気持ち。
恐怖と痛みからくる震えを懸命に抑えながら、邪帝は扉にゆっくりと手を伸ばす。

しかし、彼の手が扉に触れる事はなかった。

扉を押し開けようとした瞬間、目の前の扉がひとりでに大きな音をたてて開いていったのだ。

「…入って来いと、いう事か」

ガコォ…ッ、と完全に扉が開ききつたのを確認した邪帝は、片足を引きずりながら、ゆっくりと部屋の中へと入っていく。

黒い、黒い、辺り一面が真っ黒な霧に覆われた部屋の内部。

灯りもなく、黒い霧によって視界は殆ど皆無な為、今自分がどこを歩いているのか把握できない。

しかし、それでも邪帝は歩を進める。

この部屋の、この先にいる存在に会う為に。

どれほど進んだのか分からない。

しばらくすると、邪帝の背後から扉が閉まる音だけが聞こえてきた。

そして、扉が閉まった次の瞬間、邪帝の耳に別の誰かの声が入ってきた。

『…邪帝ガイウス…』

「っ！！」

ガバツと。

聞くもの全てを震え上がらせるような声が、耳から入り、全身に行き渡る。

名を呼ばれた邪帝は、すぐさま片膝を地に着かせ、頭を深々と下げた。

『確か貴様は…人間界に向かった者を追っていたのだったな？どうなった？何か分かった事は…？』

「…ハッ…」

聞こえてくる声や言葉に反応するように、邪帝の身体中から嫌な汗が豪雨のように流れ落ちる。

人間界に向かったは良いが、自分は向こうの世界で敗北し、そしてここに帰ってきた。

ただその事を報告すれば良いだけなのだ。

しかし、邪帝の口は思ったように動かない。

理由は分かっている。

この声の存在に恐怖しているのだ。

『…どうした？私の問いに答えられないのか？』

ゾミッ！！っと、これまで以上の重圧が邪帝を襲う。
声の質が変化した。
自分が直ぐに答えられなかったからだ。

「もっ…申し訳…御座いません…！！」

ようやく口から出た言葉は震えていた。

途切れ途切れな言葉や、しどろもどろになる声。

恐怖し、焦る邪帝は頭の中が真っ白になっていく事だけは、ハッキリと分かった。

「…人間界に…向かった者は、ブ…ブラック…マジシャン・ガール。
しかし…かの者は…に、人間界で…西条という協力者を得ておりま
して…その…」

情けない…と、邪帝は自分に対して思った。

今の自分は、仕事に失敗した事を鬼上司に報告しなければなら
ない、ビクついた中間管理職のオヤジみたいな存在に思える。

「…情報を聞き出す為に…デュエルをしたのですが…」

『…負けた…のだな』

ゾクリ…ッ！！　　っと、全身が震え上がるのが分かった。

黒い霧に覆われた空間の全体に響き渡るような、威厳ある声に、邪帝は更に深く頭を下げる。

「もっ、申し訳御座いません…ッ!!」

『何も聞き出せなかった？ 貴様、それでも本当に王と呼ばれるモンスターか？ 王…ねえ。聞いて呆れるわ』

「……」

頭を下げる事しかできない邪帝。

確かに、自分でも情けない事だというのは理解している。

与えられた任を果たしてこそ、そして力を誇示してこそその王なのだ。

自分たちで言うならば、与えられた仕事をこなし、更に自ら進んで次の仕事に取り組むのが、社会人の仕事の基本である。

それが自分は出来なかった。

だからといって、このままで良い訳がない。

汚名を返上する為にも、ここで立ち上がらなければ、王の名折れだ。

「邪…っ、邪神様…ッ!!」

声を絞り出す邪帝は、聞こえてくる声の主、邪神に向かって

「私に、もう一度チャンスを……!! かの小娘が、人間界にて邪神様に仇なす策を練っているとするならば、早急に手を打たねばなりません……!! もう一度私が出向き……」

『もう良い』

必死の思いで練りだした言葉は、邪神からの吐き捨てるかのような言葉で碎け散った。

『どうやら今回の件、貴様には荷が重かったようだ。私とした事が、部下の技量を見誤るとは……』

「あ……いや……」

『その件に関しては、別の者を向かわせよう。貴様には、別件を追って伝える。もう良いぞ? 下がれ』

「……邪神様……しかし……っ!!」

『二度も言わせるな。もうこの件で、貴様に用はない』

侮蔑するような、邪神の放った冷たい言葉。
邪帝は悟る。

もう自分は、邪神にとって必要のない存在なのだと。

邪帝は、視界だけでなく、本当の意味で目の前が真っ黒になっていった。

※

ここ三上市は、デュエルが盛んな街として知られている。
それは、街の中心に位置する場所に建つ、トリティニーグループ
が大きく関係している。

トリティニーグループとは、この世界に遊戯王カードを製造・販売している大企業だ。

この会社は数年前から近隣の高校の授業に、デュエルを取り込むといった事業を展開した。

これは、学生時代からデュエルに触れる事で、カードに対する興味や、トリティニーグループがに関する関心向けさせようというのが狙いなのだ。

よって、三上市は文字通り、決闘者^{デュエリスト}の街として繁栄している。

そんな三上市の日曜日の昼下がり。

駅前通りにある繁華街を、一人の高校生が陽気な足取りで散策していた。

彼の名は結締智恭。

この街にある第七デュエル高等学校の生徒だ。

今朝方、精霊界から来たブラック・マジシャン・ガールことマナに会いたいのが為、彼女の下に向かう前の手土産を物色しようとして

いる最中なのだ。

季節は夏。

炎天下の中、結締は露天に並ぶ食べ物の数々を、視線をさまよわせる事でその情報入手していく。

（アソコはかき氷1個300円：なにになに：おっ、アツチにゃあサ
ーティワン！？ カップの方が良いか：モナカにすつか：！？）

注目のサーティワン・アイスクリームには、冷たいデザートが食べたいであろう客の、長蛇の列ができていた。

この暑い日だ。

きっと彼女も、冷たいデザートが食べたいに違いない。

マナが棒アイスやソフトクリームをペロッと舐める姿を想像し、
アドレナリン全開となった結締は

「ウツヒョ☆考えただけでビンビング♂だぜい！！ まってろマ
ナちゃん！！ 俺がいまー…って、なっ、何しやが…あ、ハイ…
スイマセン。ちゃんと最後尾に列びます。列びますから、ほんと…
はい…」

列の途中に入り込もうとしたが、それは列んでいたお姉さま方の
厳しい視線に妨げられてしまった。

ちゃんと、ルールやマナーを守りましょう。

女性達の射殺すような視線を一身に受けた結締は、色んな意味で汗をダラダラと流し続けていた。

※

結締がトホホ…と列に並びだした頃。
彼が通う学校の教室では、友人である白石直也がデュエルを始める所であつた。

溢れんばかりの闘志を燃やす白石。

彼の闘志の矛先は、対峙する担任教師、楠ミナに向けられていた。

白石は吼える。

「さあ先生…始めようか。俺たちのデュエルを…!!」

「……」

白石に言われ、楠ミナは手札を五枚ドロ―する。

端正からなるスリムな顔立ち。白石とは違う、切り裂く様な鋭い眼に変わる楠ミナは、デュエルを始める前に白石に尋ねた。

「デュエルの前に…」

「…ム」

「白石くん。アナタは私とのデュエルで…何を見いだすつもり？」

「ふうん…決まっている。この学校で、俺が最強のデュエリストである証しを立てる為だ!!」

グッと拳を握り、白石は豪語する。

「俺は今まで、全てのデュエルを勝ち越してきた。だが…この学校に来て、俺は一つの壁にぶつかかった。それが…先生だ」

中学時代。

白石はデュエルで負けなしだった。

別に白石は、お山の大将になるつもりはない。

ただ純粹に、デュエルに勝ちたいだけであった。

圧倒的パワーから繰り出す、一撃粉碎。

これが彼の今までのデュエル（人生）だった。

しかし、それは高校に入ってから終わった。

入学し、早速クラスでデュエル大会が開かれた。

もちろん白石も参加し、今までと同じく圧倒的パワーで勝ち星を増やしていった。

クラス大会が終わった後、彼のデュエルを見ていた担任の教師、楠ミナから呼び出しを受けたのだ。

クラス大会で優勝した事で、賞賛の言葉が貰えるものだと思います込んでいた白石は、堂々と先生の元へと向かうと…。

『…白石くん。アナタのデュエル…今のままで良いと思ってる？』

その時、先生が告げた第一声は賞賛でなく、咎でなく、非難でなく。

その時の先生の言葉の意味が理解できなかった白石は、激昂した。

俺のデュエルにケチをつける気か！？ 俺は今まで、こうして自分の手で勝利を勝ち取ってきたのだ！！ 文句を言うのであれば、この俺にデュエルで勝ってからにしろッ！！ 先生とて、容赦はせんぞッ！！

それが、事の始まりだった。

自分からデュエルを仕掛けていったは良いが、白石はものの見事に返り討ちに遭ってしまったのだ。

その結果が、白石には信じられなかった。

今まで培ってきた連勝記録が、瓦礫のように崩れ落ちてしまった。

それから何度も、何度も、何度も、何度も…。

楠ミナにデュエルを挑んでは、白石は完敗した。

自分の培ってきた連勝記録を止めた楠ミナに、何としても勝ちたい。

今の白石を突き動かすこの想いは、ここから来ているのだ。

「…変わらないのね」

楠ミナは構える。

それと同時に、白石も腕に装着した決闘盤を構え、手札を五枚用意する。

「変わらないさ…変わるものか。これが俺なのだ。今までも、そしてこれからも…ッ…！」

互いに臨戦態勢に突入した。

そして、互いの視線が交錯した瞬間、二人のデュエルが始まった。

「いくぞ…!!」

「……」

『デュエルッ!!』

※

【先攻】白石直也

LP／8000

【後攻】楠ミナ

LP／8000

遂に二人のデュエルが始まった。

先攻を奪取した白石は、早速プレイを開始する。

「俺のタアーンツ、ドローツ!!」

カードをドローした白石は手札に視線を移し、口元に笑みを浮かべる。

「ふうん…良い手札だ。最初から全力で行くぞ…!!」
手札より『
古のルール』を発動ッ!!」

【古のルール】

「魔法カード」

自分の手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

「この魔法効果によって、俺の手札に眠るレベル5以上の通常モンスターを、特殊召喚する!!」

「……」

白石は手札の一枚のカードを掴み取る。

そのカードを高く振り上げ、白石は全身全霊の雄叫びをあげた。

「魅せてやろう…このモンスターこそ、孤高にして絶対なる存在…!!
現れよッ『青眼の白龍』ッ!!」

【青眼の白龍】

星8／光属性／ドラゴン族

ATK／3000 DEF／2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

カッッ…!!

ズドドドドド…ッ!!

白石のフィールドに降臨せし伝説の龍、青眼の白龍。

見る者を魅了する青き瞳。

強く、逞しく、しなやかな体格からなる強靱なフォルム。

白石直也の信ずる、絶対にして最強のモンスターが、いきなり登場した。

「……」

「ふうん。この俺のブルーアイズを前に、顔色一つ変えないとは…さすが先生」

「アナタとのデュエルで、何度も見てきたからね…」

また、私が葬ってあげるわ。と…。

鋭い視線で語る楠ミナに、白石は絶対の自信を持って豪語する。

「今日の俺を、いつもの俺だと思ふなよ？俺は今日こそ、先生を倒す！！ このブルーアイズと共にだッ！！」

グオオオオオオオ…！！

白石の想いに呼応するかのように、雄々しき雄叫びをあげるブルーアイズ。

「先攻は最初のターン、攻撃をする事はできない…」

白石はそう呟くと、手札にある一枚のカードに注目する。
そのカードとは…。

（俺の手札には『無力の証明』がある。この効果は、相手のレベル5以下のモンスターを全滅させる事ができる強力なカード…）

【無力の証明】

「罠カード」

自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在するレベル5以下のモンスターを全て破壊する。このカードを発動するターン、自分フィールド上に存在するモンスターは攻撃する事ができない。

（フフ…先生がどんなモンスターを召喚しようが、この俺には通用しない…!!）

白石は不敵な笑みを浮かべると、無力の証明のカードを掴み…。

「リバーズカードを1枚伏せて、ターンエンドだ!! さあ、先生。掛かって来るが良い!! 俺のブルーアイズが、返り討ちにしてくれるわ!!」

白石は豪語しながら、ターンを終了した。

彼から溢れ出る闘志を直に感じながら、楠ミナは動き出す。

「∴私のターン、ドロ―」

デッキからカードをドロ―する楠ミナは、改めて白石のフィールドを確認する。

【白石直也】

LP／8000

「手札」

3枚

「モンスター」

青眼の白龍

「魔法・罠」

リバースカード 1枚

白石のフィールドには、通常モンスターの中でも最高の攻撃力を誇るブルーアイズがいる。

更に、一枚の伏せカード。

変わらない∴と、楠ミナは感じる。

何度も彼からデュエルを挑戦され、何度も返り討ちにしてきた。

いつもとは違うと言いながら、何が違うのか？と、疑問に感じる位だ。

「……」

「どうした？何も打つ手がないのか？」

挑発じみた言葉を発する白石。
彼が何を狙っているのかは知らない。
しかし、楠ミナは何もせず、ただ黙ってやられるつもりはなかった。

『…白石くん。アナタのデュエル：今のままで良いと思ってる？』

あの時、自分が彼に告げた言葉が蘇る。

彼は強い。

それは理解している。

実際に、クラスのデュエルでの成績はトップであるし、彼がその事を誇りに思っている事も知っている。

しかし、このままでは駄目なのだ。

楠ミナは思う。

デュエルに強さを求める事は良い。

それに挑戦し続ける事も良い。

しかし、それはあくまで、彼個人の気持ちだ。

対戦する相手の気持ちを汲んだデュエルを、彼は理解していない。
実際、白石はクラス大会の時、過度なまでに自分のプレイを貫いていた。

もう相手は敗北すると分かっているながらも、とことんモンスターを展開し、攻撃し、攻撃し、攻撃し…。

下手をすれば、その行為は嫌がらせに感じる者も出てくるだろう。

つまり彼のデュエルには、相手の気持ちを理解するような精神が、感じられないのだ。

楠ミナは願う。

彼に、相手の気持ちを思う人間に育って欲しいと。

だから、楠ミナは容赦しない。

自分の生徒だから、自分もデュエリストだから…。
その事に気付かせる為にも

「…デュエルで教えてあげるわ。手札より速攻魔法『サイクロン』を発動」

【サイクロン】

〔速攻魔法〕

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

楠ミナの発動したカードは、サイクロン。

この効果により、白石の場に伏せてあった一枚のリバースカードに、鋭い雷の矢が直撃した。

「この効果で、白石くんのリバースカードを破壊」

「ぬうッ!? 俺のカードが…!!」

自身の伏せカード、無力の証明を破壊された白石だが、彼からは溢れんばかりの闘志が燃えたぎったままだ。

ブルーアイズがいる限り、絶対に諦めない。

楠ミナには、そう感じられた。

その心意気は評価できる。

しかし、楠ミナは、容赦しない。

「更に手札より、魔法カード『パワー・ボンド』を発動」

【パワー・ボンド】

〔魔法カード〕

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、機械族の融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。このカードによって特殊召喚したモンスターは、元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

「このカードは、機械族専用の融合魔法カード。私は手札の『サイバー・ドラゴン』2体を、融合……！」

「ッ!？」

カッッ……!!

楠ミナの手札から、サイバー・ドラゴン二体が合体した。
辺り一面を眩い閃光が包み、その空間の中心に、融合されたモンスターが浮かびあがる。

楠ミナが融合召喚するモンスター…それは。

「融合召喚。蹂躪せよ『サイバー・ツイン・ドラゴン』！」

【サイバー・ツイン・ドラゴン】

星8／光属性／機械族

ATK／2800 DEF／2100

「融合／効果」

「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードで行えない。このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

ズドドドドド…！！

バチバチッ…！！

楠ミナのフィールドに現れたのは、双頭の機械竜。

白銀に輝くメタリックなボディからは、溢れ出るエネルギーが雷となって放出されている。

このサイバー・ツイン・ドラゴンの登場に、白石は目を見開き、一瞬、呼吸が停止した。

「パワー・ボンドで融合した機械族モンスターの攻撃力は、そのモンスターの元々の攻撃力分アップする…」

サイバー・ツイン・ドラゴンの元々の攻撃力は2800。

このままでは、白石のブルーアイズ攻撃力3000には届かない。しかし、楠ミナは魔法効果によって、白石のパワーを難なく凌駕してみた。

【サイバー・ツイン・ドラゴン】

ATK／2800 ↓ 5600

(パワー・ボンド効果)

「攻撃力…5600だと…っ!？」

「バトル。サイバー・ツイン・ドラゴンで、ブルーアイズに攻撃…
!！」

血走った眼の白石に対し、冷徹な表情でバトルフェイズに突入した楠ミナ。

そして、その攻撃宣言。

臨界点に達した機械竜の口から、全てを破壊する光線レーザーが放出された。

「消えなさい、ブルーアイズ。…エヴォリユーション・ツイン・バースト!」

ズ ド バ ゴォォォォォ!!!

「なにっ!? ヌォォォォ!!!」

【白石直也】

LP／8000 ↓ 5400

【楠ミナ】

LP／8000

凄まじいエネルギーの光線を受けたブルーアイズは、一瞬の瞬きの間に消滅してしまった。

攻撃力3000を誇る、自身のエースモンスターが瞬殺された事に、白石は衝撃を受けた。

「俺のブルーアイズが…」

放心する白石。

しかし、その間にも楠ミナはデュエルを続ける。

冷徹な表情で、淡白な言葉で。

敢えてその様な態度で、楠ミナはデュエルを続ける。

「サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃によって、白石くんのフィールドにモンスターはいない。これで終わりね…」

「……」

「サイバー・ツイン・ドラゴンは、一度のバトルフェイズに、2回攻撃する事ができる。逝きなさい…!!」

ゴゴゴゴゴ…!!

バチッ、バチバチ…!!

楠ミナの操る双頭の機械竜の口に、再び膨大なエネルギーが凝縮されていく。

サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力は5600。
対する白石のライフは、残り5400。

そして遂に、サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃が、白石本人に向けて直射された。

「エヴォリュション・ツイン…バーストっ!!」
カッッ…!!

「ヌオオオオアアッ…!!?」

【白石直也】

LP／5400 ↓ 0

【楠ミナ】
LP／8000

白石直也 VS 楠ミナ。
今回、白石にとって三一回目となるリベンジは、結果。
白石の完敗という形で幕を下ろした。

※

デュエルが終了した教室の中は静かだった。
聞こえてくるのは、デュエルに敗北した白石の、悔しさから歯を
軋らせる音か…。

「…っ」

白石は言葉が出て来なかった。
完膚なきまでに圧倒され、まるで手も足も出なかった。
わなわなと身体を震わせながら、白石は先のデュエルの内容を振
り返っていく。

「また俺は…負けたと…っ、いうのか…っ!!」

ダンッ！！と…。

行き場を失った葛藤から、白石は自分の席に拳を叩き付けた。その様子を、楠ミナは黙って横目で見つめる。

口には出さずとも、楠ミナは白石に、こう訴えかける。

これが、今までアナタがしてきたデュエルなのよ、と。一方的なデュエル。

勝つ事だけを考えれば、合理的な戦術だ。

しかし、これでは楽しいと言えるだろうか？

互いに、楽しいデュエルだったと、言い合えるだろうか？

今回のデュエルで、彼にはその事に気付いて欲しかった。

自分の気持ちだけを貫き通すだけでは、駄目だという事を…。

楠ミナは教室から去っていく。

一人、教室に残される白石。

机に叩き付けた拳を握り締め、白石は窓の外に顔を向けた。

「…相変わらずだ。先生は容赦ないな」

彼の目は、どこか遠い空を見つめるような…。

「だが…それでこそ、倒し甲斐がある…！！」

1ターンキルをされたにも関わらず、白石の気持ちは前を向いていた。

しかし、だからこそ気付かない。

今回のデュエルで、楠ミナが自分に何を伝えたかったのかを、白石は気付かない。

「次こそは…俺が、勝つ…!!」

※

両手いっぱい菓子箱の箱。

結締智恭は、炎天下の駅前通りを覚束ない足取りで歩いていた。縦×横一メートルはある箱を抱える彼の姿勢は、すれ違う人たちが思わず避けていく位に、見ていて危なっかしく感じる。

この箱。

中には何が入っているのか…。

「お、俺とした事が…買いすぎちゃったぜい」

フラフラっとしながら、何とか道なりに沿って進む結締は、友人である西条の部屋へと向かっている最中であつた。

彼の部屋にやって来た、精霊界からの使者。

ブラック・マジシャン・ガールことマナに、デザートであるアイスクリームをプレゼントする為である。

箱の中身が余程重たいのか、小柄な体格の結締が持つて運ぶには、体力が保たない様に感じられる。

しかし、彼は違った。

（マナちゃんのオ：アイス貰って喜ぶ顔オ：！！ マナちゃんのオ：アイスをチュパチュパと舌出して舐めてくれる顔オオ！！）

彼女の事を考えれば考える程、結締は潜在能力を開放していく。
今の結締は、お相撲さんを片手で持ち上げられる位の怪力振りを発揮していた。

「待ってろマナちゃん！！ この俺がッ、今ッ、冷たいアイスをお届けするぜい：：！！」

ムッハー！！と鼻息を荒げながら、結締は進むペースをどんどん早めていく。

その姿はさながら、マリオがノコノコを抱えてBダッシュしているかのような。

しかし、やはりアクシデントというものはつき物である。

「このまま、西条ちゃんトコまで…最速記録だ『ドゴォ!!』ぜに
よわああああ!?!」

箱を抱えながら、前方不注意だった結締は、目の前で蠢く何かを弾き飛ばしてしまったのだ。

ぶつかった衝撃で、抱えていたアイスの箱は大きく弧を描き、見事にアスファルトの地面に落下した。

「あゝあゝあゝあゝ!!!! マナちゃんの為に買ったアイス
があゝあゝあゝあゝ!!!! テメェ!!! どこ見て歩いてや
が…おん!?!」

結締がぶつかった相手に怒鳴ろうとした時、思わず言葉に詰まっ
てしまった。

そこにうずくまっていたのは、緑色の肌をした奇妙なデブであっ
た。

奇妙な緑デブは、地面に転げ落ちたチンケな王冠を拾い上げ、ス
ポツと頭に被せると。

「何をするであるは、コツチの台詞でおじゃる!! ボクちんの高
級な服に、泥が付いたのでおじゃる!!」

「……」

ピンク色のタラコ唇から唾をぺっぺと吐きながら、緑のデブは結

締に向かって言い放つ。

「貴様ア、この成金ゴブリン様の話しを聞いてごじやるか!? ボクちんをこんな目に遭わせた罪…ッ!! 精霊界なら、即刻死刑でおじやるよ!!」

プンスカと怒る自称、成金ゴブリンは、まくし立てるように結締に怒鳴りつける。

しかし、結締はというと…。

「おじやる…おじやるって…ププ…ッ!! 何だコイツ…見た目もだけど、頭おかしいんじゃないか?」

「し、し、失礼なっ!? ちんちくりんな奴に、こうも言われるなんて…!! 黙ってられないでおじやる!!」

「デメエだって、ちんちくりんのチビデブじゃねえか!! って…ん? ちょっと待って…お前、今…精霊界って言ったか?」

精霊界。

成金ゴブリンがそう言っていたのを思い出し、結締は若干ではあるが冷静になる。

マナから聞いた話しでは先日、西条は精霊界の者と戦ったと言っていた。

もしかしたら、精霊界からの追っ手が来るかもしれないという事も言っていた。

そして今、自分の目の前でギョロリと睨んでくる緑のチビデブ、成金ゴブリンは、精霊界から来たと言っていた。

（まさか…コイツもマナちゃんを…？）

思考を冷静に切り替える事で、結締は様々な思案を張り巡らせながら、成金ゴブリンを見据える。

「精霊界から、何の用でコッチに来やがったんだ？ テメエもマナちゃんを狙ってんのか？ 邪神って神サンの差し金か？ それとも…」

「質問が多いでおじゃる。ま、チミの様な低脳な輩には、ボクちんの目的は理解できないのでおじゃる」

余程、結締が憎たらしく感じたのだろう。

イヤミばかりを言う成金ゴブリンは、フフンと鼻を鳴らしながら言葉を続けた。

「ボクちゃんは精霊界でも、大富豪として超有名人なのでおじゃる。欲しい物は全て、金で手に入れてきた、偉大なる大富豪なのじゃ！」

「……」

「そんなボクちゃんは、前々からお嫁さんが欲しくって欲しくって…。」

前にブラック・マジシャン・ガールちゃんを買おうとしたんだけど、師匠であるブラック・マジシャンに阻まれてしまったのでおじゃる」

(…当たり前だぜい)

成金ゴブリンの経緯を聞き、結締はつい溜め息を吐いてしまった。つまりはアレだ。

この成金ゴブリンは…。

「でもでも、そのブラック・マジシャン・ガールちゃんが、人間界にやって来たって情報を金で入手したのでおじゃる。ボクちゃんは今度こそ、ブラック・マジシャン・ガールちゃんを買って、お嫁さんにするんじゃない☆」

(…何か…頭痛くなってきた…)

「という訳で人間。ブラック・マジシャン・ガールちゃんはドコに居るか知らないでおじゃるか？教えてくれたら、ボクちゃんにぶつかってきた事は、特別に許してやるのでおじゃる」

さあ、どうする？と、見下したような態度を見せる成金ゴブリンは、ポケットから金貨をジャラジャラと見せつける。

そんな態度の成金ゴブリンに、結締は…。

「まったく…ろくでもねえ奴ってのァ、こういう奴の事を言うんだろ

うなア…」

「なに…!?!」

「おい、チビデブ。テメエにや、マナちゃんは釣り合わねえ。とつとと帰んな」

「人間…その言い種からして…、ブラック・マジシャン・ガールちゃんの居場所を知っているでおじやるね?」

「…ッ!!」

ニタア…と、醜惡な顔付きに変貌した成金ゴブリンは、どこからか取り出した決闘盤をセツトした。

「によほほほほ…!! どうやら貴様は簡単に話してくれなさそうでおじやるからね…デュエルでおじやる!!」

「へっ…俺に勝って、マナちゃんの居場所を聞き出すってか? なら、俺が勝ったら…マナちゃんにや金輪際関わるなって誓ってもらうぜい…!!」

マナちゃんは、俺のだ!!

ブラック・マジシャン・ガールちゃんは、ボクちんだ☆

本人の知らぬ所で、結締と成金ゴブリン。

二人の、女を賭けた戦いが、始まろうとしていた。

楠ミナの願い (後書き)

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の話はイカがでしたでしょうか・

デュエルに対する、相手を思いやる気持ち。デュエルにおいて、自分の意思を貫き通す気持ち。

それは人それぞれ、様々です。

今回の白石は、ある意味において、人としてのモラルを考えさせられる描写に仕上げました。

人からされて嫌な事。それは、自分が人になると嫌がられるのと同じです。

楠ミナはデュエルにおいて、そういった事を白石に伝えたかった訳です。

え？口で言う方が早いって…？

この小説は遊戯王の小説ですよ？

さて、次回はいいよ結締のデュエルが始まります。

次話のデュエルは今回みたく、超あっけなく終わらせるつもりはありませんので、よろしくお願いします。

それでは、今回はこの辺りで…。

それにしても今回、主人公の西条やヒロインのマジシャン・ガールが空気だった。

ある意味で新鮮だなあ

結締の戦い 参上! E・HERO

※

日曜日の昼下がり。

三上市の学生寮、その中にある西条の部屋では、二人の男女がいた。

一人はこの部屋の主で、三上市の第七デュエル高等学校に通う高校生、西条亨。

そしてもう一人は、幼い顔立ちながらも、可愛らしいという言葉が似合う少女、マナことブラック・マジシャン・ガールだ。

昼食を食べ終え、時間に余裕が出来た西条は、今後の事を話し合うついでに、彼女にある事をしていた。

「イタタタタっ!?　さいじょお、これ染みるう!」

「我慢しろ。こういった傷跡は、ちゃんと消毒しとかないと、化膿しちまうぞ?」

二人が何をやっているのかというと、精霊界のデュエルによって負傷した箇所の手当てだ。

マナの擦りむいた部分に、消毒液を吹きかけると同時に、彼女の元気な悲鳴が響き渡る。

「やあん！もつと優しくしてえ！」

「はいはい。よつと、後はここに…こうして…」

「ひゃう…んっ…」

「はい、終了。お疲れさん」

膝、腕、腹。

それぞれ負傷した場所の処置を済ませた西条は、消毒液や包帯、ガーゼといった道具を、救急箱の中に片付けていく。

手当てを受けたマナは、初めこそ痛がっていたものの、最後までちゃんと我慢していた。

「くぅっ。手当てって分かってなかったら、思わず魔法を使っちゃう所だったんだよ」

「やたらめったら魔法は使っちゃいけません。魔法を使って、いつも痛い思いをするのは俺なんですよ？」

「…さいじょおは、タイミング悪いだけだよ」

手当てを終え、床にぐだーつと寝転がるマナ。

大の字で寝転がる彼女の姿は、現在カードイラストに載っている様な派手な衣装ではない。

ピンク色のTシャツに、白いカッターシャツ。

黒の学生ズボンといった、男子学生の格好をしていた。
どうやら、思いのほか動きやすい格好だったらしく、何だかんだで気に入っている様だ。

「ねえさいじょお、さいじょお。三幻神のカードの事なんだけど…」

「…ああ」

それまで、和やかだった雰囲気ぴたりと止まる。

マジシャン・ガールは、精霊界に三幻神のカードを持ち帰る使命がある。

三幻神、つまり神のカードとは三上市の総称、大企業トリティニールグループの代名詞とも言える代物だ。

持ち帰る、と簡単に言うものの、それは容易な事ではない。

神のカードとは、それぞれ世界に一枚しか存在しない代物であり、現在それぞれのカードは、カードテキストを解読する為に厳重に保管されている。

普通に考えれば、自分のような只の高校生が、おいそれと対面できるような物ではない。

「あの3枚のカードは、今この街の中心地にあるトリティニールグループという会社の中にある。それは、前に説明したよな？」

「うん。その会社の、しゃちょーさんって人が、三幻神を見つけて…今のさいじょお達が暮らす街があるんだよね？」

「まあ…大体あってるかな。それでだ、明日の夕方…俺とお前、そ

して中島店長の3人で、トリティニーグループに行く事になったから」

「へ?」

彼の話しを聞いて、マナはキョトンとした表情を見せる。

「てんちよーさんも?なんで?」

「何で…って、あの人は、カードショップの店長でもあり、トリティニーグループの社員でもあるからな」

中島は、カードショップ・アリスの店長という肩書きを持つ一方で、トリティニーグループの社員だ。

カードショップ・アリスとは、元々トリティニーグループが運営する店である為、当然その店を任されるのは、トリティニーグループ内の人間という事になる。

その事は三上市に住む人間ならば、誰もが知っている事なのだが、精霊界から来たマナはそんな事情など知る由もない。

「邪帝とのデュエルの後、つまり…お前が気を失っている間に、中島店長にお前の事を説明して、その時にお願いしてみたんだ」

「……」

「…ん？どうした？」

西条の説明を聞き、マナは彼の顔をまじまじと見つめていた。
自分が気を失っている間に、彼は本当に自分の為に、色々と動いてくれているんだと、マナは改めて彼に感謝していた。

今回の事もそうだ。

邪帝とのデュエルでもそうだ。

食事だってそうだ。

傷の手当てだってそうだ。

「…ホント…なんだか、コッチの世界に来てから、さいじょおにはお世話になりっぱなしだね…」

儂げな表情で、ふと顔を逸らすマナ。

精霊界に居た頃は、師匠であるブラック・マジシャンに迷惑ばかりかけてきた。

人間界に来てからは、西条に迷惑ばかりかけている。

どこに行っても、他人に迷惑ばかり。

そう思うマナの中には、自責の念が渦巻いていた。

「…ゴメンね。なんか、さいじょおにばっか、色々やってもらって」

「…」

「わたし。コッチに来てから、何にもできてないや…」

しゅん…と。

彼女が何を思って、そう呟いたのかは大体わかる。

彼女に出会い、まだ幾分と時間が経った訳でもないのだが、西条には彼女の気持ち的理解できた。

「…そう落ち込む事はないと思うぞ？」

「…え？」

「初めて来た場所で、最初から何でも上手くこなす奴なんて、いるもんか。俺だって、今だからこそお前の事を色々としてやれるケド、俺が最初にこの街に来た時は、ドジばかり踏んでたんだぜ」

「…え、さいじょおが…」

マナは最初、彼の言葉が信じられなかった。

自分に色々と親切にしてくれて、何でもソツなくこなしてくれる彼が、自分と同じだというのだ。

「信じられないって顔してるな」

「だって…」

マナが呟くと、西条は何か思いついたように立ち上がる。

そして、落ち込んだマナに向かって、ゆっくりと手を差しのべた。

「ちょうど良い機会だ。外に出て話そう。一緒に気分転換でもしようぜ?」

な?と。

自分に対し、優しい笑みを向ける彼に、やはり。

マジシャン・ガールは、自然と手を差し出していた。

※

三上市の繁華街。

その路地裏にある人通りの無い場所では、西条の友人である結締智恭の姿があった。

しかし、そこに居るのは彼だけではない。

精霊界から、わざわざマジシャン・ガールに求婚する為にやって来た、成金ゴブリンも一緒だ。

「おい、何でおじゃるか、この場所は? 薄暗くて埃っぽいでおじゃる!」

「成金だか何だか知らねえが…オマエにや、この薄汚い路地裏がお

似合いだぜよ」

「ぶふんっ！？ デュエルの敗者は、この薄汚い場所でのた打ち回るって訳でおじゃるね？でも、そんな姿はボクちゃんよりも、チミのような庶民のがお似合いなのでおじゃる…！！」

によほほほ…と、気色悪い笑みを浮かべる成金ゴブリンの腕には、結締と同じ型の決闘盤が装着されていた。

これは、成金ゴブリンが資金にものと言って、わざわざ精霊界からアマジョンという通販を経て購入した代物である。

決闘盤を装着した短く太い腕を構え、成金ゴブリンは愉快に笑う。

「によほほほ！さあ、チミを倒して、ボクちゃんはブラック・マジシャン・ガールちゃんと結婚するでおじゃる！」

「クドい…ジンギスカンの溜まった脂並みにクドいぜよ。マナちゃんとお近付きになるのァ、この俺だ！！」

結締も、学校の鞆から取り出した決闘盤を装着し、臨戦態勢に入る。

すると、二人の足元に、薄暗い緑色をした、円形の魔法陣が展開された。

「なっ…何だこりゃ…！？ まさかコイツが…！？」

「によほほほほ！さあ、始めるでおじゃる…！！ デュエルでチミを、ボッコボコにするでおじゃる…！！」

意気揚々と手札を五枚揃える成金ゴブリン。

足元に浮かんだ魔法陣を見て、結締はマナが言っていた話しを思い出した。

（コイツが…精霊界独特のデュエルってヤツか…！！ 受けたライフダメージは、プレイヤーに衝撃となって伝わる…）

頭の片隅では、にわかには信じられなかった話し。

だが、実際に目の当たりにした結締は、事実を再確認する。

「…へへ。リアルが在って、面白そうじゃねえか…！！」

シュバツ！！ っと、手札を五枚揃える結締。

結締智恭 VS 成金ゴブリン

誰も知らない路地裏にて、一人の女を賭けた戦いが今、幕を開けた。

「行くでおじゃる…！！」

「来い、チビデブ!!」

『デュエル!!』

※

遂に始まった二人のデュエル。

によほほほ!と気色悪い声を漏らす成金ゴブリンは、決闘盤にセットされたデッキに手を伸ばす。

「先攻はボクちんでおじゃる! ブラック・マジシャン・ガールちゃんを愛するドロっ!!」

「んなっ!?!」

【成金ゴブリン】

LP／8000

【結締智恭】

LP／8000

衝撃的なドロ宣言にショックを受ける結締を余所に、成金ゴブリンは手札から一枚のカードを掴み取る。

「ボクちゃんは、この奴隷を召喚するでおじゃる！『盲信するゴブリ
ン』！」

【盲信するゴ布林】

星4／地属性／戦士族

ATK／1800 DEF／1500

「効果」

このカードは表側表示でフィールド上に存在する限り、コントロールを変更する事はできない。

成金ゴブリンのフィールドに、濃い顔付きのゴ布林が召喚された。

盲信するゴブリンの余りに気持ち悪い顔に、対峙する結締は、反射的に視線を逸らす。

「によほほほほ！ボクちゃんの奴隷にビビってるのでおじゃる！」

（んな訳あるかよ…ただ単に、あの不細工ヅラを直視したくないだけだぜい）

結締の気持ちなど知る由もなく、成金ゴ布林は先攻のプレイを続けていく。

「ボクちゃんはカードを1枚セットして、ターンエンドでおじゃる！」

「にやろう…余裕ぶっこいていられるのも、今の内だぜい…!!」

成金ゴブリンのターンが終了し、結締のターンへと移行する。

先のターンからも分かる様に、成金ゴブリンはマジシャン・ガールことマナに、よほど執着している事が窺える。

しかし、結締も負けてはいられない。

「いくぜい！マナちゃんは俺の嫁ドロー!!」

「にやにいい!?」

シュバツ!!　　っと鮮やかにドロウをする結締。

手札を確認した結締は、成金ゴブリンを成敗するべく、その行動を開始する。

「最初からカツ飛ばしてくぜい！魔法カード『融合』!」

【融合】

「魔法カード」

手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

結締は初手に、手札から融合の魔法カードを発動した。
彼が融合するモンスターとは…。

「手札のフェザーマンと、バーストレディを融合し、現れろ！『E・HERO フレイム・ウィングマン』！！」

【E・HERO フレイム・ウィングマン】

星6／風属性／戦士族

ATK／2100 DEF／1200

「融合／効果」

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

結締のフィールドに、風と炎の力を合わせた戦士、フレイム・ウィングマンが現れた。

結締の召喚したモンスターに、成金ゴブリンは一瞬だけ、片方の目をギョツと見開く。

「【E・HERO】！？ 融合召喚でおじゃるか…！！」

「おうよ。俺のHEROデッキは、強えぜい…！！」

融合召喚し、ニィっと笑みを浮かべる結締は早速、バトルフェイズへと突入する。

「バトル！行けえ、フレイム・ウィングマン！チビデブのモンスターに攻撃！！」

フレイム・ウィングマンの右腕、その先端に、炎のエネルギーが凝縮されていく。

そして、成金ゴブリンのモンスター、盲信するゴブリンに向かって、その炎が解き放たれた。

「喰らいなア！フレイム・シュート！！」

ズドンッ！！

「によわあああ！？　ボクちんの奴隷が……！！」

【成金ゴブリン】

LP／8000 ↓ 7700

【結締智恭】

LP／8000

成金ゴブリンのモンスターを破壊し、先制ダメージを与える事に

成功した結締。

モンスターを失い、眉間にシワを寄せる成金ゴブリン。
すると、そんな成金ゴブリンの顔に、ある影が掛かった。

「っ…ん？な、何だコイツは？もう貴様の攻撃は終了した筈で
おじやる！何でコイツは、まだボクちゃんに対して構えているでおじ
やるか！？」

影の正体は結締のモンスター、フレイム・ウィングマンだ。
フレイム・ウィングマンは、成金ゴブリンの前に立ち、右腕をゆ
っくりと前に翳す。

「ああ、言ってなかったっけ。フレイム・ウィングマンの効果発動
！このカードがモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモン
スターの攻撃力分のダメージを与える！」

「ひょ！？ によにゃあああ！！！」

【成金ゴブリン】

LP／7700 ↓ 5900

【結締智恭】

LP／8000

効果によるダメージを受け、ボロ…っと焦げる成金ゴブリン。

先制に大ダメージを与えた結締は、掴みどころのない笑みを浮かべながら。

「リバーズカードを1枚セットし、ターンエンド。どうよチビデブ、俺の強さが分かったなら、尻尾を巻いて帰んな！」

「ぐにゅにゅ…っ…よ、よくもやってくれたでおじゃる！！ ああ、ボクちんの高価な服に焦げ目が…！！ 弁償するでおじゃる！！」

「知るかっつうの…」

「ぐにゅにゅ…！！ なら、ボクちんがデュエルに勝って、何としても弁償させてやるでおじゃる…！！」

プンスカと怒る成金ゴブリンだが、聞いててちっとも怖く感じないのは気のせいだろうか？
結締が呆れるような溜め息をつき、成金ゴブリンのターンが始まる。

【成金ゴブリン】

LP／5900

「手札」

4枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

リバーズカード 1枚

【結締智恭】

LP／8000

「手札」

2枚

「モンスター」

E・HERO フレイム・ウィングマン

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

「おじやる！！ マジシャン・ガールちゃんチュツチュ、ボクちんのターン！！」

「てめえ……！！」

「によほほ。良いカードを引けたでおじやる。その前に…先ずはこのトラップから使うでおじやる！」

成金ゴブリンは、自分の場に伏せてあった一枚のカードを発動した。

それは…。

「永続罨、発動！！『追い剥ぎゴブリン』でおじやる！！」

【追い剥ぎゴブリン】

「永続罨」

自分フィールド上のモンスターが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、相手はランダムに手札を1枚捨てる。

「そして、ボクちゃんは『ゴブリン突撃部隊』を召喚でおじゃる!!」

【ゴブリン突撃部隊】

星4／地属性／戦士族

ATK／2300 DEF／ 0

「効果」

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

ヌツ…ヌツ…のっし、のっし…

成金ゴブリンのフィールドに、どこからか大勢のゴブリン達が、かったるそうに集まってきた。

「い…っ、下級モンスターで、攻撃力2300かよ…!?!」

「さあお前たち!ボクちゃんの為に、粉骨碎身の意気で戦うでおじゃる!!」

『……ハア』

成金ゴブリンが揚々と声をあげるも、ゴブリン突撃部隊から聞こえてくる声は溜め息ばかりだ。

仕舞には地面に座り込み、それぞれが気だるそうな表情ばかり浮かべているのではないか。

これは決闘盤によるソリッドヴィジョンではないのか？と、結締は唾然となって見つめていた。

「こらあ、お前たち！何やっっているでおじゃるか！？ 立て！立つでおじゃる！！」

「…チビデブ。お前…自分のカード達から信用されてねえんじや…」

「そんな事ないでおじゃる！！ 外野は黙ってろでおじゃる！！ そら、お前たち…金だ、金をやる！！ ほおれ、ほれほれえ！！」

ジャラジャラッ！！と、成金ゴブリンはポケットから大量の金貨をばらまいた。

その光景にドン引きする結締。

しかし、次の瞬間…。

ばらまかれた金貨を拾ったゴブリン突撃部隊は、先程の気だるそうな態度から一変し、屈強な戦士の顔付きへと変貌したのだ。

『オオオオオオオオオ！！！！！！』

「のわっ!？ 何だコイツら…急にやる気になりやがった…!!」

「それで良いのでおじゃる。待たせたな、人間…デュエル再開でおじゃる!!」

ゴブリン突撃部隊がやる気になった所で、成金ゴブリンのバトルフェイズが始まる。

「ゴブリン突撃部隊!! あのにけ好かないフレイム・ウイングマンを、懲らしめてやれい!!」

オオオオオオ!!!!!!

ボコボコボコボコ…!!

「だあああ!! フレイム・ウイングマンっ!？」

【成金ゴブリン】

LP／5900

【結締智恭】

LP／8000 ↓ 7800

ゴブリン突撃部隊の集団攻撃を受け、結締のフレイム・ウイングマンが破壊されてしまった。

そして…。

「よくやった、お前たち！！　　によほほ…この瞬間、ボクちんが発動した永続罠、追い剥ぎゴブリンの効果発動！！」

「っ！？」

「追い剥ぎゴブリンは、相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札1枚をランダムに捨てる事ができるのでおじやる。さあ人間！手札を捨てるでおじやる！！」

「ハンデス…っ！？」

ハンド・デストラクション

手札破壊。

結締は、融合魔法カードを主体としたデッキを使用する。

融合モンスターには、強力なステータスや強力な効果を持つモンスターが多く存在するが、その戦術には弱点がある。

それは、カードの消費枚数だ。

基本的に、融合召喚をするには、三枚のカードを消費する事になる。

？融合魔法カード

？素材となるモンスター

？素材となるモンスター

それは、自分の手札、もしくはフィールドに、三枚のカードが揃わなければ、融合召喚が出来ないという事になる。

強力なカードを使用するには、その代償は大きい。といった具合だ。

そんな結締の手札は二枚。

ここから手札を、ランダムに一枚捨てなければならない。

(…今このカードが捨てられたら、正直キツイぜい…!!)

「によほほほ。選びきれないでおじゃるか？ だったらボクちゃんが選んでやるのでおじゃる」

成金ゴブリンは陽気な声で、小馬鹿にするような表情を作りながら

「チミから見て、左側のカードを捨てるでおじゃる。ほれ、ほれほれ！ サッサと捨てろ！」

「……ッ！！」

結締は手札を捨てながら一瞬だけ、奥歯をギツと噛み締める。

自分の思い通りに展開が進んでいく事で、成金ゴブリンは気色悪い笑い声をあげ続ける。

「によほほほ！！ コレでチミの手札は、たったの1枚！ ジリジリと、少しずつ、少しずつ…身ぐるみを剥いでやるでおじゃる…！！」

「：ちくしょう」

「によほほほ！！ 良い顔でおじゃる。そういう表情の輩から、色々と剥いでいくのは気分が良いでおじゃる。さて、バトルを終えたゴ布林突撃部隊の効果！次のボクちんのターン終了時まで、守備表示になる…」

「…！！」

「ボクちんはカードを1枚セットして、ターンエンドでおじゃる！！」

成金ゴブリンのターンが終了し、結締のターンがはじまる。
だがそれは、不利な状況からのスタートだった。

【成金ゴ布林】

LP／5900

「手札」

3枚

「モンスター」

ゴ布林突撃部隊（守）

「魔法・罨」

追い剥ぎゴ布林

リバースカード 1枚

【結締智恭】

LP／7800

「手札」

1枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

「俺のターン、ドロー!!」

デッキからカードをドローし、手札を二枚に増やした結締。
しかし、手札が満たされたかと言われては、そうとは言えない。

「によほほ…。【E・HERO】は融合しなければ、大した実力もない奴らばかりなのでおじやる。例えモンスターを引けたとしても、雑魚の雑魚でおじやる!! によほほ!!」

「によほほほほ!!」

「によほっ!?!? な、何がおかしいでおじやるか!?!? 気でも狂ったでおじやる!?!?」

手札を減らされた事で戦術の幅が狭まり、気落ちしているものばかりと思ひ込んでいた成金ゴブリンは、結締が唐突に笑い出した事に、一瞬動揺する。

「狂っちゃいないさ、チビデブ。確かに【E・HERO】達ア、融合してこそ真の力を発揮する。だけ ど…お前が発動した永続罠、追い剥ぎゴブリンのお陰で、何とかなりそうだにゃ」

ゾミ…ッ!!

「っ!？」

ニヤリ…と、凍り付くような冷たい視線を向ける結締に、成金ゴブリンは少しチビりそうになる。

「それじゃ、早速いくぜい! 墓地に眠る、ネクロダークマンの効果
!!」

【E・HERO ネクロダークマン】

星5／闇属性／戦士族

ATK／1600 DEF／1800

〔効果〕

このカードが墓地に存在する限り1度だけ、自分はレベル5以上の「E・HERO」と名のついたモンスター1体をリリースなしで召喚する事ができる。

「コイツが墓地にある時に1度だけ、手札の【E・HERO】1体をリリースなしで召喚する事ができる…!! 来い、エッジマン!
!」

【E・HERO エッジマン】

星7／地属性／戦士族

ATK／2600 DEF／1800

〔効果〕

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ズドドドド…ッ！！

追い剥ぎゴブリンの効果で墓地に送られたネクロダークマン。

その効果で、結締がリリースなしで召喚したカードは【E・HERO】の中でも最上級モンスターのエッジマンだった。

攻撃力2600の強力モンスターの登場に、成金ゴブリンは鼻水まで垂れ落ちそうになる。

「にゃにいい！？」

「散々、人を馬鹿にしゃがって…。チビデブ、容赦しねえぜよ…！！」

エッジマンを召喚した結締は、怒りで震える拳を握り締め、バトルフェイズへと突入する。

「行けッ、エッジマン!!　ゴブリン突撃部隊に攻撃!　パワー・エツジ・アタック!!」

ズガガッ!!

ドゴオオオオ!!

「ぎによええええ!!」

【成金ゴブリン】

LP／5900　↓　3300

【結締智恭】

LP／7800

エッジマンの強力な一撃が、守備表示のゴブリン突撃部隊を蹴散らした。

その衝撃に吹き飛ばされ、成金ゴブリンは一回、二回と派手に転がり、近くのゴミ置き場に衝突する。

「むぎゅっ!?!　ぶへえああ!!　あ臭っ!?!　なんでおじやるか、ココは!?!」

「エッジマンは、攻撃力が相手の守備力を上回っていた場合、その差だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。って…聞いちゃいねえな」

「ぎにゃっ!?! 変な汁が服に付いて、臭いが取れないでおじやる
!! ああッ!! ボクちんの高級なズボンに穴が!!」

ぷちん

「ゆ…ゆゆゆっ…許さないでおじやるゝっ!! ボクちんをこんな
目に遭わせた報い、受けてもらうのでおじやる!!」

頭にバナナの皮を乗せたまま、ムキーツ!! と憤慨する成金ゴ
ブリン。

もはやその姿は大富豪とは呼べず、見事に落ちぶれた浮浪者にし
か見えなかった。

「…あ、マナちゃんを愛する俺のターンは、これで終了だぜい」

「ムツギイイ!! マジシャン・ガールちゃんは、ボクちんのお
嫁さんになるんだって言っているでおじやる!! その減らず口…
叩き潰してやるのでおじやあある!!」

ズドドドドドド!!

全身から怒りのオーラを噴出する成金ゴブリン。

しかし、頭にはバナナの皮が乗ったままであるという事には気付
いていなかった。

※

日曜日の街中は、大勢の人で賑わっている。

真夏だというのに、強い日差しを浴びながらも、大通りを行き来する若者たち。

窓際から中の様子が伺える飲食店では、客たちは冷房の効いた部屋で、冷たいデザートを食べて満足そうな笑みを浮かべている。

その様子を覗き込んで、口元からヨダレを垂らしながら、マジシヤン・ガールことマナは、西条の後について回っていた。

「ねえ…さいじょお、さいじょお！あのお店のー…」

「だめ」

ピシヤリと、マナが全てを言う前に、西条はたったの二文字で黙らせる。

「ちょ、さいじょお！それはあんまりなんだよ！まだ私は、あのお店のー…」

「だめ」

また全てを言い終える前に、たったの二文字で遮断された。

「…ちゃんと話し聞いてくれないと、魔法…使っちゃうよ？」

「だめ」

「~~~~~っっ」

「だああああ、待て待て待て！！ 杖は仕舞え！！」

背後から漂う不穏な気配をいち早く察知した西条は、慌ててマナに向き直る。

「デザートとかなら、後で買ってやるから！こんな街中での魔法は勘弁してくれ！！」

「むう…気分転換で外に来て、暑いだけなんだもん。さいじょおの部屋みたいに、どこか涼しい所ってないの？」

わたしは今にも干からびそうなんだよ！と、マナは訴えかけるような視線を西条に向ける。

遡ること数分前。

部屋で今後の事を話していた二人だったが、マナは西条に対し、申し訳ないと感じている事を吐露した。

この世界に来てから、彼にばかり迷惑をかけていると。

そんな風に気を落としていく彼女を見て、西条はこの街に来たばかりの自分と重なって見えた。

見知らぬ場所で、最初から何もかも上手く行く訳がない事を、西条は知っている。

知らなければ、何も分からないままだという事を知っている。

この世界で、少しでも彼女が行動できる範囲を増やす為に。

彼女がこの世界で、少しでも自分の力で成し遂げる事ができる為に、西条はマナを街へと連れ出したのだ。

「安心しろ。もう直ぐ、涼しい場所に到着するから。それまでの辛抱な」

「もう直ぐ…って…。わたしは、まだこれからドコに行くのか、知らされてないんだよ？ねえ、ドコに向かっているの？」

「それはだな…」

西条は、現在マナが着ている服を見つめる。

黒の学生ズボンに、ピンクのTシャツの上から白のカッターシャツを羽織るその姿は、男子学生の夏服そのものである。

というよりは、彼女が着ている服は全て、西条の私物である。

彼女が持っている服は、カードイラストに描かれた派手な露出度の高い衣装しかない為に、彼が余りの服を貸し出したのだ。

しかし、今度二人はトリティニークグループに向かい、神のカードを見せてもらう事になっている。

自分は服を持っているが、彼女は持っていない為、この機会に彼女の服を買ってあげようと考えているのだ。

改めて視線を彼女に向ける西条。

男物の服というのは、やはり女性には大きすぎるのか、上から下までダボダボなゆったりスタイルになっている。

それでも上手に着こなす辺り、彼女はやはりオシャレなのかもしれない。

「ちょっと、さいじょお。やらしい目でドコ見てるの？」

「ん？ いや別に…ただ…」

「…ただ…？」

「シャツは大きいかもしれないけど、胸とかキツくないか？ お前結構大きいし（ボイン、ボイン）」

「なっっ／／／／」

「ほら…女物の服って、胸とか大きさ考えて作られてるだろ？ 今お前が着てる服は俺のだから、サイズは大丈夫だと思ってたけどー…」

「せっっ、セクハラ！！ その発言はセクハラなんだよ、さいじょお！！」

「えっ！？ セクハラって、ちょ、お前どこでそんな言葉を覚えてー…って、待て待て待て待て待て！！ 杖を出すな！！ 魔法は

使っちゃ駄目だっつうのおお!!」

三上市の街中を全力で逃げ回る西条。
片や、全力で彼を追いかけて回すマナ。

しばらくして、三上市のとある一角で、西条の断末魔が響き渡った。

※

三上市の路地裏にて繰り広げられる二人のデュエル。

【成金ゴブリン】

LP／3300

「手札」

3枚

「モンスター」

なし

「魔法・罠」

追い剥ぎゴブリン
リバースカード 1枚

【結締智恭】

LP／7800

「手札」

1枚

「モンスター」

E・HERO エッジマン

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

ライフアドバンテージを大幅に広げた結締のターンが終了し、成金ゴブリンのターンに移行する所から始まる。

路上のゴミ置き場に衝突した際に、頭に被っていた王冠がバナナの皮に変わっている事に気付かないまま、成金ゴブリンは力任せにカードを引く。

「おによれええ…っ、マジシャン・ガールちゃんと○○○や、○○○
○したいボクちんのターンッ!!」

「なッ!! テメエ、放送規制掛かってんじゃねえか!!」

「五月蠅いでおじゃる…貴様はボクちんの手で、ボッコボコのギッタギタにしてやるのでおじゃる…!!」

余りの怒りによって、血走った眼球を結締に向ける成金ゴブリン。そして、成金ゴブリンの反撃が始まった。

「先ずはこのカードから使うでおじゃる!! 魔法カード『ハンマーシュート』を発動するのでおじゃる!!」

【ハンマーシュート】

〔魔法カード〕

フィールド上に表側表示で存在する攻撃力が一番高いモンスター1体を破壊する。

「この効果で、フィールドで最も攻撃力が高いモンスター1体を破壊するのでおじゃる!!」

「今の場にモンスターは、俺のエッジマンだけ…!？」

ヒュウウウウ…

ズドゴンツツ!!

「のわぁあっ!？ エッジマン…!？」

結締のエッジマンの頭上に、巨大なハンマーが叩き付けられ、破壊された。

これにより、結締のフィールドからモンスターは全て消え、残されたのは一枚のリバースカードのみとなった。

【成金ゴ布林】

LP／3300

【結締智恭】

LP／7800

「これで邪魔者は消えたでおじゃる……！！ によほほほ、覚悟するでおじゃるよ……！！」

今が攻め時とばかりに、成金ゴブリンは次々と手札のカードに手を伸ばす。

「いでよ……！！『ゴブリンエリート部隊』……！！」

【ゴブリンエリート部隊】

星4／地属性／悪魔族

ATK／2200 DEF／1500

【効果】

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

成金ゴブリンのフィールドに召喚されたのは、下級モンスターにして攻撃力2200を誇る、ゴブリンエリート部隊だ。

「しやらに、ボクちゃんは今こそ、このカードを発動するでおじゃる……！！ 永続罠『リビングデッドの呼び声』を、発動でおじゃる……！！」

【リビングデッドの呼び声】

「永続罨」

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「によほほ……！！　ボクちゃんはこの効果で、墓地のモンスター1体を復活させるでおじゃる……！！　もう一度働くでおじゃるよ『ゴブリン突撃部隊』……！！」

【ゴブリン突撃部隊】

星4／地属性／戦士族

ATK／2300 DEF／0

「効果」

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

リビングデッドの呼び声の効果により、ゴブリン突撃部隊までもがフィールドに特殊召喚された。

攻撃力2200と2300のモンスターが出揃い、結締はギョツと目を見開く。

「まだまだなのでおじゃる……！！　手札の装備魔法『巨大化』を発動なのでおじゃる……！！」

【巨大化】

「装備魔法」

自分のライフポイントが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。自分のライフポイントが相手より上の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

「この装備魔法を、ゴ布林突撃部隊に装備するのでおじやる。装備されたゴ布林突撃部隊の攻撃力は、倍になるのでおじやるあああ！！！」

【ゴ布林突撃部隊】

ATK／2300 ↓ 4600

（『巨大化』装備）

「んなっ！？ 攻撃力が…っ！？」

「念には念を、でおじやる。ボクちゃんが攻撃した時に、チミの伏せカードで防がれたら厄介でおじやるからねえ…」

「っ！？」

「不安要素は、排除するのでおじやる！！ 手札の速攻魔法『サイクロン』を発動でおじやる！！！」

【サイクロン】

「速攻魔法」

フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。

バコオオ！！

結締の場に、切り札のつもりで伏せていた罠カード『ヒーロー見参』が破壊されてしまった。

これにより、結締を守るカードは何も無くなってしまった。

結締の引きつった顔を見て、成金ゴブリンは愉快に目元をニヤつかせる。

「これでチミのフィールドからカードは全て消えた。さあて…ボクちんが味わった痛みを、倍返しにしてやるのでおじやる！！ やれえ、お前たち！！」

バトルフェイズに突入した成金ゴブリンは、結締に対して一斉攻撃を仕掛けてきた。

「まずはエリート部隊からでおじやる！！ 突撃いい！！」

「っ！！ のおおああああ！！！！？」

【成金ゴブリン】

LP／3300

【結締智恭】

LP／7800 ↓ 5600

エリート部隊に囲まれ、集団で攻め入られた結締は、苦痛な叫びと共に路上に吹き飛ばされた。

「がっ！！ ガハッ…っ！？」

吹き飛ばされ、全身を襲う激しい痛み、結締は体中から嫌な汗が噴き出してくるのを感じた。

（ンなっ！？ ソリッドヴィジョンじゃ…ねえのかよ…っ！！）

初めてダイレクトアタックを受けた事で、結締は精霊界のデュエルというのを、本当の意味で実感する。

（こんなデュエルを…西条ちゃんはやってたってのかよ…！！）

マナは言っていた。

彼は自分を助ける為に、デュエルを挑んでいったと。

彼は怖くなかったのだろうか？

逃げ出したくならなかったのだろうか？

このデュエルの意味を本当に理解した瞬間、結締は恐怖心で冷静ではいられなくなってしまった。

「によほほほ！！ 無様な格好なのでおじゃる！！ でも、忘れて貰っちゃ困るのでおじゃるよ。永続罠『追い剥ぎゴブリン』の効果！！」

【追い剥ぎゴブリン】

「永続罠」

自分フィールド上のモンスターが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、相手はランダムに手札を1枚捨てる。

「……くっ！！」

「によほほ…これでチミの手札は0。もうこれで、チミは一文無しでおじゃる！！」

（…スパークマンのカードが墓地に送られちゃった。どうするぜよ…もう他にカードがねえっ！！）

「さて、さてさて…ここからが本番でおじゃる」

「っ！？」

ズン、ズン、ズン、ズン…と。

膝を着く結締の周りを、巨大化したゴブリン突撃部隊が包囲する。

そうだ。

まだ成金ゴブリンには、ゴブリン突撃部隊の攻撃が残っているのだ。

その事実を認識した瞬間、結締は血の気が静かに引いていくのを感じた。

「…やべ」

「さあ、お前たち。ソイツをたあアップリと痛めつけてやれ。マジシャン・ガールちゃんに、遭わせる顔がない位に、な」

「ーッッ!!??」

瞬間。

声にならない結締の叫びが、路地裏に響き渡った。

【成金ゴブリン】

LP／3300

【結締智恭】

LP／5600 ↓ 1000

「…によほほ。もう良いぞい、お前たち」

成金ゴブリンがそう言うと、結締を取り囲んでいた突撃部隊は成

「……ッ」

「夜にはやっぱり、●●●してもらうのが当たり前でおじやる。ボクちんの●●●な●●●で、ガールちゃんは大喜びで●●●してー」

「えか」

「
 ！
 ！
 ん？
 」

一人、放送禁止用語を連発する成金ゴブリンは、地面に横たわる結締が何を言っているのか上手く聞き取れなかった。

「何でおじやる？チミみたいな輩には、ボクちんのガールちゃんに
対する愛情の差がー」

「気色悪イって言うてんだよ。聞いててへドが出そうだけい」

ハッキリとそう告げた結締は、まるで何事も無かつたかのような、
軽快な動きで立ち上がる。

「んにゃっ! ? あれだけ痛めつけても、まだ立ち上がれるのでお
じやるかっ! ?」

「痛えっちゅうの。今も頭はフーラフラ。立ってるのが、やっとこ

さな感じだにゃ」

ニィ…と笑みを浮かべる結締に、成金ゴブリンは一瞬ではあるが
気圧された。

なぜ、この男は立ち上がれるのか？

この男の体力は、底無しなのかとさえ、思えてしまう。

「出来れば今は、ゆっくり体を休めたい所なんだけどな…聞いちま
ったからよ」

「…!？」

結締の静かな言葉が、逆に大きく聞こえてくる。

ギンッ!! と、結締は射殺するような鋭い視線で、成金ゴブリン
にハッキリと告げる。

「自分が好きな娘を…そんな風に言われたままってのァ、漢として
駄目だろ？ お前をマナちゃんに合わせる訳にゃいかねえ…!!」

「ひい…!？」

「このデュエル…俺ァ何何でも、負ける訳にゃいかなかったま
った…!!」 覚悟しろよ、チビデブ」

フィールドにカードもなく、手札もないこの状況で。

結締は宣言する。

このデュエルで、絶対に自分が勝つという事を。

※

【成金ゴ布林】

LP／3300

〔手札〕

なし

〔モンスター〕

ゴ布林エリート部隊

ゴ布林突撃部隊（巨大化）

〔魔法・罨〕

追い剥ぎゴ布林

巨大化

【結締智恭】

LP／1000

〔手札〕

なし

〔モンスター〕

なし

〔魔法・罨〕

なし

「俺ア、お前を倒す。絶対にだ：！！」

圧倒的不利な状況から発した結締の言葉。

一瞬、その覇気に気圧される成金ゴブリンだったが、フィールドを見渡す事で、冷静さを取り戻す。

「勝つ：？この状況で：？手札も、モンスターも、魔法も、罠もないチミのその状況で？ライフがのこりたったの1000しかないその状況で？」

「：ああ」

彼の瞳に宿った光は色褪せない。

「っ！！ 馬鹿も休み休み言うでおじゃる！！ この状況で万が一、奇跡が起きたとしても、チミが勝つなんて有り得ないでおじゃる！！」

「：確かに、確率は低い。それも突き抜けてな」

そんな事は言われなくても、彼自身が一番よく知っている。しかし、負ける訳にはいかない。

マナを、こんな奴なんかに取られたくない。

「ヒーローってのはな：最後まで、諦めちゃいけないだよ。ヒーローが諦めちゃったら、そこで物語は終わっちゃう」

「：何をいつてやがるでおじゃる？ どう足掻こうと、チミの負けは決まっているのでおじゃる！！」

結締の言葉が気に食わない。

結締のその目が気に食わない。

自分では理解していなかったが、成金ゴブリンは明らかに動揺していた。

「：俺のデッキよお、ヒーローとしての力を、今こそヤツに魅せてやろうぜい！！」

キッと、表情を引き締めた結締は、デッキトップに指を添える。

本当は怖い。

負けるかもしれない、という恐怖。

狙ったカードが引けないかもしれない、という恐怖。

マナがこの変態チビデブに好きなようにされるかもしれない、という恐怖。

しかし、それを乗り越えてこそそのヒーロー。

最後まで諦めないのが、結締が信じるヒーロー。

「行くぜい：俺のターン、ドロート！！」

シュバツ!!

「:!!」

「無駄でおじゃる…」

ゆつくりとドロカードを確認する結締。
彼が引き当てた、最後の一枚とは…。

「ーッし!! 来たきた来たああ!!」

「ひょ？」

「最高だぜい、お前たち!! 俺は手札から、バブルマンを特殊召喚!!」

【E・HERO バブルマン】

星4／水属性／戦士族

ATK／ 800 DEF／1200

【効果】

手札がこのカード1枚だけの場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に自分フィールド上と手札に他のカードが無い場合、デッキからカードを2枚ドロする事ができる。

結締が引き当てたのは、バブルマンのカードだ。
バブルマンを守備表示で特殊召喚した結締は早速、バブルマンの特殊能力を発動する。

「バブルマンの効果！！ コイツが特殊召喚に成功した時、手札とフィールドに他のカードが無い場合、デッキからカードを2枚ドロ―できる！！」

「にゃにいい！？」

「ドロ―ッ！！ へへ…チビデブ、魅せてやるよ。これが【E・HERO】デッキの奇跡だ！！」

手札を二枚に増やした結締は、奇跡を起こす。
そのカードは。

「手札から『ミラクル・フュージョン』、発動！！」

【ミラクル・フュージョン】

「魔法カード」

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「墓地の【E・HERO】を除外し、そのモンスターを融合させる！！俺は墓地のフレイム・ウィングマンと、スパークマンをゲームから除外……！！」

「ぼっ、墓地融合……っ！？」

「融合 召喚 ッ！！ 現れろッ！！『E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン』……！！」

【E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン】

星8／光属性／戦士族

ATK／2500 DEF／2100

「融合／効果」

「E・HERO フレイム・ウィングマン」＋「E・HERO スパークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき300ポイントアップする。このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

結締のフィールドに現れたのは光り輝く戦士、シャイニング・フレア・ウィングマンだ。

そのモンスターの登場に、成金ゴブリンは口をあんどりと開けたまま、動く事ができなかった。

「シャイニング・フレア・ウィングマンは、墓地の【E・HERO】の数だけ、攻撃力を300ポイントアップさせる」

【E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン】
ATK/2500 ↓ 3700

攻撃力を上昇させるシャイニング・フレア・ウィングマン。
だが結締は、更に残った手札のカードに手を伸ばす。

「更に、手札から魔法カード『Hーヒートハート』を発動!!」

【Hーヒートハート】
「魔法カード」

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップし、そのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「このカードは、モンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップし、守備表示モンスターを攻撃した際に、貫通ダメージを与える!!」

【E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン】

ATK／2500 ↓ 3700 ↓ 4200
(Hーヒートハート効果)

「こ…っ、攻撃力4200の貫通持ち!？」

「お前のモンスター達は自身の効果により、全員守備表示だぜい」

成金ゴブリンのフィールドには、守備表示のゴブリン突撃部隊とゴブリンエリート部隊のみ。

このターン、結締の攻撃を防ぐ手だては残っていなかった。

「しよんな…しよんな馬鹿にやあああ!!」

「覚悟しろ、チビデブ!! 行け、シャイニング・フレア・ウィン
グマン!!」

結締のターン、その最後のバトルフェイズ。

【成金ゴブリン】

LP／3300

【結締智恭】

LP／1000

「シャイニング・フレア・ウィングマンで守備力0の、ゴブリン突撃部隊を攻撃!!」

高く跳躍し、その手に光のエネルギーを凝縮させていくシャイニング・フレア・ウィングマン。

そして遂に、その一撃が成金ゴブリンのモンスターに炸裂した。

「今回はお前がフィニッシャーだ!! 喰らえ、シャイニング・シユート!!」

カッツ!!

ズシャゴオオオ!!

「ギエピイイイイ!!」

【成金ゴブリン】

LP / 3300 ↓ 0

【結締智恭】

LP / 1000

ゴブリン突撃部隊を破壊し、その貫通ダメージを与えた結締。煌々と立ち込める土煙の中、最後に立っていたのは、結締智恭だった。

結締の戦い 参上! E・HERO (後書き)

今回は後書きというよりも、ちょっとした愚痴。

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン…

文字書き込む時に、文字数が多すぎて困る(汗)

動き出す闇 (前書き)

最近、仕事関係の用事が増えてきて、なかなか執筆作業が進まない……!!

ああ、どこかに思った事を文章化してくれる便利な機械ってないものか……!!

今回の後書きで、ちょっとしたアンケートを用意してあります。
気が向いたらで良いので、ご参加宜しくお願いします。

動き出す闇

※

三上市の一角に、一件のカードショップが建っている。

その店の名は、アリス。

トリティニールグループが経営する系列店であり、様々な種類のカードが売られているとして有名な店舗である。

日曜日の午後という事も相俟って、今日も商売繁盛。

店内は沢山の客で賑わっていた。

買ったばかりのカードのパックを開けて、ワクワクする子供たちや、自分のデッキを持ち込んで、店内の奥でデュエルをする若者たち。

皆が皆、見ているこちらが思わず笑顔になりそうなくらい、イキイキとした表情をしていた。

そんな客の笑顔を堪能しながら、この店の店長である中島は、相変わらずプロレスラーが被るようなマスクを着用しながら、終始ご機嫌な様子で鼻を鳴らしている。

「んふふ〜♪今日も沢山のお客サマが来てくれて、アタシもうダメ☆嬉しくって、はちきれちゃいそう!」

「抑えてくれ。店長のようなオカマがはちきれたら、俺たち客にとっては地獄絵図だ」

興奮する中島に物言うのは、白石直也だ。

学校で担任教師とデュエルをした後、何気なく立ち寄ったばかりであった。

くねくねと体を動かす中島に溜め息をつくと、白石は軽く咳払いをしながら、中島に尋ねた。

「所で店長よ。例のカードは届いているか？」

「届いているわヨ☆ハイ、このカード3枚よネ♪」

中島は自分の履いているズボンの股間から、艶めかしい動きで三枚のカードを取り出した。

「ホツカホカよ☆」

「その言葉は要らん。とにかく、礼を言うぞ店長。このカードが俺のデッキに入れば、俺のブルーアイズは更に強くなる…!!」

「『伝説の白石』…ホワイト・オブ・レジェンド。前から白石ちゃん、欲しがってたもんネ☆」

白石が中島から受け取ったカードは『伝説の白石』と呼ばれるモンスターカードだ。

白石は前々から、このカード欲しさに、パックを大量に購入していた。

しかし、パックを開けても開けても、このカードは姿を現さなかった。

特別なレアカード、という訳ではないのだが、この時ばかりは物欲センサーがフルに発動していたとしか言いようが無かった。

「それよりも白石ちゃん、楠センセとのデュエルで負けてきたんでしょう？」

「ムッ！？ 何故それを…」

「言わなくても分かるわヨ！白石ちゃんが眉間にシワ寄せて来店してきた時は、決まってデュエルに負けて来た時ばかりなもの」

「むぐぐ…っ、そうだったのか」

自分では気付かない癖を言われ、白石は来店してきた当初の自分を思い出す。

思い返せば、こみ上げてくる悔しさから、難しい表情をしていたのかもしれない。

「そんな怖～い顔してちゃ、誰も寄って来なくなるわヨ？」

「ふうん…それに寂しさを覚えるのは、凡人の考えだ。俺には何ら関係のない事だ」

「そうも言ってられなくなるわヨ？ 人生はまだこれからなんだから☆」

マスク越しに深みのある視線を送る中島。

彼はまだ若い。

だからこそ、まだ知らない事も沢山ある。

今の台詞のまま彼が大人になった時、困るのは一体誰なのか？

中島は敢えて、これ以上の事は言わないでおいた。

この年頃は、人に言われるのではなく、自分で気付いて大人になっていくのだから。

「ふうん…店長の言うことだ。間違った事は言っていないのだから…。…むう、どんな顔をすれば愛想が良いというんだ？」

「こんな顔ヨ☆」

「いや、マスク越しでは判らんぞ…」

中島に手鏡を用意され、鏡に映る自分とにらめっこする白石。
鏡の中の自分を見て、白石は改めて感じる。

（…何だコイツは。目つきが悪いな）

自分の顔にそう思うと、とりあえず口元を笑わせてみる事にした。

(…目が…笑っていない…)

乾いた笑みとは、正にこの事なのだろう。
これでは愛想が良いとは、到底いえない。

(ならば今度は、目尻を垂らすか…ぐぐうつ、何だこのマヌケ面は！?)

口元だけでは駄目だった。
目尻だけでは気色悪かった。
バラバラだから駄目なのだ。

「白石ちゃん。人生の先輩から、とおっておき☆のアドバイス♪」

「…ご教授願おう」

「笑顔って言うのはネ、心が籠もってなくっちゃ駄目なのヨ。本当に楽しいと感じた時、人は自然と笑顔になるでしょう？」

「むう…確かに…」

「だから、白石ちゃんも楽しまなくっちゃ駄目ヨ♪とは言っても、直ぐに気持ちが追い付く事なんて難しいだろうし…」

中島は少し考えると、何か思い付いたのか。
ポンツと手のひらで相槌を打ちながら

「そうだわ！白石ちゃんが、やって楽しい事を想像して♪そうすれば、気持ちも軽くなる筈ヨ☆」

「なる程、その手があったか！！　よし…ならば早速…！！」

白石は考える。

白石は想像する。

白石は妄想する。

これまでに自分がやってきて、心の底から愉快に笑った時の事を
…！！

「……………むむう…っ！！」

白石の額に脂ぎった汗がキラリと光る。

握り締める拳はプルプルと奮える。

噛み締めた奥歯はギシギシと唸る。

（お…っ、おもいうかばないい……ッ！！）

「し、白石ちゃん…大丈夫？今のアナタ、物凄く芸術的な顔になっ

てるわヨ!!」

（ぐぬぬ…ッ!! この俺にとって、楽しいという事は、一体なんなのだ!?! …むっ!?!）

芸術的な表情で訝しむ白石は、そこである事に気付く。

それは、店内の壁に設置された小窓だ。

普段なら、何ら気になる事のない、換気の為に開けてある小窓。その向こう側には…。

「ぷぷ…何だ白石、お前その顔…ククッ、腹いてえ…!!」

「え、なに、さいじょお?どしたの、何か変なのもあるの?」

そこには、窓の向こうから白石の芸術的な顔を、指さして笑う西条亨の姿があった。

マナの声も聞こえてきたが、どうやらマナはコチラの様子に気付いていないらしい。

「あひゃひゃ…!! なぁ白石、もう一度やってくれよ!写メに撮っとくからさ『ザシュッ!!』…って、ぐぎゃあああ!?!」

「ああっ!?! いつの間にか、さいじょおの眉間にカードが刺さってる!?!」

窓越しに、見事なカード手裏剣をキメた白石は、こめかみにうつすらと血管を浮かばせながら

「西条オッ！！ 貴様いつからソコに居た！！ ヌウウ…よもやヤツに辱めを受けようとは…っ！！ どう責任をとるつもりだ、貴様ア…！！」

「し、白石ちゃん…！！ 言葉だけで聞いたら、爆弾発言ヨ！？」

日曜日の昼下がり。

カードショップ『アリス』は、今日も賑やかです。

※

カードショップ『アリス』の店内、奥にある事務所には、中島を含め西条等四人が揃っていた。

腕を組み、不機嫌そうな表情で鼻を鳴らす白石の対面には、マナに絆創膏を貼ってもらう西条。

そんな様子を微笑ましく見つめる中島は、マナの着ている服に注目した。

「それにしてもマナちゃん♪いつの間に、そんなオシャレな服を？ とろっってもステキじゃナイ☆」

「む、そう言えば…!! 前に西条の部屋で会った時は、どちらかと言えば男物の服だった…」

中島に言われ、白石もマナに視線を移す。

ピンクのTシャツに、デニム生地の子スカートの。

ラメの入った煌びやかなサンダルに、可愛いハートのシルバ―が着いたネックレス。

マナ自身の可愛らしさも相まって、すれ違う人の全てが振り返るような、美少女になっていた。

「ふうん…なかなか似合っているではないか」

「えへへ、そうかな？」

「ええ♪キューティクルでエキサイティング☆アタシが男だったら、もう食べちゃいたいくらいヨ☆」

「いや、店長…男でしょ？なに言ってー…」

「（ウルセエぞ、コラ…ブチ殺すゾ…!!） ホント素敵ヨ、マナちゃん☆」

「…（（。；））ガタガタブルブル」

西条の言葉を、眼力だけで黙らせた中島。
人には、触れてはならない部分があるのだ。

中島の強烈なガン飛ばしにビビる西条を知らず、マナは照れながら舌をペロツと出した。

「えへへ。実はこれ、さいじょおに買ってもらったんだ！明日はこの服を着て、幻神獣に会いに行くんだよ！」

彼に買ってもらった服が気に入ったのか、マナは嬉しそうにポーズをキメる。

そんな彼女を誉める中島を余所に、白石は西条に尋ねてみた。

「西条よ。マナが、幻神獣に会いに行く…と言っていたが、どういう事なのだ？」

「ああ。マナの事情を知ってるお前だから言うけど…コイツが俺達の世界に來た目的は、もう知ってるだろ？」

「確か、精霊界…だったか。そこで我が物顔をしている邪神とやらに一泡吹かせる為に、神のカードをアチラの世界に降臨させる…か」

結締と一緒に、マナから話を聞いていた為に、西条が話す内容を確認するかの様に呟く白石。

「ああ。明日は終業式で、ソコから夏休みに入るだろ？だから、明日の学校が終わってから、中島さんをお願いして、トリティニード

ループに行く事にしたんだ」

「…ふうん。行動が早いな…」

なる程、と白石は状況を理解する。

明日、トリティニーグループに乗り出す西条の行動の早さに、白石は感心する。

感心する反面、しかし…と思う部分もある。

「しかし、大丈夫なのか？世界に1枚ずつしか存在しない神のカードを、トリティニーグループが譲ってくれるとは思えんが…」

白石の言う事は最もである。

神のカードは、カードテキスト解読の為に、今もトリティニーグループの研究機関にて解読中なのだ。

更に言えば、神のカードはトリティニーグループの発展を担ってきた、社にとって重要な代物。

それを一般人である自分たちにホイホイ貸し出すとは、到底思えなかった。

「そりゃそうだろ。そんな事、お前に言われなくても分かってるさ。だけど、もしも…」

「…？」

「もしも、“神のカードに書かれているテキストが、解読できた”

としたら…どうなると思う？」

「っ！？ 馬鹿な…！！ そんな事、俺達に出来る訳が…ッ！！」

西条の言葉に、思わずいきり立つ白石は、そこである人物に注目する。

それは、西条の隣で今も中島とお喋りをしているマナだ。

「まさか西条…、マナが…！？」

「ああ。まだ確証は持てない…だけど、希望はある。神のカードに記されたテキストは、もしかしたら“精霊界の文字”なのかもしれない、って…」

「……！！」

なる程、と。

ここまで来て、白石はようやく納得した。

もし、マナが神のカードに記されたテキストを解読した場合、一時的に神のカードに手を触れる事が出来るかもしれない。

「ふうん…、面白い…！！」

白石は口元をニヤリと釣り上げ、言い放つ。

「明日のトリティニーグループの件、俺も同行させてもらおう」

「え？」

「興味深い内容だ。俺の決闘者としての血をたぎらせる……！！ 西条よ、何を言っても無駄だ。俺は行くと決めたのだからな！！」

「…白石。ああ！明日は、宜しくな！」

※

暗雲が空を覆う精霊界。

ここは、精霊界にある虹の都市と呼ばれる場所。

この都市は、宝玉獣と呼ばれるデュエルモンスターが生息する場所であり、ここからは様々な宝石が採掘される場所として有名な所である。

都市の中心地には、大きな闘技場が建てられており、採掘だけでなく、デュエルという文化も栄えている事が窺える。

しかし、静かだ。

今のこの都市にデュエルモンスターの姿は、全くと言って良い程見当たらなかった。

荒れ果てた建築物。

薙ぎ倒された草木。

そして、至る所に転げ落ちている宝玉の数々。

都市の中心地にある闘技場でも、それは同じだった。
しかし、違っている点が一つだけ。

それは闘技場に、二人のモンスターの姿が確認できる事だ。

一人はスレンダーな体型をし、腰まで伸びた艶やかな髪を靡かせる美女。

そしてもう一人は、彼女の腰位の背丈で、手入れがされていない長い髪をした、薄汚れた感じがする少女。

銀の髪をたくしあげ、地に転がる宝玉を拾い上げる美女は、隣に立つ少女に話し掛ける。

「そう言えばクルス…あの話し、聞いた？」

「……」

尋ねられたにも関わらず、クルスと呼ばれた少女は口を開かない。
しかし、それに構う事なく、銀髪の美女は話しを続ける。

「人間界で、邪帝のヤツがやられちゃったみたいよ。良い気味だと思わない？」

「…他人の不幸は…蜜の味」

ポツリと、そう呟いたのは、クルスと呼ばれた女性だ。

そんな彼女は、手で顔を隠すようにしながら、上目遣いでその美女を見上げた。

「貴女もそう思う？フフ：最高に笑い種だわ。私、邪帝ってキラいなよね。堅物で頭でっかちで：何をやるにしても邪神、邪神、邪神様って：口うるさいったら、ありゃしない！」

拾い上げた宝玉を、まるで石ころの様に放り投げる銀髪の美女は、隣で自分を見上げるクルスに向き直る。

「ねえ、一体どんなヤツが邪帝を負かせたのか：興味ない？」

艶めかしい笑みを浮かべる銀髪の美女に、クルスは顔を隠したまま、コクリと肯く。

「ここでの仕事、飽きちゃった：玩具：すぐ、壊れちゃうんだもん」

顔を覆う指の隙間から、クルスは辺りをぐるりと見渡す。

荒れ果てた闘技場の内部には、至る所に宝玉が転がり落ちていた。

「そうよね。まさか私も、こうも早く仕事が終わるなんて思ってもみなかったし：。この連中、齒ごたえ無さ過ぎだわ」

至る所に転がる宝玉の数々。

それは【宝玉獣】と呼ばれるデュエルモンスターが討滅させられた事を意味していた。

つまり、この虹の都市は、たった二人のデュエルモンスターによって壊滅させられたという事なのだ。

「…ねえ、ルイン…行こうよ。人間界に…」

クルスは、隣に立つ銀髪の美女、ルインに呟くように口を開く。

「あっちで、新しい玩具で…遊びたい」

「フフ…ええ、行きましようクルス。人間界に…」

ルインと呼ばれた美女は、妖美な笑みを細く浮かべながら、クルスの頭を優しく撫でる。

闇は動き出す。

西条たちの事情など知る由もなく、闇は自らの欲求を満たす為に、動き出す。

※

その日の夜。

西条は自室の部屋で、自分のデッキを広げながら、唸るような声をあげていた。

テーブルに目一杯広がるカード。

それらを眺めながら、考え込む彼の隣で、マナはウキウキしながら

「ねえ、さいじょお、さいじょお。なにをそんな考えてるの？」

「んー…デッキを見直してんだよ」

「え…なんで…？」

「なんで…？って、なんで？」

「だって、さいじょお…デュエル強いじゃん。あの邪帝に勝っちゃう位なんだよ？今のままで、別に良いと思うんだけど？」

マナには、彼の行動が理解できなかった。

邪帝は、精霊界の中でも王と呼ばれる実力者なのだ。

その邪帝を打ち破ったデッキだ。

なぜ、それを今更変える必要があるのか、マナは分からなかった。

そんな彼女の疑問に、西条は真剣な表情で、視線をカードに向けながら

「…あのデュエル。俺は必死だった」

彼の脳裏に浮かぶのは、邪帝とデュエルをしていた時の事。

「余裕なんてこれっぽっちも無いって位に：俺は、全力で戦った。勝つには勝ったけど、でも：だからと言って、それで良い訳じゃない」

邪帝は言っていた。

自分の他にも、マナを狙ってくる者が現れるだろうと。

邪帝には勝てた。

だが、次にデュエルした時に、勝てるかどうか分からない。

もし、他の王クラスの実力者が現れた時に、太刀打ちできるか分からない。

（その事を、コイツは知らない。不安にさせない為にも、いつ、どんな時でも：お前を守ってやれる位に強くならなくちゃいけないんだ）

邪帝とのデュエルを終え、そう決意したからこそ、西条は自分自身^キと向き合うのだ。

「邪帝とのデュエルで、俺もまだまだって思ったからな。決闘者として、精進したいんだよ。俺は…」

「……そっか」

彼の話を聞き、マナは精霊界にいた時の事を思い出す。

魔術の修行をしている時、師匠も彼と同じ様な事を言っていた事を思い出す。

（お師匠サマも、自分から進んで魔術の修行をしたな…さいじょおも…決闘者として、こうやって修行してる。やっぱ、凄いよ。さいじょお…）

彼の背中と、師匠の背中が重なって見えたマナも、自分自身と向き合う事にした。

自分はこの世界で、神のカードと呼ばれる幻神獣を持ち帰らなければならぬ。

その為に、西条は資力してくれている。

ならば、次は自分が彼の力になってあげたい。

そう決意したマナは彼の隣に座り、一緒になって考える。

「…マナ？」

「わたしも手伝うよ。さいじょおのデッキ作り！どこまで…力になれるかどうか…分からないけど…」

意気込んで飛び込んだは良いが、自分の力に自信が無いのか、マナの言葉は語尾に近付くにつれて小さくなっていく。

しかし。

「…ありがとな、マナ。一緒に強くなろう！」

「…さいじょお」

一緒に強くなろう。

彼が、自分の気持ちを察したのかは分からない。

しかしその言葉に、マナは心の底から嬉しく感じていた。

「うん☆」

とびっきりの笑顔と共に。

動き出す闇 (後書き)

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の話で新たな敵が二人登場しました。

以前執筆していた時と、登場する敵が違ったりしていますが、物語の進行に影響を及ぼすような違いはないかと思えますので、この作品はこの作品として楽しんで頂けたらな、と思ってます。

最近、更新が不定期です。

まあ今に始まった事ではないのですが、この小説を執筆し始めた時は定期的に更新できていたのですが、仕事やプライベートの都合上、遅れてます。

その事については、素直に申し訳なく思っています。

そんなプライベート。

最近になって、フットサルをやり始めました。

近くにフットサルができる場所があるので、職場の人に誘われてやり始めたのですが、これがまたハードでして…(汗

そして今月に入って、今度はフットサルも兼ねながら、野球をやるうという事になりました。

運動自体は好きなので、「喜んで!!」と参加を表明しましたが、スポーツに掛かるお金がヤヴァイ事に…orz

さて、ここらで愚痴は終わりにして…

皆様に一度、簡単なアンケートを取ってみたいと思います。

内容は簡単です。

『この小説で登場する敵モンスターとして、誰に登場してもらいた

いですか?』といった内容です。

アンケートに答えてもらう際に、そのキャラが使用するデッキコンセプトを記載してくれると、大変ありがたいです。

感想板にでも、メッセージボックスにでも良いので、何かご希望があれば書き込んで下さい。

皆様と一緒に、作品を仕上げたい。

それが、僕が執筆する上で力になりますので、どうか宜しくお願いします。

再来、精霊界の王 白石 VS クルス

※

「さいじょお、行ってらっしゃーい！」

「気をつけてネ☆」

カードショップ『アリス』の入り口から、元気な二人の声に見送られる一人の青年、西条亨は、どこか照れくさそうにしながら、三上市の街中を歩いていく。

今日は学校で終業式がある。

しかし彼にとって、今日のメインイベントはそれではない。

自分を元気な声で見送ってくれる一人の少女、マナことブラック・マジシャン・ガール。

今日は彼女、そして友人である白石直也と一緒に、トリティニールグループにある神のカードに会いに行くのだ。

いつ精霊界から、邪神の手下が襲ってくるか分からないという不安はあるが、神のカードを見に行くという決闘者としての楽しみもある。

そんな理由から、今朝の西条はいつもより浮かれ気分だ。

大通りを抜け、河川敷に沿って進むと、同じ学校の生徒たちの数も徐々に増えてくる。

すると、西条の後ろから、いきなり肩をガシッと組んでくる人物

が現れた。

「うわっ…って、なんだ。白石か」

「ふうん…なんだ、とは随分な挨拶だな。西条よ、俺は今にも気持ちが高ぶってしょうがない…!! お前にも分かるだろう?」

「まあな…俺たち、いや…アイツにとって、今日はコッチの世界に来てから、大きく前進する日なんだ。それが神のカード…興奮するな、ってのが、無理な話しだよな」

そう。

先にも述べたように、今日はマナことマジシャン・ガールが、人間界にやって来て、初めて神と対面する日だ。

西条はまだ、神のカードを直に見た事がない。

そのせいもあって、今日の彼は普段よりも熱血が入っている。

熱血が入っているのは白石も同じ様で、今日の白石は、いつになく上機嫌な事が窺える。

「神のカード…前に一度、俺たちは学校の社会見学でトリティニーグループに見に行った事があるが…今でもあの時の感動は忘れられん!!! それが今日、再び神を拝む事になるのだ…!!! 昨夜は興奮の余り、俺は全く一睡もしていない!!!」

「遠足前の子供かよ、お前は…。でも、そうだよな…お前は前に一度、神のカードを見た事があるんだよな…」

どこか羨ましがげな言葉を放つ西条に、白石は不思議そうな顔をして

「ム、どういう事だ？お前も学校の社会見学で、見に行った事があるだろう？」

「…俺、あの日は風邪引いて寝込んでたんだよ」

そう。

西条の学年の生徒たちは既に一度、神のカードを見た事があるのだ。

風邪を引き、欠席した西条を除いて…。

「ム、そうだったか？だが良いではないか。今日はこれから、神のカードに会えるのだからな！！」

「ああ。経緯はどうあれ、その事はアイツに感謝しないとな」

マナの一件が無かったら、もしかしたら自分は神のカードを見る機会が、一生無かったかもしれない。

そう思うと、マナに感謝したい気持ちが湧いてくる。

「ふうん…。そうだな」

しばらく二人で話しながら登校していると、二人は前を歩く見知った人物の背中を発見した。

やや小柄な体型をした、お調子者の愉快的な仲間。

二人は早速、その人物に声をかけた。

「よう、結締！って、お前どうしたんだよ、その怪我！？」

「手ひどくやられたみたいだな…相手は誰だ？」

前を歩いていた結締智恭に声をかけた事で、二人は彼の様子に目を大きく見開いた。

頬はやや腫れており、ガーゼが上から貼られ、腕には包帯を巻いていた。

いきなりそんな姿を見ては、驚くな、という方が無理な話だ。心配する二人の気持ちを察してかは分からないが、結締は普段と何ら変わらない様子で、笑顔で二人に応えた。

「オィッス！！ 何て顔してんだにゃ。この傷とかなら、下手な心配は要らないぜよ。大袈裟に医者が巻いてっただけだぜい」

ケラケラっと笑う結締。

小柄な体格だが、結締はこう見えて結構タフな人物である。

中学校からの付き合いだからこそ知っているが、三人で他のグループと喧嘩した時など、結締は何度でも立ち上がり、相手に挑んで行った位にタフなのだ。

「まあ：お前が大丈夫って言うんなら、大丈夫なんだろうケド：」

「ふうん：久々に喧嘩でもしたのか：だがなぜ俺たちを呼ばなかった？」

「いやいや：喧嘩って言っても、今回ばかりは応援を呼ぶ余裕が無かったって言うか：西条ちゃん」

それまでケラケラしていた結締の表情が、鋭い視線へと変わる。
それだけで、彼がこれから話す事が真剣なんだという雰囲気伝わった。

「昨日の事だ。この怪我もソレに関係しているんだが：西条ちゃんや白石さんだから話すぜい」

ゴクリ：と、二人は同時に息を呑む。

「：昨日、俺ア精霊界から来た変なヤツとデュエルした」

「なにっ!？」

「精霊界からの敵だと!？」 となると、貴様の怪我は、その時のデュエルで：!？」

結締の言葉に、西条はショックを受けた。

マナに出会ったのは一昨日の夜。

その日の内に邪神の手下はマナを襲い、自分はデュエルに勝利して事なきを得た。

しかし、一昨日に続いて、昨日も精霊界からの敵が現れたというのだ。

自分が傷付くのは構わない。

しかし、友人である結締に怪我を負わせてしまった。

罪悪感、後悔の念が、西条の中に渦巻いていく。

「デュエルにゃあ勝ったから良いものの、アレが精霊界のデュエルなんだにゃ。西条ちゃん、アレ相当キツいな」

「…ごめん、結締…。お前にこんな怪我をさせちゃって」

「？なくに謝ってんだよ。俺ア、アイツが気に食わなかったから、デュエルしただけだぜい。西条ちゃんが謝る事ア、全然ないぜよ」

「…結締」

「所で結締よ。貴様は誰とデュエルをしたのだ？精霊界からの敵とこののであれば、やはりマナが狙いだっただろう」

白石の言葉で、西条はキツと表情を引き締める。
精霊界からの敵。

それが邪神の手下であるというならば、結締からの情報は聞き逃さない。

「確かにマナちゃんを狙ってやがったぜい。ただ…邪神の手先、つて訳でも無かったみたいだにゃ」

「…どういう事だ？」

「名前は聞いてねえから知らねえケド…なんかマナちゃんに求婚する為に、わざわざ精霊界から来たみたいだぜい？」

「……………は？」

「いや、だから！？ マナちゃんの追っかけだぜい、追っかけ！まあこの俺に喧嘩を吹っかけて来たのが、あのチビデブの運の尽きだった訳だにゃ」

「…邪神の手下じゃ…ない…」

結締の報告を聞き、西条は腕を組ながら考える。

ヤツらは、マナが人間界に来た直後には、時を同じくしてこの世界にやって来た。

それもマナ曰わく、王と呼ばれる実力者が、だ。

王と呼ばれる実力者を打ち返した事で、向こうで何か動きに変化があったのだろうか？

王が負けた事で動揺し、次が遅れているのか？

それとも、もう既に、この世界にやって来ているのだろうか？

「結締。そのデュエルモンスターからは、他に何か情報を聞き出せなかったか？例えば、精霊界での邪神たちの動向とか…」

「へ？ いや…アイツがデュエルで負けた途端、いきなり消滅しちゃったからにゃ〜。聞き出すも何も、そんな暇ア無かったぜよ」

「…そうか」

それならば仕方ない。

情報を聞き出せなかったのは痛手だが、警戒するに越した事はない、というのが分かっただけでも収穫だろう。

精霊界の話題になった事で、結締は辺りをキョロキョロと見渡しながら、ウズウズするように西条に尋ねた。

「そう言やア…今日はマナちゃんはどうかしたぜよ？一緒に登校してないのかにゃ〜？」

「一緒に登校って…」

結締の言葉に渴いた笑みを浮かべる西条。

先程の精霊界からの敵、という件がある限り、常に一緒に居た方が良いのかもしれない。

しかし、学校の生徒でないマナを、校内に連れてきても良いのだろうか？

身分証など持っていない為、素性を尋ねられた場合、彼女はきつと混乱するだろう。

「アイツは…俺たちが学校に行っている間、中島さんの所で預かって貰ってる。中島さんも、アイツの事情を知る人だから」

マナがこの世界に来た初日。

西条はマナを一人にした際に、彼女は敵に襲われた。

一人にしては危険だ。

そう判断した西条は、自分が学校に行っている間、カードシヨップ『アリス』にて、店長である中島に預かって貰う事にしたのだ。オカマで、見た目は変質者であるが、中島ほど常識ある大人はいない。

信用に足る人物であるからこそ、西条は早速、登校がてらアリスに寄ってきたのだ。

「じゃあ今日の学校が終わったら、俺も西条ちゃんと一緒に、マナちゃんを迎えに行くぜい！！俺アもつと、マナちゃんとお近づきになりたい！！」

「…ふうん、分かり易いヤツだ」

結締の熱い気持ちを察した二人。

しかし、今日は学校が終わった後、マナを連れて用事があるのだ。ただ迎えに行くだけではない。

西条は白石と視線を合わせ、アイコンタクトで確認し、結締に今日の事を話す事にした。

「なあ、結締。実は…今日、学校が終わってからなんだけど…」

「…?」

※

開店前のカードショップは忙しい。

開店と同時に、客を店内に招く事が出来る様に、仕入れた商品の確認や、店内の配置、整頓、清掃など、大忙しだ。

しかし、このカードショップ『アリス』の開店時間は正午からだ。まだ時間に余裕が有り余る店長の中島は、事務所にてマナと二人で、モーニングコーヒーを堪能していた。

ズズズイっと、優雅にマスク越しでブラックコーヒーを飲む中島を、対面に座るマナは不思議そうな顔で、じっと見つめる。

流石にじっと見られながらコーヒーを飲む事に抵抗があった中島は、自分を観察するマナに尋ねてみる事にした。

「じーーーーー…」

「マ、マナちゃん、どうしたの？アタシの顔に、何か付いてる？」

「うん。マスク。じーーーーー…」

「…あの、マナちゃん。そんなに見つめられると、流石にアタシでもコーヒーが飲みにくいんだケド…?」

「うん、知ってる。じー…」

「…あのネ、マナちゃん。何か気になる事でもある? 言ってくれなくちゃ、分からないワ…」

コーヒークップを握る手をプルプルさせながら、中島は何とか優しい口調で尋ねる。

そんなマナの口から出てきた言葉は、何とも素朴な疑問であった。

「うん。てんちょーさんも、さいじょおと同じだな…って」

「西条ちゃんと、同じ?」

何が同じなのか疑問に思った中島であったが、ここに来て、彼女の視線が、自分の飲むコーヒーに向けられている事に気付く。

「もしかして、今アタシが飲んでるコーヒーの事かしら?」

コクリ、と肯くマナ。

どうやら西条も、コーヒーはブラックを飲んでるようだ。

「それニガくて、わたし飲めないんだ。さいじょおが作ってくれる
甘いのなら、幾らでも飲めるんだケド…」

「アラ、マナちゃんはブラック派じゃナイのネ…ミルクとお砂糖を
用意しなくっちゃ☆」

中島はマナがブラックコーヒーを飲めないとは知らず、つい彼女
にもブラックコーヒーを差し出してしまっていた。

西条が普段、彼女にどんな分量でコーヒーを作っているのか知ら
ない為、彼女の前にミルクと角砂糖の入ったビンを、それぞれ用意
する。

「でもマナちゃん、ブラック・マジシャン・ガールなのに、ブラッ
クコーヒーは飲めないのネ☆マナちゃんに一本取られたワ♪」

「そのブラックは関係ないかも…」

マナは用意されたミルクを入れ、次々に角砂糖をポチャポチャと
カップに淹れていく。

「でもワタシ、今日をスツゴく楽しみにしていたのヨ♪もし、神の
カードに記されたテキストが、西条ちゃんの予測通りに精霊界の言
葉だとしたら…!! そのまま精霊界の文字が解読できたら…!!
アア!! これぞ正しく、歴史的瞬間ってやつネ☆もうダメ…ア
タシ興奮しちゃって、はちきれちゃいそう☆」

そう。

中島の言うとおり、下手をすれば今日は歴史に名を残す日、になるかもしれないのだ。

本当に神に記されたテキストが精霊界の文字だとしたら？

いつから精霊界の文字、神のカードはこの世界に存在したのか？
誰が、どういった目的で、作られたのか？いや、現れたのか？

神のカードが発見された遺跡と、精霊界とでは、何か繋がりはあるのか？

と、挙げればキリがない程に、様々な憶測が飛び交ってしまふ。

未知の言語の解説…というのは、歴史を知る上で、全人類のロマンなのだ。

大の大人である中島が、こうして興奮してしまうのも無理はない話しだった。

…が。

「マナちゃんには分かるかしら…この熱い胸の鼓動が…!! …っ
て、ちよっ!?! マナちゃん!?!」

感傷に浸る中島が目にしたものとは、マナに用意したコーヒード。
ブラックコーヒーでは苦くて飲めない、と言った為、ミルクと角
砂糖の詰まったビンを渡したのだが…。

「どれだけ角砂糖を入れてるのヨ!? コーヒーに浮かぶ角砂糖のピラミッドなんて、アタシ初めて見たワ!!!」

「ふえ? だって…どれだけ淹れたら良いか分からないし…」

「そんな砂糖の山なんて飲めないわヨ!? マナちゃん、糖尿病になっちゃうわヨ!」

浅はかだった、と中島はこの時思った。

彼女は精霊界の住人であり、人間界の常識には疎いのだ。

「そんな甘いのか? ホントに…ゴクンッ、ぶうううううう!!
!??」

「アアッ!? 辺りがマナちゃんの噴き出したコーヒーまみれに!
! マナちゃん、大丈夫!」

この時初めて、中島は西条の苦勞を理解した。

※

一年間の学校行事の前半が終わり、遂に夏休みが訪れる。
夏休みとは、太平洋高気圧支配下での授業が暑熱により困難なの

で、その間を休業とする為とされている。

その間生徒たちは、各々で学校では体験する事のできない事への挑戦や、自己学習に励む事が望ましい。

しかし、当の高校生たちの中で、その内容を深く理解している者はどれだけいるのだろうか。

「うっシ！！ 通知表も貰い、遂に俺たちの夏休みが始まったぜよ！！」
ところで白石さん。今年の夏休みは、何かやる事ってあるのかにゃ〜？」

「ふうん…夏の風物詩といえば花火、甲子園、お盆、祭り、バーベキュー、海、プール、水着の美女、山、キャンプ等々…挙げればキリがない。だが、俺が今年の夏にやる事は既に決まっている！！
徹夜でエロゲー三昧！！ これしかないっ！！」

どうやら白石は、やはりと言うべきだろう。

「夏休みの本質を理解していない様である。」

「アウトドアから、一気にインドアな宣言だぜい…。ま、白石さんらしいっちゃ、らしいわな」

終業式を終え、帰りの身支度をする結締や白石は、いつもよりハイトテンションだ。

これから長い夏休みなのだ。

理由はどうあれ、浮かれない学生など、そうはいないだろう。

「俺は今年の夏は、海に行ってみたいぜよ……!! マナちゃんの水着姿、俺ア是非とも拝見したいぜい!! そう言う訳だから西条ちゃん!!」

「はい？」

自分の席で荷物を纏めていた西条は、不意に話しかけられた事でキョトンとなる。

「行こうぜ、海!! というよりマナちゃんと一緒に!! というか西条ちゃん是要らねえ。俺とマナちゃんだけで良い!!」

「ヲイ……なに言ってるんだお前は」

青春に燃える結締の声を、ヤレヤレと溜め息混じりに受け流す西条。

彼の様子から、西条は悟る。

ああ……当分の間、結締からはマナの事で色々と言われるんだろうな」と。

「それより二人とも、準備は出来たのか？これから俺たちはアリスに行つて、アイツを迎えに行かなくちゃならないんだからな」

アイツ、とはマナの事だ。

これから西条たち三人は、カードショップ アリスに居る彼女を迎えに行かなければならない。

今日はマナを含めた四人で、トリティニーグループに向かい、神のカードと対面する予定なのだ。

「なに言ってるんだ西条ちゃん？」

「俺たちは、とっくに準備など済ませてあるわ。いつまで待たせる気だ、貴様は？」

「へ？」

言われてみると、既に二人は鞆を持ちながら、廊下の前で待機しているではないか。

おかしいな…。

確かにさっきまで、あの二人も準備をしていた様に見えたのは、気のせいだったのだろうか？

「まだ時間が掛かる様なら、俺たちは先に行くぞ」

「マナちゃんには、遅刻って伝えておくぜい☆」

「なっ!?! ちょっと待てお前ら!! 俺も今行くって、うわたあぁ!?!」

「きゃあああ!!」

急ぎ、荷物を仕舞い込み、廊下の向こうに消えた二人を追おうとする西条。

しかし、慌てて席を立った拍子で、隣を通過しようとしたクラスメートとぶつかってしまったのだ。

「いたた…ちょっと、西条くん!危ないじゃない!って、ああ!」

「悪い、委員長。…って、おお!」

思わず驚愕の声をあげる二人。

その理由は明白だった。

委員長と呼ばれた女性は、最後のホームルームが終了した際、クラス全員の提出物を職員室まで届ける様に言われていた。

その為、彼女の両手には、山のようなプリントが抱えられていたのだ。

その山が西条とぶつかって、倒壊した今…。

バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ…!!!!

「ああ!?! 先生に届けなきやいけないプリントがあ!?!」

無情にもプリントは教室中に四散し、残っていた生徒たちは、その壮絶な光景を目の当たりにしている。

ハッキリ言って、飛び交うプリントの量は、半端ないくらいにヒラヒラと宙を舞っている。

そして、次の瞬間…。

プリントという紙吹雪の中、教室中に委員長の激昂が響き渡った。

「西条くん!! あなたが全部回収しなさい!! 元は全部、あなたの責任なのですからね!!」

「ええええっ!!??? そ、そんな馬鹿なああ!!!!」

どうやら、本当に遅刻が確定した西条。

そんな彼の事情を知らないクラスメートたちからは、暖かい同情の視線だけが送られてきた。

※

「ム、なにやらクラスの中が騒がしいな…?」

「どうせ西条ちゃんが、また何かやらかしただけに決まってるぜよ」

「ふうん…そうだな」

西条や委員長の叫び声は、校庭を歩く白石たちの耳にもハッキリ聞こえてきた。

が、そこまで野次馬根性を持ち合わせていない白石は、結締と共にズンズンと進んでいく。

どうやら西条のトラブルは、学校では日常茶飯事らしい。

「しかし、マナちゃんが神のカードを解読できるかもしれねえとは…もしそれが本当なら、滅茶苦茶ワクワクしてくるぜい!!」

「精霊界の文字か…以前、俺たちが社会見学に行った時には、その様な考えには至らなかったが…」

それも全て、一人の少女がキツカケだった。

そして、その少女の為に立ち上がった一人の青年のおかげで、今がある。

「精霊界ねえ…。夢があつて良いじゃねえの！それにしても、精霊界から来たのがマナちゃんで良かったと、心からそう思うぜい」

「同感だ。気色悪いモンスターや、ガチムチな男がやって来たら、俺だったら容赦なく叩き潰していただろう」

「違いないねい」

興奮する二人は、いつも以上に饒舌だった。

それ程、二人からすれば、これからの予定が楽しみで仕方ないのだ。

すると…。

「…?」

「ム…」

アリスへと向かう途中、二人は同時に足を止めた。

それは、自分たちの前に立つ、二人の人影に気付いたからだ。

普段なら、前に誰が立っているように、避けて歩くだけで何ら問題でないし、気にも止めない。

しかし、今回ばかりは止まらざるを得なかった。

「フフ…」

「クス…」

目の前に立つ二人の人影。

それは、白石や結締が思わず足を止めてしまう程、異様な雰囲気を出していた。

一人は、銀色の艶やかな髪を靡かせながら、妖美な笑みを向けて

くる美女。

そしてもう一人は、銀髪の美女の腰くらいまでの背丈で、ウェーブがかった髪をした、色白い少女。

二人とも、外を歩くうえで似つかわしくないドレスを身に着けており、その存在感を浮き彫り立たせていた。

どうやら自分たちの存在に気付いたらしい、結締と白石を眺め見て、銀髪の美女は艶めかしい動きで、二人の前に迫る。

「ねえ、ボウヤたち…」

銀髪の美女は、聞く者を誘惑するような大人びた口調で二人に話しかける。

「ボウヤたち、今…“精霊界”って、言ったわよね？」

「っ!？」

精霊界。

他人の口から出たその言葉に、結締と白石は一瞬の内に表情を引き締めた。

「は…精霊界？」

「何だソレは。悪いが、俺たちは貴様等なんぞに構っている時間は

ない。行くぞ、結締：」

強ばらせた表情のまま、銀髪の美女の隣を通り抜ける二人。

しかし、その足は再びピタリと止まる。

今度は銀髪の美女の仲間らしき少女が、二人の前に立ちはだかったのだ。

「…なんだ、貴様たちは？」

「…ウソは…いけないよ、おじちゃん」

「おじ…っ!？」

立ちはだかる少女は、下から覗き込む様に、白石や結締を狂気の眼差しで捉える。

「おじちゃんたち…からは…精霊界の匂いが、少し…する。どこかで…会った？」

「っ!？」

少女の言葉に、結締と白石は思わず言葉に詰まってしまった。

精霊界の匂い？

もし、この少女が言っている事が本当ならば、間違いなくマナとの接触が原因だろう。

そして、二人は悟る。

この二人こそ、西条が言っていた、精霊界での敵なのだ。

「あら、クルス…貴女がそう言うんだったら、今回のターゲットは当たり前だよ」

「おじちゃんたち、精霊界…知ってる。ようやく見つけた…!! 私、新しい玩具…!!」

ギン…ッ!!

クルスと呼ばれた少女から、鋭い視線が二人に向けられる。

思わず後ずさる二人は、不意に気付く。

いつの間にか自分たちは、銀髪の美女とクルスの二人に、挟み撃ちにされている事に。

「ボウヤたち、お姉さんたちに少し付き合ってもらおうわよ」

「クスクス…!!」

妖美な笑みを浮かべる美女と、不気味な笑い声を漏らすクルスに挟まれながら、結締は白石とアイコンタクトを図る。

（白石さん、気をつけろ！！ コイツら……！！）

（ふうん、コイツらが精霊界での敵か……面白い……！！ 俺が相手になってやろう……！！）

互いに肯き合う二人は、警戒心を剥き出しにしながら、彼女たちに付き合う事にした。

結締と白石を連れた二人は、人知れない三上市の路地裏へと姿を消した。

※

結締と白石、そして精霊界の敵がやって来たのは、三上市の郊外にある廃墟したビルの中だ。

ビルの中は薄暗く、湿っぽく、埃臭い。

鼻を刺すようなカビの匂いに、結締や白石は警戒心とは違った、怪訝な表情を作る。

銀髪の美女と、色白い少女に挟まれながら、二人は促されるままに階段を登る。

そこは、広く開けた大広間のような場所だった。

無数に割れた窓から差し込む日差しによって、部屋の明るさはある程度確保できる。

辺りをぐるりと見渡す結締と白石の二人を余所に、精霊界の敵である二人は、並ぶように二人の前に立った。

「こんな所まで連れてくるなんざ…えらく周到じゃねえの」

「ふうん…確かに。この場所ならば、応援を呼ぼうにも到着までに時間が掛かる。それ程、貴様らの話しは人前では聞かれたくない内容の様だな？」

ギンツ！！　　つと、鋭い視線を向ける白石だが、敵である二人の女性には狼狽える様子を見せる所か、それぞれに白石たちの反応を見て笑みを浮かべる始末である。

「…なにがおかしい？」

「フフ…別に、大した話をしようとしてる訳じゃないのよ」

「クスクス…」

「…どういう事だ？」

二人の態度が気に食わない白石は、全てを圧倒する様な視線を銀髪の美女に向ける。

「貴方たちが精霊界からこの世界にやって来た、魔術師の小娘と接触した事は、クルスを通して分かっているの。だから、魔術師の小娘の事を知っている…という前提で、話すわよ」

銀髪の美女は背筋を伸ばし、上からモノを言う態度で口を開く。

「邪帝ガイウス。先日、私たちの世界のデュエルモンスターがこの世界で敗れ、おめおめと帰ってきたわ。貴方たちの中で、邪帝ガイウスを倒したのは誰？」

邪帝ガイウス。

その名前に、結締と白石の二人は聞き覚えがあった。
それもそうだ。

件の邪帝ガイウスとデュエルしたのは、自分たちの仲間である西条なのだから。

「なんだ。どういった話しがくるかと思えば、只の敵討ちって訳かeny。どんな話しが飛び出すかと期待してたケド、ガツカリ拍子抜けだぜい」

「あら、勘違いされちゃ困るわ。別にアイツがデュエルに勝とうが負けようが、私たちにはどうだって良いの」

「むしろ、負けて来たから…凄く、良い気味…クスクス」

(…コイツら…!?)

二人の様子は、本当に邪帝を嘲笑う様な。

この二人にとって、邪帝は仲間ではないのか？

「邪帝は、お前たちの仲間じゃないのか？ 仲間の敗北を笑うなんざ、気が知れないぜい」

「何と言ってくれても結構よ。で、貴方たちの中で、邪帝を倒したのはどちらかしら？ 傲慢な態度のボウヤ？ それとも、ちんちくりんなボウヤかしら？」

「ちんちくりんだとオ！？」

「ふうん…あながち間違いではない。結締よ、牛乳を飲め。俺も少しは協力してやろう」

「…クスクス」

二人の様子を、まるでTVでも見ているかのように楽しむクルス。そんな彼女の様子に軽く舌打ちする白石は、一歩前へと進み出る。

「…フフ。ボウヤがそうなの？」

「いや、俺ではない。ましてや、そこに立っているちんちくりんでもない…！！」

「ちよっ!?! 白石さんまで…ちんちくりん…」

ダンッ!! っと、地を踏みつける白石は、堂々と。
そして、大胆にも言い放つ。

「邪帝を倒したのは俺たちではない。ヤツの名は西条!!」

「……」

「だが、精霊界の王と呼ばれる者も、大した実力では無い様だ。たかが西条^{ヤツ}如きに負けるのだからな…!!」

「あら、その言い方だと…西条ってボウヤよりも、自分の方が強い。みたいな言い方ね」

「当たり前だ!!」

クワッ!! っと、目を見開く白石。

そんな彼の様子を見ていたクルスも、彼の闘気に当てられ、その存在感をより強くしていく。

「クルス。今回の玩具、貴女にとって本当に当たりかもしれないわよ?」

「うん…!! ねえ、おじちゃん。わたしと…デュエルしようよ!!」

「っ!？」

グゴゴゴゴゴ…ッ!!
ゴバウツッ!!

圧倒的な邪気を放つクルス。

クルスの足元から広がる魔法陣は、一気に白石を捕らえ。
精霊界のデュエル。

それを初めて目の当たりにした白石は、思わず一步後退した。

「コレは…!？」

「気を付けろ、白石さん!! このデュエルは、ダメージが本物になるぜよ!!」

結締の脳裏に蘇るのは、成金ゴブリンとデュエルをした時の事だ。
今思い出すだけでも、あの時に受けたダメージが全身を襲う様な…。

しかし、フィールドに立つ白石は。

「ふうん…結締よ。貴様はこの俺が、ドコの誰とも知れない輩に負けると思っているのか？」

「…白石さん」

「クルスと言ったか？ 貴様とのデュエル。この俺が受けてやる！！
さあ、デュエルだ！！」

白石VSクルス。

二人のデュエルが、今始まる。

再来、精霊界の王 白石 VS クルス (後書き)

この小説を読んで下さり、誠にありがとうございます。

そして、前回の後書きにてお聞きしたアンケートに答えて下さった方々。

この小説を書き上げるうえで、大変参考になりました。

本当にありがとうございます。

さて、今回はいよいよ白石とクルスとのデュエルです。

前回の白石のデュエルは、呆気なく終わってしまいましたが、今回はどうなるでしょうか？

物語の進行速度は、ここまで比較的緩やかに進めてきましたが、近々急展開となるつもりで構成しております。

今回の内容でもそうですが、もし、文章表現が伝わりにくかったり、各描写で不可解な点がございましたら、教えてもらえるとありがたいです。

それにしても、エクシーズ召喚。

この小説では、『頂を目指す者』の過去という設定ですので、エクシーズモンスターの登場予定はありませんが…。

実際のデュエルでは、最近のエクシーズは強いなあ…と、思わせられました。

身近な所では、リアル結締くんが『セイクリッド』を組んできました。

セイクリッド・プレアデスの、相手ターンでもフィールド上のカードをバウンスする効果。

あれ、めっちゃつよい：

その時に僕が使用したデッキが『HEROビート』だったのですが、ポンポン戻されてボッコボコにされました。

それに対抗すべく、僕は『ヴェルズ』を揃えました。
ブリューナクのヴェルズ態である『ヴェルズ・バハムート』が強い。

リアル白石くんとデュエルした時、相手のハイパー・ライブラリアンや真・六武衆シエンを、バハムートの効果でコントロール奪取。奪われたモンスターがモンスターだけに、白石くんはボッコボコに負けました。

まあ白石くんは、ブルーアイズデッキを使った時が真骨頂なんですけどね。

この小説を読んでくださっている皆様は、いったいどんなデッキを使っていますか？

魔轟神の進撃 青眼の咆哮

※

三上市の郊外に立つ、取り壊し予定の廃ビル。

元は何かの会社だったのだろう、そのビルは、コンクリートの床や壁には亀裂が走っており、入り口には立ち入り禁止の札が掛けられている危険な場所でもある。

その廃ビルの中には、四人の人影が見受けられる。

白石直也と、結締智恭の二人だ。

三上市の第七デュエル高等学校の生徒である二人は、この場所が危険である事を知っていた。

では何故、危険を承知でこの場所に立っているのか？

それは、目の前に対峙する、二人の女性が原因だ。

初めに言ってしまうえば、二人の女性は人間ではない。

精霊界からやって来た、デュエルモンスターだ。

二人の内、クルスと呼ばれる色白い少女は、デュエルのターゲットを白石に定め、臨戦態勢に入っていた。

少女とは思えない、狂気に満ちた瞳をぶつけてくるクルスに、白石も鞆から決闘盤を取り出し、迎え撃つ姿勢をとる。

そんな二人のデュエルを見守る形となった結締は正直な話し、嫌な予感がしていた。

それがこのクルスと呼ばれた少女からくるものなのか？

それとも、もう一人の銀髪の美女からか？

いずれにせよ、気は抜けない。油断したら、一瞬でやられる……!!
警戒心を剥き出しにする結締は、銀髪の美女に対し。

「お前さん等が、邪帝ってヤツの敵討ちのつもりじゃねえ……ってんなら、何でこの世界に来た？ マナちゃんが狙いか？ なら何故、直接マナちゃんを狙わねえ？」

「あら、ちんちくりんなボウヤは、私たちの目的が気になる？」

尋ねられた銀髪の美女は、結締を小馬鹿にするような口調で、卑しい笑みを浮かべる。

「別に、私たちは魔術師の小娘はどうだって良いのよ。私はただ、クルスのお供で来ただけ」

銀髪の美女がそちらを向いた様に、結締もこれからデュエルを始めようとするクルスに視線を移す。

「私たちは、精霊界で色々なモンスターとデュエルをしてきたのだけれど、アツチじゃ物足りなくなってるね。そんな時よ……邪帝が人間界で負けたという報告が入ったのは」

「……!!」

銀髪の美女の話しの下りを聞き、結締は「まさか…」と息を呑む。

「フフ…。あの子は、もっと強い敵との戦いを純粹に臨んでいたわ。だから、私が連れてきてあげたのよ。あの子の飢えを満たしてあげる為にね」

「…ただ単に、デュエルしに來ただけだったのか？それを素直に信じてるのも思っているのかにゃ？」

真剣な表情でいながらも、普段の口調で平静を装う結締。

述べた言葉通り、彼女の話した内容を、結締は信用する事ができなかった。

彼女やクルスは、仮にも邪帝の仲間である。

敵討ちが目的でなくとも、別の目的があるに違いない…と、結締は警戒する。

彼女たちは、この世界にやって來たマナの目的を知らない。

ならばこのデュエルを通して、自分たちに隠している情報を吐かせてくるかもしれない。

もし、そうだとするならば、このデュエルは必然と負ける訳にはいかない。

全てはデュエルを受けた、白石に掛かっている。

結締はそう思っていると、銀髪の美女はやはり、小馬鹿にするような口調で口を開いた。

「無理に信じて貰う必要はないわ。ボウヤたちが警戒するのも、無理はないしね」

「……」

「フフ…。とりあえず、今は二人のデュエルを楽しみましょう。フフ…!!」

銀髪の美女の不気味な声に包まれる空間の中、白石とクルス。

二人のデュエルが幕を開けた。

※

遂に始まった白石とクルス、二人のデュエル。

二人を覆うように、足元に展開された漆黒の魔法陣に包まれる中、先攻を奪取したのはクルスだ。

小型の薄汚れた決闘盤らしき物を腕に装着したクルスは、狂気の眼差して白石を視界に捕らえる。

「いくよ、おじちゃん。わたしの…ターン!!」

「くっ…、誰がおじちゃんだ…!!」

手札を五枚用意し、カードをドロートしたクルスは、白石のツツコミなどに聞く耳は持たない。

今のクルスの思考は、ただ純粹に…。

純粹に、デュエルで相手を叩き潰す事のみで占められているのだ。

「クスクス…わたしは、チューナーモンスター『魔轟神レイヴン』を…召喚…!!」

【魔轟神レイヴン】

星2／光属性／悪魔族

ATK／1300 DEF／1000

「効果・チューナー」

自分の手札を任意の枚数捨てて、その枚数分のこのカードのレベルをエンドフェイズ時まで上げる事ができる。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、この効果によって捨てた手札の枚数×400ポイントアップする。

クルスのフィールドに赤黒い翼を生やした、不気味な悪魔モンスターが召喚された。

「そして…魔轟神レイヴンの、効果…!! 手札を任意の枚数捨てる事で…エンドフェイズまで、レイヴンのレベルを、捨てた手札の枚数分…上げる」

クルスはギョロリと、自分の手札を確認し、その口元を一瞬、ニヤリと釣り上げる。

「そして、捨てた手札の枚数分：レイヴンの攻撃力は、エンドフェイズまで400ポイントアップする。：わたしは、手札を1枚：墓地に捨てる。これで：レイヴンのレベルは、1つ上昇：！！！」

【魔轟神レイヴン】

星2 ↓ 3

ATK／1300 ↓ 1700

効果により、レベルと攻撃力を上昇させたクルス。

しかし、クルスのプレイを間近で見ている白石は、レイヴンの効果を鼻で笑う。

「ふうん…効果を使っても、所詮は貴様のターンのエンドフェイズまで。俺のターンが来れば、貴様の雑魚モンスターなど、粉碎してくれるわ！！！」

「クスクス…」

「：果たして、ボウヤの思い通りになるかしら？」

白石の放った言葉を返すように、デュエルを観戦する銀髪の美女

は不敵な笑みを浮かべる。

その言葉に白石や結締が怪訝な表情を浮かべる中、クルスは自分の墓地から、一枚のカードを取り出した。

「慌てちゃ駄目だよ、おじちゃん……!! わたしは、効果によって手札から捨てられた……『暗黒界の軍神 シルバ』の、効果を……発動……!!」

【暗黒界の軍神 シルバ】

星5／闇属性／悪魔族

ATK／2300 DEF／1400

「効果」

このカードが他のカードの効果によって手札から墓地に捨てられた場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。相手のカードの効果によって捨てられた場合、さらに相手は手札を2枚選択し、好きな順番でデッキの一番下に戻す。

「このカードが……効果によって、手札から捨てられた場合……墓地から特殊召喚する。おいで、シルバ……!!」

ズゴゴゴゴ……!!

魔轟神レイヴンの効果で捨てた手札は、暗黒界の軍神 シルバだった。

それぞれの効果のシナジーを活かした展開に、白石は「ほう……」と声を漏らす。

「ただ単に、手札を消耗してただけでは無いようだな…!!」

「クスクス…!!　いくよ、お　じ　ち　ゃ　ん　!!」

クワッ!!　っと、クルスの瞳が再び狂気に満ちた時、闇の力が奔流する。

「レベル5の…暗黒界の軍神　シルバに、レベルが3となった…魔轟神レイヴンを…　チ　ユ　ー　ニ　ン　グ　!!」

クルスのモンスターたちの力が一つになり、^{レベル}辺りを眩い閃光が包み込む。

「古に伝わりし魔の系譜…今ここに蘇れ!!」

カッッ!!

「シンクロ召喚!　轟け『魔轟神ヴァルキュルス』!!」

【魔轟神ヴァルキュルス】

星8／光属性／悪魔族

ATK／2900　DEF／1700

「シンクロ／効果」

「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

手札から悪魔族モンスター1体を捨てて発動する。自分のデッキからカードを1枚ドロ―する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ズゴゴゴゴ…ッ！！

クルスのフィールドに現れたのは、八つ星の最上級モンスター『魔轟神ヴァルキュルス』だ。

漆黒の仮面の下から覗かせる不気味な眼が光り、辺りは重苦しい雰囲気包まれる。

「ふうん…攻撃力2900。だが、その程度で本気だというのであれば、とんだ期待外れだ」

クルスの攻撃力2900もあるモンスターを、鼻で笑う白石。
しかしクルスとて、このまま終わらない。

「焦っちゃ駄目…だってば。わたしは、ヴァルキュルスの特殊効果を…発動！！」

ヴァルキュルスの効果を発動させたクルスは、手札のカード1枚を掴み取る。

「この効果で…わたしは手札の悪魔族モンスターを捨てて…カードを、ドロー…！」

手札の入れ替えを行うクルスは、その手を再び墓地に伸ばす。

「そして、手札から墓地に捨てた悪魔族…『魔轟神クルス』の、効果…！！！」

【魔轟神クルス】

星2／光属性／悪魔族

ATK／1000 DEF／800

「効果」

このカードが手札から墓地へ捨てられた時、自分の墓地に存在するこのカード以外のレベル4以下の「魔轟神」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

「このカードが、効果で手札から捨てられた時…墓地から、レベル4以下の…魔轟神1体を、特殊召喚する。おいで…魔轟神レイヴン…！！！」

魔轟神クルスの効果により、再び現れた魔轟神レイヴン。

これでクルスのフィールドに、二体のモンスターが並んだ。

その様子を、デュエルを観戦する結締は、ゴクリと息を呑みながら呟く。

「…あのおチビちゃん。なかなかやるねい…!!」

「フフ…まだよ。クルスの力は、こんなものじゃないわ…!!」

銀髪の美女がそう述べたと同時。

クルスは、更に闇の力を解放しながら、声高に叫ぶ。

「いくよ…おじちゃん!!　これが…わたしの本気!!　レベル8の…魔轟神ヴァルキュルスに、レベル2の…魔轟神レイヴンを、チューニング!!」

「…っ!!　（レベル8のモンスターを、シンクロ素材にするだと…!?!）」

8+2=10

その高レベルのシンクロ召喚に、それまで余裕の態度だった白石は、思わず言葉を詰まらせる。

「古に伝わりし魔の系譜…主の名の下に…今、光臨…!!」

カッッ!!

「シンクロ召喚! 魔よ…轟けっ!! 『魔轟神レヴェアタン』!!」

【魔轟神レヴュアタン】

星10／光属性／悪魔族

ATK／3000 DEF／2000

「効果／シンクロ」

「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついたモンスターを3体まで選択して発動する事ができる。選択したモンスターを手札に加える。

カッッ…、カッッ…！！

ズズズズズ…！！

魔轟神レヴュアタン。

魔轟神の中で、最上位の存在であるモンスター。

朱に染まる長髪から覗かせる朱色の仮面。

金の装飾が施された、威厳と気品に満ち溢れた鎧。

そして、見るものの全てを畏怖させる、巨大な朱の両翼。

圧倒的攻撃力3000を誇る、まごうことなき魔轟神の王が、僅か1ターン目から光臨した。

「どう、おじちゃん…？わたしのモンスターに…勝てる！？」

「ふうん…攻撃力3000。ようやく及第点といった所か…。面白
い…!! この俺が粉碎してくれるわ!!」

クルスの狂気の眼差しに対抗するが如く、白石も自分の闘志を溢
れんばかりに放出する。

「クスクス…!! じゃあ… や っ て み せ て よ …!!
わたしは、カードを1枚セット…して、ターンエンド…!!」

「……」

クルスのターンが終了し、白石のターンへと移行する。

白石は考える。

今の自分の手札には、自身の最強カードである『青眼の白龍』の
姿はない。

先程は威勢良く言ったものの、手札のモンスターカードは、全て
下級モンスターであった。

「…俺のターンッ!! ドローッ!!」

シュバッ!! っと、鮮やかにカードをドローするも、白石は内
心、軽い舌打ちをする。

引き当てたカードはブルーアイズでなく、トレード・インのカー

ド。

これでは、クルスの魔轟神レヴュアタンの攻撃力に対抗できない。

「俺は、モンスターをセット！！ リバースカードを1枚セットし、ターン終了だ！！」

「…え？」

白石のプレイに、クルスは思わずキョトンとなってしまった。

彼は先程まで、自分のモンスターを鼻で笑う態度でいた。

それが、いざプレイを開始してみると、ただ守備を固めてきただけである。

これでは、拍子抜けするな。という方が無理な話しだ。

これにはクルスだけでなく、デュエルを観戦する銀髪の美女までもが、呆気にと取られていた。

結締に至っては、こめかみを押さえながら、反応に困っている次第だ。

「おじちゃん…わたしの事、バカにしてるの…？」

グゴゴゴゴ…！！

クルスにとって、白石のプレイは期待外れの何物でもなかった。

あれだけ人を興奮させておいて、結局は守備を固めるだけ。

「ふうん…どう思おうが貴様の勝手だ。別に俺は、このターンで貴様を倒す…とは宣言していないハズだ」

「…でも…っ！！」

「うるさい。何度も言わせるな…貴様のターンだ！！」

プチン

その瞬間、クルスは頭の中でナニかがキレた。

「…だったら…わたしは、容赦しない…っ！！ つまらない玩具な
んか…っつ、いらない！！ おじちゃんなんか…っつ、壊れちゃえ
！！」

※

全てが静かに感じられた。

部屋の外では、耳をつんざく勢いで雷が鳴り響いているのに、その部屋の中には吹きすさぶ風の音や、叩き割るかのような雷の轟音は、一切聞こえてこない。

現在その部屋の中では、邪帝ガイウスともう一人。

二人がいる場所は、精霊界に在るとある国だ。

その国の至る所には、まるで武家の家紋が印された旗が、いくつも立てられている。

その旗は当然、邪帝ガイウスともう一人のデュエルモンスターがいる部屋にも立っている。

二人がいる部屋の中は、まるで日本の戦国時代を模したような城の部屋の造りをしていた。

部屋の中を灯す蠟燭が、ゆらりと形を変える。

すると、もう一人のデュエルモンスターは、しわくちゃんな声ながらも、ハッキリとした口調で、邪帝ガイウスに言った。

「フハハ…!!　そうか。邪神は次にワシを選んだか…!!」

「…シエン。言葉を慎め…邪神“様”だ」

シエンと呼ばれたデュエルモンスターは、見た目そのままを言い表せば、戦国時代の武将その者であった。

畳の上で肘置きにもたれ掛かる姿勢で胡座をかき、丁寧に結った鬘に、和を重んじる着物。

歴史的人物を例に挙げるとするならば、織田信長といった所か。

そんなシエンは、邪帝ガイウスに言葉遣いを指摘されながらも、

まるで気にも止めずに、感情の赴くまま口を開く。

「フン、相変わらず堅いヤツよ。して…うぬが先程述べた言葉が、次のワシの獲物なのだな？」

「そうだ。人間界に向かった最上級魔術師の弟子…そして、その関係者の排除が、邪神様より仰せつかった任務だ」

「掃討戦か…フハハハハ！！ うぬを返り討ちにする程の者だ。さぞ、ワシを楽しませてくれよう…！！」

その笑い声は、心の底から楽しんでいるような。

シエンは立ち上がると、歪みきった表情で、床に座る邪帝ガイウス横に進む。

「ガイウス。うぬを退かせた人物…名は？」

「…西条だ。シエン、私は貴様の实力は高く評価している。だが…油断するな」

「…フン。誰にものを言うておる」

シエンは軽く、そう告げると、自信に満ちた笑みを浮かべながら部屋から出て行った。

恐らく、これから直ぐにでも人間界に発つのだろう。

部屋に取り残された邪帝は、深く息をつく。
それと同時に、考える。

この世界にはいない、かつて自分を打ち破った彼の事を。

「さあ、どうする西条。貴様は…ヤツを相手に…あの小娘を守りきれるか？」

細く微笑む不気味な表情は、蠟燭の灯りに照らされて、見た目以上に醜惡な笑みにもみえた。

※

【クルス】

LP／8000

「手札」

2枚

「モンスター」

魔轟神レヴュアタン

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

【白石直也】

LP／8000

「手札」

4枚

「モンスター」

裏側守備表示 1体

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

「わたしの…ターンッ!!」

クルスのターンが始まった。

白石はそんなつもりは毛頭なかったのだが、馬鹿にされたと思い込んでいるクルスは、血走った眼を更に充血させていく。

少女とは思えない、余りの気迫に、この建物までもが圧され、震えているかにも感じてしまう。

カードをドローしたクルスは、即行で三枚の手札から一枚を掴み取る。

「わたしは…『召喚僧サモンプリースト』を、召喚…!!」

【召喚僧サモンプリースト】

星4／闇属性／魔法使い族

ATK／800 DEF／1600

「効果」

このカードはリリースできない。このカードは召喚・反転召喚に成功した時、守備表示になる。1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、自分のデッキからレベル4モンスター1体等特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは、そのターン攻

撃する事ができない。

クルスのフィールドに、黒いローブを羽織った白髪の魔術師が現れた。

「サモンプリーストは、召喚されたターン…守備表示になる…。そしてわたしは、サモンプリーストの…第2の効果を、発動！！」

「…！！」

「手札の魔法カードを捨てて…デッキから、レベル4のモンスターを…特殊召喚する…！！　おいで『魔轟神獣ルビィラーダ』！！」

【魔轟神獣ルビィラーダ】

星4／光属性／獣族

ATK／1100 DEF／800

「効果・チューナー」

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、手札から「魔轟神」と名のついたモンスター1体を捨てる事で、その攻撃を無効にする。

クルスが手札の魔法カードを捨てると、彼女のフィールドにルビィラーダと呼ばれる奇怪な鳥が出現した。

これによりクルスの場には、モンスターが計三体並んだ事になる。

「い く よ ー！！ わたしは、レベル4のサモンプリーストに…
レベル4、ルビィラーダを… チ ュ ー ニ ン グ ツ！！」

サモンプリーストにルビィラーダ。

二体のモンスターの力が一つになり、再び辺りを眩い閃光が覆い
尽くす。

「全てを…闇で飲み込んで…！！ 絶望を…！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！！ 誘え…！！ 『ダークエンド・ドラゴン』！！」

【ダークエンド・ドラゴン】

星8／闇属性／ドラゴン族

ATK／2600 DEF／2100

「シンクロ／効果」

チューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター1体以上

1ターンに1度、このカードの攻撃力・守備力を500ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター1体を墓地へ送る事ができる。

ゴゴゴゴゴ…！！

閃光が収まると、そこにいたのは漆黒の竜。
その竜から放たれるどす黒いオーラは、まるで今のクルスと重な
ってみえた。

「ふうん…貴様もドラゴンを使うか。だが、その程度の攻撃^{パワー}力では、
俺を倒す事などー…」

「お じ ち ゃ ん は だ ま っ て な よ ！ ？ クス
クス…！！ わたしは、ダークエンドの…特殊効果を、発 動 ！
！」

【ダークエンド・ドラゴン】

A T K / 2 6 0 0 ↓ 2 1 0 0
D E F / 2 1 0 0 ↓ 1 6 0 0

クルスが言い放つと同時に、ダークエンドは溢れ出す闇の力を解
放し、その力を白石のモンスターに直撃させた。

ゴバウツ！！

「ヌ…っ！？」

「ダークエンドは…攻撃力・守備力を500ポイントずつ解放する
事で…相手モンスター1体を、闇の底へ誘う…！！」

「なに…っ！？」

「おじちゃんのモンスターなんか…消えちゃえ!!!」

白石の場に唯一出ていた裏側守備表示のモンスターは、ダークエ
ンドの闇に吞まれ、姿を消した。

「マズいぜい…これで白石の場に、壁となるモンスターはいねえ！
？」

「フフフ…口ほどにもないのね」

外野でそれぞれの反応を見せる結締や銀髪の美女。
しかし、当の本人はと言うと…。

「感謝するぞ、クルスとやら」

「…え？」

白石は自分のモンスターが墓地へ送られたにも関わらず、その姿
勢は堂々としていた。

思わずクルスはキョトンと、口を開ける始末だ。

「貴様が俺のモンスターを墓地へ送ってくれた事により、俺のデッ
キ最強モンスターを手札に呼び込む事ができる!!! 俺は墓地に送

られた『伝説の白石』（ホワイト・オブ・レジェンド）のモンスター効果を発動オー!!」

【伝説の白石】

星1／光属性／ドラゴン族

ATK／ 300 DEF／ 250

「効果・チューナー」

このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから「青眼の白龍」1体を手札に加える。

「この効果により俺は、指定されたモンスターを、デッキから手札に加える事ができる!! そのモンスターとは…ククク!!」

「ッ!? そ…っ、その…モンスターは…!!」

白石がデッキから抜き取ったカード。

それを見た途端、クルスはまるで、信じられないモノを見るような目で、一瞬だが血の気が引いてしまった。

デュエルを観戦する銀髪の美女はも、思わず言葉に詰まってしまふ位に。

白石が手札に加えたカード。

それは…。

「伝説の…ブルーアイズ…っ!! まさか人間界に来て、伝説の龍を見る事になるなんて…思わなかったわ」

「…ブルー…アイズ…!!」

カタカタ…と小刻みに歯を鳴らせるクルスに、白石は言い放つ。

「クルスとやら。今の内に宣言しておいてやる…。このターンで、俺を倒してみろ!!」

「っ!？」

初めは、彼が何を言っているのか理解できなかった。

しかし、彼の絶対な自信により、それは直ぐに耳に入ってきた。

「次の俺のターン、俺はブルーアイズと共に、貴様のモンスターを粉碎してくれる!!」

彼の言葉が何を意味するのか？

それは、このターンで彼を倒さなければ、次の彼のターンで、伝説の龍がフィールドに姿を現す事を意味していた。

「……う」

一度、気持ちしが沈んでしまっでは、そのモチベーションを再び高

めるのは至難の業。

クルスは自分でも気付かない内に、いつの間にか、白石のブルーアイズの影に萎縮してしまったのだ。

それはデュエルを観戦する二人にも、手に取るように分かった。
今のクルスには、先程までの威勢はない…と。

「…次のターンに…ブルーアイズ…が…!!」

「クルス。何をそんなに怯えているの？」

取り乱すクルスを見かねてか、銀髪の美女はハッキリと凜とした姿勢で立つ。

「目の前に集中しなさい。確かに、伝説の龍の力は計り知れない…でも、現状では貴女が圧倒的優位に立っているのよ」

【クルス】

LP／8000

「手札」

1枚

「モンスター」

魔轟神レヴュアタン

ダークエンド・ドラゴン

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

【白石直也】

LP／8000

「手札」

5枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

「今があのボウヤに、大ダメージを与えるチャンスよ。それに、相手が伝説の龍であっても…クルス。貴女なら大丈夫よね？」

「…ルイン」

凜としながら、まるで子供をあやし、励ますような口振りを見せる銀髪の美女、ルインに、白石や結締は驚いたような表情をしていた。

仲間である筈の邪帝ガイウスの敵討ちはどうでも良い、と言いつながら、クルスという少女に対しては、まるで真逆の態度で接しているのではないか？

その事を不思議に感じている最中、ルインによって徐々に冷静さを取り戻したクルスは、再びその眼に狂気の光を宿らせる。

「クスクス…そうだよ。わたしには、力がある…魔を轟かす力が…！！」

「……」

ギンッ！！　　っと。

少女のものとは思えない狂気の眼が、再び白石を捉える。

そして遂に、このデュエルで初めてのバトルフェイズが始まった。

「いくよ… お じ ちゃん！！ バ ト ル ！！」

クルスのバトルフェイズ。

その先鋒を勤めたのは魔轟神の王、レヴュアタンだ。

「魔轟神レヴュアタンで…　　ダイレクトアタック
！！　　続けて、ダークエンドもっ！！」

「っ！！」

ズズズ…！！　　グゴゴゴゴ…！！
バリッ！！　　バヂヂヂヂ…！！

二体の最上級モンスターからの直接攻撃に、白石の表情が、流れ落ちる冷や汗と共にキッ！！と引き締まる。

この時、白石は結締やマナが言っていた言葉を思い出していた。

（このデュエルでは、ダメージが現実のものとなって、プレイヤーを襲う……！！　それが一体、どれほどのモノなのか……！！）

今朝方、敵とデュエルしたという結締の容態。

そして、マナが見せてくれた、自身の怪我の痕。

（……ふうん。だが俺を……！！　他のヤツらと同じとするな……ッ……！！）

そして次の瞬間。

クルスの二体のモンスター総攻撃が、白石に直撃した。

「キャハハハ……！！　壊れちゃえ……！！」

「ッ……！！」

鳴り響く轟音。

吹き荒ぶ衝撃波。

クルスのモンスター達の総攻撃は、白石の身体を一瞬の内に、遙か後方のコンクリートの壁にめり込ませた。

バゴウツツ……！！

メキヤキヤキヤキヤ…!!

「……………ッッッ!!!!!!!!」

「しっ、白石さん!!??」

【クルス】

LP／8000

【白石直也】

LP／8000 ↓ 5000 ↓ 2900

声にならない絶叫。

聞こえてくるのは、クルスのモンスター達が放った凄まじい攻撃の余波と、彼女の狂気に満ちた、甲高い笑い声。

「キヤハハハハ!! これでおじちゃんのライフは後少し…!! いくら伝説のブルーアイズでも…クスクスッ、キヤハハハ!!」

「…くっ、白石さん…!!」

「キヤハハハ…え？」

しかし、甲高い声はピタリと止んだ。
それは何故か？

クルスが笑うのを止めたからだ。

では何故、笑うのを止めたのか？

それは、目の前に立つ漢が原因だった。

立ち込める煙や埃に映る、彼独特の大柄なシルエット。

それは一步、また一步と、こちらに歩み寄ってくるのではないか。

クルスは思う。

たしかに攻撃は直撃した筈だ。手応えもあったし、現に彼のライフも大幅に削られた。

では何故、彼はまだピンピンとしているのか？

ライフを全て奪いきった訳ではない為、まだ彼が生きているのは分かる。

だが今までデュエルしてきた相手は、この時点で戦意をなくし、気を失ってきた脆弱な者ばかりであった。

彼もそうだと思っていた。

だが、彼は違った。

埃を払いのけ、目の前に姿を現した彼は、苦痛な表情を浮かべ、頭から血を流してはいるものの、その眼は明らかに、以前よりも闘志に満ち溢れているではないか？

「なる程…コレが貴様等のデュエルか。流石の俺も、一瞬とはいえ気を失ったぞ…!!」

「……」

彼から放たれる気に当てられ、クルスも表情をキツ…!!と引き

締める。

外野からは結締の安堵の息が聞こえてきたが、白石は目の前に集中する。

これからの、自分のデュエルに集中する。

「…驚いたわ。人間って案外、丈夫なのね…」

「…そりゃ白石さんだけだぜい」

「…クルスとやら。貴様のバトルフェイズはそれで終わりか？」

白石は言い放つ。

クルスがそれに頷き、ターンの終了を宣言すると、彼は手札にある一枚のカードを見つめる。

（いくぞ、ブルーアイズよ。このデュエル…お前の力で、勝利をもぎ取るぞ…！）

※

暑い…という言葉が自然と口にしてしまうこの季節。

猛暑と呼ぶに相応しい三上市のアスファルトは、生肉でも置いたらこんがり上手に焼けるのではないか？と思える位に…。

そんなアスファルトの上を、汗だくになって歩く西条は、乾いた口をあんぐりと開きながら、三上市の街中を歩いていた。

学校で委員長とぶつかって片付けを手伝わされて、マナとの約束の時間に遅れてしまった西条は、急いで学校を飛び出した。

飛び出したは良いが、がむしゃらに走っても走っても、先に出て行った結締や白石の姿は見当たらず…。

もしかして、アイツらも走って向かったのかなと、ペースを上げて猛ダッシュをしたは良いが…。

この猛暑の中、学生カバンを肩に掛けながらの猛ダッシュは、流石に体力に自信のある西条さんでも堪えたらしく…。

今では、まるで遊戯王カードのアンデット族モンスター、ワイトが歩くようなヨボヨボの足取りで、街中をガクガクと進む始末だ。

「あちい…み…みじゅう…」

自分の隣を横切っていく通行人が、思わずギョッと振り返っていきのけに気付かないまま、西条は枯れ果てたゾンビ顔で、ようやくアリスへとたどり着いた。

ふらふらとドアノブに手を掛け、重力に身を任せながらドアを開けた彼を出迎えたのは、ヒンヤリと冷えた店内の空気だった。

「ただいまあ…って、なんだこの涼しいエアコンの空気は…！」

寒っ！？ 外と中の温度差がありすぎて、メツチャ寒っ！！ って、あれ？」

一瞬、エアコンの風が寒い位に感じた西条だったが、そんな感覚はすぐに消えた。

再び感じたのは、ムワっとした、暑苦しい人だかりの熱気だ。

ドアを開けた先に見えたのは、いつもの数倍はいるであろう、男性客がレジの前で犇めき合う異様な姿だった。

「夏休みに入った途端にこの客の数かよ……。すっげーな……」

レジ前に集る男性客の集団に、思わず一步後ずさる西条だったが、ここで帰る訳にはいかない。

今日はこれから、仲間たちと共に、マナを連れてトリティニークループに向かわなければならぬのだ。

そういう意味では、先に学校を出た結締や白石はドコだろう？ と、西条は店内をぐるりと見渡す。

しかし、二人の姿は見当たらず、視界に映るのは大勢の客たちの背中、背中、背中。

マナや中島は？ と、再び店内をぐるりと見渡すが、これもやはり見当たらず。

視界に映るのは大勢の客たちの背中、背中、背中。

いったい彼等はドコにいるのだろうか？

すると、西条が首を傾げた時だった。

レジ前に集る男性客の一人が、それはそれは嬉しそうな声で…。

「おおっ!! 買ったばかりのパックに、早速レアカードが入ってたぜ!! これもマナちゃんが選んでくれたおかげだよ!!」

「え? あはは…そう、かな?」

「そうに決まってるさ!!」

よく見ると、レジには店員が着るエプロンをしながら、何故かマナが中島と一瞬に接客をやっていた。

どうやらマナが選んだカードパックにレアカードが入っていたらしく、マナの愛嬌や可愛さも相俟って、かなり男性客たちからチャホヤされているらしい。

この人だかりの原因はアイツか…と思っていると、マナの隣に立つ中島は、客には聞こえないように、彼女の耳元でゴニョゴニョと…。

(ゴニョゴニョ…今よ、マナちゃん☆このお客サマに、この商品とこの商品をオススメしてみて☆)

「えっと…そのすてきなおにーさん。せっかくですから、このしよーひんと、あのセットはいかがでしょうか?」

「ええ!?! コレとコレを…!?!」

「かってくれたら、わたし、うれしーな！」

「買うぜ！！ マナちゃんの為なら、俺は買う！！」

「毎度ありヨ☆（やったワ♪マナちゃん、作戦成功ヨ☆）」

グッと親指を立てて、ニヤリと頷き合うマナと中島。
どうやら男性客に人気のあるマナを売り子にして、次々と商品を
売りさばいている様だが…。

（アイツ…すっげー棒読みだなヲイ！？ それに…親指をグツツて
…もっと見えない所でやれよ…丸見えじゃねえか）

二人の行動に軽く溜め息をつく西条は、とりあえずあの二人に声
をかける事にした。

でなければ、いつまで経っても出発できないだろう。

並み居る男性客を押しわけ、押し返され、掻き分けて。

あ、ちよつと誰かが肘をぶつけてきやがった。

うおっ、今度は蹴りかよ！？ あだっ！？ また肘が！？ うお、
おお！！ 後ろから引っ張るヤツ誰だ！？ も、戻されるうー！！

ぽーい、と。

まるでスゴロクの『ふりだしに戻る』が如く、西条は店の出入り
口に弾き出されてしまった。

「くっ！っ！　だぁぁぁぁ！　何だコイツら！？　俺は急いでるんだっつうのオオ！！」

西条は立ち向かう。

マナが目当ての男性客たちを相手に、彼女に会う為に……！！

西条は、たった数メートルの距離に、全身全霊を賭けて、勢い良く突っ込んだ。

「俺の邪魔を……っ！！　すんじゃねえええ！！」

※

【クルス】

LP／8000

「手札」

1枚

「モンスター」

魔轟神レヴュアタン

ダークエンド・ドラゴン

「魔法・罠」

リバースカード　1枚

【白石直也】

LP／2900

「手札」

5枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

リバーズカード 1枚

三上市の郊外にある廃ビルの中では、白石とクルスのデュエルが続いていた。

僅か3ターン目にして、ライフを大幅に削られた白石だが、彼の目は一点の曇りもなかった。

対するクルスは、幼い顔立ちながらも、彼に対する警戒心を剥き出しに、キツ…と、彼の行動を待つ。

そんな二人のデュエルを観戦する結締とルインの二人。主にルインは、白石が発する自信満々の雰囲気、口元を細く吊り上げた。

「あのボウヤは前のターン、ブルーアイズのカードを手札に加えた。モンスターも場に出揃っていないこの状況で、どうやって召喚するって言うの…」

「黙って観てりゃ、分かる話しだぜい」

ルインの疑問に答える結締。

素っ気ない返事に、視線のみをチラッと向けるルインに、結締は白石を見つめたまま、不敵な笑みで、こう告げた。

「白石さんなら、こんな状況：簡単にひっくり返しちまうぜよ。今の白石さんの手札は：満たされている：！！」

結締が言い放ったと同時に、白石は怪我をモノともせず、荒々しい動作でデッキからカードをドローした。

「俺のタアーンッ！！　ふうん：このカードを使うのも一興か」

ドローし、手札を六枚に増やした白石は、今の自分の手札を見て、ニヤリと心の底から笑みを浮かべる。

1ターン目の時には、まるで噛み合わなかった手札。

しかし、ブルーアイズが舞い込んだおかげで、その手札は無限の可能性を秘めた、希望の一手となる。

「先ずは下拵えからだ：！！　メインフェイズ、俺は手札から魔法カード『トレード・イン』を発動オ！！」

【トレード・イン】

〔魔法カード〕

手札からレベル8のモンスターカード1枚捨てる。自分のデッキか

らカードを2枚ドロ―する。

「この効果によって、俺は手札のレベル8モンスター、ブルーアイズを捨ててゐる！！」

「っ！？」

「そして、カードを2枚ドロ―！！　ふうん…面白い手札になった！！」

トレード・インにより、手札の入れ替えを行った白石は、胸の奥から熱い鼓動を感じる。

この鼓動こそ、彼がブルーアイズと共に戦う時の、気持ちの高ぶりなのだ。

「クルス、そしてルインとやら…！！　魅せてやるぞ。これが俺と、ブルーアイズの力だ！！　手札より魔法カード『召喚師のスキル』を発動オ！！」

【召喚師のスキル】

「魔法カード」

自分のデッキからレベル5以上の通常モンスターカード1枚を選択して手札に加える。

「このカードは、デッキからレベル5以上の通常モンスター1体を

選択し、手札に加える！！　俺が手札に呼び込むのは、当然……！！」

「…ブルーアイズ…っ！！」

唸るように呟くクルス。

白石は「その通りだ……！！」と、デッキから二枚目のブルーアイズを手札に加えた。

「更に、手札の魔法カード『古のルール』を発動オ……！！」

【古のルール】

〔魔法カード〕

自分の手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

「このカードは、俺の手札に眠るレベル5以上の通常モンスターを、特殊召喚する……！！　見るがいい、そしておののくがいい……！！　これがッ、俺の最強モンスター……！！」

カッッ……！！

白石が手に翳した一枚のカード。

それは眩い光りを放ち、彼のフィールドに絶対の力を持って光臨した。

「いでよ!! 我が最強のしもべ!! 『青眼の白龍 (ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン)』!!」

【青眼の白龍】

星8／光属性／ドラゴン族

ATK／3000 DEF／2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

ズドドドドド…!!

青眼の白龍…。

蒼く澄んだ瞳。

しなやかでありながら、強靱さと美しさを兼ね備えた神々しい体躯。

大きく広がる翼が、ブルーアイズの美しさを更に際立たせている。

精霊界に伝説として残る、最強にして圧倒的火力を誇る龍が、白石のフィールドに光臨した。

ズドドドドド…!!

「遂に…来た…っ!! ブルーアイズ…!! つでも!!」

白石の召喚したブルーアイズに対抗するかのように、クルスは負

けじと声をあげる。

「わたしには、魔轟神の王…レヴユアタンがいる！！　レヴユアタンの攻撃力も…ブルーアイズと同じ、3000っ！！」

更にクルスは、自分のフィールドに伏せてある一枚のリバースカードに視線を移す。

彼女のリバースカードの正体は、罠カード『ヘイト・バスター』だ。

【ヘイト・バスター】

「罠カード」

自分フィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。相手の攻撃モンスター1体と、攻撃対象となった自分モンスター1体を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

（もし…ブルーアイズが、わたしのレヴユアタンに攻撃してきても…ブルーアイズは、返り討ち。更に、ブルーアイズの攻撃力分のダメージも入って…おじちゃんは、オシマイ…！！）

【クルス】

LP／8000

【白石直也】

いくら伝説の龍を召喚しようとも、対処法はいくらでもある。
それが、今の自分のフィールドに揃っている。
そう考えると、クルスは冷静でデュエルを見る事ができた。
だが…。

「更に俺は、手札の魔法カード『スタンピング・クラッシュ』を発動するうー!!」

【スタンピング・クラッシュ】

〔魔法カード〕

自分フィールド上にドラゴン族モンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊し、そのコントローラーに500ポイントのダメージを与える。

「このカードは、俺のフィールドにドラゴンがいる時、フィールドの魔法・罠カード1枚を破壊する!!」

「なっ!？」

「対象はクルス!! 貴様のリバースカードだ!!」

バゴウツ!!

クルスが切り札として伏せていた罠カード『ヘイト・バスター』は、白石の発動した『スタンピング・クラッシュ』によって破壊された。

「更に、この効果で破壊されたカードのプレイヤーは、500ポイントのダメージを受ける！！」

【クルス】

LP／8000 ↓ 7500

【白石直也】

LP／2900

切り札を破壊され、更にダメージを受けたクルスは、いつの間にか自分でも気付かない内に、ガチガチと歯を鳴らしていた。

もちろん、クルスの心情など知った事でない白石は、どこまでも自分のデュエルを貫き通していく。

「そして俺は、手札より魔法カード『死者蘇生』を発動オ！！」

【死者蘇生】

「魔法カード」

自分または相手の墓地からモンスターを1体選択する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「この効果によって、俺は墓地に眠るモンスターを、特殊召喚させる！！ 現れよッ！！ ブルーアイズ！！」

ズドドドドド…！！

トレード・インのコストとして墓地に送られた1体目のブルーアイズが、死者蘇生の効果によって白石のフィールドに光臨した。

これにより、白石のフィールドには攻撃力3000を誇るブルーアイズが、二体も並んだ事になるのだ。

【クルス】

LP／7500

「手札」

1枚

「モンスター」

魔轟神レヴェアタン

ダークエンド・ドラゴン

「魔法・罫」

なし

【白石直也】

LP／2900

「手札」

2枚

「モンスター」

青眼の白龍

青眼の白龍

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

「いくぞ、クルス！！ 貴様に俺と、ブルーアイズの力を見せ付けてくれる！！ バトルだ！！」

「っ！！」

遂にバトルフェイズへと突入した白石。

そんな熱い彼の気持ちに呼応するかのように、ブルーアイズたちはそれぞれに雄々しき声を放つ。

「1体目のブルーアイズで、ダークエンド・ドラゴンに 攻撃
ッ！！ 滅びのバースト・ストリームッ！！」

カッッ……！！！！！！

クルスのダークエンド・ドラゴンが消し飛んだのは、一瞬の事だった。

少し遅れて、辺りに轟音が鳴り響き、その場に居合わせた全員に、衝撃波が襲い掛かる。

【クルス】

LP／7500 ↓ 6600

【白石直也】

LP／2900

「くうう…っ!!」

「ダークエンド、粉碎ッ!! 続けて、2体目のブルーアイズよ!
! 魔轟神レヴュアタンに、攻撃!! 滅びのバースト・ス
トリイームッ!!」

白石の二体目のブルーアイズが、クルスの魔轟神レヴュアタンに
向けて、全てを破壊する一撃を放つ。

「っ!! 迎え撃って、レヴュアタン!!」

カッッ…!!

カッカッ…!!!!

バゴウッ!!

ズドゴウッ!!

ブルーアイズとレヴュアタンの攻撃力は互角。

これにより、互いのモンスターは消滅し、フィールドから姿を消
した。

「レヴュアタン、玉砕!!」

「でも…でもっ!! わたしは、破壊された魔轟神レヴュアタンの…効果発動!!」

破壊されたレヴュアタンには、破壊された際の効果がある。
その効果として、クルスは墓地に手を伸ばす。

「レヴュアタンが破壊された時…墓地の…【魔轟神】3体を、手札に戻す…!!」

「手札に加えた3体」

●魔轟神レイヴン

●魔轟神クルス

●魔轟神獣ルビィラーダ

手札を一枚から四枚に補強させたクルス。

これにより、次の自分のターンで、反撃の糸口を掴むつもりなのだ。

「…おじちゃんの場合には、ブルーアイズは…1体。1体だけなら、まだ…わたしにも…勝機は、ある!!」

「…ふうん。だが、果たしてそう上手くいくと思っているのか？」

「…え？」

ピシッ…と。

勝機を探るクルスの表情が、白石が言い放った一言で凍り付く。

「貴様は勘違いしているようだが、まだ俺のバトルフェイズだ。このターンの俺の攻撃は、まだ終わりではない！！」

「な、なにを…言ってるの…！？　だって…だって！！」

そう。

このターン、白石は全てのモンスターで攻撃した為、現在フィールドに残っているモンスターでは、このターンの攻撃宣言はできない。

現在、残っているモンスターでは…。

「…っ！？　気を付けなさい、クルス！！」

とっさに、白石の狙いに気付いたルインは、思わず声を張り上げた。

そんな彼女が注目したのは、最初のターンに白石が伏せた、一枚のリバースカードだ。

「ふうん、いくぞ…!! リバースカード、オープン!! 永続罠
『正統なる血統』を発動オ!!」

【正統なる血統】

「永続罠」

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

「この効果により、墓地に眠る通常モンスター1体を、特殊召喚する!! 今ふたたび蘇れ!! ブルーアイズツ!!」

ズドドドドド…!!

「そ…っ、そんな…っ!？」

攻撃力が同じレヴュアタンに玉砕してきたのも、これが狙いだっただのか!？と、目の当たりにして実感したクルスは、大きく目を見開き、言葉を無くす。

険しい表情でデュエルを見つめるルイン。

白石の活躍に、ヨシ!とガッツポーズをとる結締。

為す術がないクルスに対し白石はやはり、容赦なく、自分のデュ

エルを貫き通す。

「いくぞ、ブルーアイズッ！！ クルスに、お前の一撃を叩き込んでやれ！！ 滅びのつ、バースト・ストリイームッ！！」

「きややあああああっ！！??」

【クルス】

LP／6600 ↓ 3600

【白石直也】

LP／2900

「フハハハハ！！ アーッハッハッハッハ！！ 大喝采！！ アーッハッハッハッハ！！」

凄まじい衝撃が、幼い少女であるクルスを襲う。

ダイレクトアタックを決めた事で、ライフポイントの差を一気に縮めた白石。

精霊界では、新たな王が動きを見せ。

人間界では、マナに会うべく、西条が男性客のスクラムに突撃する中。

クルス VS 白石、二人のデュエルは、終盤へと突入する。

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

今回の内容は、白石とクルスの二人のデュエルをメインに書かせてもらいました。

如何でしたでしょうか？

序盤は手札事故気味な白石でしたが、一枚のカードが手札に舞い込んだ事によって、劇的な展開を披露してくれました。

実際のOCGでも、一枚のカードが手札に加わるだけで、戦術の幅が一気に増える事は、デュエルをする方なら分かるかと思います。

白石のブルーアイズ2体を前に、クルスはどうか対抗するのか？

二人の決着が着いたら、ルインや結締はどのような動きを見せるのか？

精霊界から人間界に向かったシエンは？

まさかマナに会う為に、身体を張らなくてはならなかった西条はどうなるか？

そして、白石は今回、相手を気遣う描写を一切見せませんでした。どうやら楠先生の願いは、まだ彼には届いていないようです。

といった具合に、今回の内容で以上のキャラクター達の動きがありました。

次回でそれぞれが、どのような活躍をするのか？

皆様の期待に応えられるような展開にしたいなあ、と。

読んで、楽しかったと思って下さるような展開を心掛けておりますので、応援よろしく願います。

次話の更新ですが、月末は仕事を立て込み、次話掲載までに時間が掛かってしまいそうです。

今のうちにこの場を借りて、これを謝罪の言葉とさせていただきます。

それでは、失礼しました。

狙われた神

※

カードショップ アリスは、トリティニーグループが経営する店舗の一つだ。

夏休みに突入した三上市の今日、アリスは学校帰りの生徒たちが多数詰め寄り、順調な売り上げを伸ばしていく。

客足が多い事や、新たな売り子として、マナを手伝わせた事が相俟って、今日だけでかなりの利益を儲ける事ができたのだ。

そんな商売繁盛しているアリスの事務所では、店長である中島が、気色悪い笑みを浮かべながら、軽快な指さばきで電卓を華麗に弾いていく。

「ムフフフ♪マナちゃんに売り子をさせて、大成功ネ☆ 下手をすれば、今年の売り上げの中で今日がダントツよ！！　じゅるり…」

涎を垂らす中島に、同じく事務所にいた西条とマナの二人は、そんな彼の様子にドン引きする。

しかし、このまま浮かれ気分の彼を放置する訳にはいかない。

今日はこれから、彼にトリティニーグループの中を案内して貰わなければならないのだ。

「中島さん、そろそろ時間になるんで…俺たちだけでも、先に出発

しませんか？」

「アラ？もうそんな時間？」

西条に言われて、壁に掛けられた時計を見ると、時刻はちょうど十三時半になっていた。

次に中島は、事務所の中をぐるりと見渡す。

ソファーの上では、西条が退屈そうに座っており、その隣ではマナが彼のデッキを広げ、楽しそうにホンワカしている。

自分以外に事務所に居るのは、この二人だけのようなのだ。

「西条ちゃん。結締ちゃんと白石ちゃんの二人はどうしたの？まだ到着してないみたいだケド：ちゃんと連絡したの？」

「それが：何度電話してもアイツ等に繋がらないんですよ。メールしても全然返事が返って来ないし：」

「アラまあ：いったいドウしたのかしら？」

中島も西条と同じように首を傾げた。

今日は彼らと共に、トリティニーグループに置かれている神のカードを見学する予定なのだ。

結締も白石も、今日の日を心待ちにしていた筈なのだが：。

「アイツ等…俺よりも先に学校を出ただけど…まだココに着いてないってのがおかしい。どこで油売ってんだか…」

「そうヨね…でも、そろそろホントに時間が無いわネ。西条ちゃん、マナちゃん。アタシ達だけでも、先に行くわヨ☆」

中島はデスクの中から車の鍵を取り出し、席を立つ。

「アタシが車で送っていく間も、西条ちゃんは2人に連絡を続けて頂戴☆」

「はい、分かりました。ホラ、マナ。カードを片付けろ、俺たちも行くぞ」

「ふえ？うん、ちょっと待って」

テーブルに広げたカードをあたふたと片付けるマナ。
そんな彼女の様子を見ながら、西条は考える。

未だ、ここに到着していない彼等の事を。

（結締、白石…いったい何やってんだよ…）

西条たちは知らない。

こうしている今も、彼等二人は戦っているという事を。

※

【クルス】

LP／3600

「手札」

4枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

【白石直也】

LP／2900

「手札」

2枚

「モンスター」

青眼の白龍

青眼の白龍

「魔法・罨」

正統なる血統

三上市の郊外に建つ廃墟。

そのビルの中では、今もクルスと白石、二人のデュエルが続いていた。

フィールドに青眼の白龍二体を揃え、ボードアドバンテージで優位に立つ白石は、自分に対して恨めしげな視線を向けるクルスを、鼻で笑う。

「ふうん…どうしたクルスとやら。まさかこれで終わりではあるまいな？」

「……！！」

「俺はデュエルでは、相手が誰であろうと、容赦はしない！！それが俺のデュエルだ！！」

端から見た二人の様子は、幼女をイジめる白石、といった構図に見えるかもしれない。

しかし、これはただのデュエルではない。ダメージが実際のものとなってプレイヤーを襲う、文字通りの生と死を賭けた戦いなのだ。

そこに妥協は許されない。

だからこそ、二人のデュエルを観戦する結締と、クルスの仲間であるルインは、白石の言葉に反論はしなかった。

それぞれが胸の内に熱い激情を秘める中、白石はバトルフェイズを終了し、メインフェイズへと移行する。

「俺は手札を2枚伏せ、ターンエンドだ！！クルス、全力で挑んでくるが良い！！俺はブルーアイズと共に、貴様の全てを粉碎し

てくれるわ!!」

「…好き勝手、ばっか…!!」

キッツと白石を睨み付けるクルス。

自分の場にカードは一枚も無く、ライフも残り3600ポイント。
このまま何もしなかった場合、待っているのは白石のブルーアイズ二体のダイレクトアタック。

それは、自分が予測する最低の未来だ。

そんな結末など、断じて選ばない。

「言われなくたって…わたしは、全力で…!!」

奥歯を一瞬、強く噛み締めたクルスは、デッキトップに指を添える。

そうだ。

伝説の龍、ブルーアイズを相手に、全力を出さないのは命知らずな行為。

だが、自分はこのデュエルに勝ちたい。

勝って、勝って、もっと沢山のデュエルをしたい。

自分は強い相手とデュエルをする為に、この世界に来たのだから。

「おじちゃんを…っ、倒す…!!　わたしのターン、ドロ―!!」

始まったクルスの反撃^{ターン}。

カードをドローしたクルスは、引き当てたカードを確認して、目を見開く。

【クルス】

LP／3600

「手札」

5枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

【白石直也】

LP／2900

「手札」

なし

「モンスター」

青眼の白龍

青眼の白龍

「魔法・罨」

正統なる血統

リバーズカード 2枚

「(きた…っ!!!)　いくよ、おじちゃん…!!!」

「…!!!」

クルスが引き当てたカード。
それは…。

「魔法カード『フォトン・ベール』…発動!!」

【フォトン・ベール】

「魔法カード」

自分の手札から光属性モンスター3体をデッキに戻し、自分のデッキから光属性・レベル4以下のモンスターを3体まで手札に加える事ができる。2体以上手札に加える場合は、全て同名モンスターでなければならない。

クルスが魔法カード、フォトン・ベールを発動した途端、彼女の手札の中から三枚のカードが光に包まれる。

「このカードは、わたしの手札から…光属性モンスターを3体デッキに戻して…デッキから新たに、光属性・レベル4以下のモンスター3体を…手札に加える」

このカード発動時のクルスの手札は4枚。

●魔轟神レイヴン

●魔轟神クルス

●魔轟神獣ルビイラーダ

●魔轟神獣キャシー

その中からクルスは、レイヴン以外のカードを全てデッキに戻した。

「わたしが…手札に加えるのは…『魔轟神グリムロ』、3枚…!!」

「なにっ!?!…グリムロ…だど?」

クルスが手札に加えたカードを見て、怪訝な表情をつくる白石。そんな彼に、デュエルを観戦する結締は、神妙な面持ちで白石に尋ねた。

「(グリムロ…?聞いた事ねえカードばっかだぜい) 白石さん、知っているのか?」

「知らん!!」

「……………」

「クスクス…!! よそ見してる場合じゃないよ、おじちゃん。わたしは…魔轟神レイヴンを、召喚…!!」

【魔轟神レイヴン】

星2／光属性／悪魔族

ATK／1300 DEF／1000

「効果・チューナー」

自分の手札を任意の枚数捨てて、その枚数分このカードのレベルをエンドフェイズ時まで上げる事ができる。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、この効果によって捨てた手札の枚数×400ポイントアップする。

クルスのフィールドに、攻撃力とレベルを自在に変化させる事ができる悪魔族のモンスターが召喚された。

「魔轟神レイヴン：確かその効果は、手札を任意の枚数墓地に捨てる事により、1枚につき攻撃力を400ポイントアップさせ、レベルを1つ上昇させる：！！！」

確認するように呟く白石は、クルスの手札枚数を確認する。

クルスの手札は三枚。

その全ては魔法カード、フォトン・ベールの効果によって加えたカードたちだ。

「だが、3枚の手札を全て墓地へ送った所で、レイヴンの攻撃力は2500止まり！！ 所詮、俺のブルーアイズの敵ではない！！」

豪語する白石。

しかし、彼の話を聞いたクルスは不敵な笑みを浮かべる。
それはまるで、だからどうした？と言っている様にも見えた。

「クスクス…おじちゃん、言ったじゃない。焦っちゃ…駄目だってば」 ギョロリ!と、クルスの両の瞳が一段と大きく開く。

「わたしは手札から…魔轟神グリムロの、効果…発動!!」

【魔轟神グリムロ】

星4／光属性／悪魔族

ATK／1700 DEF／1000

「効果」

自分フィールド上に「魔轟神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、手札からこのカードを墓地へ送る事で自分のデッキから「魔轟神グリムロ」以外の「魔轟神」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

「自分の場に…魔轟神がいる時、手札のこのカードを捨てる事で、デッキから…魔轟神1体を手札に加える…!!」 わたしは、手札3枚のグリムロの…効果を発動する!!」

「っ!!」

フォトン・ベールで手札に加えた魔轟神グリムロの効果は、サーチ効果を持っていた。

これによりクルスは、状況に合わせた有用な効果を持つモンスターを、手札に加える事ができるのだ。

「手札3枚のグリムロを…墓地へ送り、デッキから…3体の魔轟神を、手札に加える…!!」

「手札に加えたカード」

●魔轟神獣キャシー

●魔轟神獣キャシー

●魔轟神獣ガナシア

手札を一気に入れ替えたクルスは早速、フィールドのチューナーモンスター、魔轟神レイヴンの効果を発動させる。

「いくよ… お じ ちゃん !! わたしは、魔轟神レイヴンの…効果、発 動 !!」

効果の発動と同時に、クルスは手札に加えたカードを、全て墓地へ送った。

「魔轟神レイヴンは、手札を捨てた枚数分だけ…エンドフェイズまでレベルを1つ上げ、攻撃力を…400ポイントアップさせる。わたしが捨てた…手札は、3枚…!!」

【魔轟神レイヴン】

星2 ↓ 5

ATK / 1300 ↓ 2500

効果によって攻撃力を上昇させたクルス。

しかしこのままでは白石が述べた様に、それだけでしかない。

だが、クルスの狙いはそれだけではない。

「そして、この瞬間……!! 手札から墓地へ送られた『魔轟神獣キヤシー』の、効果が……発動……!!」

【魔轟神獣キヤシー】

星1 / 光属性 / 獣族

ATK / 800 DEF / 600

「効果・チューナー」

このカードが手札から墓地へ捨てられた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を破壊する。

「キヤシーの効果で……フィールド上の、カードを……破壊する。対象は、もちろん……!!」

「っ!？」

クルスの視線の先には、白石のエースモンスター。
青眼の白龍の姿が……。

「わたしは、手札から…2枚のキャシーを捨てた。クスクス…！！
これで、おじちゃんの…ブルーアイズは、全滅ッ！！」

「なにいつ！？　ヌオオオッ！！」

バゴォ！！　チュドォ！！

カード効果により、白石のフィールドに揃っていた二体のブルーアイズは消滅した。

これにより、白石の場に壁となるモンスターは全て消え、残ったのは二枚のリバースカードのみとなった。

「っ！？　マズい…白石さんの場にゃあ、壁となるモンスターがないぜい！！」

「ふうん…俺のブルーアイズを倒した事は誉めてやる。だが、それでも足りんわ！！」

【クルス】

LP／3600

【白石直也】

LP／2900

「今の貴様の場には、攻撃力2500のレイヴンのみ!! このターン、貴様は既にモンスターを召喚している為、新たなモンスターを展開する事など、不可能だ!!」

このターンで決着を着けようものなら、その通りだ。

魔轟神レイヴンで攻撃した所で、白石のライフは400ポイント残る。

クルスがこのターンで決着を着けようものなら、攻撃力400以上のモンスターを特殊召喚するか、400以上のダメージを与える効果を使わなければならない。

だが、クルスの手札は0。

場には魔轟神レイヴンしか存在せず、リバースカードもない。

「…クスクス」

「…なにがおかしい」

白石の話を聞いたクルスは、それでも不気味な声を漏らしていた。

その余裕は、いったいどこから来るのか？

「フフ…ボウヤはとんだロマンチストね」

「…なに…!？」

まるで今のクルスの気持ちを代弁するように、デュエルを観戦するルインは失笑する。

「魔轟神は、その殆どが“手札から墓地へ捨てられる事によって、効果が発動するモンスター”。その中でクルスは、3枚の手札を捨てたのよ？」

三枚の内、二枚は魔轟神獣キャシーのカード。
そう。

ここでクルスが、意味のないカードを墓地へ捨てる筈がない。

手札から…が無理ならば。
フィールドから…が無理ならば。
残されたのは…。

「っ！？ まさか…！？」

「クスクス…！！ 気付くのが遅すぎだよ、おじちゃん。わたしは、手札から墓地へ捨てた…『魔轟神獣ガナシア』の、効果… 発動ッ！！」

【魔轟神獣ガナシア】

星3／光属性／獣族

ATK／1600 DEF／1000

「効果」

このカードが手札から墓地へ捨てられた時、このカードを自分フイ

ールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚したこのカードの攻撃力は200ポイントアップし、フィールドから離れた場合ゲームから除外される。

「このカードが手札から墓地に捨てられた時、墓地のこのカードを……特殊召喚する……おいで……ガナシア……！！」

「なにっ！？　墓地から、モンスターを特殊召喚だとオ！？」

魔轟神レイヴン、そして、魔轟神獣ガナシア。

これでクルスの場に、二体のモンスターが出揃った。

「ガナシアは……自身の効果で特殊召喚した時、攻撃力を……200ポイントアップする……クスクス」

【魔轟神獣ガナシア】

ATK／1600 ↓ 1800

【魔轟神レイヴン】

ATK／2500

「攻撃力2500と……1800のモンスター……！！」

白石のライフは、残り2900。
クルスの二体のモンスターから総攻撃を受けた瞬間、白石の敗北が決定する。

「フフ：お友達が無様にやられていく瞬間を、しっかりとその目に焼き付けておきなさい。ちんちくりんなボウヤ：」

「……っ」

デュエルを観戦する結締は、キツと：表情を引き締めながら、白石の場を見つめる。

そして遂に、クルスが動き出した。

「おじちゃんは：まあまあ楽しめたよ。でも：もういない！！ここで：壊れちゃえ！！！」

バトルフェイズへと突入したクルス。

トドメの一撃、と言わんばかりの気迫で、クルスは声を張り上げて

「魔轟神レイヴン！！ おじちゃんに：攻撃！！！」

両腕を振り上げ、翼を広げたレイヴンが高く跳躍する。

この一撃を受ければ、白石のライフは風前の灯火となるばかりか、更なるモンスターの攻撃が待っている。

「キャハ☆ これで…おー…」

「リバアースカード、オオープンッ!!」

「っ!？」

いきなりの白石の怒号に、クルスの口から言葉が消えた。

「永続罨『蘇りし魂』を発動オオ!!」

【蘇りし魂】

「永続罨」

自分の墓地から通常モンスター1体を守備表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

勝負が決まりそうなのこの土壇場で、白石が発動したカードとは、永続罨『蘇りし魂』のカードだ。

「この効果により、俺の墓地に眠る、我が魂を復活させる!!」

そう。

白石直也、彼が最も信頼する魂のカードを。

「蘇れ、我が魂……!! 『青眼の白龍』（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）……!!」

「そんなっ!？」

「なんですって!？」

【青眼の白龍】

星8／光属性／ドラゴン族

ATK／3000 DEF／2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

ズドドドドド……!!

クルスとルインが驚きの声を放ったと同時に、白石のフィールドに伝説の龍が蘇り、雄々しき雄叫びをあげた。

「蘇りし魂の効果で特殊召喚されたブルーアイズは、守備表示……!!
! だが……ブルーアイズの守備力は、貴様の魔轟神レイヴンの攻撃力と同じ2500……!!」

ガキィィィ!!

クルスの攻撃モンスター、魔轟神レイヴンの一撃から白石を守るように、ブルーアイズはその強靱な尾で、白石を包み込んだ。

「攻撃モンスターの攻撃力が、守備表示モンスターの守備力と同じならば、互いのモンスターは破壊されず、バトルダメージも0となる…!!」

「っ…!!」

魔轟神レイヴンの攻撃を弾き返したブルーアイズ。

その光景に、クルスやルインは思わず啞然となり、返す言葉がなかった。

「よってこのターン、俺のライフは無傷!! 残念だったな…クルス。俺とブルーアイズの魂は、この程度で壊れる事はないわ!!」

このターンで決着をつけるつもりだったクルスは、大きく目を見開いたまま硬直し、動く事ができなかった。

自分の場には、まだ攻撃していない魔轟神獣ガナシアが残っている。

しかし、ガナシアの攻撃力は1800…。ブルーアイズの守備力は2500な為、攻撃しても倒す事はできない。

攻撃した所で、逆に自分がダメージを受けるだけであり、メリッ

トが一切ない。

このターン、クルスに残された手は、エンド宣言をする他なかった。

次のドロローで、白石のブルーアイズを倒せるカードを引き当てるしか、望みはなかった。

「…わたしはこれで…っ、ターンエンー…」

「ふうん。ならば、貴様のターンのエンドフェイズ時、俺はこのカードを発動する…!」

「っ!?!」

ビクウツ!!　　っと、クルスの華奢な身体が震える。

白石はクルスのエンドフェイズ時、自分の場に唯一伏せられていた、一枚のリバースカードを手にした。

そのカードとは…。

「我が魂の前では、貴様の操る雑魚モンスターなど、一切の無力である事を教えてやる!!　リバースカード、オープン!!　『無力の証明』を発動オオ!!」

【無力の証明】

「罨カード」

自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在するレベル5以下のモンスターを全て破壊する。このカードを発動するターン、自分フィールド上に存在するモンスターは攻撃する事ができない。

「このカードは、俺の場にレベル7以上のモンスターが存在する場合に発動できる！！ その効果は、貴様のフィールドのレベル5以下のモンスターを、全て破壊するウ！！」

「なっ！？」

クルスの場には、レベル3の魔轟神獣ガナシアと、効果によりレベル5となった魔轟神レイヴンのみ。

「我がブルーアイズの前では、低レベルの雑魚モンスターなど、無駄ッ！！ 無駄アッ！！ 無駄だアア！！」

グオオオオオッ！！

白石の熱き雄叫びと同調するかのように、フィールドに蘇生したブルーアイズは、全てを粉碎せんばかりの咆哮をあげた。

その咆哮は凄まじい衝撃波となりクルスのモンスターを襲い、その衝撃に耐えきれなかったクルスのモンスター達は、全て破壊されてしまった。

ズドゥッ!!
ボバァッ!!

「そんなっ!? わたしのモンスターが…ぜん…め…!!」

言葉をなくし、ただ立ち尽くすだけのクルス。

文字通り、彼女のフィールドや手札は焼け野原と化し、何も残されていなかった。

【クルス】

LP／3600

「手札」

なし

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

【白石直也】

LP／2900

「手札」

なし

「モンスター」

青眼の白龍

「魔法・罨」

蘇りし魂

クルスのターンは終了した。

そして遂に、このデュエルに終止符を打たんが為の、白石のターンが始まる。

※

トリティニーグループ。

デュエリストにとって総本山とも呼ぶべきその場所には、神のカードが置かれている。

三上市の高校に通う西条亨は、精霊界から来たマナと一緒に、トリティニーグループの社員である中島の後を追う形で、トリティニーグループの廊下を歩いていた。

壁にはトリティニーグループの創業の歴史を記したパネルが掛けられており、そこに写された写真を眺めながら、二人は物珍しそうにしていた。

静かな廊下には、自分たちの進む足音や、感嘆の息を漏らす声しか聞こえてこない。

すると、前を歩く中島は、視線だけを西条に向けながら

「そう言えば、西条ちゃんはココに来るのは初めてなのよネ…緊張

しちゃってル？」

「…ええ。そりゃまあ…。なんつうか、これから神のカードを見る事が出来るのかと思うと…緊張って言うよりも、何か…ドキドキします」

「アラ☆このアタシにドキドキするなんて…／＼／ 西条ちゃんなら、アタシなにされちゃってもOKヨ」

「店長、人の話しちゃんと聞いてました？どう聞いたら、そんな反応になるんですか…って、クネクネしないで下さいって…！ 気持ちわる…！？」

中島の発情する動きにドン引きする最中、西条は隣を歩くマナの表情に気付く。

「…マナ」

それは、今まで見たことがない真剣な顔。

それもそうだ、と西条は思う。

今この場所には、神のカードが置かれている。

神のカード。それは即ち、マナの世界…精霊界の神を言い表しているのだ。

その神のカードを、マナは自分たちの世界に持って帰らねばならない。

持って帰り、精霊界に蔓延る邪神を倒す為に…。

神の力には、神の力をもって制す。
その為に、マナはここに來たのだ。

（…感じる。この建物の中に入ってから…幻神獣、神の力が…ビン
ビン伝わってくる…！！）

キリツと表情を引き締めるマナ。
しかし、その華奢な身体は小刻みに震えていた。
震える理由は、マナ自身が一番よく分かっている。
それは…。

（…もし、神のカードに記されたテキストが、精霊界の文字じゃな
かったら…？　なにより、神のカードを…精霊界に持ち帰る事がで
きなかったら…？）

恐い。

そう考えるだけで、マナの心の中は、疑心暗鬼に満ちていく。
精霊界にいた頃は落ちこぼれ扱いされ、実際、何をやるにしても
失敗続きだった。

しかし、今回ばかりは失敗する訳にはいかない。
今までは任務で失敗しても、ごめんなさいで済んだりもした。
しかし、今回の件に関しては、失敗しちゃったのでごめんなさい

…は通用しない。

このマナに与えられた任務は文字通り、精霊界という世界を揺るがす規模の仕事なのだ。

思い詰める事で、かなりのプレッシャーに苛まれるマナ。

そんな彼女の様子は、見ている西条にも、痛いくらいに伝わってきた。

「…マナ…っ!？」

(ちよっと、西条ちゃん! ナニぼーっとしてるのヨ!)

西条の肘をつつくように、中島はマナに聞こえない位の小さな声で、西条をまくし立てる。

(マナちゃんを見て、分からないの!？ こういう時は、オトコ♂がちちゃんと支えてアゲないと駄目なのヨウ☆)

「う、な…中島さん…」

中島の威圧感溢れる気迫にたじろぐ西条。

しかし、確かに中島が言うように、ここいらでフォローをした方が良いのかもしれない。

今のマナは、明らかに顔色が悪かった。

思い詰めた表情をし、ガチガチに固まっているのも直ぐに分かる位に…。

「…マナ」

「っ、さいじょお…」

肩に手を置かれ、名を呼ばれた事で、マナはハッと我に帰る。

「…緊張しているのか？」

「緊張…とは、少し違うかも」

緊張もしている。

だが、今のマナを占めるのは緊張というよりも、プレッシャーだ。

「わたしは…なんとしても、幻神獣を精霊界に連れていかなきゃ…でないと、精霊界のみんなは…!!」

「…マナ…いや、マジシャン・ガール。これだけは言わせてくれ」

西条はマナを真っ直ぐに見据える。

彼女の不安に満ちた瞳が自分に向けられる中、西条はハッキリと告げる。

彼女の不安を拭う為に。

彼女の力になる為に、西条はこう告げる。

「そんなに、一人で全部背負うことはない。俺がいる…!!」

「…さいじょお」

「俺だけじゃない。中島さんや、結締や白石だって…お前に協力してくれる奴は、沢山いるんだ。だから、全部お前が一人で背負い込む事はないんだ…!!」

西条に言われ、マナは気付く。

確かに、不安はある。

しかし、初めて人間界に来た時、右も左も分からない自分を助けてくれたのは、彼ではないか。

邪帝とのデュエルの時も、自分を助けてくれたのは、彼ではないか。

こうして神のカードに会う為に、資力してくれたのは、彼やその仲間たちではないか。

その彼が今、自分を励ましてくれている。

疑心暗鬼に陥った自分の心に、手を差し出してくれている。

「…ありがとう。さいじょお」

そんな彼の優しさに、マナは素直になれた。

そんな彼の優しさに、マナは自然と、彼の手をとる事ができた。

「さいじょのお陰で、なんだか気持ち became たんだよ」

「過度なプレッシャーは、その人物の能力を制限しちゃう時がある
ワ☆マナちゃんは、そのタイプみたいネ♪」

仲間たちのお陰で、笑顔を取り戻す事ができたマナ。

すると、中島は廊下の向こうに見える嚴重な扉を指差しながら

「さ、いよいよ…あの部屋ヨ☆」

「…あの部屋に…!!」

「…幻神獣が…!!」

扉の前に立ち、それぞれに真剣な表情で息を呑む二人。

中島が扉のロックを解除する為のパスワードを入力し終え、遂に、
神のカードが安置されている扉が動き出した。

ゴゴゴゴゴゴ…!!

「いよいよだな、マナ……!!」

「うん。わたしは…大丈夫!!」

不安はある。

だが、それと同時に期待もある。

西条とマナの二人は一緒に、扉をくぐり、中へと入っていった。

※

「俺のタアーンッ!!」

【クルス】

LP／3600

「手札」

なし

「モンスター」

なし

「魔法・罠」

なし

【白石直也】

LP／2900

「手札」

1枚

「モンスター」

青眼の白龍

「魔法・罨」

蘇りし魂

クルスのターンが終了し、白石のターンが始まった。

クルスの残りライフは3600。

このターン、白石が攻撃力600以上のモンスターを召喚すれば、このデュエル…。

「ふうん…！！ 覚悟は良いか？」

「っ！？」

白石の全てを圧倒する眼圧に、クルスはハッと息を呑む。

「俺は手札より『サファイアドラゴン』を召喚ッ！！」

【サファイアドラゴン】

星4／風属性／ドラゴン族

ATK／1900 DEF／1600

全身がサファイアに覆われた、非常に美しい姿をしたドラゴン。争

いは好まないが、とても高い攻撃力を備えている。

白石の場に現れたのは、攻撃力1900のサファイアドラゴン。
更に、白石の場には攻撃力3000のブルーアイズがいる。
その攻撃力の合計は、4900。

【クルス】

LP／3600

【白石直也】

LP／2900

「勝負あったな、クルス！！ 俺のドラゴンたちで、貴様を木っ端微塵にしてくれるわ！！」

グオオオオオオ！！

「ひいっ!？」

白石のドラゴンたちが、クルスに向かって雄々しき雄叫びを放つ。

「…まさか…クルスがこんな所でやられるなんて」

二人のデュエルを観戦していたルインは、若干の不穏な空気を漂

わせながら呟く。

それと同時に考える。

クルスが負けた場合、次に自分はどうか…と。

（このボウヤたちが、魔術師の小娘の何を知っているのか…クルスが勝ったら、聞き出すつもりでいたのに…）

考えるルインだが、その時、デュエルをしているクルスと目があった。

彼女の瞳は涙が溢れており、その姿はまるで…自分に助けを求めているかのような。

「……全く。調子の良い子」

その呟きは、まるで呆れたような。

その時だ。

ガコオオオオオツッ！！！！！！

「っ！？」

「なっ！？」

「ッ！！」

「きゃあああ！！」

それは突然だった。

四人がいる廃ビルの壁が粉碎し、砂埃が一気に部屋の中を充滿したのだ。

突然の出来事に、結締や白石はとっさに動く事が出来ず、その場で凌ぐしかなかった。

クルスに至っては悲鳴をあげ、頭を抱えてしゃがみ込む始末だ。

そんな中、ルインだけは違った。

一瞬、訝しむ表情を見せたルインだが、それは直ぐに整った表情へと戻り、凜とした姿勢で崩れ落ちた壁の方を見つめている。

「ぬうう…!! 一体なにが起きたと言うのだ!？」

「まさか…このタイミングで…倒壊…いや」

そう呟く結締は充滿する砂埃の中、崩れ落ちた壁に注目する。

崩れ落ちた瓦礫は、全て中に向かって四散した。

つまりは、外から中に向けて、外部からの衝撃があつたと推測できる。

そう、外部からの衝撃。

そこにきて結締は、ある事に気付いた。

砂埃が舞う部屋の、崩れ落ちた瓦礫の上に、それは居た。

いつの間に居たのか？

人型のシルエットをしたそれは、ガシャツ：ガシャツ：っと、重い音をたてながら、ゆっくりとこちらに近付いてくる。

突如現れた謎の人物に警戒する中、ルインはその人物に、親しげに声をかけた。

「…あら、誰かと思えば…シエン、王である貴方までこの世界に来たの？」

「ふん…。何やら王の気配を察知し、気になって来てみれば…ルイン、お主であったか」

シエンと呼ばれたその人物の姿に、結締や白石の二人は目を奪われた。

紅に染まった鎧を身に纏い、圧倒的な存在感を放つシエンの前から、動く事ができなかった。

「ルイン。うぬは何用でこの世界に来たのだ？」

「別に…そこでデュエルをしているクルスに付き合っただけよ。単なる暇つぶしに…ね」

二人の会話を聞き、結締は、自分の全身から汗が滝のように流れているを感じた。

マズい…と。

二人の話しを聞く限り、ルインやシエンは精霊界での王と呼ばれる実力者。

その実力は、白石がデュエルをしているクルスとは比べものにならない筈だ。

（仮にもし…俺と白石さんの2人で、この2人とデュエルをしたとしても…王2人を相手に、俺たちが無事でいられるか分からねえ…！！）

西条は王である邪帝とデュエルしたと聞いたが、やはり勝利しても、その身体はボロボロだったという。

自分の時は、王ではなかったが、激しいダメージによって今でも怪我は完治していない。

白石に至っては、今も続くクルスとのデュエルで、頭から血を流している最中ではないか。

（この状況を乗り切ったにしても…コッチの損害がハンパないぜい！！）

ギッと奥歯を噛み締める結締。

すると、新手が現れた事に、白石は…。

「次から次へと…ッ！！ ええい、貴様等はそんなに俺たちの邪魔

をしたいのかアア!!?」

吼える白石だが、ルインやシエンは、白石を一瞥するだけである。

なにを言っている?と言わんばかりに、二人の王からの視線は、冷めきっている。

二人の視線が勘に障った白石は、更に声を張り上げてしまい…。

「本来なら、俺たちは今頃“トリティニーグループに向かい、神のカードを”見に行く予定だったのだ!! だのに貴様等は、それを邪魔するが如くウジャウジャと湧き出よって!!」

「ぼっ…、白石さん…!!」

それまで冷ややかな視線を向けるだけだった二人の王。
しかし、白石の発した、あるワードに、その目を大きく見開いた。

「ムッ、神のカード…!!?」

「まさか…幻神獣!?!」

二人の王の様子が一変したとは知らず、白石は尚も…。

「貴様等のせいで、俺たちは“西条”のヤツよりも出遅れてしまっ

ているではないか!! サッサとこのデュエルを終わらせ、俺と結締でー!」

「バカ野郎、白石さん!! なにベラベラ喋りやがる!!」

つい声を荒げる結締。

ルインたちは、この世界に神のカード…つまり幻神獣が存在している事を知らなかった。

それはつまり、マナが何故この世界に来たのか…その動機を知らなかった事になる。

その情報というアドバンテージがあれば、少なくとも今回、ルインの言うターゲットは自分や白石だけで済んだ。

しかし、先の白石が言い放った一言で、状況は一変した。

恐らく既にルインやシエンは、自分たちを眼中に見ていない。

その矛先は、ここには居ない西条やマナ、そして神のカードに向けられてしまった筈だ。

現にルインやシエンの二人は、先程までとは違い、鋭い視線で窓から見えるトリティニーグループを凝視しているではないか。

「…幻神獣、魔術師の小娘…フフ。なる程…そういう事だったのね」

まるで確認するかのように呟くルイン。

それだけで、結締は悟る。

これが、最悪の展開であるという事を…。

しかし、このまま精霊界の王二人を、トリティニーグループに向かわせる訳にはいかない。

力づくでも、二人をこの場に留めなければ…!!

結締が鞆から決闘盤とデッキを取り出した瞬間だった。

「待てっ!? なっ、コイツァ…!!」

突如、ルインの足元を中心に、漆黒の魔法陣が大きく展開されたのだ。

それはルインと結締を包み、一種の結界として、結締を閉じ込めてしまったのだ。

「ちんちくりんなボウヤ…邪魔はさせないわ」

「くっ!?!」

「シエン、この場は私が引き受けてアゲル…貴方は、幻神獣の下へ向かった魔術師の小娘を…!」

「ふん…うぬに言われるまでもない…!!」

シエンはニヤリと。

まるで心の底から、この展開を待ち望んでいたかのように、狡猾な笑みを浮かべながら

「うぬ等の話しによれば、幻神獣の下へ“西条”という者も居るの
だろう？クハハハハ……！！ 邪帝を倒したその実力……！！ 久しぶ
りに楽しめそうだ……！！」

ズドンッ……！！

狂気に満ちた真紅の眼をギラつかせながら、シエンはその場から
壁を突き破り、トリティニーグループへと一直線に飛んでいく。

「っ！？ 待ちやがれ……！！ って、糞ッ……！！ 魔法陣の壁で……出ら
れねえ……！！」

後を追おうにも、ルインが展開した魔法陣に閉じ込められた結締
は、まるで見えない壁にぶつかったように、弾き飛ばされてしまう。

「フフ……無駄よ。この魔法陣から出るには、私とデュエルする他な
いわ」

ルインから放たれる、圧倒的な闘気に、結締は奥歯を噛み締める。

「白石さん!!」

「っ!？」

「早くクルスとのデュエルを終わらせろ!!　そこで、急いでヤツの後を追うんだ!!」

「くっ!?　貴様に言われるまでもないわ!!」

結締に言われ、事の事態を把握した白石は、今も尚怯えるクルスに向かって…。

「という訳だ、クルス!!　このデュエル…俺のモンスターたちで、貴様に総攻撃をかけるぞ!!」

「ひいっ!？」

【クルス】

LP／3600

【白石直也】

LP／2900

クルスの前に立ちはだかる二頭のドラゴン。

壁となるモンスターがいないクルスは、白石のドラゴンたちの総攻撃を受けた。

「行けええ！！ サファイアドラゴンッ！！ そしてブルーアイズ
よッ！！」

「ひいいっ！？」

眼前に迫る二頭のドラゴン。
クルスは思わず目を逸らし、一緒にこの世界にやってきたルイン
を見た。

（ルインっ、ルイン…っ！！）

しかし、見えたのはルインの背中だけ。
いくら自分が彼女の名を叫ぼうが、ルインは二度と、此方を振り
返る事はなかった。

（ルインっ、ルインっ！！ 助け…っっ！？）

その瞬間。

幼いクルスの身体に、白石のドラゴンたちによる凄まじい攻撃が
襲いかかった。

「滅びのッ！！ バースト・ストリイームッ！！」

ズドンッ！！！

「ぎややあああああああ！！！！！！」

【クルス】

LP／3600 ↓ 0

【白石直也】

LP／2900

メキヤッ！！

ズゴゴゴゴゴ…ッ！！

凄まじい衝撃がクルスの身体を突き抜ける。

身体の所々が悲鳴をあげる中、クルスは最後の力を振り絞って、白石をギョロリと睨みつける。

「……は…ず…っ！！」

「っ！？」

声は聞こえない。

しかし、白石には口の動きでクルスが何を言っているのかが理解できた。

次は、必ず… 壊してやるっ！！

その言葉を最後に、クルスは人間界から姿を消した。
しかし、やはりルインは最後まで。

クルス（仲間）の最後であっても、振り返る事はなかった。

※

クルスが消滅した事で、白石を束縛していた魔法陣が消滅した。
これにより白石は、この場で行動の自由を与えられた唯一の人物
という事になる。

結締に至っては、ルインの展開した魔法陣に捕らわれ、強制的に
デュエルをしなければならぬ状況だ。

白石のデュエルが終了したのを確認すると、結締は魔法陣の中か
ら、鬼気迫る勢いで、白石に言い放った。

「急げ、白石さん！！」

結締は、ルインと対峙し、鋭い視線をぶつけ合いながら

「急いであの鎧野郎を追うんだ！！ 西条ちゃんも居るだろうが、誰も応援に行かないよりマシだぜい！！」

「ふうん…、貴様に言われるまでもない…！！」

白石は一步、二歩と。

結締に背を向けて、その場から離れていく。

「俺の不用意な発言で、この状況を作ってしまった。自分のツケは…自分で払う！！」

その言葉に白石は、自分の拳を奮わせる。

それだけ、自分なりに責任を感じているのだ。

「結締。ここの相手は…貴様に任せる…！！」

「…ああ。仕方ねえが、ここは俺が引き受けてやるぜい」

友からの頼もしい言葉に、白石は走り出す。

結締ならば、必ずルインを倒すと信じて。

そんな二人の様子を眺めていたルインは、白石が走り去ってから。まるで小馬鹿にするように、結締を嘲笑った。

「フフ…。あのボウヤが向かった所で、シエンに振り返りにされるのがオチだわ。それ以前に、無事に幻神獣の所まで辿り着けるかどうか…」

「それはやってみなくちゃ、分からねえぜよ。それに…神のカードの所にゃあ、西条ちゃんがいる…!!」

結締はここには居ない、自分の友人を思い浮かべる。

「西条ちゃんなら、あんな鎧野郎なんかじゃ負けねえ!! なんてって、一度は王である邪帝ってヤツを倒しているからにゃ…」

そう。

王クラスの相手の実力を、西条は理解している。理解しているからこそ、西条はきつと、油断はしない。持てる力の全てを出して、神のカードを…そしてマナを守るだろう。

しかし…。

「フフ…知らないから言える台詞よね」

「？」

意味深なルインの言葉。

「シエンは私たち、王の中でも…その力は別次元の領域。ま…結果は自ずと分かるわ」

ルインの言葉に結締は内心、言い表せない不安が広まる。
しかし、今は彼を…自分の友を信じる他ないのだ。

そんな結締に、ルインは両の腕をゆっくりと広げ、構える。
それは、二人のデュエルの始まりを意味していた。

「さ、お喋りはこれでオシマイ。始めましょう？ 私たちのデュエルを…！！」

結締 VS ルイン

そして、神のカードを襲撃するシエン。

その神のカードにたどり着いた西条にマナ。

傷を負いながらも、責任を果たそうと懸命に走る白石。

神のカードを守る為の戦いが、今、本格的に動き出す。

王の力 儀式 V S H E R O （前書き）

※

三上市の中心地に在る、世界有数の大企業トリティニーグループ。今でこそ、この会社はカードゲームの製造・販売を主にし、遊戯王カードというビッグタイトルを獲得しているが、昔は考古学・古代遺跡発掘・調査の会社であった。

そんな昔のある日、トリティニーグループの現社長である早乙女という男が、仕事の依頼で遺跡の調査に向いた。

地元の住民からの話しによれば、それは突然の出来事だったらしい。

遺跡の内部から、不可解でありながら、幻想的な眩い光が発せられたというのだ。

勿論、遺跡調査には照明機器は必要不可欠だ。

しかし、その光の現象は、社員達が作業を終えた深夜に起きたらしいのだ。

気になった早乙女は息を呑みながら、慎重に遺跡の奥へと歩を進めていく。

最深部の、まるで何かの祭壇らしき広い空間に、ソレは在った。

昨日までは何も無かったソレは、今も尚、幻想的な輝きを発しているではないか。

まるで早乙女は、ソレに吸い込まれるように見とれながら、ソレに手を伸ばす。

そう。

彼の手に収まった三枚のソレこそ、後にトリティニーグループがカードゲームを発展させるに至ったモノ。

幻神獣、即ち…神のカードである。

王の力 儀式 VS HERO

※

三上市の郊外に建つ廃墟、その内の傾いたビルの中では、精霊界の王であるルインと、結締のデュエルが始まろうとしていた。

白石が失言した事により、ルインの仲間であるシエンという王は、神のカードが安置されているトリティニーグループへと向かって、ロケットのように飛んでいった。

自分も急いで後を追おうとしたが、それはルインが展開した魔法陣によって阻止させられ、強制的にデュエルをする事になったのだ。

妖美な笑みを浮かべながらも、圧倒的な威圧感を放つルイン。

その気迫は、流石に王と自負するだけの事はある…と、結締は警戒するように、表情を引き締めた。

神のカードの安否は気になる。

しかし今、神のカードの所には、友人である西条亨がいる。

更には事態の修繕に努めようと、白石直也も必死になって走ってくれている。

ならば、今の自分が成すべきことは一つ。

「ボウヤには悪いケド…ここで眠ってもらおうわ！」

「そいつア俺の台詞だぜい。俺のHEROたちで、お前をぶっ飛ばす!!!」

それぞれ気迫に満ちた視線や言葉をぶつけ合う二人。
そして、遂に二人のデュエルが始まった。

『デュエルッ!!!』

【先攻】ルイン

LP／8000

【後攻】結締智恭

LP／8000

「先攻は私がもらうわ。私のターン、ドロー!」

先攻を奪取し、カードをドローするルイン。

初めての王とのデュエルに、対峙する結締は警戒心を露わにする。

いったいどのようなデッキで、どう攻めてくるのか…と。

「私は手札の永続魔法『漆黒のトバリ』を発動…!!!」

【漆黒のトバリ】

「永続魔法」

自分のドローフェイズにドローしたカードが闇属性モンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で、そのカードを墓地へ送る。その後、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。

初手に永続魔法を発動したルイン。

妖美な笑みを浮かべながら、ルインは手札の中から一枚のカードを掴み取り

「そして…フフ。モンスター1体を、裏側守備表示でセット。さあ…ボウヤのターンよ」

永続魔法『漆黒のトバリ』を発動し、モンスターを一体セットしただけでターンを終了したルイン。

普通に見れば、それは何の変哲もない、ただの先攻プレイだ。

しかし、対峙する結締は、ルインの発動したカードに注目する。

（漆黒のトバリ…？さっきから精霊界の連中ア、俺たちが知らねえカードばかり使ってきやがる。油断ならねえ…！！）

気を引き締める結締は、自分の初期手札に視線を移す。

（今ルインの場にやあ、リバーズカードは1枚もない。なら、俺は安心して攻撃する事ができるぜい!!）

今の自分の手札は良い具合に噛み合っている。
ならば、攻めれる時に一気に攻める。

「じゃあ、行くぜい!俺のターン、ドロー!!」

相手は精霊界の王。

一瞬の油断は、即座に死を意味する。

そう判断した結締のプレイとは

「手札の魔法カード『Eーエマージェンシーコール』を発動!!」

【Eーエマージェンシーコール】

〔魔法カード〕

自分のデッキから「E・HERO」と名のついたモンスター1体を
手札に加える。

「この効果で、デッキから【E・HERO】1体を手札に加える!
俺が手札に加えるのァ、バーストレディ!!」

「【E・HERO】：そう、ボウヤは【HERO】デッキなのね…」

結締が手札に加えたカードを確認し、ポツリと呟くルイン。
そして、次に結締が使うカードとは

「更に、手札の魔法カード『融合』！！」

【融合】

「魔法カード」

手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札のフェザーマンとバーストレディを融合し…現れる！！」

カッツ！！

結締の手札から、二体のHEROが融合した。

辺り一面を眩い閃光が包み、その空間の中心に、融合されたモンスターのシルエットが浮かびあがる。

「融合 召喚 ！！ 『E・HERO フレイム・ウィングマン』
！！」

【E・HERO フレイム・ウィングマン】

星6／風属性／戦士族

ATK／2100 DEF／1200

「融合／効果」

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO バーストレディ」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

結締のフィールドに、風と炎の力を宿したHERO、フレイム・ウィングマンが参上した。

融合召喚し、強力モンスターを呼び出した事で、結締は早速、バトルフェイズへと突入する。

「行くぜい！フレイム・ウィングマンで、裏側守備モンスターに攻撃！フレイム・シュート！！」

ドギヤアッ！！

炎を身に纏ったフレイム・ウィングマンの一撃がルインのモンスターに炸裂し、大爆発を起こした。

「破壊されたのは守備力2000のモンスター『儀式魔人リリーサー』。フフ…融合して正解だったわね」

モンスターを戦闘破壊されながらも尚、余裕を醸し出す発言をするルインに、結締は口元に笑みを浮かべながら警告する。

「余裕ヅラしてられるのも、今の内だぜい……!!」

ピクリ…と、その言葉にルインは反応する。

「フレイム・ウィングマンは、バトルで相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、相手ライフに与える！行け、フレイム・ウィングマン!!」

「っ!!」

フレイム・ウィングマンの右腕に在る巨大な竜の口から、強力な熱線が放たれ、ルインに直撃する。

ズボアッッ!!

「くっ!!」

【ルイン】

LP／8000 ↓ 6800

「っし！！ 先制ダメージを与えたぜい！！」

相手モンスターを破壊し、尚且つダメージを与える事に成功した結締は、パチンと軽快に指を鳴らす。

「へへ……！！ 俺ア、リバーズカードを1枚セットして、ターンエンド……！！」

このターン、正直なところ結締は安堵していた。

彼にとって、ルインが発動した永続魔法『漆黒のトバリ』の効果は知らない。

知らないからこそ、融合召喚しながらも結締はそのカード効果を警戒していた。

しかし、上級モンスターを融合召喚しても、攻撃しても、いずれも効果が発動する気配がない。

ならば、あの永続魔法は自分のターンでは無害だという事が証明できた、という事になる。

未知のカードを使用する相手なだけに、そういった些細な情報だけでも、結締にとっては朗報なのだ。

その事実が、重苦しかった彼の気持ちを、若干ではあるが軽くしてくれた。

だが……。

「フフ…。少し加減し過ぎたみたいね」

ゾミ…ッ！！

「っ！？」

「それに、勘違いされちゃ困るのよ。まだデュエルは始まったばかり…これからよ」

ギンッ！！

それまで妖美だった笑みに、更なる冷徹さが加わり、結締を射抜く。

「本当の王のデュエルは…！！ 私ターン、ドロ…！！」

【ルイン】

LP／6800

「手札」

5枚

「モンスター」

なし

「魔法・罫」

漆黒のトバリ

【結締智恭】

LP／8000

「手札」

2枚

「モンスター」

E・HERO フレイム・ウィングマン

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

ルインのターンが始まった。

デッキからカードをドロートしたルインは、そのカードをゆつくりと…結締に見せつける。

「私のターンのドロフェイズ…この瞬間、永続魔法『漆黒のトバリ』の効果発動！！」

「っ！？」

「ドロフェイズにドロートしたカードが闇属性モンスターだった場合、そのカードを公開する事で、そのカードを墓地へ送る。私がドロートしたカードは、闇属性モンスター『儀式魔人プレサイダー』！！」

永続魔法『漆黒のトバリ』の効果によって、ルインはドロートしたモンスターカードを墓地へと送った。

更に…

「この効果でモンスターを墓地へ送った後、私はカードをドローで
きる。ドロー!!」

(ナルホド：闇属性モンスター専用の墓地肥やしか：!!！)

漆黒のトバリの効果が判明し、表情を引き締め直す結締。
すると、ルインはドローしたカードを再び公開してきた。

「フフ：今ドローしたカードも、闇属性モンスター『儀式魔人カー
スエンチャンター』!!」

「っ!？ (また：!!！)」

「漆黒のトバリの効果により、カースエンチャンターのカードは墓
地へ送り、私はカードをドローする!!」

再びデッキからカードをドローするルイン。
更に：!!！

「ドロー!! フフ：また闇属性モンスターを引いたわ。『儀式魔
人プレコグスター』!!」

「なっ!？ (また：っ!？)」

「闇属性モンスターを引いた為、私はドローしたプレコグスターを

墓地へ送り…もう1枚カードをドロー!!」

一気にデッキ枚数を減らし、墓地を肥やしていくルインのプレイに、結締は咄然とする他なかった。

漆黒のトバリの効果でドローしたルインだったが、今回は闇属性モンスターではないらしく、そのカードを公開する事なく、手札の中へと収めていく。

「フフ…これで私の準備は整った。ボウヤ…覚悟は良いかしら？」

「っ!？」

「私は『マンジュ・ゴッド』を召喚!」

【マンジュ・ゴッド】

星4／光属性／天使族

ATK／1400 DEF／1000

〔効果〕

このカードが召喚・反転召喚された時、自分のデッキから儀式モンスターカードまたは儀式魔法カード1枚を選択して手札に加える事ができる。

ルインのフィールドに、神仏像を象ったモンスターが現れた。

「マンジュ・ゴッドの効果を発動するわ!このカードが召喚に成功

した時、デッキから儀式魔法もしくは儀式モンスター1枚を選び、手札に加える……!!」

ルインは自分のデッキに手を伸ばし、その中から一枚のカードを抜き取った。

「フフ：私が手札に加えるのは、儀式モンスター『救世の美神ノースウェムコ』!!」

デッキから儀式モンスターを手札に加えたルインは、早速と言わんばかりに、手札のカードに手を伸ばす。

「そして、手札より儀式魔法『救世の儀式』を発動!!」

【救世の儀式】

「儀式魔法」

「救世の美神ノースウェムコ」の降臨に必要。手札・自分フィールド上から、レベルの合計が7以上になるようにモンスターをリリースしなければならない。自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、このターン自分フィールド上に表側表示で存在する儀式モンスター1体は魔法・罠・効果モンスターの効果対象にならない。

「儀式モンスターを降臨させる為には、自分の手札・フィールドに

召喚したい儀式モンスターと同じ、又はそれ以上のモンスターレベルを生贄にしなければならない。でも、この瞬間：私は墓地の『儀式魔人リリーサー』と『儀式魔人プレサイダー』のモンスター効果を発動！！」

【儀式魔人リリーサー】

星3／闇属性／悪魔族

ATK／1200 DEF／2000

〔効果〕

儀式モンスターの儀式召喚を行う場合、その儀式召喚に必要なレベル分のモンスター1体として、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事ができる。このカードを儀式召喚に使用した儀式モンスターがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手はモンスターを特殊召喚する事ができない。

【儀式魔人プレサイダー】

星4／闇属性／悪魔族

ATK／1800 DEF／1400

〔効果〕

儀式モンスターの儀式召喚を行う場合、その儀式召喚に必要なレベル分のモンスター1体として、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事ができる。このカードを儀式召喚に使用した儀式モンスターが戦闘によってモンスターを破壊した場合、その儀式モンスターのコントローラーはデッキからカードを1枚ドローする。

すると、ルインのフィールドに墓地へ送られていた四体の内、二体の儀式魔人たちが姿を現した。

「【儀式魔人】と名のつくモンスターは、墓地から除外する事で、儀式召喚の生贄とする事ができるのよ」

「なにっ!？」

思わず声をあげる結締。

通常、儀式召喚とは最低でも以下のパーツが必要なカード軍だ。

●儀式モンスター

●儀式魔法

●儀式モンスターのリリース用モンスター

それらは手札、フィールドからカードを消費していく為、最低でも三枚のカードを消費していく事となる。

これは、以前に融合召喚で説明した消費枚数と同じと言える。

しかし、ルインは墓地からでも効果を有用に活用していく事で、たった二枚の手札消費で、強力な儀式モンスターを召喚しようというのだ。

「フフ：私は墓地のレベル3モンスター『儀式魔人リリーサー』と、レベル4モンスター『儀式魔人プレサイダー』を除外して、儀式召喚ッ!！」

カッッ!！」

「降臨せよ……!! 『救世の美神ノースウェムコ』!！」

【救世の美神ノースウェムコ】

星7／光属性／魔法使い族

ATK／2700 DEF／1200

〔儀式／効果〕

「救世の儀式」により降臨。このカードが儀式召喚に成功した時、このカードの儀式召喚に使用したモンスターの数まで、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するカードを選択して発動する。選択したカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードはカードの効果では破壊されない。

ズドドドドド…！！

ルインのフィールドに降臨せし、救世の美神ノースウェムコ。

彼女から放たれる神聖さに、結締は思わず見とれてしまった。

「攻撃力…2700のモンスター…ッ！！」

「この瞬間、ノースウェムコの効果、発動！！」

「っ！？」

「ノースウェムコが儀式召喚に成功した時、その素材としたモンスターの数だけ、フィールドのカードを選択して発動する。私が選ぶのは永続魔法、漆黒のトバリとマンジュ・ゴッド！！」

ルインが選択したカードが淡い輝きを放つ。
その輝きはノースウェムコと同調している様で、ノースウェムコも同様に身体から同じ光の輝きを発していく。

「選択したこれらのカードが在る限り、ノースウェムコはカード効果では破壊されない」

「っ!？」

その効果に結締は奥歯をギリツと噛み締める。
攻撃力2700もあるモンスターを倒そうとするならば、それ以上の攻撃力のあるモンスターか、カード効果によって破壊するしかない。

しかし、その二択の内一つは、ノースウェムコの効果によって封じられてしまったのだ。

「フフ…さあ、バトルと行きましょう」

遂にバトルフェイズへと突入するルイン。
その先陣を進むのは…

「ノースウェムコで、フレイム・ウィングマンを攻撃!!」

ズゴウツ!!

「ぬあっ!! フレイム・ウィングマンっ…!!」

【ルイン】

LP／6800

【結締智恭】

LP／8000 ↓ 7400

ノースウェムコの持つ杖から放たれた浄化の光により、フレイム・ウィングマンが破壊されてしまった。

これにより、結締のフィールドに壁となるモンスターはいなくなり、一枚のリバースカードだけが残されてしまった。

（フレイム・ウィングマンがバトルで破壊されちゃったが…俺の場じゃあ『ヒーロー・シグナル』のカードがある!!）

【ヒーロー・シグナル】

「罠カード」

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

（まだルインの場にやあ、マンジュ・ゴッドの攻撃が残っている：！！　ここはヒーロー・シグナルを使って、壁モンスターを特殊召喚するっきゃねえ！！）

そう判断した結締が、ヒーロー・シグナルの効果を発動しようとしたその瞬間だ。

ニヤリ…と、ルインの口元が狡猾な笑みへと変貌する。

「フフ…この瞬間、私は儀式召喚の生贄にした『儀式魔人プレサイダー』の効果の恩恵を得るわ」

「っ！？」

「プレサイダーを儀式召喚の生贄とした儀式モンスターがバトルでモンスターを破壊する度に、私はカードをドロォできる…！！」

デッキからカードをドロォしたルインは更に、結締に言い放つ。

「言い忘れてたケド：儀式召喚に使用した『儀式魔人リリーサー』にも、もちろん効果はあるわ。リリーサーを素材とした儀式モンスターが場に居る限り、相手はモンスターを特殊召喚する事ができない」

「ン…なッ　！！？」

“特殊召喚できない。”

これにより、結締の目論見は全て封じられた。

彼が主軸とする融合召喚は“特殊召喚”であり、今回使用する筈だった罠カード、ヒーロー・シグナルも“特殊召喚”だ。

これでは、自分のデュエルはほぼ完封されてしまった事になる。

「フフ…その顔だと、どうやらそのリバーiscardはモンスターを特殊召喚する為のカードみたいね？でも、それもノースウエムコが私の場にいる限り、全て無効…！！」

「くっ！！」

「今のボウヤの場には、モンスターはいない…！！ マンジュ・ゴツドで、プレイヤーへダイレクトアタック！！」

「のおああッ!？」

【ルイン】

LP／6800

【結締智恭】

LP／7400 ↓ 6000

「フフ…良い悲鳴^{ハズ}。ああん…ゾクゾクしちゃう♪」

ライフを逆転され、手札やフィールドのアドバンテージを大きく
損失した結締の表情は険しかった。

【ルイン】

LP／6800

「手札」

4枚

「モンスター」

救世の美神ノースウエムコ
マンジュ・ゴッド

「魔法・罫」

漆黒のトバリ

【結締智恭】

LP／6000

「手札」

2枚

「モンスター」

なし

「魔法・罫」

リバースカード 1枚
(→ヒーロー・シグナル)

マズい…と、頬に嫌な汗が流れ落ちる。

それと同時に実感する。

やはり、自ら王と名乗るだけの事はある…と。

（強ええ…！！ 前にデュエルした変なチビデブや、白石さんがデュエルしたクルスって奴よりも、ケタ違いな強さだ…！！ このままじゃ俺ア…何も出来ねえ！？）

結締の中に言いようのない不安が広がっていく。

そんな彼の表情を楽しみながら、ルインはメインフェイズ？へと移行し…

「フフ…私はリバースカードを1枚セットして、ターンエンドよ」

※

やや薄暗いその部屋は、西条やマナからすれば、余りにも日常離れした光景だった。

広く空けた部屋の要所要所には、様々な電子機器が部屋の至る所に設置されており、そこから伸びるケーブルは、部屋の奥にある三つの巨大なカプセルへと繋がっていた。

しかし、そのカプセルに触れる事はできない。
部屋の中央には、こちら側と向こう側を遮断するように、ガラス

張りの敷居が設けられているのだ。

こちら側に立つ西条やマナは、見慣れない部屋の光景に目を奪われ、感嘆の息を漏らしながら、部屋の中をぐるりと見渡す。

少し遅れて、後から部屋に入ってきた中島は、部屋に設置されている機会のボタンを手馴れた手つきで操作する。

すると、それまで薄暗かった部屋に電力が行き渡り、各コンピューターがシステムを起動させていく。

「これで準備OK☆西条ちゃん、マナちゃん。向こう側にあるカプセルの中ヨ…よく見て♪」

ヴォン…ヴォン…ツ…!

ヴォン…!!

「…っ!! あれが…!?!」

「幻神獣…!!」

中島がコンピューターを操作した為か、部屋の向こう側に設置されていた三つのカプセルそれぞれに、三つの照明が当てられた。

そう。

そのカプセルに入っているそれぞれのカードこそ、マナが探し求めていた精霊界の神、幻神獣なのだ。

「ちょっと待ってて、今スクリーンに映すわネ☆」

此処からでは遠すぎる為、中島は近くのモニターにそれぞれ三枚の神のカードを表示させる。

映し出された神の姿に、西条やマナは息を呑んだ。

「コレが私たちが言う神のカードであり、マナちゃんの言う幻神獣ネ…どう、マナちゃん？ このカードテキスト…読める？」

「……うん」

恐る恐る尋ねる中島に、マナはゆつくりと…だが、ハッキリと答える。

「間違い…ないよ！この文字は…精霊界で使われてる文字なんだよ！」

「ーッ！！」

マナの言葉を聞き、感極まった中島は喜びの余り、涙と鼻水を激流葬した。

「……………」

しかし、中島が喜んでいる最中、西条は違った。

近くのモニターに神のカードが表示されているのにも関わらず、彼の目は依然と、カプセルの中に安直された本体を見つめたままだ。

「…さいじょお？」

そんな彼の様子を不思議に思ったマナは、キョトンとした表情で彼の顔を覗き込む。

どうしたの…？

そう尋ねようとした瞬間、彼の口から零れた言葉とは…。

「……える」

「え？」

「何だよ…コレ…ッ！？ 何で…あのカードから声が聞こえるんだよ！？」

「っ！？」

「ドゥしたっての、西条ちゃん！？ アタシには何も聞こえないワよ！？」

西条の視線の先には、三枚の神のカードしかない。
神のカードと、西条の顔を交互に見比べるマナは、まるで信じられないモノを見る目をしていた。

(まさか…幻神獣が…さいじょおに!？　　って、きゃああ!？)

「っ!？」

「ナニ!？　　一体なんなのヨウ!？」

マナがそう思った瞬間、それぞれ三枚の神のカードから、凄まじい勢いで眩い光が発せられた。

その光は西条とマナの二人を包み込み、尚もその輝きを増していく。

「oooooooooooo!!？」

「キャアアアア!!!!!!？」

「西条ちゃん!？　　マナちゃん!？」

思わず彼の身体に飛び付くマナ。

眩い光に包まれながら、二人の視界は完全にホワイトアウトした。

※

「くっ…!? 俺のターン、ドロ…!!」

【ルイン】

LP／6800

「手札」

3枚

「モンスター」

救世の美神ノースウエムコ
マンジュ・ゴッド

「魔法・罠」

漆黒のトバリ

リバースカード 1枚

【結締智恭】

LP／6000

「手札」

3枚

「モンスター」

なし

「魔法・罠」

リバースカード 1枚

(→ヒーロー・シグナル)

結締のターンが始まった。

ルインの使役する儀式魔人の効果により、モンスターの特殊召喚を封じられた結締は、完全な劣勢となっていた。

今、引き当てたカードはモンスターカード『カードガンナー』。

守備表示でセットし、ルインからの攻撃を凌ぐ事ができるが、それでは更に自分を追い込む事になりかねない。

(ここは少しでも：ヤツのモンスターの数を減らすっきゃねえ!!！)

結締は腹をくくり、カードガンナーのカードを決闘盤に叩き付けた。

「俺ア『カードガンナー』を召喚ッ!!！」

【カードガンナー】

星3／地属性／機械族

ATK／ 400 DEF／ 400

「効果」

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする。また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

結締のフィールドに、両手が小さな砲芯となっているロボットが召喚された。

「カードガンナーの効果発動!! 1ターンに1度、デッキの上か

ら3枚までのカードを墓地へ送る事で、カードガンナーの攻撃力は墓地へ送った枚数につき500ポイントアップする！！」

結締はデッキの上から三枚のカードを墓地へ送る。

これで、このターンの間だけ、カードガンナーの攻撃力は1500ポイントアップした事になる。

【カードガンナー】

ATK／ 400 ↓ 1900

「墓地へ送られたカード」

● E・HERO スパークマン

● E・HERO エッジマン

● ネクロ・ガードナー

「3枚のカードを墓地へ送った所で、その攻撃力は1900。私のモンスター、ノースウェムコは倒せないわよ？」

「だがそれでも、マンジユ・ゴッドなら倒せる！！」

まだ、互いにライフの余裕があるならば、叩けるモンスターは叩く。

常に攻める姿勢を持つ。

それが結締の、決闘者としてのバトルスタイルなのだ。

「バトル!! カードガンナーで、マンジュ・ゴッドに攻撃!!」

ズドンッ!!

ボバアッ!!

「うっ!？」

【ルイン】

LP／6800 ↓ 6300

【結締智恭】

LP／6000

マンジュ・ゴッドを破壊し、ルインの場のモンスター数を減らす事に成功したが、それでもライフは逆転できない。

「俺は…ターンエンド!」

【カードガンナー】

ATK／1900 ↓ 400

「…何か策があるのかと思ったけど、ただの悪あがきだったみたいね?」

「……」

「フフ：でもそういうの、キライじゃないわ。最後まで抵抗しない：でなきゃ、潰し甲斐がないもの」

艶めかしい動きで、頬や唇に指を這わせるルイン。

妖美な微笑みが、逆に彼女の存在感・威圧感を増幅させる。

激しい攻防の極限バトル。

それが、ルインの求める快樂なのだ。

「激しくしていくわよ……！！ 私のターン、ドロー！！」

【ルイン】

LP／6300

「手札」

4枚

「モンスター」

救世の美神ノースウエムコ

「魔法・罠」

漆黒のトバリ

リバースカード 1枚

【結締智恭】

LP／6000

「手札」

2枚

「モンスター」

カードガンナー

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

(→ヒーロー・シグナル)

自分のターンを開始したルインは、デッキからカードをドロースる。

「フフ…ドロートしたカードは闇属性モンスター『儀式魔人プレサイダー』。永続魔法『漆黒のトバリ』の効果によって、このカードを墓地へ送る…!!」

再び闇属性モンスターを墓地へ送るルインのプレイに、結締は陰しい表情で彼女の行動を見つめる。

「そして、カードをドロート!! フフ…私は『センジュ・ゴッド』を召喚!!」

【センジュ・ゴッド】

星4／光属性／天使族

ATK／1400 DEF／1000

「効果」

このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから儀式モンスター1体を手札に加える。

ルインのフィールドに、神仏像を象ったモンスターが召喚される。

「センジュ・ゴッドのモンスター効果よ。このカードが召喚に成功した時、デッキから儀式モンスター1体を手札に加える：私が手札に加えるのは、儀式モンスター『終焉の王デミス』！！」

儀式モンスターを手札に加えたルインは、バトルフェイズへと突入する。

「行きなさい、センジュ・ゴッド！ボウヤのモンスター、カードガンナーに攻撃！！」

ズドドッ！！

バコオッ！！

【ルイン】

LP／6300

【結締智恭】

LP／6000 ↓ 5000

「くっ！？　だがこの瞬間、破壊されたカードガンナーの効果発動！！」

「っ」

「カードガンナーが破壊された時…デッキから、カードをドロースる…!!」

「ドロー補助効果…フフ、ただ雑魚モンスターを召喚しただけじゃなかったってワケ？」

効果によって手札を補強した結締。

しかし…

「でも私には、まだノースウェムコの攻撃が残っている…!! 行きなさい、ノースウェムコ!! ボウヤに激しい一撃をあげなさい…!!」

ルインの直接攻撃宣言。

その瞬間、結締は墓地から一枚のカードを取り出した。

「そいつア遠慮しとくぜよ!! 墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動…!!」

【ネクロ・ガードナー】

星3／闇属性／戦士族

ATK／600 DEF／1300

「効果」

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「ネクロ・ガードナーを墓地から除外する事で、相手モンスターの
攻撃を1度だけ、無効にする！！」

ガキイイイ！！

その瞬間、結締の前にネクロ・ガードナーの幻影が現れ、ノース
ウェムコの攻撃から結締を守った。

「防がれた…！？」

「へへ…どうよ、俺の抵抗は？まだまだ足掻くぜい…！！」

ニィ、と笑みを浮かべる結締に、ルインはゾクリと…。
自分の中で、どんどん気持ちが高ぶっていくのを感じた。

「フフ…なかなかやるじゃない」

ルインのターンを凌いだ結締。

「私はこれで、ターンエンド。さあ、掛かってきなさい。もっと、もっと私を楽しませてちょうだい…!!」

※

【ルイン】

LP／6300

「手札」

4枚

「モンスター」

救世の美神ノースウエムコ

センジュ・ゴッド

「魔法・罨」

漆黒のトバリ

リバースカード 1枚

【結締智恭】

LP／5000

「手札」

3枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

(→ヒーロー・シグナル)

ルインのターンが終了し、始まった結締のターン。

場にはモンスターはなく、手札にもモンスターのカードはない。
更に、救世の美神ノースウェムコの儀式素材とした儀式魔人リリ
ーサーの効果により、結締はモンスターの特殊召喚を封じられてし
まっている。

その場しのぎで足掻いてみせたが、未だ状況が苦しい事に変わり
はない。

（何としても…ここはあのカードに賭けるしか方法はないぜよ…！
！）

結締は真剣な眼差しで自分のデッキを見つめる。

デッキ残り枚数27枚の中に、この状況を打開できるカードが無
い訳ではない。

だが、その確率は1／9。

決して高いと呼べる確率ではない。

「どうしたの？もう手詰まりかしら？」

余裕、とも呼べる発言を吹きかけるルイン。

そう、確かに今のままでは手詰まりだ。

だが…。

「…このドローが…このデュエルの命運を分かつ…！！俺のデッキよォ…HEROとして、今こそ起つ時だぜい！！」

このターンが正念場だと判断した結締は、デッキトップに添える指に力を込める。

ここで勝負をしなければ、男が廃る！！

「行くぜい…！！俺のターンッ、ドロォーッ！！」

運命の一枚。

このドローの結果によって、このデュエルの結末が変わる。そんな、彼の運命の一枚とは…

「ーッ！！　っし！！　きた、キタ、来たアアア！！」

「っ！？」

「最高だぜい、お前たち！！　さあ、HEROの力を魅せてやろうぜい！！」

引き当てたカードに、イキイキとした表情で高ぶる結締。

そのHEROとは……!!

「来い! 『E・HERO エアーマン』! !」

【E・HERO エアーマン】

星4／風属性／戦士族

ATK／1800 DEF／300

「効果」

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から1つを選択して発動する。●自分フィールド上に存在するこのカード以外の「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法または罠カードを破壊する事ができる。●自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

結締のフィールドに現れしエアーマン。

その効果を、結締は高らかに宣言した。

「エアーマンの効果発動!! 召喚に成功した時、デッキから【HERO】1体を手札に加える!! 俺が手札に加えるのァ: キャプテン・ゴールド!!」

デッキから『E・HERO キャプテン・ゴールド』のカードを手札に加えた結締は早速、キャプテン・ゴールドの効果を発動する。

「そして、手札のキャプテン・ゴルドの効果発動!!!」

【E・HERO キャプテン・ゴルド】

星4／光属性／戦士族

ATK／2100 DEF／800

「効果」

このカードを手札から墓地に捨てる。デッキから「摩天楼－スカイスクレイパー」1枚を手札に加える。フィールド上に「摩天楼－スカイスクレイパー」が存在しない場合、フィールド上のこのカードを破壊する。

「キャプテン・ゴルドを手札から墓地に捨てる事で、デッキからフィールド魔法、スカイスクレイパーを手札に加える!!!」

次々とデッキからカードを手札に加える結締に、ルインは顎を引き、表情を引き締め直す。

「へへ：行くぜ、ルイン！俺アこのターンでアンタの儀式モンスター、ノースウェムコを倒すぜい!!!」

「倒す？攻撃力1800のエアーマンで？ボウヤ：それは土台、無理な話しよ」

何を言い出すのかと思えば：と、ルインは一蹴する。

しかし当の本人、結締は大真面目だ。

「なら教えてやるぜい！HEROには、HEROに相応しい戦う舞台ってもんがあるんだ！フィールド魔法、スカイスクレイパー発動！！！」

【摩天楼—スカイスクレイパー】

「フィールド魔法」

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。

フィールド魔法、スカイスクレイパーの発動により、辺りの光景が一変する。

荒廃したビルの中だったのが、まるで月明かりに照らされた夜の都会へと変貌してしまったのだ。

「バトル！！ 行けッ、エアーマン！！ ノースウェムコに攻撃だ
アア！！！」

「っ！？ ノースウェムコの攻撃力は2700、エアーマンの攻撃力は1800……！！ ボウヤ……いったい何を考えているの……！！？」

「この瞬間、スカイスクレイパーの効果が発動される……！！！」

エアーマンは夜の都会の高層ビルの上に立ち、月明かりに照らされながら、攻撃目標をノースウェムコに定める。

「スカイスクレイパーは【E・HERO】が攻撃する時、相手モンスターとの攻撃力が自分よりも高い場合、ダメージステップの間だけ、攻撃する【E・HERO】の攻撃力を1000ポイントアップする！！」

「何ですって!?!」

【E・HERO エアーマン】
ATK／1800 ↓ 2800

「行けエエ!! エアーマン!! ノースウェムコに、攻撃ッ
!!!」

ズボウッ!!

「くうっ!? ノースウェムコを…っ!!」

【ルイン】
LP／6300 ↓ 6200

【結締智恭】
LP／5000

「っし！！ ノースウエムコを破壊できたぜい！！」

ルインのモンスター、ノースウエムコを破壊した結締は、思わずガッツポーズをとった。

それ程までに、ノースウエムコの儀式召喚で付加かれた能力、特殊召喚封じが厄介だったのである。

だが今、その呪縛は解き放たれた。

「これで俺ア、モンスターを特殊召喚できる様になったぜい！！
さあ、ルイン！！ ここからだぜい、本当のデュエルは……いつ！
？」

「ああ……いいわあ……っ！！ 感じちゃう……んっ！？」

特殊召喚を封じられている中、まさか戦闘において、攻撃力2700のモンスターがパワー負けするとは思ってなかったのだろう。

自分のモンスターが破壊されたにも関わらず、ルインは結締とのデュエルに熱が入ってしまった。

誘惑するかのように、艶めかしく腰をくねらせながら、太股から股、腰、胸、唇へと指を這わせるルイン。

まるでその光景は、自分の身体を弄り、気分を高めているような……。

「あ～……!! フフ……まさか、特殊召喚や破壊効果もせずに、上級モンスターを倒すなんて思ってもみなかったわ……」

「……」

「本当のデュエル……フフ。ボウヤが望むなら、良いわよ？魅せてアゲル……!!」

ペロリ……と。

ルインは舌で唇を軽く舐めると

「私の本当の実力を……!! フフ……、一瞬で消えないですよ？」

一瞬で消えないですよ？

それは、ルインの本気を意味していた。

※

気がつくつと、そこは不思議な空間だった。

辺りには何もなく、ただ真っ白な一面が広がっているだけの空間。壁も、空も、地も、何もないこの場所で、西条はゆっくりと瞼を開けた。

今、自分の身体は浮いているのか、立っているのか分からない。
ただ、自分という存在や、自分に捕まる彼女の存在だけはハッキリと
感じる事ができる。

そんな自分にしがみつく魔術師の少女、ブラック・マジシャン・
ガールことマナも、辺りを見渡しながら

「っ…ここは…?」

「分からない。突然…神のカードが光ったと思ったら…ここに…」

そう。

突然、神のカードから眩い光が発せられ、自分たちはその光に呑
み込まれてしまったのだ。

再び辺りを見渡してみても、やはりここには何もない。
すると二人の頭に、誰かの声が響いてきた。

『……………』

「っ!？」

「えっ!？ なに!？」

『……………』

突然、頭の中に響き渡る謎の声に、マナは思わず耳を塞ぐ。
しかし、耳を塞いだ所で、頭に響く声は消えない。

辺りを見渡しても、やはりここに居るのは、自分と西条だけである。

『……………』

「…闇が…迫っている？」

「さいじょお…!! 何なのこの声!？」

『……………』

得体の知れない声、言葉に取り乱すマナは、彼の腕にしがみつき、
涙目で縋ってくる。

「…まさか…頭の中に響いてくるコレって…神のカードが…!？」

「…コレが…幻神獣の…声…!？」

『……………』

そうだ。と、二人の耳にはそう聞き取る事ができた。

「もしこの声が、本当に神のカードの声なら…!! 教えてくれ! さっき言った、闇が迫っているという言葉は、どういう意味なんだ!?!」

『……………』

すると二人の脳内で、とある映像が映し出された。

それは、真紅の鎧を身に纏った武者が、トリティニーグループ目掛けて、ロケットの如く空から飛んできている様子だった。

「コイツは…!?!」

「そんな…っ!?! まさか…っ、大將軍…シエン!?! 精霊界のっ、邪神軍の王が…なんで!?!」

『……………』

二人に告げる神の声を聞き、西条は決意する。
自分の腕の中にいる、この少女の為に…。

「ああ…分かった。そのシエンってヤツを、俺は必ず倒す!!」

「っ!?! さいじょお、無理だよ!?! シエンは王の中でも、最強クラスの實力者なんだよ!?! いくらさいじょおが強くっても、今回相手は…!?!」

「じゃあ諦めろってのかよ!?!」

ピシヤリと、マナの言葉を塞ぐ西条は、真剣な表情でありながら、諭すように

「今、神のカードが敵の手に堕ちたら、お前の使命が果たせなくなっちゃう。せっかく此処まで来たんだ……!! 一緒に闘おうぜ、マジシャン・ガール!!」

「…さいじょお」

改めて感じる。

やはり彼はスゴいなあ、と。

自分は、相手がシエンだと知って、途端に逃げ腰になっていた。しかし、彼は違った。

相手がどんな強敵だろうと、立ち向かう勇気を見せてくれた。

しかし、やはり…怖い。

だが、彼の言うように、せっかく幻神獣の前までたどり着いたのだ。

ここで逃げては、今まで積み重ねてきた事が、全て無駄になってしまう。

それは、最悪の未来だ。

「…分かったよ」

マナも決意する。

相手が誰であれ、彼と一緒に戦うという事を。

「わたしも…さいじょおと一緒に戦う！！　一緒に戦って、自分の世界を…守る！！」

「…マジシャン・ガール」

二人が頷きあつたと同時に、二人がいた空間は徐々にその形を崩れていく。

そして…！！

・ ・ ・ ・

気がつくところには、先程までの白一色の世界ではなく、神のカードが安置されたトリティニーグループの中だった。

中島は神の光に当てられたせいなのか、床に倒れ込み、気を失っている。

先程、神のカードが見せた映像が本当ならば、もう直ぐこの場所に、ヤツが現れるはずである。

精霊界、最強の王が…!!

「とりあえず、中島さんを起こさないと…!! 中島さー…!!」

ズガアッ!! バゴオッ!!

ガキイイッ!!

突如、怒号とも呼べる破壊音が連続する。

しかもその破壊音は、徐々にこの部屋に近付いてきているではないか。

ズガガガガッ!!

バリイッ!!

「ーっ!？」

「くる…!!」

そして、遂に…!!

バゴ オオオオ !!!

この部屋の壁の一部が粉々に碎け散り、そこから一人の男が姿を現した。

その姿を見間違える筈がなかった。

真紅の鎧に、不気味に輝かせる両の眼。

手にした長い獲物を鞘に収めながら、その男は重鈍な足取りで、此方にゆつくりと近付いてくる。

「…シエン…!!」

確認するかのように呟く西条。

そんな彼の声を聞いたシエンは、グシヤリと…。

歪みきった笑みを浮かべながら

「うぬが西条か…!!　クハハハハハ!!　言葉は不要な様だ…良
いぞ? シンプルで分かり易い…!!」

グゴゴゴゴゴ…!!

建物全体が、シエンの放つエネルギーに耐えきれず、激しく揺れる。

凄まじい威圧感を放ちながら、シエンは宣言する。

神のカードを、そして…マジシャン・ガールも守ると決意した男
に対して、こう宣言する。

「さあ、始めよう!! 血肉たぎらせる、究極の死合をな!!」

混沌の街

※

ズドンッ！！と、

三上市の中央に聳え建つ、巨大なビルの一部…世界有数の大企業トリティニーグループの外壁が、凄まじい轟音をたてながら爆発した。

例えるならそれは、ビルに飛行機が直撃した様な…、と言える分かるだろう。

何十階もの上空の外壁が爆発し、崩れ落ちる様を、街の住民たちは戸惑いや悲鳴をあげて見ている事しか出来なかった。

その爆心地であるトリティニーグループの内部では、けたたましく警報が鳴り響き、社員等は急いで避難を始めている。

警察や消防、救急隊にも連絡が入り、出動命令が出る中、マスコミ等も車やヘリを使って走り出す。

たった一つの爆発で、大混乱へ陥る三上市。
その原因を作ったのは、一人の王の存在だ。

その名は、こことは違う異世界、精霊界の住人。

精霊界では知らぬ者はいないとされる、最強の王、大將軍シエン。

シエンは今、トリティニーグループ内にある特別な場所で、一人

の少年と少女と対峙していた。

その少年、西条亨は、何枚もの壁を突き破って現れたシエンに向き合いながら、険しい表情で闘志をぶつけている。

その西条の隣には、シエンと同じ精霊界から来た少女、ブラック・マジシャン・ガールが立っていた。

この世界に在る神のカードを手に入れ、精霊界を救う為にやって来たマジシャン・ガールだったが、後一步の所で敵側からの奇襲を受けてしまった。

それが、目の前に立つ精霊界の王、シエンだ。

「お前がっ…、シエン…!!?」

傍若無人の振る舞いで突如、目の前に現れた王に対し、西条は威嚇するように尋ねる。

「そうだ。ふん…!!　そこに最上級魔術師の弟子がいるとなると…クハハ。なる程、うぬが西条か…!!」

ギンツ…!!

シエンの両眼が紅に染まり、身体中から凄まじいオーラを放つ。

「うぬの事は邪帝から聞いている…!! 王を倒す程の腕前…、久しぶりに楽しめそうだ!!」

ゴバウツツ!!!!

シエンが言葉の一言一言を発する度に、それはプレッシャーという衝撃となって西条やマジシャン・ガールの二人を襲う。

それだけで分かる。

ここまでの、たった数口の会話だけで、西条はマジシャン・ガールが言っていた事を実感する。

(同じ王でも…邪帝と比べると…!! くっ!? なんて気迫だコイツ!?)

シエンから発せられる強大な力に、思わず怯みそうになる西条は、そこでマジシャン・ガールの様子に気付き、ハツとなり

「マジシャン・ガールっ!? 大丈夫か!？」

「わたしは…っ!! だ、だいじょぶ…!!」

大丈夫…というマジシャン・ガールだが、彼女の顔色は明らかに悪かった。

足は小刻みに震え、奥歯はカチカチと鳴っている。

しかし、彼女の瞳に宿る力はそうではなかった。

「わたしは…っ、さいじょおと一緒に、たたかうって決めたんだもん！！　だから…相手が王でも…っ、たたかう！！」

「マジシャン・ガール…！！」

彼女の本気の覚悟を聞き、西条は自分が恥ずかしくなった。

確かに、目の前に立つシエンは強敵だ。

恐らく、今までデュエルしてきた相手の中で、その強さは最強クラスなのは間違いない。

それを理由に、自分は気持ちが悪く思っていた。

だが、彼女は違った。

彼女は相手が最強クラスの敵であっても、堂々と戦う宣言をしたのだ。

身体は震えていても、その心は違う。

デュエルにおいての強さ。

その心構えを、西条はマジシャン・ガールから教わった気がした。

「…シエン！！　デュエルだ！！」

「クハハ…！！　幻神獣を賭けての決闘という訳か…！！　シンブルで分かり易い…！！　フンッ！！」
デュエル

ゴバウツツ!!

再びシエンの身体から凄まじいオーラが発せられ、周囲の壁が耐えきれず爆発を起こす。

「うぬ等2人掛かりで、このシエンと戦うか……!! 良いだろう! 束になろうが……ムツ!？」

「マジシャン・ガールツ!!」

シエンが戦闘態勢に入ろうとしたその時だ。

左腕に決闘盤を装着した西条は、その手を天に掲げる。

「うん!!」

すると、彼の掛け声に合わせるマジシャン・ガールの身体に、ある変化が起きた。

身体中に七色の魔力を帯びたマジシャン・ガールは、その身体を一枚のカードへと姿を変え、彼の決闘盤に収められたデッキの中へ入っていったのだ。

カッツ……!!

「ッ!？」

これにはシエンも言葉を詰まらせ、思わずその光景に見入っていた。

精霊界のデュエルモンスターのカード化。

その事実を確認するかのように、シエンは西条に尋ねる。

「貴様……!! まさか、その小娘と“契約”していたとでもいうのか……!？」

契約。

それは精霊界のデュエルモンスターが決闘者と心をつなぐ事で、その決闘者に精霊界の力の一部を譲渡する事である。

精霊界の力を得た決闘者は、本来の実力以上の力を引き出せると言う。

精霊界ではそれ以外にも様々な言い伝えはあるが、大まかな内容は先に述べた通りである。

ただし、この契約は精霊界のデュエルモンスターと決闘者ならば、誰とでも契約できる訳ではない。

産まれもつての相性もあれば、目的の不一致や互いの理解不足というものもある。

西条とマジシャン・ガールの二人は、そういった意味では条件は

満たしていた。

西条は彼女を守る為、そして、彼女の支えになる為に、力を求めた。

その上で彼女を励ましながら、一緒に強くなろうと手を差し伸べた。

マジシャン・ガールはそんな彼の心の強さに惹かれ、気持ちを奮い立たせる事ができた。

彼の決闘者としての向上心に、自分も彼と一緒に強くなりたいと願った。

互いが互いを求め、強さを求め、目的（神のカード）を目指す。

二人が契約するに至ったのは、つい先日の事だった。

二人で一緒にデッキを作っていたその時に、マジシャン・ガールから契約話このしを持ち出したのだ。

それを西条は、彼女なりの決意の顯れだと受けとめ、承諾した。

二人の力を一つに。

これが、二人が見いだした力（答え）なのだ。

ちなみに、西条とマジシャン・ガールの二人だけに幻神獣の声が聞こえた…という理由はここから来ているのだが、当の本人たちはその事実を知らない。

「いくぞ、シエンー!!」

「この目で人間と契約した者を見るのは初めてだ…なる程、良い面構えになっておる。クハハ…!! 良いぞ、高ぶる…高ぶるぞ、西条オオ!!」

互いに戦闘態勢に入る西条とシエン。

幻神獣。神のカードを賭けた死闘が今、始まる。

「全力でいくぞ…!!」

「推して参る…!!」

『デュエル!!』

※

【ルイン】

LP／6200

「手札」

4枚

「モンスター」

センジュ・ゴッド

「魔法・罨」

漆黒のトバリ

リバース・カード 1枚

【結締智恭】

LP／5000

「手札」

3枚

「モンスター」

E・HERO エアーマン

「魔法・罨」

摩天楼一スカイスクレイパー

リバーズカード 1枚

西条とシエンのデュエルが始まる頃、三上市の郊外に建つ廃ビルの中では、彼の友人である結締智恭が精霊界の王の一人、ルインとデュエルを行っていた。

現在バトルフェイズを終えた結締のメインフェイズ？。

ルインの場にモンスターは攻撃力1400のセンジュ・ゴッドしか存在しない。

だが次のターン、ルインは必ず儀式モンスターを展開し、一気にたたみかけてくるだろう…と、結締は予測する。

（ルインは前のターン、儀式モンスターを手札に加えている…このままじゃ、俺のエアーマンは確実に倒されちまう…！！　だが…！！）

何も手はない訳ではない。

「俺ア、リバースカードを1枚セットして、ターンエンド!!」

「フフ…じゃあ、ボウヤのエンドフェイズ時、私はこの罠カードを発動するわ」

結締のエンドフェイズに合わせて発動する罠。
それは…。

「いくわよ…!!」 リバーストラップ『ナイトメア・デーモンズ』
「!!」

【ナイトメア・デーモンズ】

「罠カード」

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。相手フィールド上に「ナイトメア・デーモン・トークン」（悪魔族・闇・星6・攻／守2000）3体を攻撃表示で特殊召喚する。「ナイトメア・デーモン・トークン」が破壊された時、このトークンのコントローラーは1体につき800ポイントのダメージを受ける。

ルインがナイトメア・デーモンズを発動したと同時に、彼女の場にあったセンジュ・ゴッドはコストとしてリリースされた。

「ナイトメア・デーモンズ…ッ!？」

「このカードは発動コストとして、私の場のモンスター1体をリリースする。そして、相手フィールドに『ナイトメア・デーモン・トークン』3体を特殊召喚する」

「ッ!？」

【ナイトメア・デーモンズ・トークン】

星6／闇属性／悪魔族

ATK／2000 DEF／2000

そして、ルインの発動したカードから影のような小悪魔三体が飛び出し、結締のフィールドにトークンとして現れた。

ルインの発動したナイトメア・デーモンズに対し、怪訝な表情をつくる結締。

「どういうつもりぜよ？ わざわざ俺のフィールドに、攻撃力2000のトークンを3体もくれるなんざ…」

「強力な効果ほど、何かしらの代償がある。覚えておいた方が良いわよ…フフ」

含みのある笑みを浮かべるルインに、結締は気色悪い胸騒ぎを感じた。

ルインは攻撃力2000もあるトークン3体を、こちらのフィールドに特殊召喚した。

それは彼女にとって、何かしらのメリットがあるか…或いは、その方が都合が良いからか。

結締が警戒する中、遂にルインのターンが始まった。

「フフ…私のターン、ドロォー!!」

【ルイン】

LP／6200

「手札」

5枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

漆黒のトバリ

【結締智恭】

LP／5000

「手札」

2枚

「モンスター」

E・HERO エアーマン

ナイトメア・デーモン・トークン 3体

「魔法・罨」

摩天楼一スカイスクレイパー
リバースカード 2枚

ギンッ！！っと、デッキからカードをドロ―したルインは細く、切り裂くような目つきで結締を捉える。

「言ったわよね？ここからが本当のデュエルだと…」

「…ゴクリッ」

「じゃあ、ボウヤの望み通り…！！ここからは激しくいくわ！！手札より儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』、発動！！」

【エンド・オブ・ザ・ワールド】

〔儀式魔法〕

「破滅の女神ルイン」「終焉の王デミス」の降臨に使用する事ができる。フィールドか手札から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにリリースしなければならない。

「更に、私は手札の『儀式の供物』のモンスター効果を発動！！」

【儀式の供物】

星1／闇属性／悪魔族

ATK／ 300 DEF／ 300

〔効果〕

闇属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、このカード1枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。

「このカードは闇属性の儀式モンスターを儀式召喚する場合、このカード1枚で、儀式召喚の生け贄とする事ができる……！！ 私が呼びだすのは、闇属性儀式モンスター『終焉の王デミス』！！」

「っ！？」

カッツ！！

ゴバウツツ！！

ルインのフィールドに黒い魔法陣が展開された瞬間、凄まじい突風が吹き荒れ、結締を襲う。

「儀式の供物を生け贄とし、儀式召喚……！！ 降臨せよ……！！ 『終焉の王デミス』……！！」

【終焉の王デミス】

星8／闇属性／悪魔族

ATK／2400 DEF／2000

「儀式／効果」

「エンド・オブ・ザ・ワールド」により降臨。2000ライフポイントを払う事で、このカード以外のフィールド上のカードを全て破壊する。

ゴゴゴゴゴゴ……ッ！！

黒き魔法陣から顕れし、全てを終焉へ導く悪魔。
終焉の王デミスが、ルインのフィールドに降臨した。

「：攻撃力2400のモンスターっ！！　だが、俺のフィールドには攻撃力1800のエアーマンや、アンタがくれた攻撃力2000のナイトメア・デーモン・トークンが3体もいる！！　そのまま攻撃してきても、俺にくるダメージは微々たるモンだぜい！！」

やはり儀式召喚をしてきた。

ここまでは結締の予測通りの展開…。

だが結締は、そこから先の展開を予測する事ができていなかった。

「フフ…ボウヤはとんだロマンチストね」

「なにっ!？」

「王である私が、そんな事に気付かないとでも思ってたの？　見くびられちゃ困るわ…」

ルインは凍り付くような冷たい視線を結締に向けたと同時に、言い放つ。

「私がボウヤのフィールドにトークンを召喚した事にも、ちゃんと意味は在るのよ！！　私は、終焉の王デミスの効果を発動！！」

【ルイン】

LP／6200 ↓ 4200

【結締智恭】

LP／5000

「ライフポイント2000を払う事で、このカード以外のフィールド上のカードを、全て破壊する！！」

「んゝなゝっ ！？」

カッツ！！

それは、結締が声をあげた瞬間だった。

デミスは手にした戦斧を地に叩き付けた瞬間、そこを爆心地にしたかのように、凄まじい衝撃が広がり、全てのカードを破壊してしまったのだ。

バゴゴゴゴガキヤガキイヤキヤ…ツツ！！！！！！

「このままむざむざと…ツ！！ 速攻魔法、発動！！ 『異次元からの埋葬』！！」

【異次元からの埋葬】

「速攻魔法」

ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に戻す。

次々とフィールドのカードが消し飛ぶ中で、結締は先ほど伏せた一枚のリバースカードを発動させた。

「この効果で、ゲームから除外されているモンスターを墓地へ戻す！！
ネクロ・ガードナーを墓地へ……つくう！？」

バコオオオオ！！！！

終焉の王デミスの効果にチェーンし、異次元からの埋葬を発動させた結締。

しかし、フィールドの全てのカードを破壊された事にならず、結締のフィールドは文字通り、焼け野原と化した。

しかし、次の瞬間。

破壊された衝撃とは別のダメージが、結締の身体に襲い掛かった。

バチバチバチッ！！

「グアッアッアッ……ッ……！！？」

【ルイン】

LP／4200

【結締智恭】

LP／5000 ↓ 2600

（なん：でっ！？ 俺が2400もの：ダメージを：っ！？）

結締は一瞬、自分の身に何があったのか理解できなかった。

まだルインはバトルフェイズに入っていない為、デミスでの攻撃ではない。

では何故、自分は2400ものダメージを受けたのか？

デミスの効果なのか、それとも別の何かか…？

「フフ…分からない、って表情^{カオ}してるわね」

結締の朦朧となる表情を見て、冷ややかな視線を向けるルインは、墓地から一枚のカードを取り出した。

「それはコレ：罨カード『ナイトメア・デモンズ』の効果よ」

「っ！？」

「この効果によって生成されたトークンが破壊された時、そのトークンのコントローラーは800ポイントのダメージを受けるの」

「まさか…っ、その為に…俺の場にトークンを…!!?」

「フフ…言ったでしょ？私は王なのよ？王のデュエルは、一切の妥協はしない…!!」

「…くっ!!」

強い、と。

結締は改めて、目の前で対峙するルインを見やった。

結締は前に一度、精霊界から来た成金ゴブリンとデュエルをした事がある。

決して強かった、と呼べる実力者ではなかったが、それでも自分は勝った。

そしてつい先程、白石とクルスのデュエルを見て、邪神に属する敵の実力をその目で見た。

だが、ルインは違う。

成金ゴブリンよりも、そしてクルスよりも、明らかに。

圧倒的に強さの次元が違うではないか？

以前、西条は王である邪帝とデュエルをし、苦戦したと言っていた。

今なら分かる。

その時の彼の気持ち…!!

(やべえ…!! コイツ、マジで強ええ…!!)

【ルイン】

LP／4200

「手札」

2枚

「モンスター」

終焉の王デミス

「魔法・罨」

なし

【結締智恭】

LP／2600

「手札」

2枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

フィールドに一枚もカードが存在しないこの状況で、結締に残された手段は限られていた。

「今ボウヤの墓地には、異次元からの埋葬の効果で墓地に戻した『ネクロ・ガードナー』がある…」

【ネクロ・ガードナー】

星3／闇属性／戦士族

ATK／ 600 DEF／1300

「効果」

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「その効果は、墓地から除外する事で相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする…つまり、このままデミスで攻撃しても、ボウヤがネクロ・ガードナーの効果を使ってしまうば、私はこのターンでこれ以上のダメージを与える事はできない」

「……っ」

「でも無効に出来るのは一度だけ。2回、3回の攻撃には耐えられない！！」

「くっ!？」

ルインはこのターンの開始時に「激しく」と言った。
そう…。

まだルインは、余力を残している。

「フフ…ボウヤに耐えきれるかしら？」

ルインは不敵な笑みを浮かべながら、手札から一枚のカードを取り出す。

「私は墓地に眠る『闇属性、悪魔族モンスター3体』と『光属性、天使族モンスター1体』をゲームから除外し、特殊召喚っ！！」

カッツ！！

ルインは墓地から闇属性、悪魔族モンスター『儀式魔人プレコグスター』『儀式魔人カースエンチャンター』『儀式の供物』を。
光属性、天使族モンスター『センジュ・ゴッド』を除外し…。

「降臨せよ…！！」「天魔神 ノーレラス」！！」

【天魔神 ノーレラス】

星8／闇属性／悪魔族

ATK／2400 DEF／1500

「効果」

このカードは通常召喚できない。自分の墓地の光属性・天使族モンスター1体と闇属性・悪魔族モンスター3体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。1000ライフポイントを払う事で、お互いの手札とフィールド上のカードを全て墓地へ送り、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

ズドドドド…ッ！！

ルインのフィールドに降臨せし天魔神。
結締にとって未知のモンスターの連続に、驚愕や絶望が表情から隠せないでいた。

「更に私は、手札の魔法カード『死者蘇生』を発動！！」

【死者蘇生】

「魔法カード」

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「この効果により、私は墓地のモンスター1体を復活させる……！！
今、再び降臨せよ『救世の美神ノースウェムコ』！！」

【救世の美神ノースウェムコ】

星7／光属性／魔法使い族

ATK／2700 DEF／1200

「儀式／効果」

「救世の儀式」により降臨。このカードが儀式召喚に成功した時、このカードの儀式召喚に使用したモンスターの数まで、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するカードを選択して発動する。選択したカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードはカードの効果では破壊されない。

ズドドドド…ッ！！

「っ！？　ここでノースウェムコだっ！！」

ルインのフィールドに次々と展開されていく最上級モンスターの数々に、結締は嫌でも思い知らされた。

「ルインのモンスター」

●終焉の王デミス

ATK／2400

●天魔神ノーレラス

ATK／2400

●救世の美神ノースウェムコ

ATK／2700

【ルイン】

LP／4200

【結締智恭】

LP／2600

自分の場にはモンスターはいない。

墓地には攻撃を一度だけ防ぐ事ができるネクロ・ガードナーがいるが、それも一枚だけ。

ルインのモンスターたちからの波状攻撃を受けては、今の自分のライフポイントでは受けきる事は不可能である。

「…ア…ウア…ッ」

「フフ…これが、王の力よ」

しわくちやに崩れる表情、言葉をなくし、抗う術をもなくした結締。

そんな彼に、ルインは容赦なく…。

これでオシマイ。

それが、結締が最後に聞いた言葉だった。

【ルイン】

LP／4200

【結締智恭】

LP／2600 ↓ 0

※

一人の王が齎した行動で、混沌に包まれる三上市の空には、いつしかどんよりとした暗雲が立ち込めていた。

街の中心に建つトリティニーグループの周囲には大勢の人々が詰

めかけており、皆が皆、今この街で何が起こっているのか理解できないでいた。

ある所では、トリティニーグループに対するテロ行為だ！とか、宇宙から降ってきた隕石が衝突した！とか、社内で何らかの実験中の事故か！などなど、根の葉もない噂ばかりが広まっていくな。

そんな噂が広がる人々の中には、この街の高校教師である楠ミナの姿があった。

終業式を終え、生徒たちが帰宅していった直後の騒ぎだ。

学校の生徒の誰かが巻き込まれていないだろうか？

無事に帰宅していっただろうか？という心配からの行動である。

実際に現場に來たは良いものの、周りは警察が警戒線を敷いており、そこに救急隊や消防隊が入っている為、けたたましいサイレン音や叫び声が行き交いし、大混乱に陥っている。

更には根も葉もない噂がたっている為、まともな情報収集ができないでいた。

「いったいどうなっているの…！？ とにかく今は、生徒たちが無事か確認しないと…！！！」

近くに來た警察に生徒の事を訪ねても「危ないですから、避難して下さい！」の一点張りで、ろくに対応してくれない。

恐らく、警察も事態が把握しきれていないのだろう。

こうなつては、自力で無事を確認するしかない。

（今日…結締くんが、いつもの三人でトリティニグループに行く
と喋っていた。連絡網で無事が確認できていないのは…!!）

結締、白石、そして西条。

学校が終わってから、そのままトリティニグループに来たので
あれば、間違いなくその三人はこの中にいる。

クラス内での連絡網で、あの三人の所で途絶える事実や、実際に
楠ミナが三人の携帯に電話をしても繋がらなかった事から間違いな
く、あの三人は今回の事件に巻き込まれている。

そう認識する事で、彼女の胸の内に言いようのない不安がどんど
ん募っていく。

もし、爆発に巻き込まれて怪我をしていたら…？

もし、この人混みに紛れて避難が出来ていたら…それに越したこ
とはないのだが、やはり不安は拭えない。

人混みを掻き分けて、走り、声をあげて。

すると彼女の目に、ある一人の生徒の姿が目に入った。

彼の姿を見間違える筈がなかった。

身長は180センチを超え、髪をオールバックにする人物。

それは間違いなく、自分が担任する問題児（生徒）の、白石直也
だった。

彼を見つけた途端、楠ミナは周囲の目など気にする余裕もない勢いで、彼に向かって突撃した。

「白石くん、無事だったの!？」

「ムッ、先生…どうしてココに…いや、今は先生に構っている時間はない!!」

何故、担任の教師である楠ミナがこの場に居るのが理解できない白石は、一瞬だけ驚いた顔をしたが、それは直ぐに戻る。すると白石は、あろうことかトリティニーグループを囲む警察の群れの中へと歩み出したのだ。

「っ!?! 待ちなさい、白石くん!! 貴方、ドコへ向かうつも…
っちょ!?! 貴方、なにソレ!?! 頭から血が…怪我してるじゃない!!」

「っ放せ、先生!! 俺は行かねばならんだ!!」

「そんな怪我で、ドコへ行こうって言うのよ!?! 貴方は今、怪我人なのよ!!」

「放セッ!! 放してくれ!!」

白石としては、何としてもトリティニーグループの中へ入らなければならなかった。

クルスとのデュエルの時…。

あの時。

自分が感情に任せた発言をしなければ、トリティニーグループに置かれた神のカードが敵に狙われる事はなかった。

三上市を、皆をこんな目に遭わせる事はなかった。

全ては自分の愚かしさ故の…。

「俺のせいなんだ！！ だから俺がッ！！」

「何を分らない事を言ってるの！！ 白石くんっ！！ 誰か救急隊を！！ ウチの生徒が怪我をしているの！！ 誰か、早く！！」

「くっ！？ 何だお前等は！！ 放せッ！！ 放せエエエ！！」

楠ミナが呼んだ救急隊に取り押さえられ、救急車へと引きずられていく白石の瞳には、うっすらと涙が浮かび上がっていた。

何故だ？

どうしてこんな事になってしまったんだ？

自分は神のカードの下へ行き、王を倒さなければならないのに…。

暗雲が広がる三上市の空と同じように、彼の気持ちは深く、後悔の念が広がっていた。

※

ひんやりとしたコンクリートの感触が肌を伝う。

それと同時に、全身にのし掛かる倦怠感。

それだけで、結締は自分が床にうつ伏せているという事を実感する。

それと同時に、自分はルインとのデュエルで敗北したんだと理解した。

「…なにやってんだよ…」

誰に言うでもない。

ポツリと零れた言葉は、自分自身に対しての言葉だった。

絶対に倒す…と意気込んでいたのに、自分は負けた。

「…手も、足も…出なかった」

実感させられた王の實力。

自分はルインに対して、文字通り何もできなかった。

まともな有効打すら与えられなかった。

そんな自分に、結締は哀れみを覚えた。

「ホント…、なにやってんだろ…俺って奴ア」

初めて精霊界から来た成金ゴブリンとデュエルをした時、勝利した自分はどこか自分でも誇らしげに感じていた。

マナちゃんを守れた。

好きな子に危害が及ばずに済んだ。

例え本人の知らぬ所でのデュエルとはいえ、自分はヒーローだと思っていた。

影で好きな子を支えるヒーローだと…

だが、自分は負けた。

ここ一番の大勝負で、自分は負けた。

もし自分が勝っていたら、紛れもなく彼女の使命に貢献できた！と胸を張って言えるだろう。

だが今の自分には、そんな事を言える気力もない。権利もない。

「俺ア：HEROじゃ…ない」

何をやってるんだ！？

何で負けたんだ！！

俺の力は、この程度なのか！？

ポツリと呟く言葉の中に、様々な自己嫌悪が含まれる。

徐々に意識も朦朧とする中、

「こんなんじゃ…HEROにすら…なれ…な…」

その言葉を最後に、結締の意識は闇に沈んでいった。

混沌の街（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の内容は如何だったでしょうか？

結締はルインとのデュエルに敗れ、己の無力さを知らされる結果となってしまいました。

そして白石は目的地に辿り着くも、楠ミナの教師としての立場によって、己の責任を果たそうという意気込みを阻害されてしまいました。

結局、友人達からの応援が途絶えた西条は、単身でシエンとのデュエルに挑まなければなりません。

次話よりいよいよ、西条のデュエルが始まります。

精霊界の者と契約し、力を得た西条 VS 精霊界最強の王、シエン。

二人の神のカードを廻る戦いの決着は如何に…！？

さて、物語の内容はここまでにして、近況報告。

昨年のこの時期、僕は職場の町内で催される駅伝大会に参加しました。

その時期は丁度、資格試験の勉強の息抜きに…と思い参加しただけで、次回も参加しようとは全く考えていなかった訳ですが…

先日、携帯電話に職場の人から着信が入りまして…

『あ、○○くん？来月の駅伝大会なんだけどさ』

「はい？」

『今年も参加してくれる？タイムそこそ早かったじゃん！今年はガチで入賞めざしてるんだ！』

「いや、僕今年は出…」

『って言うか、参加確定だからW俺の手元にある登録リストに、名前と電話番号もう書きちゃったからW』

「ハアッ!？」

『来月の11日が本番だからネWそれまでに体力作りした方が良いでしょう？じゃね』

「あ、ちよっ!! 待ってく…で、電話切りやがった!!」

というのがありまして、どうやら参加しなければならなくなりました。

ヤヴァイ…去年の駅伝が終わってからランニングなんて全くしてねえし…!!

っていうか、何だこの漫画的な嵌められた展開は!!

…ここまで書いておいてなんですが、これ後書きっていうか愚痴ですよ(汗)

スイマセン…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0485w/>

決闘者の道

2011年11月17日09時39分発行